

鹿兒島県史料集
(50)

西藩烈士干城録(二)

鹿兒島県立図書館

刊 行 の こ と ば

県史料集の刊行は、郷土資料の保存を図るとともに、地方史の研究や県民の文化向上に役立てることを目的としております。

今回は、鹿児島県史料集第五十集として「西藩烈士干城録」(二)を刊行することになりました。

「西藩烈士干城録」は、戦国時代から近世初期にかけて活躍した島津歳久をはじめとする島津家家臣の列伝です。島津久光の師である上原尚賢(別名、鴻)が編纂し、後に島津久光が精写したもので、今回は、巻十三から二十六までを刊行することといたしました。

本史料集は、第四十九集に引き続き、黎明館学芸課長の徳永和喜氏によって、原稿作成・編集・校閲・校訂が進められ刊行の運びとなったものであります。

長期間にわたる同氏の御苦勞に対し心からお礼を申し上げますとともに、この史料が郷土史の研究に大いに役立てられるよう期待いたします。

平成二十三年三月

鹿児島県立図書館長

脇田 稔

島津忠明列傳第三十三 大島

伊勢貞成列傳第三十四

平田昌宗列傳第三十五

伊地知重武列傳第三十六

村田經定列傳第三十七

本田薰親列傳第三十八

肝付兼道列傳第三十九

村尾重侯列傳第四十

西藩烈士干城錄 卷二十一〜二十四

岩切信朗列傳第四十一

稻留傳翁列傳第四十二 附相良氏
脈岡氏

市來家政列傳第四十三

三原重益列傳第四十四

宮原景種列傳第四十五

菱刈重廣列傳第四十六

井尻祐秀列傳第四十七

長谷場孝純列傳第四十八

猿渡信光列傳第四十九

敷根賴賀列傳第五十

白濱重住列傳第五十一

白坂昌棟列傳第五十二

東郷重尚列傳第五十三	76
穎娃久虎列傳第五十四	80
祁答院重加列傳第五十五	81
奈良原資列傳第五十六	83
曾木重治列傳第五十七	84
禰寢重長列傳第五十八	85
北原兼親列傳第五十九	86
五代友慶列傳第六十	87
西藩烈士干城錄 卷二十五〜卷二十六		
土持親成列傳第六十一	89
吉田宗清列傳第六十二	90
福永丹波列傳第六十三	91
大野忠宗列傳第六十四	92
大田忠與列傳第六十五	93
廻久元列傳第六十六	94
上床國成列傳第六十七	94
中馬重方列傳第六十八	95
仁禮賴景列傳第六十九	96
和田玄蕃列傳第七十	97
伊東右衛門列傳第七十一	98

平山忠智列傳第七十二	99
林百梅列傳第七十三	100
柏原有閑列傳第七十四	100
押川公近列傳第七十五	100
蒲生清綱列傳第七十六	102
橋口安張列傳第七十七	103
濱田經重列傳第七十八	104
春成久正列傳第七十九	105

例言

本資料集は、鹿児島大学附属図書館玉里文庫（島津久光旧蔵）「西藩烈士干城録」（全二十五卷）を底本とし、三ヶ年にわたり全三冊として刊行するものである。今年度は卷十三から卷二十六までを『西藩烈士干城録（二）』として収めた。

- 一 漢字は、原則として底本の体裁である旧字体を用いた。
- 一 干城録引書は、底本のままとし、「○」・「、」の符合も残した。
- 一 読点は、底本を重視したが本文で割書を付している部分についての読点は割書の下に読点を移した。
- 一 凡例及び底本文の頭注は、（頭注）と註記し、頭注内容は「」で示し、行間の該当する場所に移した。
- 一 闕字は、底本の体裁とおりとし、一字・二字あけとした。
- 一 本文の附録書きは、体裁とおり一字下げとした。
- 一 割書は、底本体裁とおりとしたが、左右の文字数は調整した。
- 一 底本の判読史料として、東京大学史料編纂所所蔵「西藩烈士干城録」を参考本として用いた。

西藩烈士干城錄(二)

卷之十三

卷之十五

入來院重聰

山田有信

喜入季久

島津義虎

寺山直久

川田義朗

卷之十四

卷之十六

上井覺兼

比志島口弘

町田久倍

鎌田政盛

種子島惠時

木脇祐利

西藩烈士干城錄

十三之
十六之

西藩烈士干城錄卷之十三

入來院重聰列傳第十九

彈正少弼入來院重聰初稱千代五郎。又云。桓武帝之枝葉也。重聰十二世祖、渋谷莊司平重國重國親王之八世孫也。重國生太郎光重、光重生曾司五郎定心、寶治二年、戊申、春、奉父命至薩、始居入來院清色邑、故姓入來院氏、又姓清色氏二建長某年、卒、定心生三郎明重、四月、可、卒。明重生平次公重某年七月五、卒。公重生新平次重基、號定圓、重基無男、養小宗勝五郎重知重知、即明重孫、子重勝、是為美濃守、元弘建武之

百、某年十一月者、以為子、重勝生彈正少弼重門、重門屬南朝、文中元年北朝慶安、五月、卒。六月廿三日、陣沒於高江峯城薩州之、重門生彈正少弼重賴永享元年、

少弼重豐朝變號以心、文龜元、重豐娶北原貴兼號昌宅、女、生重聰、世々領入來院邑、及帖佐岩劍、當重聰之世、三州擾亂、戰爭不已、數與島津

實久戰於百次・山田・水引・串木野之間元二年、二月廿五日、國元八郎宗戰死於百次、時年十九、三月廿四日、重聰自持兵、與實久戰於山田、九月廿日、合軍、與實久戰於水引、二月廿五日、其族山口將監重戰死於百次、能等、二月十八日、與村答院氏、東鄉氏、合、復戰於水引、四月五日、入來院上總重戰死於水引、武本右京、戰死於百次、寺尾左兵衛戰死於串木野、結木尾、天文六年、正月七日、梅岳君

圍竹山城院、伊集、時重聰引兵往佐之、其臣萩原采女擊殺強敵長瀬平左衛門、八年、閏六月、大中公攻陷市來平城、重聰往賀焉、且告曰、臣老矣、不能從軍、請從此辭、因命其子重朝、將兵屬焉、初、梅岳君幣重聰女重朝、天文中、重聰病卒、法號陽中定祐居士、永正九年、三齡公・及公子歲久、天文年中、重聰病卒、法號陽中定祐居士永正九年、三

來、廿七日、公進攻本城、重朝戰於大日寺家臣萩原采女、池、公嘉其功、命討川內之賊、而自領其地、於是八月廿八日、夜、重朝襲取百次城

田城內、續取宮里・平佐・碓山・高江・寄田俱在川內、實久所并吞、於是重朝命、及郡山重朝郡山、及他邑方十町之地云、并伊集院地盡領之、食田祿凡十二萬石、

而以外戚之故、驕奢日甚、當是時、東鄉氏・村答院氏・各以其邑頭注、與去聲、叛、十三年、夏、人有告重朝與之者、重朝聞焉、大恐、因上書、白

無反意、公不聽、十四年、八月八日、遂沒收郡山城、某年、七月十六日、病卒、葬定安寺、法號心應定安禪定門、子又五郎重嗣賀守、

嗣賀守、天文十五年、八月、我軍征串木野、廿四日、重嗣始將兵來援、而戰於枯木尾、有功秀高軍勢絕於云、初、公惡重朝驕奢、不許朝朝、

覺府、至是命重朝嗣朝覺府、後屢朝焉、公賞其勤勞、永祿二年、十二月廿三日、加賜大迫邑、九年、正月、村答院良重遇殺、家相等乃

相謀曰、重嗣世々將家、且與我同宗、宜推此人以為假主、衆從之、於是二月廿八日、重嗣遂撰其家政、而并領其采地陳成、重嗣賞其勤勞、因與良重家臣

大井美作實勝、高城武藏重治、久富木兵衛重平、俱為義兵、而以水田一町、與之大山外記記云、一或曰、永祿十、九年九月十九日、有谷齋兵五十三人、戰沒於串木野坂下、考諸記、疑是村答院氏之兵、而未知何人之戰也云、

十二

年、冬一作元龜元年、正月五日、東鄉重尚降、賴重嗣、獻高城・水引・中鄉・湯

田・西方・地、重嗣亦獻百次・平佐・隈城・碓山・高江・凡五城、則命領清色・山田・天辰・田寄・寄田・如舊云、某年、十二月二

日、卒、葬定觀寺、法號應山定觀大禪定門、子又五郎重豐幼稱千代、

嗣、是為彈正少弼、母肝付兼與女、天正二年、秋、八月十一日、人上變、告重豐欲反、重豐聞焉、大驚、越十六日、獻盟書・及山田・天辰・田寄・寄田・凡四邑、而白其不反書是時家臣等五人亦造盟、花押血點而獻云、、下教曰、先

公剖符以入來院邑七十五町清色、市比野、久重、浦之名、添田、中、及寄田邑、封汝祖、汝宜襲封、卒釋而不問或云、是後復賜寄田一邑、而、其餘盡沒久之、此說亦是、、是年、九月五日、重豐使東鄉宗左衛門獻柳實十籠於麿府、公親召使者而見之、三年、三

月十五日、官習勒犬追物事、重豐為射者班、射犬二匹是時重豐稱、淡谷氏云、、四年、從攻高原城、六年、從赴耳川、八年、十月十五日、我兵進攻肥

後矢崎城、是時重豐有病、使家老山口重秋・種子田秀次・將兵來屬焉、既而二人敗走、亡士卒五十餘人、九年、重豐以副將、從赴水

股、十一年、八月五日、卒、葬定永寺、法號扇皇定永大禪定門、後崇為廣瀨大明神、重豐娶島津忠將女、生女、無男、以島津以久第

二子鎌三郎為贅婿、遂以為嗣、因冒入來院氏、是日又六重時島津彰久同時弟、天正元年、生、、既而夫妻不睦、遂絕昏、重時復娶公子歲久長女、天正十五

年、四月、豐公大兵入薩、進攻平佐城、重時遣高木和泉・瀨々善左衛門・往救城、廿八日、敵兵急圍城、和泉等拒戰多殺敵、文祿元

年、先是重時以寺尾重高稱善左衛門、質於伏水城、猶在長初、重高、當是之時、重高聞賊臣今藤權兵衛重時家者出奔在京師、而惡我國家事於豐公、豐公因賜

祿一千石之朱印牒、於是重高設謀誑誘權兵、遂奪其上書及朱印牒、而獻之、松齡公、於是三月、命押川公近等誅權兵於上關、語在公近

事中、是歲朝鮮役起、是時重時有病、遣親族入來院重興稱左、東鄉重

影稱善左衛門、率兵赴朝鮮、重影路俄黨梅北國兼、而被殺、於是公命重

時誅戮重影父重定稱備、并親族從兵數十人、重興獨率從兵七十五人、至朝鮮云、是歲七月、公子歲久被殺、其孫袈裟菊丸久後名常、與家衆據宮

城、公遣使說下城、於是八月十一日、袈裟菊丸・與其母・并祖母、置諸入來院坂中、四年、秋、豐公下重時教、遷封湯之尾、因移

居焉、慶長元年、正月廿日、慈眼公下重時教曰、孤方思賜子舊領之地、子姑待焉、是歲春、重時病瘵、於是將家老種田秀邦稱新左衛門、等至

朝鮮加德島、有戰功是役也、家臣櫻井六郎左衛門、今村玄蕃左衛門、二年、春、毛利壹岐守吉成・伊東民部大輔祐兵・秋月三郎種實・高橋九郎元種・島津又七

郎豐久・俱軍安骨浦、慈眼公遣重時、出使五將、是時朝鮮戰艦塞海上、重時命多發鳥銃、急進、遂全使而還報、公感賞之、五將亦

大賞重時勞云、八月十五日、攻陷南原城、三年、十月朔日、公大破明兵於泗川、是時重時披赤緞甲、斬首過當、十二日、明兵來乞

和、小西行長寺澤正成與公謀、和議遂成、十七日、明兵質茅渭濱於新寨、公命重時送之正成營、正成又送之日本、十一月十八日、

擊破敵艦是戰也、重時家臣村尾少五郎重次、種田喜右衛門秀次、種田喜右衛門秀次、十兵衛等力戰皆沒、、從而還國、四年、伊集院忠

真以邑叛、命重時為高崎・高原地頭職、率兵至莊內、六月廿三日、我軍進攻山田城、重時將諸軍屯于楠牟禮、進擊破擄手口城後門、此云擄手口、

俊、從山口直友使上國、是時東照廟在于京師、四月廿三日、二使往謁焉、終至伏水、謁松齡公、於是廿七日、公親謁東照廟、具

言莊內戰鬪・且賊平之狀、於是乃召重時賴俊、俱賜食、八月朔日、諸將圍伏水城、公命重時為督此云總、攻松丸口城門、城陷、重時執槍多

殺敵宗原軍敗績、是役也、重時前知必敗、於是解、、九月十五日、關原軍敗績是役也、重時前知必敗、於是解、

二右衛門、持連之於陸、至今傳之入來院氏家、名曰保充久利、保充久利、草名、善馬曾見、重時失 公之處、

自引騎兵三十餘騎、直而馳去、廿三日、至水口瀨多江州、是時、家臣村島助右衛門、田善左衛門、森萬助、四人、三郎

曰、今卒困於此、此天也、與諸君固決死、於是重時乃上馬、大呼馳

衝敵兵、敵兵皆披靡、遂戰沒、時年廿八、法號雲庵定曉居士、墳墓

在壽昌寺來、後崇為日吉大明神、又改號重來大明神、重時生一女、

無男、慶長十年、春、命以穎娃久秀為贅婿、遂以為重時嗣、冒入來

院氏、是日加賀守重國、

父島津義虎五、母 貫明公女、天正七年、八月廿日、生、初名忠

富、文祿二年、夏、其伯兄和泉忠遠豐公軍律、没入出水邑、是

時豐公命以忠富及其叔忠清季忠季、置諸肥後宇土城小西長、三年、

夏、忠富屬行長至朝鮮、有戰功、翌年臘月、從而歸宇土、慶長二

年、五月十五日、忠富潛出宇土、復至朝鮮、六月廿四日、之加德

島、謁 松齡公、而力戰深入、七月、進衝敵艦於唐島、八月、我

軍攻南原城、忠富先登、斬捕頗多、三年、十月朔日、公大破明

兵、忠富斬首數十級、既而從歸國、改名久秀、四年、赴莊內、六

月廿三日、久秀與吉利忠張等、俱進攻山田城、十二月八日、賊伏

兵猝起、我軍驚亂、多陣沒、於是久秀指揮二百餘人、大呼急馳

擊、賊兵皆退散、以故我兵多得不死、五年、九月、從軍關原、十

五日、我軍敗績、久秀始終不離 公側、至江州水口、則既設關、

久秀先衆是時、久秀國人千兵衛一人從其、而所騎馬、雄辨服守兵、而 君臣遂得俱全

者、斯人之力也、是時 公賞賜關小刀、及從歸國、賜褒牒及秩二

百石、且命為穎娃彌三郎久音嗣、因稱穎娃彌一郎、八年、以國家

始安定故、宴享親戚家臣於覺城、久秀亦陪焉、十年、春、從 慈

眼公朝京師、茲年復命久秀出穎娃氏、而為入來院氏養子、翌年久

秀歸湯之尾、而為一齊之禮、改名重國、改彌一郎為加賀守、

十五年、慈眼公率琉球王而至駿府及江都、重國亦從焉、十七年、

下教曰、凡采邑者一切宜移居于覺府、而慎勤國家之事、因各賜邸地

于府下、重國邸在城巽、近海之地云是時、今人來院、十八年、以重國之祖先

世々食邑入來院故、分其地半、命為重國采邑、除先所采湯之尾邑、

又命為入來院 公邑之地頭職、衆中是日、二百人屬焉、以故入來院

地、公邑與采邑、犬牙相接、衆中家臣雜居而為生業也、是歲重國

率家屬、徙居覺府、而復改重國名重高、改加賀守為伯耆守、十九

年、浪華之役起、是時重高領田祿六千二百八十七石餘、而出騎馬六

人、執旗者六人、及步卒百廿六人、元和二年、六月二日、世子生

慈眼公發覺府、翌年、夏、詣江戶邸、三年、秋、

後水尾帝行幸二條城、重高從 公之扈從、七年、四月十八日、

大猷廟枉駕于櫻田邸、重高見焉、而獻大腰刀、及拾十襲、

大猷廟賜重高拾十襲、白銀五十枚、廿一日、台德廟亦枉駕于櫻田

邸、重高又謁焉、而獻大腰刀、及拾五襲、台德廟賜白銀五十枚、

其後重高歸國、是年七月十九日、暴風、八月六日、大風大水、是時

多失重高家藏書籍云、十年、六月、重高出覺府、八月二日、至江

戶、而勤番櫻田邸、翌年、十一月廿日、出江戶、十二月廿九日、歸

國、十四年、冬、島原賊起、翌年、正月八日、以島津久賀為上將、

重高為副將是時、重高家老種田久左衛門秀詮等從之、進至天舛久田間、廿二日、陳甲

櫛、二月廿八日、城陷、於是松平伊豆守信綱、戶田左門氏鐵、唱凱

歌而歸、道經天舛、三月十五日、重高等過三角瀨戶、十七日、還覺

府與久賀等傳、十七年、寬陽公始朝江都、重高從焉、途至備後鞆港、遇

佐々權兵衛尉、是則 幕府賀 公嗣立之官使也、公即使重高、

兼行詣江都、謁 幕府、而拜其辱、 幕府語頗叮嚀、又召重高

於西城、而賜衣服二襲、十八年、細川光利始就封於肥後、於是官使
重高使肥後而賀焉七月、朔、重高至川尻一日、至熊本、三日、光利與重高吉岡、廿年、從 寬

陽公獵郡山邑、獵罷、公枉駕于入來院清色、留驪十日是後五月十七日、重高次子、以春綱目、正保四年、七月、南蠻船二艘至瓊浦、於是官命重高、將兵

赴焉、十四日、重高至京泊、十六日、乘舟比及瓊浦、蠻舶起碇還
去、於是八月、重高徹軍歸、至阿久根而病起、越十八日、遂卒於藏

津在阿久、年六十九、歸葬入來蓮昌寺、法號大圓月鑑庵主、殉死者四
人川崎佐左衛門重助、延川、原田主膳、經秀、藤田番右衛門秀盛、俱殉死於蓮昌寺門前、杉杉樹下、

野史氏曰、重聰重時以外戚親族、不恃貴好權、盡臣節而報國家、蓋
有魏其賢、而無武安驕、書曰、謙受益、憂勞可以興國、宜哉、子孫

俱嗣守祖法、謙恭能下士、而永為國家之干城、可不重哉、可不重哉、

喜入季久列傳第二十

撰津介喜入季久初名忠賢、稱三郎四郎、號休宅一作久、其先 大岳公第七子若狹守

島津忠弘母作藤口女、始封喜入邑、而弟撰津介賴久號清隆、母松、封揖宿、而

賴久無男、故以揖宿欲附與忠弘、而忠弘子年尚幼、因以賴久為已
後、居揖宿城、而以忠弘忠弘、永正元年、甲子、八月八日、卒、法號芳嚴、道譽大居士、之子為賴久明應八年、二月廿四日、

後、名忠譽、亦曰撰津介初稱三郎、於是忠譽并食喜入揖宿二邑、居喜入
城大永年二月廿日、大嶽公進盟書賜忠譽、八年、戊子、三月八日、卒、、忠譽生撰津介忠俊、忠俊

力能扛鼎、好引強弓、天文八年、三月、大中公自將陷神前城在山谷、、
是時忠俊與穎娃小四郎俱往始謁 公、六月、從 公攻市來城、廿七
日、與佐多忠成俱至笑隈城、而說本田薰親和、事在忠成傳、十八

年、十月廿七日、卒、年四十二、法號義運源忠、忠俊娶樺山廣久

女、天文元年、生季久於喜入邑、弘治元年、三月廿七日、季久戰帖
佐岩坂、有功、永祿元年、命去島津氏、始為喜入氏、後為使役、五

年、六月三日、戰於橫川、有功、越十六日、貫明公賜褒牒焉、十
二年、大中公舉為國老、益賜花北邑院、在斐列、元龜元年、命季久使京

師、謁將軍義昭、義昭賜之酒及寶刀作康光所、亦數謁近衛前久公、天正
二年、四月、將軍義昭賜季久書、三年、三月十五日、以 貫明公嗣

立故、行犬追物事、季久為射者班、十七日、又有犬追物事、復為射
者班、射犬五匹、四月、琉球人來朝、廿一日、有燕享之禮、而命行

犬追物事、季久復為射者班、十月廿日、又慣習犬追物事、復為射者
班、四年、八月、從攻高原城、季久屯白坂、九年、為副將屬島津義

虎、軍肥後井川平、十四年、與諸將出擊筑紫、陷鷹取城、及岩屋
城、後以戰功、益賜鹿籠邑、徙居焉、而留長子久道處喜入、十六

年、戊子、七月十四日、卒、年五十七、法號昌圓、式部大輔久道
覽、田祿凡五千四百四十八石、天正三年、十月廿一日、有犬追物事、

久道為射者班、射犬十一、十一年、十月、出軍八代、十三年、秋、
往軍三船、九月廿九日、引兵而還、十五年、四月、羽柴秀長大軍至

日州、久道引兵往援山田有信、入守高城、既而為質子、至桑山修理
亮營、其後賜永吉邑、除前所食喜入邑、慶長五年、八月廿二日、

卒、年四十二、法號心翁久安、撰津守忠續初名忠誠、季久第四子、久
道同母弟、元龜二年、生、從幼出家稱長阿彌、居淨光明寺、初久道

有一男母榮輔左馬、而男子早卒、因乞 松齡公第四子萬
千代丸為養子、天正十六年、九歲夭、至其明年、細川幽齋議之 貫

明公、以長阿彌還俗、而嗣久道家、改曰撰津守忠續、時年十九、文

祿元年、從赴朝鮮、慶長三年、十月朔日、泗川之戰、被赤緋甲、騎白馬此六月、十一月、忠續等進衝敵艦、而捨舟上南海島、事在樺山忠

征傳、五年、從軍關原、六年、中納言秀家遁奔至于薩、而因我弓生於幕府、幕府曰、秀家叛逆之渠魁、罪當滅族、然島津氏為乞

哀、亦難默止、宜特減死一等、流于八丈島、於是公遣忠續至江都、拜謝其辱、八年、十月、東照廟任征夷大將軍也、復遣忠續至

江都而賀焉、且獻烏銃及砂糖、十三年、春、復使忠續奉使江都及駿府與忠續俱詣江都及駿府云、十九年、長崎及有馬天主教亂起、幕府命山口

直友下討之、是時忠續率兵往會直友、而留數十、有事則直友謀之忠續云、元和中、慈眼公舉為國老、寬永二年、五月、公子忠朗辭

江都邸、忠續從焉、七月十五日、至柁城、六年、正月初日、公使者至自江都邸能乘、平田純正、三人辭江都邸云。下教而告忠續等諸大夫曰、國老比

志島國隆、數背公命、其罪不見原、宜令渠致事而蟄居亦云入等、說在別記。川邊寶福寺、八日、使者國分民部又至、復下教曰、宜放流國隆于種子島、是

歲春、大猷廟病痘、遣忠續至江都問安否、十年、賜忠續以鹿籠邑、除前所食永吉邑、十八年、八月三日、嚴有廟生、九月、使忠

續至江都而賀焉、正保二年、三月十八日、卒、年七十五、法號快覺忠慶菴主、墓在鹿籠長善寺、殉死者二人田代助左衛門清貞、諸氏、孫原平左衛門宗長善等、伏在。

榮、以公命出為島津豐久嗣、故次子美作守忠高為父後、忠高母伊集院久治女、慶長十一年、生、寬永十二年、三月五日、卒、年三十、法號怨山芳忠今喜入多門、即忠高子、孫也、而世食巴鹿籠。

喜入圖書介忠道、忠俊第二子、季久同母弟、天文十六年、生、長能書、天正二年、正月十九日、戰死於根占、年廿八、大炊介久正、

號紹嘉、川上久光衛門、九郎左。長子、天文十九年、生、及長力克蕩舟、永祿

中、從軍菱刈、既而出為忠道養子、其後為貫明公隱居家老隱居、說在、轉徙財部國分地頭職、久正性好和歌、元和四年、八月、受古今抄於

野村意間、其後慈眼公師受古今集、伊勢物語於久正、因褒賜小刀信國所。一口、及白銀五十枚、田祿五十石云、寬永九年、五月十八日、卒、年八十三、法號岱叟善昌菴主、墓在龍昌寺在國、

久正嘗所賦和歌六首

曉
寂在曉、寂、寂、設與、如何二音伊加爾、曉阿加都喜、枕枕、枕、枕、枕、遠遠、遠、遠、遠、鐘鐘、鐘、鐘、鐘、音音、音、音、音、信信、信、信、信、

恭挽 貫明公
為雲雲、雲、雲、雲、雨雨、雨、雨、雨、霞霞、霞、霞、霞、殘殘、殘、殘、殘、月月、月、月、月、西西、西、西、西、行行、行、行、行、

失題
年々能、能、能、能、隔隔、隔、隔、隔、日日、日、日、日、夏夏、夏、夏、夏、衣衣、衣、衣、衣、偏偏、偏、偏、偏、跡跡、跡、跡、跡、跡跡、跡、跡、跡、法法、法、法、法、

雖拂二音、花
不落二音、庭庭、庭、庭、庭、雪雪、雪、雪、雪、寒寒、寒、寒、寒、松松、松、松、松、葉葉、葉、葉、葉、白白、白、白、白、月月、月、月、月、下下、下、下、下、風風、風、風、風、

慶長三年、十月、侍龍山公旅舍作、
詠詠、詠、詠、詠、送送、送、送、送、洞洞、洞、洞、洞、櫻櫻、櫻、櫻、櫻、戶戶、戶、戶、戶、影影、影、影、影、

立立、立、立、立、雙雙、雙、雙、雙、松松、松、松、松、木木、木、木、木、蔭蔭、蔭、蔭、蔭、自自、自、自、自、不不、不、不、不、音音、音、音、音、風風、風、風、風、有有、有、有、有、涼涼、涼、涼、涼、利利、利、利、利、

子久右衛門久供、母北原兼親女、天正十年、十二月十七日、生、及長為使役、寬永十五年、五月十三日、從寬陽公朝江都、而謁幕府、後為國分地頭職、正保四年、十二月八日、卒、年六十六、法

號月浦清新菴主今喜入休右衛門、喜入小四郎久續、忠俊第三子、忠道同母弟、天文十八年、生、天正二年、正月、與忠道俱戰死於根占、年二十六、

喜入掃部助久親初稱小四郎、季久第三子、久道同母弟、天正十四年、七月廿七日、陣沒於岩屋城、年廿四日、野史氏曰季久以公室之責、且有才略、命為大夫、服官政、而以功數益封采邑、於人臣足矣、長阿彌還俗嗣兄後、而亦為大夫、庶乎所謂順受其正者也、忠道與弟俱死報國、可謂壯烈也哉、

寺山直久列傳第二十一

寺山出羽守直久一作廣久、初稱久、島津淡路守某第三子、而為島津出羽守光口養子、光口薩摩守國久第五子、國久父即義天公第二子薩摩守用久也、一、天文八年、三月、谿山神前城降此間疑有闕文、是時直久為質子、始謁大中公、時年九歲、既而賜直久以谿山五箇別府邸、至永祿元年、十二月、命改島津氏為寺山氏別府村以有名寺、山之地故也、其後直久戰沒於吉田本城、一、子出羽守久兼初稱久、二、號定雲、母猿渡休覺女、永祿十年、生、天正十四年、七月廿七日、久兼與諸將往攻岩屋城前在、中石碎曹、而身無恙、其後從至朝鮮、慶長二年、十二月、聞朝鮮酋長蜂起晋州、於是二公自將渡河、而登智愚山、是時敵既退去赤國、則收軍復渡河、而據嶮築砦、是曰望津砦、留久兼戍之、而二公還泗川、時天寒、士卒多墮指、三年、六月廿日、明大軍廿萬至望津、樹柵連營二十餘里、久兼以三百餘人臨水拒守、因利制權或謂將入山、殺敵探權者、或據山中、或夜深鳴鳥、養威積氣、不示兵之多寡、以為持久之策、七月、明兵大苦熱、日多出浴水、久兼覘之、乃選鳥銃乎三十人、乘夜伏隄下、翌日午時、敵人馬復出簇浴、久兼吹海螺為號、則衆響應、齊放鳥銃、無虛丸矣、敵大驚、盡弃馬、蹶而遁去、敵遂不知我虛實、累月不能渡

川、其後公遣使曰、汝以寡能拒衆、而勢甚危、宜早引還、是時公方築泗川、號曰新寨、久兼報曰、願公無憂、臣據形勢、籌策之、故敵不能渡川、公宜間固墨壁、練士卒、併氣力、以備敵、（頭注）備敵、一作待敵、臣如班師、敵必渡、且夕且至新寨、至九月、公復遣使曰、新寨堅固、汝宜蚤引還、於是廿日、夜半、久兼自燒砦、道山中退泗川、敵即渡川、十月初一日、大衆進攻新寨、二公嬰城督兵、諸將能拒、巨砲手銃引放、鐵彈火藥飛激數里、敵軍藥壺皆破、烟焰蔽天、人馬多燒死、於是城中乃縱兵擊之、敵兵亂走、久兼被紺緋甲、騎驪馬四尺六寸五、與入來院重時、樺山久高等先驅逐北、是時明將茅國器反旗、與島津忠長疾戰、久兼望見敵輜重在其後、乃從間道出其背後、連發鳥銃、負糧者先遁、敵遂敗走、比至望津、敵止相拒、久兼曰、我能識其地利、急應銃手、自隄上橫射敵軍、敵軍復大亂、爭渡川、死者大半、遂道晋州、遁星州星州、十一月、久兼從而歸國、四年、從軍莊內而市成邑迫恒古城據所、非智勇兼備之人、難其守、乃命久兼戍之、六月廿三日、島津忠長、樺山久高、柏原有國進兵攻恒古城、廿五日、城宰伊集院宗右衛門不能守、弃城而遁都城、於是久兼移居恒古城、十六年、十月廿九日、卒焉、年四十五、法號即安淨心居士、墳墓在恒吉德泉寺、一、子出羽守口豐、母川上忠照女按文流系譜、久兼妻川上久通、與本記不合、後傳考、為泊地頭職今寺山塚右衛門、

寺山甚右衛門、從軍朝鮮、新寨之戰、被黑緋甲、野史氏曰、久兼膽略超群、能以寡拒衆、臨機應變、明兵畏之、不能渡川、（頭注）不能渡況乎我新寨、知勇特達將八九十人、明將不知之、遽進大壘、長為泗川之鬼、悲夫、而久兼累月駐敵之功亦多矣、

西藩烈士干城錄卷之十三

西藩烈士干城錄卷之十四

上井覺兼列傳第二十二

伊勢守上井覺兼初名為兼、稱伊左衛門尉、姓大神氏、其先信州諏訪御洗祝、其三世孫新大夫為信、為信生四郎為貞、為貞生諏訪五郎敦實第二、敦實生蹈入五郎弘氏第五、弘氏八世孫次郎左衛門尉兼喜、兼喜生筑前守為秋、為秋世々居隅州上井邑、故改諏訪氏為上井氏、大中公遣為秋討本田薰親、天文十七年、戊申、賞其功、增賜食邑下井二十五町、二十二年、癸丑、易賜薩州永吉邑、因徙居焉、為秋生武藏守薰兼、薰兼娶肝付兼固女、生覺兼、覺兼為人知略越人、忠信事上、相國之器也、天正元年、癸酉、為使衆二年、十一月十七日、賜、四年、丙子、舉為國老、覺兼辭曰、臣才駑下、以不足當國家重任、敢辭、不聽、八月、從征高原、十九日、與諸將俱攻陷城、六年、戊寅、九月、使島津以久為上將、覺兼為副將、往圍日州石城、數日城中食尽出降、十月、從擊破大友軍於日州耳川、八年、庚辰、為宮崎地頭職、以鎮日州、因移居焉、而除前所食永吉邑、又賜日州海江田邑八十町是時父薰兼亦徙其、屬邑志和洲崎城、九年、辛巳、八月、從攻水股城、十年、壬午、十一月四日、出宮崎、十一日、至肥後八代、而謁松齡公是時公為八、代地頭職、、十一月、癸未、正月十二日、出八代、自德洲乘舟、過出水米津、十五日、至覺府、十九日、辭覺府、廿一日、還宮崎、是歲、貫明公有病、覺兼往齋居法華嶽寺、凡七日自十四日、至十四日、、求以身代、齋畢、乃詠國歌曰、辰志毛有音阿、光音能、能場爾、志圖心音古々、有音阿、花音波、能影音加、哉音奈、三音阿、月、至覺府、晦日、辭覺府、四月八日、歸宮崎、十二年、甲申、三

月、公留軍佐敷、覺兼從在焉、廿七日、公子家口獻隆信首於佐敷、公親行實檢之禮實檢、說在、、覺兼侍焉、四月朔日、與伊集院忠棟等至島原、既而還宮崎、八月廿九日、松齡公自飯野城、出軍於肥後、覺兼亦出宮崎從焉、九月四日、至八代、八日、覺兼與島津忠長、及伊集院忠棟建連名木札於肥後、以禁士卒亂暴、軍無私、肥民安堵、十日、至熊本、十三日、徙軍於吉松、廿三日、俱進入高瀨、是月、肥後盡屬我、十月廿一日、自高瀨乘舟、至囊浦、廿二日、又乘舟至德洲、廿六日、又乘舟至水股、廿七日、去水股、廿九日、還宮崎、十三年、乙酉、八月、日州諸軍出陣於肥後、廿二日、覺兼使鎌田源左衛門・柏原周防介率兵先至八代、閏八月六日、覺兼發兵兵衛、字田能、登等從焉、、十日、至八代、是日、又與諸軍進至小川、夜宿豐福、十一日、與諸軍俱擊隈莊、敵兵出戰、我兵擊破之、斬隈莊役人甲斐治部・甲斐帶刀・以下二百餘人、追至坂城戶野村甚助、瀨田後藤、立木石近、及谷山刑部、、十三日、松齡公遣覺兼及新納忠元、屯響原、且使壯士、進放火於堅志田城麓、而親率忠長・忠棟出軍法連寺尾嶽、按視地形、以備寇之出襲、是時鎌田源左衛門・柏原周防介・金丸主馬允・吉田外記進擊破甲佐峯、殺敵兵數百人覺兼家士加治、木雅、樂介等亦為焉、、於是諸將俱進陷堅志田萩尾峯、覺兼及肝付兼寬先登入內城覺兼家臣長山兵部少、山、本備前、前繁被創云、、是夜覺兼與兼寬俱守內城、十四日、夜、美船城自拔而退去、十五日、與忠長至美船、夜、松齡公亦至焉、乃謀遣使於隈莊、而告之曰、子等宜早納質子而降于我、不然急攻屠城、十六日、敵遂降、廿一日、唱凱歌、比及九月晦日、猶居美船城、十月初一日、覺兼去美船、六日、至覺府、十八日、去覺府、廿日、歸宮崎、是歲、我聞羽柴氏率兵西下、公乃下教於一所衆地頭衆六字說在、、而獻盟書於覺府謂是時、國人疑我諸將中必有飽異志、不獨知其為誰、故使將其盟也、、於是十月廿四日、覺兼及諸將各上書曰、方今聞羽柴氏大軍將西下、

而聽下民之言曰、國中懦夫、或有密通志於彼者、臣等疑焉、雖然決不可與黨之、又曰、當與彼戰鬪之時、假使病莫能興、不可杜門留家、又曰、臣等身在外、公若聽其有罪過、宜速召而讓問焉、臣等罪借使當滅族、不敢迷亂欺罔明野史氏曰、昔李德裕誦武宗曰、臣等有罪、陛下當面詰之、事苟無實、得已辭無疑問矣、今覺兼等之言、有類之者、辭理自簡、小過則容其後改、大罪則加之誅讞、如此君臣之際

是歲十二月廿四日、一唯世子遣長野仲左衛門賜覺兼刀一口・馬一疋、十四年、丙戌、七月九日、發兵、十三日、經佐敷至八代、十七日、公下令曰、大衆宜進攻岩屋寶滿二城、十八日、夜、覺兼乘舟、翌日至高瀬、廿二日、至岩屋、廿七日、寅牌、我大衆進圍城、覺兼率日州兵宮崎、曾井、清武、田野、高城、飯田、嶽、米、大呼先登岸、執旗者此兵黨七郎兵衛建旗於岸上、城兵以眉尖刀斫折之、七郎兵衛中石、覺兼亦中石、銃彈又中面、不能進而退謙田源左衛門、數世民部少輔、長山兵部少輔、高野村主水佐、唐仁原藤七兵衛、皆中石、清武、高於是山田有信率衆續登、我大衆勵氣盡登、城將力盡遂戰死、城兵七百餘殲焉高二字、一作與之字死焉、廿九日、諸侯使者來問覺兼營、而兵士皆被創、無應對之者、乃下令急退軍、八月四日、歸八代、翌日、松齡公親臨營、手自賜藥、是月宮崎奈古八幡祠・及但生野八幡祠・有祭祀之事、於是九月十日、休暇去八代、十四日、歸宮崎、十月十五日、卒兵屬公子家口、踰梓山而入豐後三重、攻陷緒方城、尋圍利滿城、十二月十二日、大破京軍於利滿城下、十五年、正月、猶在豐後、三月、聞豐公大軍西下、則與諸將議班師、四月、豐公進入薩、而籍沒我日州諸邑、以故覺兼去宮崎還慶府、則命為伊集院地頭職、往居焉、貫明公因賜書曰、子宰日州、以盡忠於國家、孤未嘗一日忘也、今也徙居偏小、安能鬱々久居於此乎、孤方思封子大邑、子姑待之、十七年、己丑、六月十二日、病卒、年四十五、法號一超宗咄庵主、墳墓在妙圓寺、子治部少輔經兼初稱神、母敷根賴賀女、天正十年、壬午、四月朔日、

生、文祿四年、經兼年十四、從赴朝鮮、慶長三年、冬、從而歸國、直從至伏水、其後、慈眼公習勒犬追物事、經兼為射者班、十五年、九月廿五日、皆官往至信州高島、請因幡守諏訪賴滿、改上井氏復諏訪氏、自是小宗請復諏訪氏者亦多、元和間、經兼食田祿一千二十八石、寬永九年、壬申、七月廿九日、卒、年五十一、法號起岫明越居士、家臣谷山兵八殉死今誠訪義六、即經兼子孫也、

上井次郎左衛門秀秋、號傳齋、薰兼第二子、覺兼同母弟也、從祖父參河守親秋為秋弟、無嗣、因以秀秋為養子、松齡公舉為家老、從居飯野城、元龜三年、從戰木崎原、以功為馬關田地頭職、天正十年、十一月、赴肥後八代、十四年、七月、諸將攻陷岩屋城、秀秋留守八代城、後徙為小林地頭職、又轉為綾地頭職、遂病卒於綾、子次郎左衛門里兼初稱兼、永祿九年、丙寅、生、天正十八年、里兼年二十五、為松齡公家老、賜小林地頭職、從軍朝鮮、慶長三年、十月朔日、我軍大破明兵於新寨下、使里兼使伏水、因留勤番伏水邸、其後遣里兼航海檢地琉球國、十八年、從公女至江戶、居凡八年、而歸、賞其勞、賜秩二百石、寬永八年、辛未、六月四日、病卒於帖佐中津野村、年六十六、法號梅北了香居士、墳墓在中津野村飯屋園、子東市正兼道、天正十六年、戊子、生、及長為使衆、賜田布施地頭職、元和七年、八月、田祿籍云、上井西市正、食一千二百二十二石、寬永七年、祗役於江戶、病卒、年四十三、兼道之曾孫采女兼延之世、承應元年、四月廿九日、請諏訪因幡守、更上井氏為諏訪氏今誠訪市右衛門、即其子孫也、

上井仲五兼政、秀秋第二子、元龜二年、辛未、生、長為小林地頭職、從赴朝鮮、慶長三年、十月朔日、新寨之捷、被紅白雜縞甲、斬

捕為多、既而歸國、四年、九月十日、陣沒莊內野々美谷、年二十

九、子仲右衛門兼安、天正十三年、生、及長改上井氏為諷訪氏、

轉徙始良小林地頭職、慶長五年、稻津祐信侵暴我日州穆佐邑、兼安

往討之、寬永七年、幕府枉駕於我江戶邸、是時命兼安及大野主

計為普請奉行、而修邸、十四年、病卒於小林、年五十三、子木工右

衛門兼利初名兼、母野村市右衛門女、慶長十九年、甲寅、生、寬永元

年、兼利年十一、慈眼公召為近侍童子、後累遷物奉行・大坂奉

行・吟味役、慶安二年、年三十六、為泰清世子守役、因率妻子至

江戶邸、勤勞凡九年、至明曆四年、上言而免職、寬文二年、年四十

九、舉為國老、轉徙小林・帖佐・頴娃地頭職、三年、上言而致事、

六年、命定日入相府、而與聞國政、七年、復為國老、賜谷山地頭

職、十一年、又上言致仕、剃髮號如菴、如菴性聰警、有風雅、學和

歌於岡元宗好、又學禪於鈴木正三、貞享四年、六月十日、卒、年七

十四、法號不傳院殿直心如菴居士即今讓助仲右衛門、兼利之子孫也、兼利有嘗所詠和歌集行

於世、今錄其三首曰、今朝計左波猶保、木古能葉波志具禮天、密志秋音阿

能、形音加見密音立音多田音能、山音耶風音加增音吹、旅音多衣音古、須音野能音能

真音柴、加音利寢音念志音天、露音由志音俱袖音祖爾、耶音土留音月影音加解、悟音亮利音左

天波、何音爾遠音伊不喜能、左志毛草音左、草音上木音毛花音奈毛、佛音係奈音羅

受耶右釋

上井右衛門尉兼成、為秋第二子、及姪覺兼以國老為宮崎地頭職、遣

兼成俱徙居焉、數從軍有功今上井五郎左衛門、即兼成子孫也、

上井六郎左衛門、慶長中、從公女至江戶、

上井式部左衛門、慶長五年、官始置高岡邑、以為一外城、是時遣式

部等徙居焉、

野史氏曰、覺兼謹慎周密、且有武略、盡忠公室、事無過舉、其勳

績甚多矣、雖有自記終集日記、始天正年、甲辰八月、丙戌十月、凡十三年間、不全、惜哉、傳人居明不能令人輕

如軒、朱註、輕車之覆而前也、軒車之知而後也、

町田久倍列傳第二十三

出羽守町田久倍初名久倍、稱助太、號存松、道佛公第七子常陸介忠經十六

世之孫也、忠經第三子五郎太郎忠光、始為町田氏、世々食邑於伊集

院石谷、忠光生五郎光俊、光俊生五郎太郎經俊、經俊生五郎入道道

俊、道俊生常陸介實氏、實氏生五郎兵衛尉助久、助久生五郎清久、

清久生五郎忠良、忠良生伊賀守成久、成久生五郎俊久、俊久為寇所

殺於妙圓寺在伊集、法號善中、俊久無男、叔父出羽守高久弟、成久、嗣、改

町田氏始為石谷氏、高久生左京亮賴本、賴本生伊賀守梅吉、梅吉生

伊賀守梅久、號傳心、天文五年、十二月七日、奉大中公命、去麿

府歸石谷、路為島津實久所殺、葬之路側、樹墓上以松俗傳今水神、二里塚

梅久、梅久生伊賀守忠榮、忠榮生兵部左衛門尉久德、久德生久倍、久

倍復為町田氏、永祿十一年、菱刈隆秋謀反、久倍從公與相良菱刈

二賊戰、殺其將有屋田源四郎、其後為使衆賜伊集院地頭職、天正三

年、四月廿一日、官享琉球人、設犬追物事、久倍掌傳呼職此云呼、六

年、從戰耳川、九年、八月、從軍水股、十一年、春、勤戍于肥後八

代城、三月廿三日、還麿府、十二年、八月、龍造寺政家為盟書賴秋

月種實、請屬我、種實又為盟書、遣使平田光宗城八代、假知、光宗乃使久倍

於飯野城、白之松齡公、於是九月四日、公率軍至八代、久倍從焉、

五日、使久倍及稅所新助會種實使、而聽龍造寺氏降、十三日、公

移軍吉松、是時山鹿氏亦乞屬我、十四日、以宇藤伊賀者為質、公乃遣久倍及伊集院久治、使山鹿氏以堅其信、(頭注「以堅其信四字」一作「重結信四字」又重二字、左傳「結信二字」古人用焉)十二年、四月、貫明公使久倍及島津忠長・伊地知重秀讓 松齡公守護職(詳讀守讓職、考未、俟再考)、是歲

貫明公親加元服於 慈眼公、使久倍禮相而助其儀(此云禮、考未)、十四年、貫明公及 松齡公出軍八代、遣諸將攻筑紫岩屋二城、久倍從 二公留守八代城、十月、久倍從 松齡公、進入豐後、十五年、三月從而班師、文祿元年、七月、久倍及伊集院久治殺公子歲久於瀧水(是時二子未聞之、脫公子於瀧水、考未)、其後舉為國老、賜大口市山地頭職、而以國老之故不能移治、因以弟久政代治焉、慶長十四年、琉球國降於我、於是我乃遣使白之於

幕府於江都、 幕府賜 慈眼公及 貫明松齡二公書、以賞賀

此事、於是十二月、 貫明公使久倍使於江都、拜其辱(是時 東照台德、五年、八月廿八日、卒於播州赤石、歸葬於大口市山永福寺、法號惟仙宗逢居士、)子左京亮忠綱(初稱五郎、太郎)、天正十六年、從貫明公朝京師、後從軍朝鮮、病卒於唐島、無男、圖書頭久幸(初稱助、太郎)、久倍次子、初久幸出為肥後山城養子、冒肥後氏、名盛吉、稱勝兵衛、及忠綱卒、辭肥後氏復町田氏、而繼其後、更名久幸、從赴朝鮮軍、慶長三年、新寨之戰、久幸被玄甲、進衝明軍、四年、赴莊內軍、十六年、慈眼公舉為國老、十八年、祇役於江都、廿年命歸國(三月九日、歸江都、四月初一日、至高島、廿三日歸松城、是時久幸居松城、)其後復祇役於江都、寬永元年、正月十七日、卒於江都、法號江山鄰月庵主(今町田監物、即久幸裔也)、

町田源左衛門尉久政(初名忠顯、稱源六、)久德第三子、母伊集院久盈女、及代兄久倍為大口市山地頭職、率兵赴朝鮮、慶長三年、十月朔日、公大破明兵於泗川、久政被青緞甲、先衆追亡、十一月、被敵艦而戰死、法號劍叟鐵居士、墓在福昌寺、)子伊賀守久則(初名久慶、稱源六、)號石

心、以父戰死故、賜久則世祿百石、徙居覺府、後增賜田祿若干石、慶長四年、從討莊內賊、六月廿三日、進攻山田城、中銃丸、特有賊魁黑木越前者、大呼血戰、我兵無敢當之者、久則冒創與之戰三合、遂斬其首、五年、從戰關原、及敗走、久則後 公、乃與長谷場織部等凡十人至京師、往依近衛公所、而借銀於三輪山大先達前官、俱歸薩、寬永十三年、五月二日、屬公子忠朗徙柁城、賜田祿三百石、十五年、十一月、復歸覺府、慶安二年、寬陽公舉為國老、寬文二年、致仕、延寶四年、十一月十日、卒、法號聲前院殿明口石心大居士、久則在職之日、轉遷山田(今町田縣、)大崎・隈城・阿久根・百次地頭職、即久則之後也、

町田三郎五郎久次、出羽守高久第三子三郎五郎忠光四世之孫也、忠光生三郎五郎忠儀、忠儀生八郎左衛門忠親、天文五年、十二月七日、陣沒於石谷、忠親生久吉、久吉生久次、戰死於隅州岩劍城、子新左衛門忠繼(初稱新五郎、一本作、忠繼、久次之弟、)馬越之役、羊頭中喉死、子新左衛門久泰(初名久直、稱、)稱、天正中、為市山地頭職、子神兵衛久時(初名久守、稱、)稱、為田代地頭職(按別記、朝鮮新寨之戰、町田三郎五郎按綠緞甲、力戰、尋又衝敵艦、與兵、三郎五百人俱捨舟上南海島、疑是久時也、○今町田新左衛門久時之子孫也、)

町田彌兵衛久興、解魔法師如意坊(八郎左衛門忠之適子、)從軍朝鮮、明大軍來圍我於新寨、久興被綠紫雜緞甲、與衆俱擊破之(或云、官庫所藏新寨圖畫、有町田基五郎者、即久興也、)尋進與敵艦大戰於海上、為敵艦所困、語在樺山忠征事中(今町田平覽、)

町田助次郎久次、久興弟、慶長三年、戊戌、四月三日、病死於朝鮮新寨、年十八(久次子孫、今、伊作也、)

町田中務少輔久用(初稱又七、)町田氏八世清久第六子・左京亮則久(一作土佐、)守則久、三世之孫・又七盛久之子也、盛久戰沒於郡山(郡山、忠重生久用、而盛久、忠重時也、)

知再考、久用黨島津實久、大永七年、實久劫略伊集院、使久用守一字

治城、天文五年、三月七日、梅岳君攻陷一字治城、久用降、子加

賀守忠林初稱又七、又縫殿又七、大中公以忠林為右馬頭忠將家老、永祿四年、從忠

將戰沒廻邑、子加賀守忠豐初稱又七、又縫殿又七、、父屬忠將之日、忠豐留事於鷹

府、子駿河守久門初久、為納殿役、後轉徙百次・曾於郡地頭職、元

和初年、田祿籍云、久門領二百餘石、自寬永元年、至十年、祗役於

江都、賜月俸三十石云、廿年、七月八日、卒、墓在南林寺、子縫殿

介久岑、為百次地頭職今町田孫也、即、

町田軍四郎忠次、忠林第二子、與父共陣沒於廻、年十九、法號義翁

常忠禪定門忠次子孫今居、

（頭志）二本作石谷因幡守忠成、町田周防守忠成初稱三郎、又民部左衛門、、伊賀守梅久第二子、大中公以忠成為右馬

頭忠將家老、後從忠將戰沒焉、法號道久忠成子孫今居、

町田新助忠玄、周防守忠胤町田氏九世五郎、十二世之孫也、慶長四年、六月

十四日、戰死於莊內山田城忠玄子孫今居、

町田周防守忠房初名忠機、稱、號香中、伊賀守忠榮第二子、以大中公命為

右馬頭以久家老忠房子孫今居、

町田越中守忠辰初稱助三郎、又宮内少輔、號一步齋、土佐守忠好町田氏八世清、四世之孫也、

忠好生讚岐守鄰久、鄰久生讚岐守□恒、□恒食邑帖佐住吉、而居

焉、□恒生越中守□時、□時生忠辰、忠辰學兵法於伊集院忠朗、而

事 松齡公於飯野城、木寄原之捷、使忠辰唱凱歌、且行首捨引導及

血祭之法二事未詳、、子越中守忠連初稱又、號乘傳齋、受兵法於父今町田孫右衛

也孫、

野史氏曰、

種子島惠時列傳第二十四

加賀守種子島惠時初日左兵衛、號意釣、其先平相國清盛之孫・左馬頭行

盛、壽永二年、癸卯、奉

帝出京師、長州壇浦之戰敗、行盛投海死、有子、年猶幼、母抱匿邊

土、後避難至鎌倉、而賴遠江守北條時政、時政以為己子、任肥後

守、名時信後更名、而賜三鱗幟章及大腰刀傳國宗、後奏封時信隅州熊毛郡

種子島、故時信渡海往居焉、因始為種子島氏、是時有種子島地頭大

浦口某者、時信有所思慮、請其姓藤原及其幟章、以為家吉兆云、時

信卒、子太郎左衛門尉信式立、信式卒、子太郎右衛門尉信真立、信

真卒、子左衛門尉真時立、真時卒、子左衛門尉時基立、時基卒、子

左近將監時充立、時充卒、子對馬守賴時立、貞治五年、己丑、齡

岳公遣賴時等擊肥後菊池氏、戰於日岡、賴時奮戰、遂亡於陣、子左

近將監清時立、應永十五年、戊子、十月八日、恕翁公增賜清時屋

久島・口永良部島・硫黃島・竹島・黒島・凡五島、清時卒、子播磨

守時長立、時長卒、無男、弟左近將監幡時立、永享八年、丙辰、八

月十日、大岳公益賜幡時臥蛇・及平二島、幡時卒、子左近將監時

氏立、時氏卒、子武藏守□時立、□時卒、子惠時立、自信甚至惠時

凡十三世、惠時母蒲生宣清女、文龜三年、癸亥之歲生、天文八年、

閏六月、從 大中公征市來賊、十二年、秋、八月、南蠻船漂到種子

島西村浦、賈長二人一人曰半良取舍、一人曰喜多化五夫、携鳥銃來焉、以術傳之惠時父子惠時

命家臣藤川四郎、此本邦傳習其術之始也、永祿十年、丁卯、三月十四

日、卒、年六十五、法號蓮住院日善大居士、子左兵衛尉時堯初名稱蓮

大稱、號可釣、母島津忠興女、享祿元年、戊子、二月十日、生、及

長、梅岳君以其女妻之、天文十年、四月七日、時堯任彈正忠、叙

從五位下、先是時堯父子不睦、至十一年、三月廿三日、遂叛父、合
禰寢氏、而招其兵、於是禰寢氏兵渡海至種子島、未幾而引還、是時
惠時乞救於 大中公、乃遣新納康久、率兵往援、閏三月七日、船至
屋久島、則惠時來告曰、臣才弱、不能保三島、請獻之 公、康久
曰、自今父子和睦、而子無恙歸本島、則 公喜使父子統領襲授三島
必矣、於是父子遂感悟、獻誓言、而奉謝永不逆恩、康久乃收兵而
還、永祿元年、二月十七日、時堯任左近將監、天正七年、己卯、十
月二日、卒、年五十二、法號法性院日勝大居士、長子左兵衛尉時
次、母禰寢尊重女、弘治二年、丙辰之歲生、元龜元年、父有所思
惟、讓位於時次、時年十五、三年、壬申、先卒、年十七、次子左
近將監久時、號一琢、母黒木道統女、永祿十一年、戊辰、十月廿八
日、生、及兄卒、久時繼其後、天正七年、久時年甫十二、貫明公
親加冠 名克時、稱三郎二郎先是傳島氏世行冠禮於祖先神、而公親加元服自久時始云、八年、十月、賜諱
一字、改名久時、十一年、久時年十六、從獵田布施邑、是時大豬人
立 公馬前、久時捕而刺殺、因賞賜甲冑一領、十二年、三月、遣諸
將救肥前有馬氏、久時率兵船三十餘艘、四月七日、至島原、十四
年、七月、擊筑紫廣門、十月、赴豐後、途至日州細島、病瘵瘡、命
還國、而使家臣等代其軍、其後久時至京師、學鞞鞠法於飛鳥井亞相
雅純卿、十七年、十一月廿二日、遂傳授其法、文祿元年、壬辰、從
松齡公入朝鮮、野戰攻城甚勞軍事、其後歸國、四年、秋、豐公命
丈量我三州田地、以改易諸將采地、而易久時所采種子島・屋久島・
口永良部島、以薩州知覽院、於是久時率親戚家臣移居焉、其後再從
至朝鮮、慶長三年、泗川之捷、久時被紺絨繚穿甲、血戰為多、十一
月、歸國、四年、夏、公復賜久時種子島之地・田祿六千七百石、
而除知覽院、是時屋久島・口永良部島諸島不復與焉云、是歲赴莊

內、十六年、辛亥、十二月廿七日、卒、年四十四、法號世尊院日恕
大居士、初久時妻島津朝久女、無男、又娶前田重弘次郎女賢是、有遺
腹、至翌年壬子、八月十七日、生男、名曰鶴袈裟、元和六年、三月
十五日、慈眼公親加冠、伊勢貞昌相禮、而賜諱一字名忠口、稱武
藏守後任左近、而賜大小二刀・馬二疋、翌日又賜盾尖刀於西城、其後忠
口承 公女、寬永七年、四月、台德 大猷二廟枉駕於我櫻田邸、
是時忠口抵役於江戶、而謁 二廟、各獻給二十襲、二廟亦各賜忠
口白銀一百枚、既反乎國、十八年、五月十三日、寬陽公遣忠口使江
都、大猷廟召見之、而口自賜報、又賜道服及衣裳、而反于薩、二
十年、九月十日、奉命復使江都、而謁 大猷廟、復口自賜報、復賜
道服及衣服、其後忠口以所珍藏名茶器此云茄子獻之 公、於是遣伊勢貞
昌賜忠口田祿四千餘石、以報謝是時貞昌有所與忠口之書云云云、獻其所、
三月廿六日、卒、四十三、法號孟猛院日源大居士令種子島伊勢、即忠口之、
種子島彈正忠時式、惠時第二子、天正二年、正月、攻牛根城、最
貫明公命改武藏守、且賜甲冑、十九年、辛卯、閏正月、卒、法號隆
善、
種子島二郎右衛門時貞、和田讚岐正貞長子、稱十郎、母東鄉肥前重
信女、元和六年、八月十一日、生、及長、為北條甚四郎時住時住、種子島
種子島二郎右衛門時貞、和時生國上大和守時種、時宣生能登守時庭、時通生四子、長出家為僧、次女子次子、、
次駿河守時章、及 貫明公納大宗時亮女、立為夫人、時通女後入掖庭、為 二妻、夫人業後、公使一妻掌內政、勤勞多年、因賞賜
滿之兄、北條氏、奉一妻祭禮、寬永九年、六月十四日、卒、年五十七、時盛生時住、慶長三年、生、寬文元
年、卒、年五十四、無 之義子、冒北條氏、為人善鳥銃、且學馬術、及犬追物之
術于川上芳安、正保四年、十一月十三日、有王子原大追物之事、時
貞為射者班、寬文二年、賜久志秋目地頭職、是歲大宗久時令時貞改
北條氏為種子島氏、延寶六年、戊午、十二月廿八日、卒、年五十

九、法號本□院貞□日覺居士（今種子島次郎右衛門、當時貞之弟也）、野史氏曰、

附錄

上妻家長、姓藤原、稱阿波守、其先筑後守隆宗、居於筑後上妻、

因氏焉。（頭注）其書以下五字一作有爾天日家真。建久中、奉幕府命、來宰種島、及北條時政

以肥後守信基奏封於種島、家真將辭而反鄉土、信基以其能得民心、使之止而為政、且與之土田陪敦、（頭注）土田陪敦。家真遂臣事焉、家真之十六

世孫曰阿波守家續、家續生家長、少穎悟、三郎二郎久時（頭注）久時信基以後世孫也、十四世孫、國語注例。見而器之、擢為室老、時年二十、天正中、貫明公出師於肥筑

豐、是行也、家長從於久時、力戰有功、文祿元年、壬辰、豐公將

有事於朝鮮、使諸侯受役、往結營於肥前名護屋、貫明公亦與

焉、於是使久時等往戕、（頭注）久時乃使家長為植將、徒役六十人先至、功役未成、豐公將至、傳命促戕甚急、而家長廝役不給、懼獲戾、

有宗族越後守鎮勝（頭注）鎮勝後人、者、使徒卒二百人來助之、家長說、於是乎日

夜董督、不五日而造七十餘營、事畢而歸、先是島父老故臣或有沮

出師者、久時惑之、猶豫未有所決、家長乃與西村時安（頭注）同辭而諫、同辭而諫

曰、聞方今違師命者、爵貶國削、君若後至、臣懼其不免於罪、久

時覺寤、即徵發兵賦、戒具鬪艦、家長乃與時安帥偏師先濟、是時

松齡公既在朝鮮、二人走謁曰、久時有疾、不能挺鉞先驅、仍執醜

虞、懼不免於罪、使吾儕先謝不敏、及久時至、遂不被責、則二人

之為也、君子曰、善事君哉、家長與虜戰有功、文祿三年、從歸

國、四年、久時徙封知覽、家長從之、厥後再從征朝鮮、泗川之

戰、斬首虜多、慶長四年、久時復舊封、家長從歸、是歲、冬、從

軍莊內、十四年、祝髮號入木、未幾辭職、是時久時既卒、忠□猶

幼、老臣野間氏、平山氏、（頭注）統回。跋扈縱姦回、家長與河內時元訴之覽

府、姦人遂伏誅、於是 慈眼公命家長復舊職、元和六年、忠□

冠、家長以耆老、從事於其間、儀成、公召家長於西城曰、忠□

幼弱、汝左右周旋、嘉事有體、自今而後汝能匡正以成其德、乃賜

佩刀、時人榮之、寬永六年、以老乞骸骨、及忠□為婚、公又命

家長助其儀曰、汝有力於種島氏、今雖致仕、宜與其事、因親賜卮

酒、十三年、丙子、正月十七日、病死、葬于石體原、家長娶西村

氏、生一男二女、男曰家直、慶長元年、與父俱赴朝鮮、四年、十

二月、戰死於莊內安永、時年十九、無嗣、家長乃養肥後氏子以為

嗣、長女適肥後氏、次女適西村氏（頭注）山田子種作家長神道碑、其事極詳、今鈔記於此、以備他日纂考。

西藩烈士干城錄卷之十四

西藩烈士干城錄卷之十五

山田有德列傳第二十五

山田藏人有德、父式部少輔有親、母市來家親女、有親之父曰主計介有俊、有俊之父曰和泉守有重、有重之父曰四郎左衛門有朝、有朝之父曰國熙、國熙之父曰有尚、有尚之父曰有康、有康之父曰彌九郎有家、覽島野元原良之戰、有家與多田七郎鬪有功、有家之父曰有備、有備之父曰國治、國治之父曰國恒、國恒之父曰式部少輔有實、文治間、奉 得佛公命來薩、而賜日置山田、因家焉、故姓山田氏、有實之父曰武藏三郎左衛門尉有國、有國即

桓武天皇之六世孫平維衡第二子、出雲守正濟之五世孫也、初有親與島津實久叛我、天文二年、十二月二日、悔先非、而獻山田於我、

梅岳君便復賜山田、鎌田刑部左衛門・阿多加賀等謂於君曰、彼今雖屈膝、而非其情、彼梟雄絕倫、如懷二心、則其害多矣、宜早殺之、於是廿四日、誅有親於伊作佛坂事詳於前、既而悔無其罪、則召其孤有德、復賜山田、而崇有親靈為多門天、即伊作多寶寺毘沙門堂是也

有親法號孝山、忠公居士、天文中、隅州宮浦之戰、有德揮刀先登被創、弘治元年、

正月廿三日、從大中公攻蒲生北村城、先登、以功賜市來地頭職、其後改賜串木野地頭職、因移居焉、是時渋谷賊數來侵串木野、有德以有病不能任戰事、辭職退山田、五月廿五日、卒、法號天室昌祐菴主、子越前守有信初稱新、母町田忠林女、天文十二年、癸卯之歲生、從幼近侍大中公、天正三年、三月十五日、以貫明公嗣立故、有大追物事、有信為射者班、四年、八月十八日、公自將伐高原、有信為劍役初後未、五年、從公出擊伊東義祐、義祐敗績、出奔豐後、六年、二月十四日、為新納院高城地頭職、因徙居焉、時人倚重於有信、是歲大友議鎮自率六萬餘人、侵我日州、有信僅以三百餘人、堅守高城、是時島津家口・吉利忠澄・鎌田政近・比志島國貞等共來援、步騎凡三千餘人、當是時、三納村愚民謀反、據河原田道場、於是城中出擊殺賊民數百人、十月廿日、議鎮進圍城、放火村落、擊破外郭、十一月朔日、公率精騎三萬餘至佐土原、十一日、我軍進破松山砦、十二日、大戰於城下、有信等出擊、敵軍敗績、敵將獨有整頓部曲七十餘人、而退者或云田原、我軍觀其齊肅、無敢迫之者、有信選銳躡其後、而擊破之、斬獲二十餘人、是日有信部下斬首三百餘級、翌日、公召有信等賜酒、既而又賜褒牒、九年、八月、有信率兵、從松齡公赴水股、十年、十一月、有信復從公在八代、是時公使有信及鎌田刑部左衛門至有馬、十三日、還報、二十日、復以川上上野為上將、乘船自德洲至有馬、有信屬焉是時有馬氏使德原肥前守、差至、廿三

日、有信等謀深江城、城兵猝出、我兵放鐵砲斃敵最着前者三人、餘兵退去有信乃遷於八、而十五馬、廿五日、國老上井覺兼自八代來、而下令曰、諸將宜合謀竭力、而攻陷城、不可妄戰以傷士卒也、十二月四日、有信等進兵攻千々輪城、鎌田兼政率宮崎土兼政、上甘地兼政、是時覺兼在八代、先登於正陣

此云大、中石被創數根越中先登於副陣此云野久、被創、有信及穎娃久

虎・蕨田木工左衛門相長兵士・等亦繼登、大呼血戰、城遂陷、是日我兵斬首凡三百餘、十一年、正月十一日、夜、有信等班軍還八代、八月、有信在八代城、十月廿八日、公使諸將築花山城、命有信行鐵初二字俗誤、之儀、十二年、三月、有信率兵、伐龍造寺隆信於肥前島原、秋、從松齡公至肥後、十月八日、與新納忠元共出八代城、謀三池境而歸、十三年、閏八月、進軍三舟、九月六日、至筑後三池、十二日、陷堀切城、斬敵兵三百人、十月十六日、班軍於麿府、十四年、七月、與諸將往伐筑紫六日、陷鷹取城、十日、筑紫廣門降、勝山城不攻而潰、廿七日、諸軍圍岩屋城、上井覺兼先登、中石被創、有信繼登、亦中石、碎鐵盔被創、家臣等扶而退八代、公賜藥而後愈是戰馬賊士連矢軍兵、及家臣八陣沒、、十月、從島津家口入豐後三重、放火邨落、十二月九日、進陷緒方城、尋圍利滿城、十二日、破京軍於城下、既而有信先衆班師、十五年、春、諸將撤軍於豐後、三月十八日、公及家口率諸軍入日州縣城、時有信出高城往謁焉、翌日、公入城、廿四日、公出城、至都於郡、謁貫明公、四月六日、羽柴秀長將二十萬衆、謂雁行蓋二史記亦言雁行、雁行至日州、結營高城高鍋之間、凡五十餘所、而有信以三百人守城、繕兵列柵、為死守計是時喜入久道、平田增宗、、十八日、公自將二萬餘人、進擊目白坂營官部職、、我軍不利、公引而還麿府、是時高野山興山上人及安國寺等來勸和議、廿一日、公乃遣伊集院幸侃質於秀長營、又遣善哉房者、至高城、命開城而降焉、於是信不得已、剃髮

從之者八人、時有榮年二十三、既而阿松等多與邏所人金、而與留衛者共出城而遁去、歸國後、公賞有榮功、賜褒牒及祿二百石、貫明公亦賜刀吉道所、以褒美之、後公遣有榮使駿府、謁東照廟、廟賜有榮川原毛馬白馬黑鬃、此、川原毛、

榮二為射者班、其後慈眼公下教曰、子父理安盡忠於公室、而失其采地、事最無謂、宜選地以賜子、有榮固辭不受、寬永六年、己巳、閏二月廿六日、轉徙出水地頭職、而居焉、又增賜祿八百石、十三年、丙子、三月、擢為國老、十四年、島原賊起、有榮率出水兵至島原、有功、二十一年、以嚴有廟生、且是歲琉球王尚賢即位、故使者金武安按司・及國頭按司二人、航海至於慶府、於是命有榮掌來朝事、而寬陽公自將二使發慶府四月十日、往至江都六月十日、而朝幕府十月五日、慶安三年、致仕、寬文八年、戊申、九月二日、卒於

出水、年九十一也、野史氏曰、乳養子云、太公八十而得文王、慧時云、太公九十乃領榮、王氏云、奇美哉、太公之得文王、所謂至任事十八字、一作君臣統、度能名、附於當時、遺類榮於後商、可、伊地知重秀九十五、田有榮九十一、所謂聖臣俱合、魚水相親、布德施惠、善功名於當時、猶堪一行、忠元有榮其類、法號昌巖松繁菴主或曰、出水、龍淵村有榮灰塚、葬杉、初一唯世子賜有榮紅緞甲・及刀一口・四

錢鉛子鳥銃、傳之子孫云、子彌九郎有季、母伊勢貞眞女、慶長十三年、生、元和七年、官勒習犬追物事、有季為射者班、時年十四、寬永八年、從慈眼公至江都、有病、公親臨問焉、五月七日、遂卒、年二十四、法號本室理源居士今山田新助、即、有季之子孫也、

山田土佐守有貞初稱彌、理安第二子、母關屋清右衛門女、天正十九年、生、為彌八郎有守式部大輔有親第二、嗣、而理安叔父也、有貞有世祿百石、及父没之日、貫明公下教曰、理安盡忠報國、以故數賜秩祿、皆辭而不受、方今賜子祿二百石、於是合領三百石、而與町田伊賀俱為親從隊騎、數抵役於江都、其後兄有榮為國老、或抵役江都、或奉最於慶府、以

故有貞以假知出水城事往鎮焉、萬治四年、四月三日、卒、年七十一、法號無計勝庵主今山田八郎、即、有貞之子孫也、

山田主計頭有尊、理安第三子、有貞同母弟、慶長元年、長為長島地頭職、寬文十二年、卒、年七十七、法號清意即、今山田增右衛門、即、有尊之子孫也、

山田與一兵衛有清初稱彌、加賀守國菊家宗子彌九郎有之子孫也、從討大友氏、有功、因賞賜盛長刀、其後陣亡於肥後矢崎城、子彌兵衛有昌初稱彌、生死不知其年月今山田彌兵衛、即、有昌之子孫也、

山田彌兵衛有相或云與彌兵衛、有昌蓋同人、朝鮮之役、我聞明兵大至、於是松齡公急召兵於薩、是時有相以所領田祿賦、出兵四人、而至朝鮮、泗川之戰、被紺緞甲、力戰有功、公振旅之後、賞賜祿十五石、

山田彌左衛門有棟初稱彌、市來備後第二子、而為山田彌太郎有明式部少輔有棟第四郎、之嗣、冒山田氏、有棟有所著軍功記、行於世、其子孫今居出水邑云、

山田松千代、見於栗野由來起、俟再考、

山田大泉坊執辨、一口善吹二海螺、慈眼公嘗過萩原天神祠、有祠中吹海螺者、公聽而異焉、使人視之、則勢辨也、乃召為近侍、及公薨、勢辨自殺以殉焉、年四十九、法號權大僧都法印大越家勢辨、福昌寺公廟前第九地藏塔、是為勢辨塚、

山田半助、備前中納言秀家家臣也、及秀家見囚、半助遂事我、賜之以月俸乘馬賦乘馬賦、未詳、數使於他邦云今山田彌左衛門、即、半助之子孫也、

山田伊豫、大中公潛出清水城、至小野之日、伊豫等八人從焉、子壹岐、更山田氏為山本氏、其子孫今居綾邑云、

野史氏曰、有親失之於前、而得之於後、所謂困而反則也、仲尼曰、能補過者、君子也、詩曰、君子是則是效、孟僖子可則效已矣、如有親亦庶幾乎、惜夫、死其讒也、有德事君忠貞、古語云、君討臣、誰敢讐之、其有德之謂乎、一有信純亮死節之臣也、昔哀公問取人之法於孔子、孔子對曰、事任於官、無取捷捷、無取鉗鉗、無取多非不正、啍啍、捷々貪也、鉗々亂也、啍々誕也、故弓調而後求勁焉、馬服而後求良焉、士必慤而後求智能者、至如公之與有信、其庶幾乎、蓋有類於此者、一有榮義勇忠烈、萬人之敵也、所謂雲雷交發、虎豹出沒、推倒一世之智勇者、非耶宋陳亮、其一門闔族可謂多良也、

島津義虎列傳第二十六

薩摩守島津義虎者、薩摩守實久之子也、天文十三年、五月朔日、生實久、初名久意、稱太郎三郎、又八郎左衛門尉、父曰薩摩守忠興、母相良氏、永正九年、壬申之歲生、忠興父曰薩摩守成久、成久父曰薩摩守國久、國久父曰薩摩守用久、用久即義天公第一子、應永八年、辛卯之歲生、及長始封薩州出水郡、是號薩摩家、長祿三年、己卯、三月十九日、卒、年四十九、

當實久之世、傳領薩州出水郡、并吞高城・水引・谿山・加世田・川邊等數邑、支族繁茂、而其姊為大翁公夫人、以故實久威勢日強大、潛抱不臣心、大永六年、丙戌、公賢大中公、欲立以為嗣、而將任梅岳君以國政、於是十一月十八日、君携大中公、俱至覺府、而謁公、十二月、邊川筑前忠直以隅州帖佐城畔按忠直、川上家口、實久密遣兵援之、於是梅岳君自將攻陷之、是時梅岳君率兵五百餘人、其後至直之通食忠貞、始事大中公、賞其功、益封伊集院邑、七年、丁亥、四月、公讓位於大中公、而自退隱居伊作、而剃髮、於是大中公親承

國統、即位於覺府、移居清水城、實久不懌、五月、帖佐邑宰島津昌久稱下野、號政實、去年十二月、梅、柘城城宰伊地知重貞為柘城地頭職、、俱黨實久、實久時其隙也、自引兵襲日置伊集院二邑六月十七、是時梅岳君既誅二賊五月十七日、誅昌久及重貞、重貞子新左衛門、今其子孫居吉城云、、分兵守二城、而乘舟至覺府戶柱津、始聞實久變、乃乘夜歸田布施、十五日、實久來襲清水城得獲輿、或止其死、不能事君、而又復云、國、大中公與數騎從城西門出、由小野走田布施、廿一日、實久潛至伊作、誑誘太公復歸覺府、而自執國權、七月、梅岳君伐復伊作城、伊地知重貞將東城、七月廿三日、城陷、重貞、、天文二年、栗波田孫六以南鄉城叛、梅岳君襲復之孫六意、孫六稱實久三月晦日、孫六出獵、君襲其亡也、往襲之、擊殺留守將栗波田河內、栗波田氏、孫六遂逃去、、四

島津義虎列傳第二十七

實久來襲南鄉、不克而還、十二月、山田有親叛實久降梅岳君、而以讒被誅、四年、四月三日、太公誅川上昌久、其黨十四人、恐罪及已、則與實久謀逐太公、太公潛乘舟逃帖佐、而賴祁答院氏、實十月十日也、於是實久引兵入覺府、放火郵落及市門、火七日不絕、實久遂以覺府為已有、且有奪大統之志、而國人不服、別謀曰、實久引軍入覺府、則諸家子欲欲即宗實久為三州之主、獨吾邑兵士等不可、得謀變之、於是實久不能得、遂引還出水、其後數歲、大中公自伊集院復歸覺府云、自此三州擾亂、豪族各据城邑、而戰鬪日無止、五年、三月、梅岳君征伊集院邑、陷

一宇治城大永七年、六月、實久城、而遣町田、、九月、攻陷大田原砦、十一月長崎砦大永七年、實久使土橋勘解由左衛門守之、是歲十一月廿八日、勘解由遣栗波田孫六左衛門、島某乞降於君、而自燒砦來降、、及神殿砦皆降我、關、某、有威、三月、廿九日、十二月、石谷城畔實久而降我、初石谷城主石谷伊守忠榮、實、六年、正月、七日、竹山砦陷、守將肥後盛治自殺盛治治大和、號忠清、又勳實、額下大眼高、、於是君乃率兵至覺島、陣犬迫、實久來戰敗績、走谿山、四月、遂遁加世田、當是之時、梅岳君深憂邦内干戈不止、民人苦塗炭、於是五月上浣、會實久謂之曰、子若以加世田川邊二邑與於

我、我與子以寔島・谿山・伊集院・吉田・四邑、而各守封疆、以

止戰爭、俱無苦下民為也、實久不可、其後自至莊內、與北鄉氏島

津氏等相謀、而結好、新納忠勝不應、遂謀逐忠勝於山東、七年、

十二月十九日、梅岳君攻加世田城、不利、廿九日、夜、復襲取

之、是時大山內藏介、以實久守城、及城陷、遂被殺、大山宮內少輔、與我兵奮松久友相刺而死、大浦東、亦在城中、與從

兵二十人俱歿、相復新左衛門、先送妻、於城外、還城而戰、實久陣沒、市來備後家保、曾祖備

前守實始屬瀨州家、為加世田頭、至、川邊山田賊來救、不及、初大梅越前領山田、而應實久、其後

家保戰死、子家利降我、自有傳、

我、君遂并保加世田五城、八年、三月十三日、實久與 大中公

戰於谿山紫原、敗績、十四日、苦莘城主平田式部宗秀畔實久而降

我、本城亦陷、初實久使備後播磨者為本城、

是時大山內藏介、以實久守城、及城陷、遂被殺、大山宮內少輔、與我兵奮松久友相刺而死、大浦東、亦在城中、與從

兵二十人俱歿、相復新左衛門、先送妻、於城外、還城而戰、實久陣沒、市來備後家保、曾祖備

前守實始屬瀨州家、為加世田頭、至、川邊山田賊來救、不及、初大梅越前領山田、而應實久、其後

家保戰死、子家利降我、自有傳、

公威大震、實久之黨恐而退川邊、廿八日、梅岳君引兵至川

邊、陣古殿、高城宰鎌田加賀守政真畔實久而降、去年十一月、政真敗加世田

而出、

本城平山二城皆陷、閏六月、大中公征市來邑、十七日、平

城陷、八月廿八日、串木野城主川上忠克叛實久而降、九月朔日、

市來城降、初市來城、伊集院氏所據、實久遣兵圍之、

而保守其城、公以平城為本營、

廿九日、忠房遂乞降、九月朔日、忠房率七百餘人、乘舟而遁、出水、

自比後不記實久所侵、悉為我有、而其力終難、而謂和者也、

湯田兵庫者、居阿久根、有所愛田犬、而東鄉重治、東鄉重治、

犬去、兵庫大怒、往殺盜、而取其犬還、於是二家始不睦、至永祿

間凡二十餘年、鬪爭不止、鬪爭、一作戰、

年、閏正月、實久至京師、謁將軍義輝、而歸國、途有疾、七月七

日、還出水、越廿二日、卒、年四十二、法號昌岳源久大禪伯、

迫尻無二郎俱在阿之間、田代治、殺其阿左近、白男因幡、殺津田時盛、

京師、謁將軍義輝、賜諱一字、改名義俊、任薩摩守、既而又改名義

虎、八年、乙丑、三月廿日、義虎攻殺天草越前、略長島之地、十

年、丁卯、十一月廿三日、大中公父子自將往擊菱刈賊、攻下馬越

城、是夜、橫川賊捨城而遁去、翌日、至夜、本城、湯尾・曾木・市

山・青木・山野・羽月・平泉・八城亦捨城逃去、廿五日、遣諸將保

守本城、曾木・湯尾・市山・四城、又命義虎成山野・羽月・平泉・

三城、十一年、六月十八日、義虎與東鄉氏戰於阿久根、亡部下六十

三人、十二年、八月十八日、義虎與重尚子重尚戰於深迫村、從士村尾安

房利名重、執弓射白濱重陣重陣家、

義虎斬首八十三、九月十日、菱刈賊降、我則以義虎為山野地頭職、

元龜元年、正月、重尚・及入來院重嗣・各獻所并領地而降我、則增

封義虎高城・水引・湯田・西方之地、天正二年、九月朔日、有出

水瀨崎追馬之事、本傳多牧馬於原野、年々卜日馳逐、

駿馬一匹於寔府、四年、八月、義虎從 貫明公討日州高原賊、十九

日、進兵圍城、廿二日、賊魁伊東勘解由力屈乞降、九月九日、從撤

軍、六年、十月、大友宗麟率大軍來寇我日州、於是 公自將出兵、

以出水邑接肥後境故、命義虎留守焉、十一月、公大破大友軍於耳

川、按、公、是時義虎與子家口廣築軍、以、

降於我於出水、於是義虎率二人至寔府、既而傳送之於出水、又使義

虎送還之筑後、十二月、一作八、城越前守親政後、叛大友氏、侵掠飽

田・詫摩・川尻之地、宗麟大怒、出師於熊本、親政力不能敵、使

使乞降於我、且救援兵、而彼之與我相違三百餘里、山川險絕、敵若

塞路、海陸不通、難以猝行兵、以故眾議不決、鎌田寬栖計曰、島津

義虎與天草城主志岐氏有親、前此義虎以其女妻志岐氏、

若使彼先說志岐氏、因徐

說栖本氏・神津浦氏・天草氏・大矢野氏天草氏五人衆、此云、使彼等屬我、則舟路可以通熊本、公善其計、五氏果來會於出水、奉盟書乞屬麾下、於是 公遣寬栖・及田尻荒兵衛、率步卒三百餘人、乘舟經天艸至熊本、親政大喜、是歲宇都伯耆鑑高亦降於我、八年、十月、佐多久政等進陷矢崎綱田二城、尋放火於合志城外、擊殺敵兵數百人、十二月十四日、俱收軍、大小船三百餘艘順風揚帆、頃刻船悉至出水米津、翌日義虎享久政及諸將於城中、九年、八月、公自將伐相良義陽、十七日、義虎以先鋒進擊葦北郡、十八日、公率中軍至小河內、十九日、公及 松齡公陣八景尾、義虎陣勝泉岡、進逼水股城、翌日出羽守實忠義虎族支・及切通左馬率步卒至水股城下、城兵開門奮擊、實忠左馬敗走、城兵追至前川渡名津、二人遂戰沒、我兵進圍城數日、義陽引兵至佐敷、而恐我軍衆且猛、計其力不能敵、乃質二子獻葦北七城、而來降、公即使衆送城中兵於八代城、是日 公移軍於佐敷、九月廿六日、義陽來謁佐敷軍、既而 公收軍還覺府、十年、冬、義虎復出軍八代、十一年、正月十二日、撤軍而還、十三年、乙酉、七月廿五日、卒、年四十二、葬出水龍光寺、法號大通玄黃菴主、義虎六男、長又太郎忠辰一作忠、永祿九年、丙寅之歲生或云、天正五年、豐公自將兵西下、四月、自佐敷乘舟至出水、忠辰震恐、不敢放一矢、出降頓首、自餘城鎮亦皆望風疑附、乃以忠辰為鄉導、廿五日、至川內、結營於貓嶽・及泰平寺、五月、公往謁豐公於泰平寺、及豐公班師、賜忠辰朱印牒、得比小諸侯、於是忠辰改島津氏為和泉氏、文祿二年、豐公使忠辰屬 松齡公、赴朝鮮、至釜山浦、則忠辰稱病不進、豐公聞焉、而大怒、至翌年五月初一日、沒収其所領地出水野田、高尾野、阿久根、長島、高城、凡城九、村井六、高城、凡田祿三萬一千九百石、而囚忠辰於小西行長營、八月廿七日、忠辰病死於加德島、年廿八知壽略、作年、四十一、似否、

至是薩州家適派滅絕、次三郎二郎忠鄰、母 貫明公長女天正廿年、八月廿二之日、去出水、住薩州上井下、因此云平君、慶長八年、十月十二日、卒於上井下、年五十三、法號海昌妙守大城、永祿十二年、生、及長、出為公子歲久之養子、語在歲久事中、次備前守忠清初稱、忠鄰同母弟、元龜二年、生於出水城、至文祿二年、忠辰沒入出水之日、豐公命忠清及二弟忠富忠豐後、放之宇土城小西行長所治、既而忠清娶行長家臣皆吉久右衛門續能女、慶長五年、生女及長、入掖庭、而為 慈眼公之妾、元和二年六月二日、生、寬陽公、三年、又生一男、是日島津忠紀、又生女二人、寬永二年、七月廿一日、卒於江都邸、年二十六、法號心應慶安大城、是歲秋、行長被誅、沒収宇土城、於是忠清往賴加藤清正於熊本城、八年、生男、稱又助及長、為新納江守久元嗣、冒新納之孫、市正久診第二子、孫四郎久重、為忠清父忠、清後、復為島津氏、今島津仲、及忠清子孫也、其後 貫明公遣島津常久迎忠清等於肥後、於是忠清攜一男一女、經阿久根至覺府、實慶長十四年、十二月三日也、元和六年、正月五日、卒、年五十、法號如岳院節翁玄忠大禪定門、次越前守忠榮初名忠俊、稱勝四、又大禪亮、忠清同母弟、天正三年、生、十五年、兄忠辰以忠榮質於豐公軍、豐公居之豐前小倉細川幽齋所領、及忠辰滅亡、去小倉、至佐土原、賴島津豐久、豐久以其姊妻之、後豐久陣沒於關原、家臣等竊計欲殺忠榮、忠榮知之、乃去佐土原、至隅州富隈城、謁 貫明公、公哀其孑獨、乃以其母阿平君所采踊中津川村田祿一千二百石、封忠榮、嗣母之後、寬永十九年、九月晦日、卒於牛根邑、年六十八、法號大雲源龍今島津孫也、即、次彌一郎忠富、忠清同母弟、天正七年、八月廿日、生、後出續入來院重時後、冒入來院氏、是日伯耆守重高、事在入來院傳中、一季民部少輔忠豐七幼稱小、天正九年、辛巳、生、與二兄俱往居肥後、慶長十年、十一月廿一日、卒、年二十五、

野史氏曰、雖義虎以 公族、世々封於大邑、而不肖子遂頹其家聲、諸弟艱難流離、或斷而僅續、亦命矣夫、

川田義朗列傳第二十七

駿河守川田義朗^{初名義照、稱官松丸、又名義照、又稱部助}、號牛室、其始祖右衛門尉盛佐、比志島

氏始祖村上上總法橋重賢第三子、重賢分封薩州滿家院川田邑、故姓

川田氏、盛佐生右衛門太郎佐清、佐清生伊豫守義尹、義尹生掃部助

義立、義立生助太郎祐義、祐義生三郎太郎義清、及飛彈守立昌、義

清嗣、陣没肥後、立昌嗣、立昌生十郎左衛門尉義近、義近生式部少

輔義元、義元生飛彈守義秀^{初稱助、太師助}、大中公賜義秀原良地六町、義秀

卒、法號喜庵壽慶、義朗、即義秀之適子、母比志島廉範女、自盛佐

至義朗、凡十一世、世々食邑於川田、義朗學兵法於伊集院忠朗^{朝日、義朗學兵法}

^{於岩切信明、未如孰是}、術既通、事 大中公、擢為軍師、義朗為人恬淡重厚、知勇

絕倫、年二十五、有感鬼神之事、自是齊明盛服、以承祭祀、終身不

近婦女、永祿十年、十一月廿四日、從 公攻陷馬越城、諸將効首

虜、義朗行血祭儀^{（頭注）「備歷古史云血祭與禮所載不合、然本邦所貢而西土無之、類此者比、自自作古、何害、知其典禮記否、而唱凱歌、後以 功為垂水地頭職、天}

正四年、八月十九日、我兵進攻高原城、越廿八日、義朗行凱旋之

法於三山城中、六年、十月、從日州役、十一月十二日、諸將與大友

氏兵大戰於耳川、我先鋒不利、是時 松齡公兮兵為三隊、使義朗指

揮衆、義朗乃驅諸軍、發喊於三方、急進渡築瀨、衝敵軍、敵軍遂敗

績、十三日、義朗行凱旋之法、九年、八月、從 公水股役、十二

年、三月、屬公子家□至島原、廿四日、義朗勵衆曰、今日兵氣盛起

天、此我獲敵將之兆也、公等最哉、戰士咸踊躍而進、大破敵兵、果

獲主將隆信首、義朗臨陣勵衆、事多比類、十三年、閏八月、松齡

公率島津忠長等諸將北略地至肥後隈莊城、擊殺敵兵二百餘人、命義

朗及伊集院忠將唱凱歌、廿一日、進至肥後三舟、公賀頻戰捷、大

宴享諸將、命義朗鎧上着陣羽織、尚金襴袈裟、行凱旋之法、既而獻

酒禮畢、公賜義朗太刀、義朗亦獻太刀焉^{朝見之禮太刀進上、此云鏡象刀進上}、十四年、我兵

陷岩屋城、義朗從 貫明公、留在八代城、十五年、四月、豐公大兵

西下、義朗從戰目白阪、及和議成、豐公暴疾作、命義朗祈神之祐、

翌日疾愈而疾作^{（俗云、豐公軍糧乏、其部下擊斃祈田祠、報其實器、至是、神謂豐公、豐公嘆賞、因賜義朗鞍馬及太刀、其後 公命義朗經歷日本六十餘州、而藏妙經于每國}

神祠、以禱國家興隆、文祿四年、乙未、七月廿四日、病卒、法號州

嶽壽益大禪伯、墳墓在川田大川寺、無嗣、以比志島義貞第二子彥八

郎為養子、是日大膳亮國鏡、天正八年、十月十五日、攻肥後矢崎

城、有功、十三年、閏八月十三日、攻堅志田、有功、九月十二日、

與諸將攻陷堀切城、十四年、七月、我軍攻岩屋城、國鏡先登踰女

牆、流丸中其腕、其後為日州穆佐地頭職、凡廿二年、慶長五年、伊

東氏臣稻津祐信作亂、侵暴穆佐邑、國鏡討之、有功、元和六年、庚

申、卒於穆佐、法號龍山光金居士、墳墓在大川寺、無嗣、以川田主

水佐國豐^{川田氏七世義清適子、長嗣守義親之六世孫也}、適子義貞者為嗣、改名義繁、稱助太郎、為吉

松地頭職、義繁慶長十四年、五月十一日、生、寬永十五年、六月十

日、卒、年三十、法號悟室了省^{今川田大夫、即其子孫也}、

川田伊豆守義貞、川田氏七世義清子・長門守義親之曾孫也、初義清

戰死於北肥、其弟立昌兮出義親、而身自續兄後、於是義親遂往入來

邑居焉、義親生長門守義直、義直生丹波守國重、國重生義貞、元龜

三年、從軍木崎原、與敵步卒將兒玉佐左衛門戰數合、遂斬其首、後

戰亡於馬越邑^{今川田喜藏、即、義貞之子孫也}、

川田源五重親、柁城人也、從 松齡公于朝鮮役、

川田佐渡、與濱田經重俱謀下大隅田上城、有功、

野史氏曰、久國雜話曰、守哲禪師嘗語人曰、貧道少時、行脚至越

後、親見上杉謙信、狀類義明、威嚴可畏、世傳謙信不近聲色、由是觀之、則兩賢不惟狀相類、其志亦相似也、夫男女人之大欲、書云、成湯不邇聲色、聖人猶然、況於其下者乎、雖古今英傑之士不遑枚舉、而自這裏做工夫者蓋鮮矣、然則兩賢為天下後世顯名士之所欣慕、誠有以哉、

西藩烈士干城錄卷之十五

西藩烈士干城錄卷之十六

比志島(義力)弘列傳第二十八

河內守比志島(義力)弘初稱孫、

清和帝之後、六條判官源為義十四世之孫也、為義生志田三郎先生義憲子、義憲生邨上三郎左衛門賴重子、賴重領信州、有故下薩州滿家院、因居焉、而娶滿家院郡司大藏永平女、生男、其後賴重復歸信州、生子及長名曰重賢、稱左衛門尉、後是為上總介入道法橋榮辯律師、而外祖父永平無男、乃以榮辯為嗣、而領滿家院、故姓滿家氏、寬元二年、二月十一日、關東執權北條經時遺榮辯書、而安堵滿家院、榮辯生太郎祐範、居比志島邑、故改滿家氏為比志島氏、祐範生孫太郎時範、時範生孫太郎忠範、忠範生彦太郎義範、義範生彦太郎範平、範平生河內守久範、久範生河內守義清、義清生河內守義重、義重生河內守立賴、立賴生源左衛門廉範、廉範生河內守義貞、義貞生口弘、口弘永正十年、生、及長多力、好佩長刀、能引勁弓、天文八年、三月、創建日吉山王祠於比志島邑家臣坂元庄左衛門貞江州志賀郡日吉山王、下講家院、因創建焉、、九年、十一月廿一日、賀大中公嗣立、行犬追物事於田布施、口弘為射者

班、十四年、命口弘為生主將、往攻隅州岩劔城、軍敗戰亡、時年三十三、法號昌岳久家臣藤崎口、橫山下、坂下、中島人、俱戰死、、後有靈驗、乃建祠於比志島邑、崇為小鷹大明神、從死者皆從祀焉許、今隅州重疊松村西北、西百武松、不知其所以、按口弘軍敗於岩劔城、則相拒平、

代三郎丸、及長數從軍有功、天正四年、四月九日、前此近衛前久卿有故下薩、至是有宴享之禮、而行犬追物事、是時義基為射者班、十二日、又有犬追物事、復為射者班、是歲從于高原之役、後為使衆、而賜栗野地頭職、當是時、貫明公平定日州、而遣中書家口往鎮焉、因多移一所衆地頭衆、之居焉、五年、十二月十八日、封義基以日州會井三百町、於是義基率親戚家臣七百餘人、去滿家院、之會井居焉、六年、從耳川之役、十三年、與諸將出擊豐後、九月十日、高知尾人來納欵、遣義基等往約和議、十四年、十月、俱進入豐後、十五年、四月、從戰於根白坂、是歲豐公没入我日州、於是義基去會井、而歸覺府、慶長八年、十月廿一日、卒、年六十七、法號心了庵居士、子左馬介義興初名義武、母美濃守國守女、永祿四年、生、幼稱千代三郎丸、天正三年、二月十四日、始加元服、六年、從父戰於耳川、八年、十月、攻矢崎城、九年、為副將軍水股、十一年、十月、進戰八代、十二年、三月、從赴島原、四月六日、與川上忠智俱受神代城降、八月、戰於北肥、十四年、六月、為副將出伐筑紫廣門、七月、還國、十月、從父入豐後、十五年、春、與諸將撤軍、路數破賊兵、四月、從戰於目白坂、慶長二年、二月、從松齡公朝鮮役、三年、從班師、而至筑前博多、命歸薩、四年、與弟北原兼茂及小宗國家率兵至伏水、六月、卒於伏水邸、年三十九、子監物範員初名義元、稱彦太、母島津忠芳女、慶長二年、七月七日、生、十三年、年甫十二、慈眼公親加元服、賜備前刀一口、寬永十一年、我與伊東氏俱爭日州

牛嶺地、久之不決、於是 公乃選忠直明決者、以使飮肥、要折其爭、是以衆議舉範員及顯娃長左衛門、二人至於飮肥、而告壹岐將監及渡邊內匠家老伊東氏曰、夫牛嶺在我邦域之中矣、而家臣北鄉一雲者世々領之、今也邊民愚痴、不辯菽麥、相與爭之、以煩君下執事、故 寡君命我等二人來質焉、辭氣正直、有足信服人者、將監等應曰、苟如下、至然之十二字、一作君等之、足以取信矣、夫何開然之有、君等之所言、孰敢問然之、應接禮勤、遂畢事而還、十三年、春、使江都、謁 幕府於黑書院、其後枝族國隆有罪被誅、家絕、以國隆父國貞忠純勤儉、而家絕、故 慈眼公命範員繼國貞後、而賜田祿五百石、正保四年、勤番京師邸至慶安四年、寬文十二年、三月五日、卒於甌島、法號淨宗禪鑑菴主、範員在世之日、轉徙馬越甌島地頭職、而祇役於京師及江都、凡十三度云範員之子孫也、即、

比志島美濃守國守初名義貞、稱彦、號玄心、曾祖河內守義重、祖美濃守義信義重元年、明應四年、九月、美濃分與義信滿家院、父美濃守義住天文廿二年、七月朔日、國守及長從軍蒲生、每戰有功、弘治三年、十月、蒲生城陷、以國守為地頭職、於是國守去郡山移蒲生、天文九年、十一月廿三日、有犬追物事、國守為喚次役、後攻菱刈、以功徙大村地頭職、肝付之亂、國守勤戍櫻島瀨渡、及肝付氏降、賜國守大崎邑、天正九年、十二月十日、卒於大崎、法號知雄玄心、一子美濃守國親初稱彦、少學兵法某師、及長從軍常為軍師此云後、天正三年、三月十六日、有犬追物事、國親為喚次役、六年、從戰耳川、後繼父為大崎地頭職、某年卒於大崎、法號春叢菜林大禪伯、一長子源左衛門國政初稱彦、從朝鮮軍、半途病狂、出奔不知其處、一子掃部介國詮初稱孫四郎、以兄出奔故繼父後按別記曰、比志島本右衛門國詮、從于、事 慈眼公為主務人此云用人、而曰、其後為 松齡公朝辭之後、蓋國詮初稱休右衛門也、隱居遜位棄人事而老、賜田祿六百石、又為薩州吉田地頭職、正保四

年、五月十七日、卒、法號喜山永好庵主、一長子左近國重、為柅城士、次子內藏助國廣初稱孫、松齡公親加元服、賜小刀一口備稱盛光、而為近侍童子、後命繼父後、卒時不知年月、其子孫今居柅城云、

比志島源左衛門尉國家初稱彦、美濃守國守第二子一說曰、國家比志島氏三世、孫太郎也、天正十二年、三月、從軍島原、慶長四年、二月、從宗子義興至伏水、六月、義興卒於伏水邸、五年、八月、命國家率義興兵、從攻伏水城、九月十五日、關原軍敗、國家從 公至泉州平野、遣國家至浪華城、護夫人而還國、至豐後森江、與黒田如水邏舟人戰、遂死之今比志島誓太郎、源左衛門國連、蓋國家子也、慶長五年、同宗國貞為高岡地頭、是時官遣國連、從國貞移居焉、

比志島宮内少輔國真初名義貞、號笑翁齋、美濃守義住第二子、大永五年、生、從兄國守、之蒲生北村居焉、天文廿二年、九月廿五日、國守使國真及町田伊賀守奉使至大隅、翌日即還報、晦日、帖佐之役、國真先登於星原、後從戰菱刈、以功為本城地頭職、天正二年、轉徙市來地頭職、初官以國真遷為隈城地頭職、國真固辭而不受、於是十一月十四日、使上井覺兼有此命云記、十年、卒於市來、年五十八、一子紀伊守國貞初稱彦、天文十四年、生、為人文雅忠厚、有將相之度、天正六年、大友氏兵侵我日州、是時率兵往救高城、十年、與弟彦八郎奉使肥前有馬、後繼父為市來地頭職、十四年、國貞從公留在八代城、十五年、四月、從襲目白阪營、十六年、從朝京師、慶長元年、貫明公擢為國老、五年、為高岡地頭職、元和六年、庚申、四月三日、卒、年七十一、法號堯安源舜居士、墳墓在南林寺、寬永五年、慈眼公為國貞創建墳寺於南林寺境内、名曰源舜菴、十一年、十二月晦日、公選忠義老臣五人、國貞亦與焉、國貞嘗詠子

規曰、其所^{報告}禿志毛、聞^古祖不分^{加念}、子規^{禿志毛}、宿^菟志羅設與、松^{音麻}能木^{音古}蔭^{音加}、^{音加}「子宮內少輔國隆^{初稱隆}、^{四郎稱隆}、天正四年、生、及長從朝鮮軍、泗川之戰、被皂甲、斬首多、慶長十一年、十一月廿五日、有犬追物之事、國隆為射者班、射犬九匹、元和六年、繼父為高岡地頭職、慈眼公舉為國老、寬永四年、有罪免國老、居之川邊寶福寺、而沒収所領地及家財、六年、流之於種子島、其後賜自裁、是時以田祿三十石附與國貞墳寺、以其忠貞故也、

野史氏曰、口弘英魂現神、而其祠在比志島邑、邑距麿府十里許、則其胤在麿府、祀事不便、於是別建神祠於家庭、每歲九月某日、必祭焉、而每奉祀、必呼親戚朋友、而有享禮、今比志島君與予為忘年友、以故予觀其祀事、君齊明盛服、必親祭、而從事者鳴鐘鼓、十數人拔刀舞躍、觀者心凜々、嗚呼亦足以觀祖先之威武也、

鎌田政盛列傳第二十九

筑前守鎌田政盛^{初曰大}、其先大織冠鎌足公之十二世孫・左衛門尉佐藤公清之適孫・右馬頭首藤助清、事源賴義為近侍、助清第二子權守通清、始為鎌田氏、事源為義、有戰功、通清生二郎政家、從源義朝、俱為長田莊司所殺、時年三十八、無男、弟藤二光政繼之後、從源義經有軍功、後戰沒於讚州八島、光政生小藤二政佐、文治二年、從得佛公始下薩、公賜政佐水田百三十五町、政佐生刑部大輔政影、政影生左馬頭清通、清通生尾張守清憲、清憲生八郎左衛門尉清亮、清亮生尾張守清正、清正生右衛門大夫清春、建武三年、丙子、父子俱陣沒於筑前多々良濱、清春生三郎左衛門春政、春政生筑前守將古、將古生四郎右衛門清成、清成生二郎左衛門尉政經、政經生尾張

守政年、事公子久逸為家老、文明十七年、日州櫛間牟田迫之戰、政年代久逸陣亡、政年生政盛、自通清至政盛、凡十六世、以其父陣亡故、賜政盛伊作永谷、大永七年、六月十一日、大中公出清水城、

由小野、至田布施、是時政盛及從士六人俱從焉、其後卒、^一子筑前守政心^{初外}、天正元年、三月十八日、我兵伐肝付省釣於西股、政心從有功、二年、十月、為百次地頭職、後轉徙日州財部^{今高}地頭職、九年、八月、從 松齡公水股軍、十年、十二月廿七日、公遣政心及大膳坊、自八代使山北、十四年、七月、我軍進陷筑紫城、政心深入戰死、無嗣、以小宗政廣^{見于}次子為嗣、是日二郎五郎政良、天正元年、生、自幼多疾病、故以世々系譜讓小宗政近、為鎌田氏宗室、慶長四年、卒於隅州吉松、法號松岩玄椿居士、其子孫今居國分邑云、

鎌田出雲守政近^{初稱又七郎、又圖書外、後稱號玄樹法印}、二郎左衛門政經第二子・次郎左衛門政末之玄孫也、政末生出雲守政榮、政榮生出雲守政郷、天文十六年、九月廿日、卒、政郷生圖書頭政勝^{初稱又、七郎}、號清鏡齋、永正十年、生、長為新城地頭職、天文九年、大中公使諸將勒習犬追物事、政勝為射者班、天正十三年、乙酉、十一月十五日、卒、年七十三、法號笑翁淨山居士、政近・即政勝子、天文十四年、乙巳^{一作四年、乙未}、六月廿六日、生、及長為使衆、賜櫻島地頭職、元龜三年、率兵與賊戰牛根二川、被創、天正六年、耳川之役、政近率都於郡兵二百餘人^{是時政近從為郡於}、入援守高城九年、八月、從 松齡公出戰水股、十年、十二月、從軍八代、十二年、三月、與諸將至島原、五月、旋師而還國、十四年、攻陷岩屋城、其後受政良讓為鎌田氏大宗、十九年、舉為國老、後從軍朝鮮、慶長三年、慈眼公增賜政近田祿三千石、五年、關原軍敗績、松齡公逸歸薩、貫明公料 幕府大兵西下、欲舉三

州之兵與之抗衡，松齡公曰：不可，幕府新破諸侯，威震天下，若與之爭衝，不啻師不利，三州必危矣，願公量力而處之，時諸將或欲迎戰，或勸和議，衆議不決，是時政近·及比志島國貞·伊集院久治·新納久饒·相良長泰等協心同力，俱圖國家大事，會幕府下教，而諭公朝於京師，於是六年，春，遣政近奉使先至京師，賴本多正信·井伊直政·山口直友，而具陳公之意，且拜賜教之辱，則東照廟召政近，而諭言諄二，且賜短刀備前光，而命與新納旅庵俱還國，七年，公將朝京師，時國人多疑伊集院忠真黨叛起，公聞而患焉，於是政近及伊勢貞昌等相謀曰：公老病日加，慈眼公宜代公而往朝，議遂決，於是八月六日，慈眼公發覺府，政近等從焉，九月十六日，至浪華，十二月廿八日，公謁東照廟於伏水城，翌年正月，命歸國，二月十四日，政近等從還覺府，十六日，以國家安定之故，享親戚及老臣於城中，政近亦陪焉，十年，九月朔日，卒於伏水邸，年六十一，法號明義道清菴主，葬伏水泉融寺，招魂墓在福昌寺，彫刻明義玄朗法印六字，政近在職之日，轉徙櫻島·新城·志布志·都於郡·野尻·田布施·揖宿·地頭職，政近長子左京亮政虎初稱文，母稻留長秀女，永祿六年，生，天正十一年，十月廿八日，貫明公命築花山城，而以木脇祐昌為城宰，十三年，八月，遣政虎增番焉，於是政虎發都於郡所交，十日，晚至花山城外，而宿民屋，此夜甲斐親政率阿蘇兵，來攻城，政虎即潰圍而入城，與祐昌謀，政虎扞西門，出戰甚烈，被重創，不能戰，南向合掌，據柵而死，年二十三，法號蘭室隆香居士，墳墓在福昌寺，是時與政虎俱戰死者，祐昌·及鎌田與兵衛尉政由·其餘求摩八代屯成三十餘人云，藏人頭政富五初稱善，政近第二子，永祿十年，十一月，生，及長為揖宿地頭職，慶長二年，正月六日，從于朝鮮之役，三年，冬，諸將各約

以十一月十五日，會釜山浦而撤軍，當是時，小西行長等五將在順天，為敵艦所塞歸路，公聞焉，乃遣政富·及敷根賴元·往覺之兵機，乃與潛行敵艦中二百里，而至順天，及還，颶風覆船，二人俱溺死，實十一月七日也，政富死年三十二，法號月船宗皎居士，子治部少輔政統初名政弘，又政清，稱二郎，又出兼守，母伊勢貞世女，慶長二年，正月七日，生，十四年，琉球之役，政統年幼，不能從軍，因出兵十人，以屬諸將行焉，及長傳受射術於吉田一水軒印西，寬永十四年，二月，舉為國老，為揖宿地頭職自祖父政近三世，稱為揖宿地頭職，十七年，轉徙蒲生地頭職，十八年，有病致仕，正保元年，八月五日，卒，年四十八，法號奉峯紹照居士

今據田藏人，即政統之子孫也。

鎌田刑部左衛門尉政辰，父美濃守政明，祖父木工之介政常，政常即二郎左衛門政經第四子也，文明十七年，六月廿一日，戰沒於日州餓肥，大永六年，十一月七日，政辰從梅岳君攻帖佐城，深入陣亡，年三十九，法號松山壽椿居士，子尾張守政年初名政明，稱刑部左衛門，號寬栖，永正十一年，生，事松齡公為使衆，賜帖佐地頭職，後轉徙牛根地頭職，因創建墳寺於二川村，名曰望海山喜翁院，天文九年，十一月廿三日，大中公慣習犬追物事，政年為射者班，元龜三年，從戰木崎原，有功，天正四年，八月，從軍高原，廿一日，遣政年于鎮守尾以謀敵，翌日擊破敵兵，政年唱凱歌，廿四日，三山城兵捨城而逃去，則使政年守焉，九年，政年率兵，從松齡公軍水股，十年，十一月，出守八代城，十一年，七月八日，卒，年七十一一作七十五，七月十四，卒，年七十四，法號喜翁勝勸庵主，墳墓在喜翁院，子刑部左衛門尉政廣，母山田有親女，天文九年，生，及長為使衆，天正中，為志布志地頭職，三年，三月十五日，以貫明公嗣立之故，有犬追物之事，政廣為射者

班、十六日、又有犬追物之儀、復為射者班、射犬凡八匹、九年、從
赴水股、十年、十一月、政廣與山田有信俱使肥前有馬城、十三日、
歸報八代城是時松齡、十二年、三月、從陣佐敷、四月、與白濱周防俱
屬上井覺兼、至島原、十日、覺兼等進陷竹崎城、而使政廣唱凱歌於
舟中、十三年、十月、政廣有罪、謫居福昌寺記覺兼、是歲冬、豐公喻
檄・及細川玄旨茶師宗易贈書至麿府、於是十四年、正月廿三日、遣
政廣・及僧文之報書玄旨、而二人謁豐公凡四度、豐公謂二人曰、聞
方今子君既略定九國、雖其功多、而九國故家名族亦不可滅絕、孤當
取類處其宜、當以薩・隅・日・及肥後半・筑後半・豐前半・封子
君、豐後・及豐前半・筑後半・肥後半・封大友氏、肥前封毛利氏、
筑前歸之 朝廷、則子君之慶福無窮矣、反國謂子君、而比至七月復
來報、若有違背者、孤必有事於九國、因親導登天守此云天守、而設茶
式、親酌飲之、及去又賜佩刀一口・及錢十萬、以資路費、五月廿
日、二使歸報日州財部記覺兼、其後和議遂不成、文祿二年、四月十七
日、卒、年五十四、法號勢岳本隆居士、子木工介政常、母阿多久
鎮女、文祿四年、五月五日、卒、法號哲叟英俊居士、無男、以弟玄
蕃允政朝為之嗣、政朝天正十二年、生、慶長五年、年十七、從戰關
原、軍敗、始終不離 公側、從而還薩、賞賜褒牒及田祿一百石、十
一年、十一月廿六日、有犬追物事、政朝為射者班、十三年、十一
月、又有犬追物儀、復與焉、其後為清水地頭職、元和二年、五月廿
日、卒、年三十三、法號傑山芳英居士、墓在牛根喜翁院、一 無子、
以左京亮政德後見、長子源五郎政光為嗣、是日源左衛門尉政有、母阿
多忠秋女、慶長五年、三月廿五日、生、十九年、慈眼公赴浪華
軍、使有馬重純賜政有卯花繩甲一領卯花繩說在別記、初朝鮮之役、公、被之類名譽於異邦、至是賜之、因從焉、是
役也、政有食田祿一千十五石、出騎馬一・旗一・步卒廿二人、而清

水土屬焉、元和七年、十二月、官習勒大追物事、凡四日記見、政有
每與焉、寬永六年、為使衆、慶安二年、二月、為國老、明歷三年、
祗役於江都、正月十九日、江都大火、延燒及櫻田邸、政有護 君夫
人、避火於芝邸、四月、畢役而歸國、五月十九日 公賞其勞賜小刀
作津所一把・及白銀五百枚、寬文七年、致仕、延寶四年、五月十日、
卒、年七十七、法號靜真院殿賢室良豪居士、墳墓在牛根喜翁院、政
有嘗轉徙清水・高原・市來・穎娃・末吉地頭職今鎌田源左衛門、即
政有之子孫也、

鎌田大炊介政商、官栖第二子、政廣同母弟也、元龜三年、五月四
日、戰沒於木崎原、年二十五、

鎌田加賀守政真初稱治部、父加賀守政泰、政泰之七世祖彈正左衛門尉政
重者、藤二光政之第二子也、而政重與兄政佐俱從 得佛公始下薩、
自政重至政泰、不知其居何所、政真食邑於川邊神殿、大永間、黨島
津實久叛我、天文八年、三月廿八日、梅岳君自將征川邊、政真質
妻及子政春、且獻 神殿而出降、遂事 大中公、從軍數有功、十四
年、冬、公有病、左右皆禱山川神祇、政真夢神教藏法華經每國神
祠、而 公病當瘳、於是翌年、二月廿三日、辭家而詣牧聞山、剃髮
號正真、着黑黻衣、經歷日本六十餘州、藏妙經于每國神祠、十六
年、畢事而歸國、則 公病既瘳、公賞其勞、卒時不知其年月、
世俗傳、正真好栽種花、嘗逍遙籬下、詠和歌曰、姿實須遠婆、餘所
與二音爾、恥音波音禿音毛、栽音置音置音於志、我音爾音波音觀音美音與、花音奈音能音權音禮音土音毛、
有美人現花下、正真又詠一首曰、色音伊音易音加音天、開音左音增音禮音土音毛、
波加奈左波、只音秋音吳音禿音能、露音能音權音禮音土音毛、
子治部左衛門尉政春、永正三年、生、卒時不知年月、子大炊介

某、天文十一年、生、永祿十年、十一月廿三日、陣沒於馬越、年廿六、法號了性真庵、一無男、以佐多越後守弟繼之後、是日加賀守政在、天正九年、以納殿役從于水股之役、十四年、七月、諸將攻岩屋城、政在從、公在八代城、後從戰豐後、有功、其後為櫻島地頭職、〔頭註〕四年、松齡公在京師、應接諸侯賓客、費用日多、則借家族金、幕府憫之、便以金五百枚賜焉、是時政在護衛金若干、慶長十二年、四月、幕府始賜、公江都芝之地、因遣政在為作事奉行、爰方起邸、寬永元年、十二月初一日、卒、法號三輝珠寅庵主、一子大監物政貞、〔初稱清〕慶長八年、生、及長為鶴田地頭職、〔按此、寬永三年、百九十八石、〕寬永十一年、正月三日、卒於江都、年三十二、法號知覺道見居士、〔今鎌田右衛門、即政貞子孫也。〕

鎌田源左衛門尉兼政、上井薰兼第五子、而為鎌田壹岐守政實贅婿、〔頭註〕四世清重從有頃、侯母、政明十世祖原應、〔部清、〕兼政從兄上井覺兼居宮崎、為步卒將、天正十年、十一月、從至有馬、十二月四日、攻千々輪城、中石被創、十三年、八月廿二日、兼政與柏原周防率兵至八代、閏八月十三日、擊破堅志田・甲佐柵、多斬首、十四年、七月、我軍進攻岩屋城、是時兼政與覺兼俱先衆登岸、而中石被創、卒時不知年月、一子左京亮政德、〔初稱源、〕天正五年、生、慶長十九年、十月、遣政德及猿渡新助使江都、聞豐臣秀賴與、東照廟不睦故也、寬永四年、八月十四日、卒、年五十一、法號貴翁永德居士、政德在官之日、轉徙馬越・清水・小林地頭職、〔今鎌田衛守、即、政德之子孫也。〕

鎌田右兵衛尉政英、〔初稱源三郎、又稱野介、〕、大宗子清春次子藤次清長之八世裔也、父曰越中守政森、天文十五年、丙午之歲生、慶長五年、從軍關原、軍敗從而歸國、公賜褒牒及田祿五十石、寬永十三年、正月廿四日、卒、年九十一、法號信月光忠菴主、墳墓在松原山、〔今鎌田半助、即、政英之子孫也。〕

鎌田大膳亮、慶府人也、天正六年、十一月十二日、戰沒於高城城下、鎌田次右衛門政在、從、慈眼公赴朝鮮、泗川之戰、被紺緋甲、是日公先衆馳、政在與本田親正叩馬止焉、語在親正事中、一

鎌田長門守政基、大父曰出雲守政郷、父曰掃部介政續、〔政續第二子、大永五年、八月五日、卒、法號、〕天正十四年、政基戰亡於岩屋城、〔即今鎌田基右衛門、知學宗、〕

鎌田彌右衛門昌良、〔頭註〕彌藏、〔本作彌八、〕父曰和泉守將連、將連之七世祖曰四郎左衛門將永、將永即鎌田氏十一世春政第二子也、將永為福昌寺仲翁和尚代官職、至將連世々繼為其職、永祿四年、昌良上言始事、貫明公、而以弟新兵衛將通繼父職云、後昌良擊殺伊集院忠真家臣東條萬左衛門於谷山掛橋、〔是時昌良所佩刀宗俊所作、並鑄諸住宗俊、天文十六、〕寬永二年、十月十六日、卒、年六十五、法號月僊常圓居士、墳墓在福昌寺、〔今鎌田彌右衛門、即昌良之子孫也。〕

鎌田播磨守政重、末田氏子也、官命以鎌田將連前見第三子將長、〔稱門、左為末田氏之後、〕使政重為將連之義子、改末田氏冒鎌田氏、〔不詳其由、事係傳考、〕松齡公居柵城、從于朝鮮之役、以功賜田祿二百石、無男、以河村秀政、〔稱伊豆、〕第二子傳左衛門為贅婿、冒鎌田氏、因為嗣、是日豐前某、為柵城町奉行、其後殉死、慈眼公、法號傑山常英菴主、葬柵城大株寺、又福昌寺、公廟前第二地藏塔是為豐前塔、

鎌田二郎九郎、福山士也、慶長五年、從地頭山田有榮軍關原、是時我選銃手數十人、往援龜井武藏守軍、次郎九郎亦與焉、而武藏猝反、應東軍、次郎九郎等無一人生歸者、

鎌田日向守政隆、〔初稱與、〕鎌田氏宗子清堯第三子宮内少輔正幸之嗣也、天文十七年、生、及長從、松齡公、居飯野城、長子與兵衛政景、次

子伊賀守政秀、政秀繼父後、事 松齡公、為柁城船奉行、至 慈眼公之世、為柁城東城納殿役、後事 寬陽公、為代官及納殿役、子勘兵衛政安、事 慈眼公、為大島及鬼界島代官職、新墾田三千二百石云今鎌田右衛門、即政安子孫也、

鎌田因獄佐政金、公子歲久家臣也、天正十五年、四月、從忠鄰關於日州根白坂、忠鄰戰沒、政金載屍楯而歸、事在忠鄰事中、六月、豐公陣于天堂尾、以歲久病故、使政金使之、豐公賜之單衣二襲、而反報、文祿元年、七月、有罪蟄居大村寺院一說豐臣柁城仁寺、十七日、歲久有故猝據瀧水險、從士僅二十六人、事急、是時政金馳而至焉、請見原罪、歲久動容稱嘆、遂俱戰沒、法號怡雲良悅禪定門、墓在心岳寺歲久墓側、

鎌田八兵衛、率兵屬諸將征琉球、

鎌田惟參政幸初稱四郎、左衛門、高祖但馬守政武、曾祖但馬守政綱政武次子、初稱宗九、又稱宗、號玄清、

祖但馬守政治初名政義、稱宗、二名宗月、父式部政秀、政幸以醫事 貫明公 松齡

公、居國分、賜田祿二百石、子權右衛門政慶、移居覺府今鎌田平左衛門、即政幸子孫也、

野史氏曰、政盛從君不避難、政心報國戰沒、政近謁 幕府賜寶

刀、其餘支族或死國難、或登顯位、可謂盡力於國家也、況乎觀政金死節之事、與鳩巢室子嘗所稱小宮山內膳者、若合符節、嗚呼、壯烈之士、雖有先後遠近之異、而其就義如歸則蓋一也、

木脇祐利列傳第三十

越前守木脇祐利後稱刑部、左衛門、其先刑部左衛門祐賴、大和守伊東祐時第八男

也、食邑日州木脇、因為木脇氏、世々事伊東氏、祐利有故辭伊東氏、而來仕 大中公、其子伊賀守祐定初稱刑部、左衛門、號正徹、公以祐定為金吾公子歲久之傳、弘治三年、四月十五日、從破菱刈賊、獲甲首、永祿十年、十一月、從攻馬越城、廿四日、命祐定及町田忠繼初稱左衛門使

城中、二人踰障、則城兵投槍拒之、忠繼遂戰沒、祐定被重創、天正元年、十月廿四日、從戰於早崎、十四年、島津忠鄰以副將出伐筑紫、以其年少未習軍事故、貫明公令祐定及遠矢良時為之傳、而從軍、七月六日、進攻陷鷹取城是日忠繼、馳馬雉原、面度嶺、偶祐定取水土瓶、懸、槍柄而至、則賊完城之助請之祐定、灌其面云、卒時不知其年月、其子刑部左衛門尉祐昌、母町田丹後守女、天文十六年、丁未、生、永祿九年、十月十五日、從攻三山城、有功、天正十三年、築肥後花山城、以祐昌為之宰、以備阿蘇氏、八月十日、甲斐親教率阿蘇兵、來圍花山城、祐昌與求麻八代戌兵堅守之、眾寡不敵、身被數創、遂度不能脫、乃作歌曰、擊音都人音比毛、被擊音都人音上毛、戲音無多波能、浮世音二音字、能夢音免音由波、今音伊增覺音左計留、吟畢、則大呼策馬冒堅敵、遂死於正陣手口云、增成將鎌田政虎以下三十餘人亦皆死、一子三右衛門尉祐吉元龜二年、生、及長為肥後堅志田城宰、後戰沒於日州三

山按諸家系譜、不書祐吉城宰、但書父與戰沒、又一說曰、莊內之役、賊魁白水仙設伏於安來、無子、次弟祐山險我孫數十人、是時祐吉亦戰沒、又曰、慶長四年、六月廿三日、祐吉戰沒於持山田、年十九、秀繼之後、祐秀天正五年、生、初稱久作、後改刑部左衛門、長八尺、才氣過人、慶長二年、從 松齡公擊朝鮮、及班師、直從至伏水邸、五年、庚子、關原之役起、祐秀從至大垣、居數日、公進軍墨股、石田三成軍佐渡、當是之時、東軍攻陷岐阜城、三成急遣使 公曰、願君疾來議軍事、於是 公從一門子先行、從騎續發、是時祐秀被黑縮甲、上馬、挾眉尖刀前日、公賜之、於伏水邸云、而先驅、公望見之曰、祐秀一騎當千之勢也、至九月十四日夜、公徙軍於關原、明日軍敗、公與左右進突重圍、祐秀先眾大呼曰、身是薩摩今辨慶、今日固決死、揮

眉尖刀而馳前、敵兵無敢近者、自是祐秀與後醍醐院宗重更拒後、而道就便宜、備經險難、至伊賀志賀良岐、則路傍有惡僧、彎弓持滿向公、祐秀急前奪其弓、衆相蹂踐、爭縛之事祐明、馳進迷失道、縛弓持滿向衛門者、以為先導、而出泉州、由平野至住吉、遂得俱以全而歸國、公賞其功、賜褒牒及田祿若干石、六年、移居蒲生、後又徙平松・柅城、元和五年、己未、七月廿一日、公薨、越八月十六日、祐秀自殺於柅城實憲寺川原、初朝鮮之役、慶長三年、戊戌、十一月十八日、我兵與敵大戰于海上、祐秀力戰中矢陷水、公命船頭知舟事、俗謂之船頭山口彌左衛門、將櫓扶上之、公枕股而療之、祐秀感其殊恩時年廿、至是遂殉焉、年四十三、葬柅城椿憲寺、法號心叟了傳居士、寬永九年、七月六日、慈眼公為殉死者若干人、各築墳墓於伊集院妙圓寺、而以第十一石塔為祐秀塔、或云、祐秀將殉之時、上言曰、臣本次子也、以兄祐吉陣沒無嗣故、臣為之後、願官以臣長子三右衛門祐為、繼祐吉後、以為大宗、且以第三子作右衛門祐貞初稱兵衛、又稱左衛門、繼臣後、以為小宗、後官命如其所請、且賜祐貞祿三十石、今木脇賀左衛門、即祐貞子孫也云、

木脇納右衛門祐辰、祐秀第二子也、為人卓落不羈、不拘時俗、公命以祐辰為白坂與竹養子、更稱十兵衛、而事公子忠朗于柅城、祐辰意蓋以為己是烈士之子、奈何棄之於采邑、心大不樂、辭動輒不遜、行或拂戾、後不告而歸覺府、復自稱木脇納右衛門、於是忠朗大恚、請之寬陽公、而賜死於谿山宇宿村、時正保四年、丁亥、四月十二日也、祐辰將自殺、食饅頭、謂傍人曰、正思非命、食之亦不甘、食畢、乃徐執刀、自屠出腸、縣之松枝、而後死後人哀謂之懸腸松、墓碑猶存焉、至今村人禱瘡、即有瘡云、

木脇民部亟某、祐定第三子也、屬公子歲久、從死於瀧水、法號慶學淳喜禪定門、

木脇大炊介祐兄初稱源次、左衛門尉、又、姓藤原、號間庵、父主稅介某、其先即伊東氏枝族、而領都於郡之地木脇邑、故為木脇氏、初主稅介事伊東尹祐、當是時、尹祐以其女妻蘭憲公、因以主稅介從女至薩、遂臣事我、其後擊伊集院賊、為賊所燒死云、祐兄事大中公、大永七年、六月十六日、島津實久襲公於清水城、是時祐兄從公間行遁去、後食邑於伊集院戀原、卒時不知年月、法號正林景朝居士、墓在戀原、子若狹守祐充一作祐亮、初稱大炊介、號恕祐、移居覺府、天正六年、從戰於日州高城々下、有功、十四年、從松齡公在八代城、七月、岩屋城陷、是日奉使岩屋、卒時不知年月、子三左衛門祐辰初稱源次、母有川飛彈守女年而卒、後三、以其為伊東氏枝族故、請伊東大和守、復伊東氏、改曰肥後守、文祿元年、朝鮮之役起、祐辰與相良日向守、俱以船奉行從焉、至名護屋、則豐公賜我米七千石、公使祐辰及本田甲斐守掌委積出納、進至朝鮮、以祐辰與日向俱有勤勞於軍事、因各賞賜田祿一百石、是歲歸國、二年、從慈眼公復至朝鮮、四年、十二月廿七日、令祐辰使五諸侯、為歲暮嘉儀之故也、既而從歸國、慶長元年、以兵具役一作物頭役、又兵部奉行、復從至朝鮮、二年、進入敵境、三年、十月朔日、祐辰與有馬次右衛門等俱從慈眼公、出戰、殺首虜多、因使本田伊賀守鎌田加賀守賜之道服各一、及班師、進破敵艦、五年、関原之役、祐辰留在浪華邸、其後使祐辰父子祗役於江都、凡三度、又嘗使祐辰及有川淡治為旅代官、又使祐辰及野添太郎右衛門為旅進物役、又為大根占・及山川・片浦・久見崎・秋目・倉吏、更互勤焉、元和初年、田祿籍云、祐辰領五百

十五石、寬永九年、七月六日、卒、法號祥翁長瑞庵主、墓在大德寺、一子肥後守祐昌初稱源次、又稱衛門、母有屋田右衛門佐女、天正十三年、生、慶長二年、年甫十三、母氏卒、後為使役、十九年、浪華之役起、是時祐昌以弓奉行、出馬一匹、士卒十人、寬永九年、本藩兵賦籍云、祐昌出騎馬一人、兵士十七人、鳥銃二、弓一、槍一、正保四年、幕府命我行犬追物之事於王子原、使祐昌為奉行、而謁大猷、嚴有二廟、及泰清世子始自武下薩之日、祐昌為假國老、卒時不知其年月、其後子孫更伊東氏復木脇氏、今木脇八郎右衛門、即其子孫也云、

伊東三右衛門祐玄、祐辰第二子、母上床宗圓稱喜左衛門女、及長為使役、轉徙高江・串木野地頭職、

木脇刑部少輔祐元、號卜也、祐兄第二子、居隅州串良邑、野史氏曰、祐利及祐定、去虎口、歸慈母、祐昌父子兄弟、以身殉國、雖古烈士、何以加焉、及天下既平之日、或問兵家師曰、關原之敗、祐秀如呼自稱、則何如、曰、辯慶哉、自稱通國所獨知也、辯慶天下所同知、祐秀智勇哉、又曰、蘇子曰、古之所謂、豪傑之士、必有過人之節、人情有所不能忍者、匹夫見辱、拔劍而起、挺身而鬪、此不足為勇也、夫祐辰若恥己以名士之子、而棄之於采邑、則宜先折其剛銳之氣、而徐謀之父老、告之公子、請之官府、固辭其嗣子、則庶公議或見許、而後明告歸慶府、復自稱木脇納右衛門、則庶幾名正命註也事全、永為清烈之士矣、謀不出于此、而不忍忿々之心、出不遜之言、為過抗之行、卒以取殞、哀哉、或云、祐辰烈士也、若真乃父之列、遇乃父之事、則能就乃父之功、惜乎、不遇乎時、而亦不能下人、遂不免於死亡、古人曰、所寶之非賢、亦天命之有常耳、

西藩烈士干城錄卷之十六

卷之十七

後醍院宗重

卷之十九

山田口時

卷之二十

島津忠明大島

肝付兼道

伊勢貞成

邨尾重侯

平田昌宗

卷之十八

伊地知重武

邨田經定

西藩烈士干城錄

二十七之

西藩烈士干城錄卷之十七

後醍院宗重列傳第三十一

淡路守後醍院宗重初稱松重丸、又八郎、又善兵衛、又圖善介、號淡齋、姓源、後醍醐帝第六皇子懷良親王之七世裔也、延元二年、肥後守菊池武光、上書請親王西下、鎮九州、於是親王以征西大將軍至肥後州、與賊合戰不已、是時賊勢日強大、親王兵數不利、遂被創殆死、潛匿八代民間、正平六年、三月廿六日、薨、葬八代小野村東谷、而築墳

寺、名曰悟真、親王妾武光妹、生男、稱爵松丸、及長名良宗、任越後守、因為後醍院氏、良宗生伊豆守良忠、良忠生越後守宗親初稱八、後醍院氏、宗親

宗親生越後守良春、良春生越後守宗能天正四年、五月十七日卒、宗能生備後守良春、宗能

良義陽主、戰佐數量石、最、義陽賞之、因與本姓高橋氏、俱為同族親、其後宗重請義陽子忠房、讓高橋氏於適子勝三郎、自復後醍院氏云、十年、松齡公在八代、是時宗重始來見焉、宗重一見、公、服其推誠之

君、誠有以哉、十二年、三月、我軍往擊龍造寺隆信、宗重及弟主税介賴演、屬平田光宗八代城、戰於島原、賴演被創死焉、宗重亦被創、十三年、閏八月、我軍出擊阿蘇堅志田、宗重從復被創、十四年、七月、宗重從攻岩屋城、有功、場宗純、證書今稱存云、十五年、三月、松齡公班軍於豐後、賊兵逐窘於萬松寺、宗重拒後、從此別、公、還居肥後、四月、豐公入薩、使長束正家、命宗重以為導、宗重辭曰、臣既屬於薩、不可以為導、不從、六月、豐公封佐々成政以肥後十二郡、而屬宗重於成政、遣其老母及勝三郎質於熊本城、而成政為政不善、國人多叛、宗重討之、數有功、十六年、豐公大怒、賜成政死、而加以藤清正小西行長分封肥後清正居熊本城、行長居宇都城、是時使宗重屬行長、十七年、十月十三日、行長攻志岐城、宗重及勝三郎從戰於見安、文祿元年、從至朝鮮、行長據平壤城、宗重及真野孫左衛門率兵五百人守牡丹臺砦十二里許、二年、正月、明將李如松將大兵二十萬救朝鮮、八日、進與行長戰、行長敗績、行長將小西行親・木戶作右衛門・率後軍退去、

宗重及森勝介拒後、勝介戰沒野史氏曰、嗚呼、可憐人、斯人若與宗、重聞明大兵圍、慈眼公於唐島、於是宗重辭行長、急馳詣、公所、則敵兵已引去、宗重乃介島津忠長謁見、公、公賜之衣服二襲、因約收師後來歸於薩、其後宗重歸國、慶長二年、五月廿三日、携父母及

妻子至薩、是時川上忠兄偶至自朝鮮、因賴忠兄上言其所以、忠兄乃奉書朝鮮、白之、二公、於是、松齡公賜宗重田祿一百石內、來院市比野村田門之、而居入來院、後益賜四百石、四年、從軍莊內、五年、八月、東西軍起、宗重馳至墨股、謁見、公、九月十五日、西軍敗走於關原、東師逐窘、短兵急接、公欲死之、宗重等諫而後止、於是俱衝重圍而退、宗重與木脇祐秀更拒後、敵迫則宗重大呼曰、島津惟新軍敗而還薩、非畏死鼠竄、可來共決死、敵兵不敢迫、衆皆患曰、公今微行、痴漢也、何妄自呼、公名、幾敗大事矣、宗重聞曰、表裏咸敵、今日、公奚得保全、諸君固當俱決死、豈有暗默而過之邪、衆皆服其膽略、從而歸國、賞賜褒牌及田祿五十石、寬永元年、甲子、四月六日、卒、年七十四、法號香雲道淳庵主、墳墓在郡山常盤村・大坪久田門、長子半右衛門、名某初稱勝、母愛甲氏、以父命、更後醍院氏為高橋氏、朝鮮之役、從父有功、慶長三年、始來事我、賜田祿二百石、其後辭國而往事池田輝政、而與之祿五百石云半右衛門生三郎兵衛實政、實政生喜兵衛、其子孫至今以高橋氏事池田氏、次子內藏介、名義信初稱勝太郎、其兄以辭去國故、義信繼父後、寬永六年、七月廿八日、卒、年四十五、法號文安宗童居士今後醍院喜兵衛、即義信子孫也、

野史氏曰、宗重以羈旅、感激簡拔、忠志忘身於外、奔殿而不伐、如斯人、吾愛重之、願子弟效之、

山田口時列傳第三十二

初稱出、其先、道佛公之長庶子式部少輔忠繼、公以忠繼為薩州牛屎院・及谿山邑中村・上別府村等地頭職、而居山田、由是為山田氏、忠繼生式部少輔忠真、忠真生式部少輔宗久初稱宗、宗久

生加賀守忠經、道鑑公賜忠經隅州市成邑、忠經生出羽守久興號之、

久興生出羽守忠尚號聖宗、有聖宗、自聖宗七世云、忠尚生加賀守忠廣、忠廣生河內守忠

豐、忠豐生式部少輔久親、久親生口時、自忠經至口時、世々居隅州

市成城、及肝付省釣作亂之日、口時與一族家臣皆戰沒、子次郎左衛

門久武初稱少輔、又稱少輔、猶幼、不能保市成、移居曾於郡邑、及飲肥院降、我

命移居飲肥、其後又移居帖佐・綾諸邑、朝鮮之役、久武以自賦赴

焉、莊內之役、久武番成志布志、因移居焉至久武五世孫次郎左衛門久德世、上書於公、始移居豐府、今山田九郎左衛門、即其子孫也、

山田右京亮久俊、出羽守忠尚第二子式部少輔忠通之五世孫也、忠通

生右京亮久基、久基生右京亮忠秀、忠秀生又三郎忠重、忠重生久俊

第二子、有兄曰飛騨久時、其子曰淡路守久綱、久俊有一、

弟、曰彌次郎久信、曰彌右衛門久次、久次子孫居志布志云、

川、今其子孫居百引邑云、

野史氏曰、

島津忠明列傳第三十二大島

出羽守島津忠明、祖父出羽守有久者、義天公第四子也、食邑於莊

內梅北、長祿三年、七月三日、戰沒於三股院小山、年三十七、父

出羽守忠福、承大岳公女、文明十六年、十二月廿二日、戰沒於飲

肥酒谷、明應八年、圓室公封忠明大口邑三百五十町之地、以鎮相

良菱刈二氏、因移居大口城、享祿三年、七月廿七日、賊兵襲城、衆

寡不敵、忠明自剄、城遂陷、子次郎四郎明久、享祿二年、九月三

日、先父戰死於羽月大島邨、年十六、其後及我有事於九州、官崇忠

明靈為西原口、八幡、又崇明久靈為西原若宮八幡、而父子同祠、後

數有靈驗、於是貫明公使新納忠元、為明久新建祠於大島邨死所、

又以高城備前守重誠東德氏十二世重理弟、備前守重隆之子也、及重隆始為高城氏云、之適子主馬允重貞為明久嗣、

是曰出羽守忠泰忠泰母即忠經之女、忠明戰死之日、為論所捕、後後重誠生忠泰云、初忠泰出家居京師、及忠明父子戰

死無嗣、公命還俗、而為之嗣、賜羽月大島邨田祿三百石、轉遷馬

越・山野・地頭職、後從肥豐之役、文祿慶長之間、再從軍朝鮮、泗

川之戰、掌埃樓一・箭洞二、及我開壁擊敵、忠泰力戰有功忠泰有朝鮮日、

從而歸國、後更島津氏為大島氏、稱休左衛門、某年月日卒於馬越、

法號長壽寺殿空觀蓮帥、墓在長壽寺、忠泰好國雅、嘗所詠之歌曰、

池伊水能一水音、底麻音、澄音、蓮音、葉音、心音、璧音、磨音、哉音、

假初二音、別加音、賀音、良音、毛音、年音、月音、遠音、隔音、無音、禿音、思音、名音、殘音、哀音、

痛音、哀音、歸音、來音、爾音、行音、波音、爾音、不音、限音、遠音、莫音、

磨守忠經之曾孫也、以忠泰無子故、乞忠盈以為己嗣、其後寬陽公

使伊勢貞昌告忠盈曰、子祖先忠貞勇敢、世々以死報國、今賜子田祿

千石、以賞祖先之功、子宜刻骨、卒時不知年月、今大島休左衛門、

即忠盈之子孫也、

野史氏曰、

伊勢貞成列傳第三十四

伊勢貞成初名貞須、又貞顯、平姓、自稱平左衛門尉初稱、薩摩人也、其先平

相國清盛弟池大納言時忠也、祖父治部少輔有川貞則老、梅田者及大中公、為國、

父雅樂介貞真貞則別號、子、初名貞世、又貞序、號任世、或云、貞真姓中原、非平姓、今按飯野之宮大明神祠、題其體、

公進兵羽月飛田滿、賊兵急迫、我兵奮困、貞真奮身力戰、顯功名、元龜二年、公大戰于木崎原、時貞真留守飯野城、天正

九年、從軍水股、十年、十二月、從軍八代、貞真奮身力戰、顯功名、元龜二年、公大戰于木崎原、時貞真留守飯野城、天正

新納忠元女、永祿十二年、己巳之歲生、文祿元年、從父軍朝鮮、其

後以 松齡公家老、轉徙飯野・吉田・蒲生地頭職、領田祿一千石、慶長元年、復從軍朝鮮、三年、戊戌、十月初一日、公大破明兵廿萬於新寨、是日貞成被緋甲、先衆擊殺數十人、十一月、從而歸國、五年、庚子、東西軍起、是時 公在大垣、七月、徵兵於薩、八月、貞成與長壽院盛淳等俱引兵、晨夜馳至濃州、謁 公於墨股、九月十五日、關原軍敗、麾下壯士二百餘人耳、貞成以軍師布鋒矢陣詳未、向東方衝重圍、貞成先驅至南宮山下、長會我部盛親守土佐、長束正家大藏大等擁衆於前、而不戰、我疑其與東軍、於是公曰、孰能使之、言未畢、貞成挺身曰、叛邪、死之、不則揮標以為號、馳至正家軍、告曰、寡君戰敗退去、為相識故、不敢不告、正家曰、今日之戰、子之君膽略勇悍、誰敢間之、今西軍已敗、戰終無益、吾亦退去耳、敢呈一騎以為導、是時我軍相違正家軍十町許、公將據胡床、而無有焉、乃坐障泥以待、從士皆執鳥銃侍左右、方望見之間、貞成盤馬揮標、衆皆安堵、乃引去、貞成迹及、十月、俱從而還薩、賞其功、賜褒牒及田祿若干石、六年、五月、中納言秀家窘辱懼誅、遁至薩州山川、公不忍棄捐焉、遣貞成及相良新右衛門、置之於牛根邑、八年、二月十六日、以國家始安定之故、宴親戚諸將於甕城、貞成與焉、十二年、乙未、公使貞成使肥前唐津城、其家老高島新藏擊殺之、初我許晉志摩守寺澤廣高世子、既而微聞其奉天主教、天主教天下之大禁也、然事秘無可籍口者、與女不可、渝約亦不可、議久不決、貞成曰、是易事耳、臣請往焉、於是乃命使貞成、將適、所友善霧峰花林寺僧來送之、貞成出其次子後名貞、屬之曰、方今奉使他邦、鬪戰之世、我死生未可知、此兒生二歲矣、吾不還、幸煩君教養、僧應曰、諾、貞成遂與蒲生士五人・及附衆中及家臣等四十人、俱至唐津、主人享之、酒酣、貞成佯酖曰、我不嘗約昏、此是高島新藏所謬聽、語頗悖慢、

新藏大恚、欲刃且忍、而歸天草志岐城新藏所、待其經由、要而設茶式享之、言復及前事、貞成語益愎戾、新藏不堪怒、遂斬之、出告故於其從士、而亦自殺、昏於是乎絕矣、

按記曰、新藏要貞成歸路、至其所居志岐城、貞成許諾、舟經城下、貞成則上岸入城一說曰、貞成有正心、因繫舟城下、而後入城、未知孰是、、新藏設茶亭、預匿刀茶式入、因猝拔刀斬之、貞成奮奪其刀、反斬新藏、誤跌爐而倒、先者主僕、大津喜右衛門新藏家者、傍擊殺之、瀬戸口主稅貞成家急自外来、又斬殺喜右衛門、新藏乃到舟所、告貞成從士而後自剄、

貞成卒時年三十九、歸葬柁城大株寺、法號傑山文勝居士、既葬之三日、人有言貞成被背創者、公聞焉、大怒曰、孤知貞成數十年、非畏懦被背創者、遣其弟貞昌、往披棺而視之、則額及兩手指間盡被割裂云、其後歷星霜失貞成墓所、至文化十一年、甲戌、冬、反土邨吉原門・百姓治右衛門為耘耜、堀大株寺境內荒蕪地、得墓石礎、背彫刻貞成二字、於是子孫伊勢平左衛門貞高改葬諸長念寺、貞高予同僚、嘗親聞焉、因記之貞慶十二年、至文化十一年、中間七十年矣、、貞成二子、長曰美濃守貞長、母伊東權頭女權頭、即伊東結生也、善娶新納忠茂弟忠實女、而生此女、及權頭沒、義祐亦敗亡、祇肥城、於是權頭妻去、肥前、至鶴田、為公子歲久安、生一女云、○按別記曰、貞成妻、吉利絲、嫁久富長女、今據此、則吉利氏蓋早卒、自故後娶伊東氏、、為牛根地頭職、寬永三年、徙恒吉邑宰、次曰左近貞清、幼為近侍童子、及長為新從隊騎是曰馬廻、今伊勢彌一左衛門、即貞清之高也、、

伊勢兵部少輔貞昌初稱德松具、又稱九郎、、貞真第二子、貞成同母弟也、元龜元年生按記、及貞真請貞昌為其氏、貞昌以貞昌為養子、而讓第三子貞興之後、因為在文之次子、主事、、天正九年、貞昌年甫十二、八月、從軍水股、而加冠、乃近侍 松齡公、因居八代數年矣、十四年、年十七、從軍豐後、我軍進攻高城、貞昌奮擊斬敵首、而効之、公、十五年、四月、從班師薩、途至日州清田、賊兵塞歸路、我軍進擊之、貞昌斬一人、是歲從一唯世子朝京師、居凡三

年、十七年、從歸國、十八年、七月、世子赴小田原、是時選知勇士十六騎從焉、貞昌其一人也、文祿元年、以 世子近侍、從軍朝鮮、二年、九月、 世子薨於朝鮮史筆曰、世子薨、嘉慶事也。、貞昌奉柩而還國、是歲父貞真亦卒於朝鮮、以故貞昌退居飯野、居頃之、從公子朝京師、請以 公子為 世子、公命也、豐公可之後是為志、眼公、續從至朝鮮、勞軍務凡六年、是時與島津忠長俱賜田祿二百石、貞昌辭不受、慶長三年、十月朔日、新寨之捷、貞昌被紫線縲穿甲、斬捕頗多、十一月十八日、樺山久高・喜入撰津等以下五百餘人、徂救宗對馬守於南海、戰艦為敵所燒沉、於是棄船皆上南海島、而為明及朝鮮巨艦所圍、危甚、會我敗卒奔回告 公於唐島、乃急遣貞昌及有馬重純・鮫島宗俊・五代友泰使焉、於是四人同舩行一日一夜、乘夜潛過艫艫間、直至南海島、告久高等曰、公方發舟救君等、君等須努力、遂還報、於是小西氏・松浦氏・大邨氏・亦皆遣兵救之、以故五百餘人得全而還、既而賞貞昌等以田祿若干石、皆辭不受、從歸國、直從至伏水、賜貞昌及鎌田政近・比志島國貞・各以田祿一千石、貞昌復辭不受、四年、率山田出水兵、從 慈眼公軍莊內、五年、松齡公敗於關原、退歸薩、貞昌引兵迎公於日州、是時伊東氏臣稻津祐信侵暴綾邊境、貞昌擊破之、斬賊首數十級、十一年、六月、 東照廟賜 慈眼公以諱一字、於是十七日、遣貞昌至伏水、而拜其辱、十五年、公率琉球王尚寧、朝于駿府及江都、貞昌從焉、十九年、 東照廟將有事於浪華城、於是豐臣秀賴遣使贈書及刀、以乞援於我、公不可、乃命貞昌、造書以答焉其書修飾文采、朗々、今猶傳於俗。、而別記其書、獻之於江都江都、江戶也、德川幕府、、東照廟視而褒賞之、元和三年、正月、從 公朝江都元和、中、幕府、、是歲 公任宰相、初 公任少將、官次微、貞昌以為我國

于天下者也、(頭注)上言一作啓○舊註闕損父啓、父以故上言之於閣老本多上野介・土井大炊頭・本多佐渡守、至此有此命、其後至寬永三年、遂陞任從三位權中納言、八年、九月、復從朝于江都是時有誤說曰、紀伊賴宣、越前忠直、稱病而不朝江都、以故、公有此朝云。、九年、台德廟朝京師、貞昌從 公之扈從、寬永元年、公遣貞昌奏以 君夫人質於幕府、閣老土井利勝可之、於是十一月、貞昌從 國夫人及 世子及公子又十郎君質於江都、貞昌妻子亦從焉、蓋感 東照廟之殊遇也、自此貞昌勤番於江都、凡十有七年矣、七年、四月十八日、大猷廟枉駕於我櫻田邸、初貞昌傳授諸侯君臣上下儀禮禮云、於因幡守伊勢貞知朝友、、至五年春、 幕府有枉駕於我邸之命、於是 公命貞昌、按前代幕府枉駕於諸侯邸第之儀禮、而新設殿堂廊廡庖厨於櫻田邸、凡事一從故事至、今俗有、幕府邸記、、是日貞昌偕島津久元謁焉、而獻太刀馬代記、在別、及袷幾襲、 大猷廟亦賜袷十襲・白銀二百枚、廿一日、 台德廟亦枉駕於櫻田邸、貞昌久元謁焉、而獻太刀馬代・及袷幾襲、 台德廟亦賜袷十襲・及白銀二百枚、十二年、使兒玉筑後、加賜貞昌田祿若干石、合舊所領凡一萬石、貞昌固辭不受、十五年、以 公有病、且肥前島原賊起故、 幕府賜 世子告而還國、於是正月十三日、 世子去江都、貞昌等從焉、二月十四日、至有馬、十六日、歸慶府、廿三日、公病篤、召貞昌及久元於臥內曰、勉之、輔嗣子、安國家、宜盡忠貞之節、又謂 世子曰、繼父之世、居君之祿次、敬之哉、方天之休、不敬不休、悔其可及、遂薨于路寢、至三月十七日、 世子命駕而行、貞昌從焉、四月廿四日、至江戶邸、五月八日、 幕府召 世子於土井忠利館、而使秋山修理亮・井上筑後守、命 世子嗣立、是為 寬陽公、二侯又召貞昌、而命曰、方今爾君襲封、宜循舊典、傳領薩隅及日諸縣郡、十三日、公朝 幕府、拜其辱也、是日 幕府復召貞昌等曰、孤嘉汝君成世、汝等宜輔佐

之、夙夜罔違道、政事懋哉、十六年、五月七日、公去江都邸、反乎薩、貞昌從焉、居不幾、夫人在於江都邸、遭疾、八月、使者至甕府、於是貞昌急發甕府、九月五日、至江都邸、未數日、夫人病瘳、十七年、四月、甕府使者至江都邸、告曰、前三月廿二日、薩祁答院長野有出沙金、貞昌乃以查勘始開礦山之事、白之閣老、至六月廿五日、則阿部重次召貞昌曰、可、十八年、二月廿二日、幕府使太田資宗召貞昌、而上 島津系譜、四月三日、卒於江都邸、年七十二、葬二本榎廣岳院、法號俊翁豪英大居士、後子孫創建建寺於南林寺境內、名曰豪岳院、又建石塔蓋指其墓於 大中公廟右側、及貞昌病篤之日、酒井讚岐守・阿部豐後守・松平伊豆守・阿部對馬守・土井大炊頭・堀田加賀守・各遣家老一人、留在貞昌旅舍、而扶持其病、至貞昌卒之日、幕府遣正使阿部豐後守、賜香奠銀若干枚、大京伊勢兵庫頭拜受焉、貞昌自慶長十六年、至寬永十八年、凡三十一年、祇役於江都邸、而屢謁于 東照廟 台德廟 大猷廟、則賜馬・衣服・金銀無算、且每年賜臂鷹所搏之雁、幕府嘗享諸侯於西城、而有散樂、是時貞昌亦陪焉、而與閣老同坐賜食、前此十六年、使阿部豐後守、賜貞昌米五百包、比及卒年乃止、貞昌在職之日、數請招本多佐渡守・本多上野介・土井大炊頭・酒井雅樂頭・永井信濃守、而設茶式於旅舍、又當時諸侯多求見之者、松平隱岐守・立花飛彈守・毛利甲斐守・細川三齋・松平陸奥守・藤堂和泉守・松平安藝守・數枉駕其偶居、(頭注)賓客輻湊、衆中人、鳥銃十五、槍七、「子大隅守貞豐初稱彌、九郎、母市來家子女、慶長十九年、以騎馬橫目、從家臣十五人、赴浪華之役、未至而和成、寬永元年、四月廿日、先卒、年三十一、法號春陽守英居士、」兵部少輔貞照初稱龜丸、又稱龜介、、慈眼公第十三子、母崎山八右衛門盛秀女、寬永六年、五月十四日、生、以貞豐早

卒故、貞昌請公子以為已後、因名貞照、曰兵部少輔、慶安二年、為國老、授谿山地頭職、及有王子原犬追物事、貞照為射者班、是日幕府賜貞照衣服此小三襲、寬文三年、八月四日、卒於江都邸、年三十五、法號顯性院幽澗堅心大居士今大監伊勢君、即貞照之子孫也、

伊勢上總介某、筑前人也、細川幽齋請之 貫明公來仕於我、賜田祿五百石、其後又益賜田云、元和初、甕府田祿籍云、上總卒後、猶領田祿一千石、」右京亮貞則、父有川助兵衛、貞則出為上總養子、寬永間、為郡山地頭職、九年、甕府麾下出賦籍云、貞則出部將二騎從兵一則、從兵八人、、衆中去云一人、卒一人、鐵砲一、弓一、槍二、其子孫傳右衛門某、世々為小番籍、而子孫嫡子始謁 公之日、例獻太刀說在別、云、

伊勢貞末一作貞、清、、自稱六郎左衛門、入道說在義、號如閑、父有川貞明一作貞、則、、貞末初曰姓有川、稱長門、後偕弟貞眞、改姓伊勢、天正三年、三月七日、為代官、後累遷谷山・百次・郡山・小根占・地頭職貞覺兼日記云、貞天明或云、天正十二年、貞清為八代將、地頭職、、文祿元年、十一月七日、卒、法號心庵正傳居士、」子大內記貞明嗣、母栗幡河內守女、從 慈眼公軍朝鮮、慶長十九年、本府出師籍云、貞明領田祿五百餘石、以騎馬橫目、出從兵十四人、元和初、本府田祿籍云、貞明領五百二石、寬永間、為物奉行、後轉遷郡山・百次・地頭職地理、、九年、本府出賦籍、貞明出部將二騎一則從卒十五人、一則從卒八人、、衆中一人人、、鳥銃二、弓一、槍二、伊勢彌次郎貞朗、從軍朝鮮、新寨之捷、貞朗被金甲、光耀奪目云、野史氏曰、山田有榮臨終、戒子弟曰、昔者關原軍敗而退、長曾我部・長束禁部署不戰、我道其前、衆曰、彼如有異心、則吾無類、公

曰、孰能使之、言未畢、貞成曰、唯、單騎馳去矣、吾欲為貞成所為、斯須間為其所先、臨危貴決、可不努力哉、夫山田有榮我諸將中、最英武者也、而其言如此、則貞成忠決明斷、有誰能出其右者、(頭注「引不發」)貞昌智勇絕倫、世俗傳、公嘗賜貞昌以谿山邑、以其密邇於麿府、出賦生財之便殆異於他邑、故辭不受、由是觀之、其為國家慮深矣、至祗役於江都久之、為 幕府三世所寵遇、又當時諸侯多愛重之、亦有以哉、

平田昌宗列傳第三十五

美濃守平田昌宗初名馬介、稱右馬介、號春礪、父曰美濃守貞宗、事 □□公為國老、貞宗父曰美濃守兼宗號洞、事 節山公為國老、兼宗父曰美濃守氏宗、事 大岳公為國老、氏宗父曰美濃守重宗號三、事 義天公為國老、重宗父曰新左衛門尉親宗親變、事 齡岳公為國老按、親宗、桓武帝之十三世孫、內大臣、宗廟三子、大炊、後也、世々領隅州串良岩弘地不知何代其為平、田氏由云、及 大翁公出居帖佐、三州雲擾、昌宗不能保岩弘、出走末吉、寄寓平田宗應所、天文間、來事 大中公、公擢昌宗為國老、賜帖佐地頭職、天正七年、七月十四日、卒、法號來月、葬帖佐總禪寺、昌宗無男、以小宗宗秀次子新七為贅壻、遂以為嗣、是曰美濃守光宗初曰左、號舜廬、事 貫明公為國老、公賜光宗郡山西別府地、而居郡山、後累遷帖佐、及肥後八代地頭職、天正十一年、三月、公遣光宗出守八代城、十月七日、光宗與諸將擊破堅志田坊、殺敵數千人、是時求麻、八代、豐福、世喜、高津賀、高田、比奈古、田浦、久多良木、佐敷、湯浦、津奈木、羽月、曾木、平泉、高城、帖佐等兵士盡屬光宗麾下云、十四年、七月、諸將屠岩屋城、光宗從 公在八代城、十五年、四月、從

戰目白坂、十六年、六月、光宗以劍役謀未、從 公始朝京師、慶長十年、十二月廿六日、卒於郡山、年七十七、法號真翁昌安、子美濃守歲宗初名房宗、天正三年、正月七日、任左近將監、三月十五日、以貫明公嗣立故有犬追物事、歲宗為射者班、十七日、又有犬追物事、歲宗復為射者班、射犬八匹、四年、八月、從軍高原、其後為國老、十一年、九月、出守八代城、十四年、岩屋之役、歲宗從在八代、十五年、從襲目白坂之營、不利、慶長三年、先父卒於朝鮮、法號天翁宗真、子太郎左衛門尉增宗、續後初稱新、母羽島氏、永祿九年、癸亥之歲生、及長、亦為 貫明公國老、後有罪被誅、家滅按、慶長三年、增宗祗後、則以增宗為清色地頭職、先是增宗為日州移佐地頭職、至是增宗佐士英武者、十五人、從增宗移清色、是時有從士凡二百六十六人云、是歲秋、開原軍敗、公還歸、是時增宗在浪瀨城、與衆謀、潛從二夫人而歸、十四年、以增宗為副將、航海征琉球、十五年、增宗有異志、命神戶引近、久保字盛球、於是六月十九日、公近等以清色土桐野九郎左衛門為首、執島統、射增宗於土桐野、時年四十五、法號字參覺阿菴主、增宗四男、長新次郎宗次、母上野菴兼女、慶長七年八月十七日、橫死於宇州野尻、時年十七、次新三郎行部宗、慶長十五年、十月十九日、遇颶風於筑前洋、舟覆、行來自剄、時年十九、次某、出家為僧、及伏誅、配於琉球勝連島、次治部宗、應長五年、越前守宗親、增宗弟、為 貫明公隱居、家老、賜吉松地頭職、慶長十七年、四月廿六日、賜自裁、年四十二、宗親二男、長左馬頭宗次、母本田神藏女、次新八郎某、皆與父俱被誅、宗次時年廿。

備中守平田宗秀初曰右京亮、高祖美濃守重宗見上、曾祖民部少輔宗保、祖右京亮宗賴、父安房介宗知、屬薩州家為川邊地頭職宗知法號悅山、重宗次、、自宗知至宗秀、食邑於谿山山田、居苦莘城今皇德寺、初宗秀黨島津實久、天文八年、三月三日、大中公進兵敗實久黨於紫原、翌日宗秀賴伊集院忠朗而降按、宗秀實久臣也、初、梅岳君與宗秀書曰、子如妻子、若而歸我、我必降矣、既而實久疑其黨、將殺之、宗秀為城、乃體、宗秀降、廿三年、十月十二日、陣沒於岩劍城、子安房介宗茂初名宗清、號清甫、母大友氏、事 梅岳君為家老、後 大中公以宗茂為川邊地頭職、而賜長田高田兩村、以故宗茂去山田、移居川邊牧城一作牧、元龜二年、改為加世田地頭職、天正中、卒、年、戰沒於阿多島、一作天正六年、卒、又作文六、年五十二、法號豐叟常觀居士、子新左衛門尉宗張初名宗順、母武本又九郎女、天正三年、十月廿一日、有犬追物事、宗張與焉、其後為川邊地頭職

七年、轉徙日州穗北地頭職、八年、十月十五日、攻肥後矢

崎城、有功、十一年、十月、番戍於八代城、十五年、三月十五日、戰没於豐後清田、「子安房介宗衡嗣」初名宗俊、稱孫六、母平田石見守安壽女、

天正十一年、正月、勤戍八代城、十四年、七月、岩屋之戰、屬上井覺兼、先登被創、朝鮮之役、從在新寨、慶長三年、十月朔日、我軍

大破明兵、是時宗衡被紺緋甲、從 慈眼公、望望津而逐北、宗衡亡馬步行、公獨策馬而馳逐、敵三人反揮槍向 公、公下馬、拔刀斷

其槍幹、而斬一人、二人脫去、宗衡追及、謂 公曰、臣亡馬以後公、死有餘罪、公曰、步行何及騎馬、汝無為自念、宗衡乃以

所斬首、持之其家臣、是時 公馬逸、敵上之將逃去、馬頻騰而不逝、宗衡逐及之、因推墮敵、執鞞轡而馳還、使 公復上之以上據備邊記、一說

至 公前、則命祭首云引漢書、後從而歸國、五年、為阿多地頭職、十五年、轉徙恒吉地頭職、元和五年、五月廿九日、卒、法號宗慶道

忠、初宗衡創建墳寺於恒吉、名曰宗慶、因葬焉、「子新左衛門宗德

初稱孫、母友野左近元直女、早卒、「大監物宗乘、宗衡第二子、宗德同

母弟也、慶長十九年、十月十一日、生、以兄早卒故、嗣父後、為吟味役、轉徙諸邑地頭職、寬永十三年、命宗乘等十二人行鑄流馬之

儀、事在本田親平語中、貞享三年、七月十四日、卒、年七十三、法號慶雲昌壽菴主今平田強之助、即、宗乘之子孫也、

平田又十郎宗次、美濃守貞宗見乎第三子也、永祿元年、三月十九日、戰没於恒吉宮原、無子、以美濃守光宗次子新九郎為養子、是日九郎

左衛門勝宗、事 貫明公、卒時不知年月今平田新藏、即、勝宗子孫也、平田與左衛門宗敏初稱與、九郎、村田經宣第三子、天正十四年、生、出為平

田新右衛門宗房初稱與、九郎、之養子、因冒平田氏（須注）「宗貞」一作宗定、

慶長四年、宗敏從軍莊內、時年十四年、卒時不知年月、無男、以內田才右衛門正重州適子為之嗣、是日刑部左衛門宗宣初稱與、九郎、

號宗真、寬永十五年、從軍島原、子勘右衛門宗模初名宗高、稱才實、又新右衛門、即宗、

平田出羽守宗仍初名久、日置美作守久遂一作久、之第二子也、明應二年生、初美濃守氏宗見乎、之第二子筑前守宗勝、奉 公命屬島津忠廉、從軍數

有功、後戰死於飲肥、無嗣、於是官以宗仍為之後、故宗仍冒平田氏、食邑深川、為末吉地頭職、永祿元年、三月十九日、島津忠親

北鄉時久・與肝付氏戰於恒吉宮原、宗仍將忠親兵赴之、軍敗戰死俱從死者六、時年六十六、法號中山棟田居士、「子新左衛門尉宗德、初稱虎、

戰没焉、法號月窗了心居士、「子狩野介宗應、初稱虎五郎、母禰寢駿河守女、弘治二年生、永祿五年、宗應年甫七、五月、官以末吉地賜北

鄉氏、故易宗應世々所食深川、以松永・川北・持松地、為會於郡地頭職、因移居會於郡城、後益賜老別府、元龜元年、春、改食邑宮

里、天正三年、三月十五日、以 貫明公嗣立之故、行犬追物儀、是時宗應為射者班、四年、從軍高原、十一年、九月廿九日、出守八代

城、後為日州本城地頭職、又改食邑木脇、因移居木脇、十五年、及豐公西下、没入我日州、宗應竟去木脇、而來居覺府、十六年、從

貫明公朝京師、慶長五年、九月十五日、陳没於關原、年四十五、法號桃雲見空庵主、宗應娶吉利久金女、生二子、長曰平次郎宗次、

從軍朝鮮、某年七月二日卒、年廿三、「次曰狩野介宗弘、初稱、天正十七年、五月廿五日生、以宗次早卒故、宗弘嗣父後、為使役今云用、賜

羽月地頭職、寬永十四年、為高奉行、領田祿六百三十餘石、明曆四

年、三月廿四日卒、年七十、法號久庵慶昌大居士即今平田兵十郎、即宗弘子孫也、

平田新助宗次初稱源、太、宗德次子、戰死於福島市木、法號潔潭正清夫、即宗次子孫也、

平田豐前守宗祇初稱氏部、左衛門、父民部少輔初稱氏部左衛門、太、宗貞慶長、年卒、宗貞慶長、年卒、宗貞慶長、年卒、宗貞慶長、年卒、即安房介宗知前見子第二子、天正十三年、九月、貫明公遣宗祇、及伊集院淡路、使八代城、七日、宗祇、及柏原周防、屬新納忠元、出諫豐州境界、十五日、松齡公遣宗祇、及田代刑部、使慶府、十四年、從在八代城、十六年、從朝京師、其後為攝宿地頭職、慶長十年、五月十八日、卒、法號喜果快悅庵主、子民部左衛門宗正、母是枝周防妹、慶長四年、莊內之役、宗正撻槍與小川半介接戰、被重創、遂病創卒、初宗正約殉於 貫明公、且死時、屬其友武延為曰、予今不幸、先 公死、願君肯代予以殉乎、延為應曰、諾、及 公薨之日、延為果自割以殉、宗正弟民部左衛門宗位初稱作、助稱、嗣父後、慶長十四年、從諸將征琉球、子民部左衛門宗直初稱平、六、慶長十一年生、及長學射東鄉重尚、傳受其術、寬永七年、又傳受射術一水軒吉田印西、後轉徙內之浦倉岡・市來地頭職、萬治三年、八月十六日、卒、年五十五、法號松遠祐長庵主今平田平六、即、宗直子孫也、

平田大久坊宗如、宗祇第三子、從 慈眼公軍朝鮮、泗川之戰、被赤緇甲、慶長五年分高岡邑、置一外城、使宗如為物頭後改作地頭、相談役、移居焉、其後復歸慶府、而轉遷船奉行・納殿役人、賜田祿三百石、寬永十五年、三月十日、殉死於 慈眼公、法號大久昌海菴主、葬福昌寺、公廟左第一地藏塔是也初稱、宗如自以為身是沙門、不可執及自殺、乃架木為閣、而坐其上、令人積地而死、至今人傳其剛毅、、宗如無嗣、以故以其祿三百石、與姪民部左衛門

宗直云、

平田越後守宗清初稱源、五郎、初姓瀧聞氏、其以平田光宗之小宗故、光宗使宗清、更瀧聞氏、為平田氏、永祿四年、七月十二日、我攻擊肝付省鈞、宗清戰於大牟禮砦、被重創、是時川上忠朗分已田祿、私與之宗清、以賞其功、天正十年、冬、遣宗清、及伊集院忠次、帖佐宗重等、率精銳三百餘人、往援田尻氏城主、後德川、守高尾城、糧盡而班師、其後從討大友氏、攻岩屋寶滿等諸城、十五年、豐公西下、新納忠元率兵據大口城、是時宗清、與土持大膳・二階堂安房俱議、率日州兵、將援忠元、未至、忠元以 公命下城、因贈三人書而謝焉存其書今猶、十八年、從 一唯世子軍小田原、其後卒、法號祥安榮吉上座、、子五次右衛門宗知初稱藤七兵衛、又大炊亮、母大田三河女、文祿二年、以兵具奉行、從軍朝鮮、戰鬪被創、三年、歸國、而療創、後又從 慈眼公、復至朝鮮、四年、三月十日、我獵虎於昌原山、豐公命也、翌日獲二虎、而遣宗知獻肉於豐公於名護屋營、則造朱印牒、齎宗知至朝鮮、賞其功、慶長三年、十一月、從歸國、直從至伏水、五年、九月、以兵具奉行兼昇主取役、從戰關原、軍敗而從歸國、十九年、八月四日、卒、法號一安玄空上座、子藤七兵衛宗政初稱小、四郎、為兵具奉行、寬永二年、三月三日、卒、法號喜雲淨觀居士、無子、以弟藤右衛門宗則初稱、為、為兵具奉行、及大坂留守居、而轉徙山崎・水引・高尾野・福山・清敷等地頭職、正保四年、我行犬追物事、是時宗則為普請奉行、卒時不知年月今平田五次右衛門、即宗則子孫也、

平田萬兵衛宗次、宗清第二子、戰沒於關原宗次子孫今在、志布志也、平田駿河某、事 大中公為兵具役、有子三人、長曰右近、亦事公、

月十二日、卒、年五十三、法號千山守法菴主、

俗傳、重興嘗以豐後人女為妾、而通家臣、重興乃入妾及衆蛇於櫃、而浮之水中、使家臣柳田某持竿登岸、櫃循岸輒以竿推之中流、女苦死、遂為祟、於是十一月廿日、登崇之為赤明神、因號池夫人、以祀之、其後柳田家滅亡、人皆以為女祟、「伊地知氏家藏文覺上人書八幡大菩薩五字之大旗、初鎌倉幕府使上人書之于蛭子島、舉以舉義兵于石橋山、後賜之畠山重忠、而以鳩羽二結之竿、其後傳之伊地知氏家傳之故、以、至重興曾孫縫殿介重治之世、令大乘院住持政真獻之、寬陽公、因此旗為家寶云、」

伊地知伊賀者、重興家臣、元龜二年、引兵侵慶府・及瀧水、中銃丸被重創、

伊地知美作重矩、重興命為小濱城守將、
田上助左衛門、馬場玄蕃、俱來侵瀧水、皆中銃丸而死、

田上二之介、助左衛門弟也、能引勁弓、且習船戰、而為重興將、
督下大隅云、

福岡和泉重純、黨重興戰沒於牛根城、

重興子縫殿介重昌初稱太郎、又三郎九郎、母禰寢重就女填妻在國分縣、天文九年、
生、為人好和歌、由其生而廢人之故、「由其以下七字、一作以有疾而廢之、」、填妻在國分縣、號蘆津、元和四年、三月六日、卒、年六十九、法號花叟守榮庵主、墳墓在倉岡

龍泉寺填妻亦在此云、、子佐渡守重順初稱太郎、又、填妻在國分縣、母肝付良兼女、或云、蘆津肝付良兼之

年、重順年甫十二、八月、以副將赴水股、小宗重賢傳之、十二年、

十月、率兵一百五十人、與諸將攻堅志田城、先登、時年十五、十四

年、十月、率兵從公子家口、入豐後、十二月七日、進攻利滿城、重順先登、與利滿藏人鬪斬之、是日小宗重賢、及中馬伊賀重、十二日、大破京軍於利

滿城下、重順先登、十六年、六月、從 貫明公朝京師或云、是時石田三成之屬、、豐公所書古歌、是時采女六百四十石、、凡祿四子四百七十石、、

文祿二年、以旗奉行及船奉行、從軍朝鮮、時年廿四、三年、秋、有罪、没入下之城、蟄居於某寺別記、而流落凡七年、慶長六年、春、

慈眼公朝京師、是時重順潛匿高野山、公聞焉、乃召賜田祿五百石、為步卒將及地頭職、還居高岡、松齡公則召重順於平松、使萩原

寺僧告之曰、孤欲封子以舊領下大隅之地、而今為右馬頭以久之所領、宜選他邑以封子、子姑待之、十三年、為倉岡地頭職、及改易三

州稅畝、減重順祿四一、而以三百六十石勤番于倉岡、凡廿二年、寬

永十四年、以是歲飢饉故、三月三日、奉新納加賀守・及町田勘解由書曰、請借官米十三石、至秋以銀及米、償之于官、令曰、可、十九

年、十月廿二日、卒於倉岡、年七十三、法號久山清長菴主至重興之曾孫助四

俗傳、重興與大乘坊日勢者重興祈願所僧不和、及朝鮮之役起、重順行役、

請招大乘院僧正而禱全身班師、日勢大怒曰、我為祈願所僧、則當禱之也、何為使佗僧禱焉、可怨之甚也、因入定、安養院僧適而諫

之、不聽、凡四十一日而死、實文祿元年、九月十八日一作七月、自是日勢為祟、以故伊地知氏崇之、而與祖先同祭祀之云、又曰、重

順禱福田利益、而獻粟田口太刀於梅北黑尾權現云、又曰、朝鮮

之役、松齡公賜重順金幣、以為寺社奉行云、又曰、重順禱家國

安定、而獻法華經一部重興所書于隅州八幡祠云、

伯耆守伊地知重秀初稱又人、又勤、號增也、彈正少弼季隨第二子・正貞之六世孫也、初 道鑑公賜季隨姓島津氏、季隨固辭不受、於是賜之正貞為島津氏、且封日州田島之地九十町、故謂之田島島津氏、正貞無子、以縫殿介季豐次子為嗣、是曰田島忠通、號道忠、道忠生彈正少

彌久等、號久顯、久顯生越中守重賴、重賴生駿河守久純、號道珠、事 □□公為國老、天文十八年、戰沒於薩州吉田、法號實叟貞公居士、久純生又八某、某生重秀、重秀事 貫明公為申口役今用、累遷阿多・始良・蒲生・湯浦後肥地頭職、食田祿三千町之地、天正四年、八月、從攻高原城、六年、十月四日、命重秀・及同宗又十郎、勤成佐土原城、而從軍耳川、九年、將兵赴水股、十二年、三月、赴島原、十三年、公使重秀・及島津忠長・町田久倍、假讓位於 松齡公、十四年、諸將攻岩屋城、重秀從在八代城、其後重秀建墳寺於蒲生、號曰重榮、文祿三年、五月廿九日、卒於蒲生重秀妻鎌田國書頭政勝、一子勘解由左衛門尉重元初稱又、天正六年、九月、遣重元等使石砦湯津以、過期不還報、公怒而誚讓之、十二年、與父俱軍島原、十四年、諸將屠岩屋城、重元留戍八代城、十五年、六月、從 公朝京師、後以使衆今云甫為蒲生地頭職、文祿元年、率蒲生士及家臣四十餘人、從 松齡公軍朝鮮、六月十六日、戰死家臣隈元金兵衛、大崎太郎三郎、高橋吉次、宅間源太兵衛、源左衛門、粟小、藤太、大兵衛等以下十數人亦戰沒、訃音至國、其妻大寺氏、祭事闕、則即以刀斷喉、家人驚駭、急奪其刀、未死、貫明公聞之、使村田雅樂助且醫來謂之曰、凡行役戰沒、是士之常、女何辛苦乃爾、宜療創而長育孤、以成國家用、大寺氏合掌唯諾、候雅樂助出戶、又嚙斷舌吐而死、舉家莫不益驚嘆、重元法號傑心伯英居士、墳墓在興國寺、子勘解由左衛門尉重初稱勝、母大寺氏、重初稱甫年甫四歲、為孤、其後 松齡公憐其幼失父母、召為近侍、後親身傳大坪流馬術、其後為普請奉行、領田祿三百十三石、某年月日卒今伊地知助太郎、乃重秀子孫也、

伊地知隼人佐初稱平、重秀第二子也、天正十二年、從赴島原、後為蒲生地頭職、從軍朝鮮、子平次郎與諸將征琉球今伊地知五兵衛、乃平次郎子孫也、

小牟田彌六左衛門、父右衛門四郎、祖小三郎、小三郎即縫殿介季豐第五子、季豐與小三郎居覺島水口門小牟田地、故改伊地知氏為小牟田氏、彌六左衛門戰沒於白銀七曲、一子和泉守重元初稱小左、改小牟田氏復伊地知氏、一子和泉守重倫初稱彌六、又、天正中、從軍肥筑豐、有功、後從 松齡公軍朝鮮、慶長五年、關原軍敗、從而歸國、賞賜褒牒及田祿五十石、正保元年、十一月十日卒按慈眼公之世、蓋有柁城納殿、子喜兵衛重商初稱小、號安心、母媛渡筑前女、慶安二年生、及長為典書記・及侍醫今伊地知彦右衛門、乃重商子孫也、

伊地知左衛門尉頭注、四世戰死、太郎左衛門重弘見于前第二子、大永三年、戰沒於高城、法號可翁悅公居士、一長子新四郎、大永三年、十二月、戰沒於日州月野梅淵、法號義山忠勇居士、一子次子亦稱新四郎、天文八年、戰死於薩州吉田、法號傑心良雄居士、一子左衛門尉、天文十八年、四月三日、陣沒於飢肥業每辻字、法號商岳逸勇居士、一子甚左衛門尉重辰初稱美作、號昌繁、轉徙吉田福島地頭職、慶長四年、慈眼公誅伊集院幸侃於伏水邸、乃使重辰送其尸於幸侃邸、卒時不知年月、法號麟翁宗英居士、墳墓在興國寺、子四郎兵衛重賢初稱新、慶長四年、從軍莊內、十四年、以步卒將率兵士十五人、與諸將俱航海征琉球、十九年、以小監察率騎馬家臣九人是時重賢實衛、祿三百六十石、赴浪華、未至而和成、寬永中、為兵具奉行、九年、本藩兵賦籍云、重賢出部將二騎一則步從七八、一則騎從八人、衆中三人僕夫等、鳥銃一、弓一、槍二、某年月日卒、法號久翁源長居士、重賢嘗累遷川邊・馬關田・穆佐等地頭職、賜田祿二百石云、一子十左衛門重商、母勝目兵右衛門女、元和元年生、寬永十五年、赴島原、後為穆佐地頭職、寬文元年、十月十五日卒、年四十四、法號仁勝貴運居士、墳墓在穆佐悟性寺今伊地知十左衛門、即重商子孫也、

伊地知式部少輔重成、祖縫殿介重周見下、父筑前守某重周長子、為吉田假知城事一作吉田、地頭職、重成事、梅岳君、采食田布施高橋之地、天文十三年、

冬、梅岳君、大中公為盟書賜重成者二、長子式部大輔重隆娶大野口、

天正三年、十月廿日、重隆等慣習犬追物事、四年、從攻高原城、五

年、日州平定、以重隆為三納地頭職、六年、十月廿三日、三納按漢應麟、

百姓謀叛、攻陷三納城、重隆遂戰死、次子與兵衛尉重賴初曰民部大輔、

以兄重隆戰沒故、重賴續之後、續領高橋天正二年、覺兼日記、天正十三年、秋、

出軍三舟、十五年、從、貫明公朝於京師、後從、慈眼公軍朝鮮、慶

長三年、十一月十八日、戰沒於朝鮮海上、子與兵衛尉重昌、生死

不知其年月今伊地知筑右衛門、即重昌之裔也、

伊地知丹後守重政、父又七重英、祖淡路守重宗、曾祖出羽守某、高

祖淡路守重基、重基即太郎左衛門尉重豐第四子、重政智勇絕人、

天正中、選謀臣五十四人、重政其一人也、六年、十一月、大友宗麟

來侵我日州、勢甚強大、於是十日夜半、松齡公命重政、及酒瀨川

武安、富山備中、率三百人、伏於嶮、翌日、猝出擊殺敵五百餘人、

後命為門川地頭職按覺兼日記、天正十三年、有三城、一伊地知丹後者、今按、三城即前出羽守、九

年、率門川兵從軍水股、十四年、十二月、諸將進攻丹生島城、重政

先登、十五年、二月八日、與酒瀨川武安等、俱戰沒於豐後一作豐野、

津、子新三郎重次初稱康久女、母、永祿九年、十月廿六日、從軍三山、十

年、三月廿三日、與菱刈凶徒戰馬越城下永福寺按覺兼日記、天正十一年八月廿五日、天

正十四年、十一月、我軍破舟於利浦城、直道政丹生島城、城將桑田壽翁先奮戰、其鋒甚疾、是時重政與新三郎俱戰有功、則非按

瀨田氏記、丹後守伊地知松上、從入豐後、戰丹生島城、原坊、斬捕有功、據三說、則自永祿九年、至戰永福寺、則非按

重次事、蓋傳者誤、也、後從之朝鮮、慶長三年、十月初一日、泗川之捷、被紫綰

甲、斬捕頗多、十一月十八日、遇敵艦戰沒、無男、以鮫島與一左衛

門實貞子治部左衛門初稱新為之後、更曰八郎左衛門重張、因冒伊地知

氏、後改越後守、事、貫明、松齡、寬陽三公、見寵遇今伊地知八之裔、即重張子孫也、

伊地知雅樂介按覺兼日記、天正二年、存伊地知雅樂介、事、貫明公為使衆、天正十一年、十月、

島津忠長率兵在肥後八代、是時、公使雅樂介往使八代、而命忠長為

國老人或云、雅樂介即與新三郎重次同、或云、二人、未知孰是、

伊地知又十郎重近、號世休、新納忠元附鄉士也一作家臣、以鄉士稱其、慶長

十五年、十二月三日、忠元卒、重近自殺以殉焉、法號罷翁世休居

士、墳墓在忠元墓側大重近子孫、今在、

伊地知美作守重常初稱十郎、又稱、、民部少輔重辰長子、重辰即民部少輔重真

民部少輔、手之四世孫也、初重辰為帖佐新城地頭職、享祿二年、己丑、正

月廿二日、祁答院重武率兵來攻新城、事急、重辰使重常出避兵吉田

城、重常不聽、重辰怒逐之、於是重常不得已、乃與從兵五六人俱出

新城、潰重圍入吉田城、重辰遂戰沒、當、大中公之世、命重常為

伊集院地頭職、且賜市來邑皆田代地、及伊作邑陳園門之地方十二

町、後轉徙泊須木地頭職、某年月日卒、年六十七、法號光林澤公居

士按覺兼日記、天正十二年、九月、吉也、、子備後守重康初名重興、稱小、、號喜甫、母河上年

伊地知、重守從焉、重常也、、家女、少有才略、及長每從軍多功勞、而終身九被創云、嘗徙居市來

蒲生馬關田等地、永祿十二年、命為宮城地頭職、天正六年、遷平泉

地頭職、八年、五月十五日、與新納忠元俱攻陷寶河內城後、、十月、

築墳寺於平泉、曰勝軍院、九年、八月、率平泉兵、從軍水股、是歲

九月、又轉湯浦地頭職、十二年、三月、從軍島原、慶長十三年、

卒、法號安叟慶泰居士、子民部少輔重賢一作重賢、稱小次郎、、母本田氏、

永祿三年、生、天正四年、年十七、從攻高原城、執槍戰鬪有功、六

年、從父徙居平泉、八年、五月、與父俱攻寶河內城、伏兵於嶮、擊

殺敵數十人、重賢奮戰被重創、城遂陷、九年、水股之役、亦與父俱
伏兵、獲甲首、十年、冬、我軍往援田尻氏、重賢從焉、十二月四
日、與川上忠堅等俱攻千々岩城、重賢先登有功、十一年、五月、我
軍往援有馬氏、重賢又從焉、六月十三日、與新納忠堯等、俱進攻深
江城、重賢又伏兵獲甲首、被創、十二年、三月、島原之役、重賢創
未愈、從公子家口在中堅、敵兵急迫、重賢奮擊獲甲首、敵遂敗走、
後從擊筑紫、又從入豐後、文祿元年、從軍一唯世子朝鮮、賜田祿
一百五十石、二年、九月、世子薨於巨濟宮、十月、重賢等奉柩而
歸國、命為山野邑代官役、慶長二年、七月、復赴朝鮮、三年、十月
初一日、新寨之捷、重賢與衆俱擊破董一元軍、獲首數級、十一月十
八日、戰沒於南海瀨戶、年三十九、法號富山賢居士、墳墓在山野
滿德寺、子木工右衛門尉重政初稱小太郎、後、民部少輔、母阿多中務久宗女、天正十
四年、生、既長為兵具奉行、後為京師邸藏奉行、又為使役、賜秩祿
二百石、而別領田祿四百六十餘石、慶長五年、從軍莊內、二月十六
日、進攻山之口城、獲甲首、十九年、七月廿九日、遷山野地頭職、
寬永九年、本藩兵賦籍云、重政出部將一騎、衆中二人一僕等、鳥銃
一、弓一、槍一、士卒十二人、十年、六月廿二日、轉羽月地頭職、
益賜秩祿二百石、十三年、三月廿六日、又徙加久藤地頭職、十五
年、島原賊起、正月、以普請奉行、率加久藤兵士五十人、及家臣三
十餘人、至島原、二月廿八日、進攻島原城、執槍戰鬪獲賊首是時出水士賴
宿內藏助忠
易、伊尻三郎右衛門祐水等、
為重、政假文契以為照云、、加久藤土亦各斬捕有功、正保三年、十一月四日、
卒於東武、年六十一、法號嘉翁祐慶居士今伊地知小太郎季安、
即重政之子孫也、

伊地知彌右衛門尉重高、備後守重康第二子、慶長五年、戰沒於關
原、法號他參宗賢居士、無男、以兄重賢第二子小八郎重慶為嗣、

改曰彌右衛門尉重延、寬永十五年、赴島原之役、二月廿八日、斬賊
一人、明曆三年、卒重延子孫今居、
加久藤云、

伊地知越中守重隆、越中守重清之曾孫也、重清父曰筑前守重近重清、
重近、重近父曰兵庫助重元、重元即縫殿介季豐第三子、重隆事
貫明公、為山田地頭職、天正十四年、諸將攻岩屋城、重隆從留守八代
城、卒時不知年月、子刑部少輔重章、天正十五年、豐公大軍西
下、四月、先鋒羽柴秀長驅至日州、重章率兵援山田有信、入守高
城、六月、從 貫明公朝京師、卒時不知年月、

伊地知土佐守重通、父曰肥前守重脫、重脫之曾大父曰伊豫守某、某
父曰淡路守入道岳心伊豫守、即、
岳心次子、岳心即太郎左衛門尉重豐第四子、重通
嘗從新納忠元攻牛根城、有功、而賜姓前田氏所以某、移居串木野・牛
根・栗野・踊・飯野・倉岡・國分之地、後去國分居都於郡、又去來
居覺府、其後卒於小濱邑今前田某、即、
重通子孫也、

伊地知筑後守重則、號一寒、父曰左近將監某、左近曾祖曰備中守
某、備中即太郎左衛門重豐第三子、左近將監嘗黨新納氏戰死、是
時重則猶幼、家臣等相謀欲立孤、與俱携見 貫明公、乃召焉、以為
近侍、因賜小刀一口、長一尺三寸、賜稱左近將監、天正五年、命鎮日州
福島、十五年、公女持明君為質赴京師、是時重則為奧家老此云
奧家、文祿元年、十一月八日、命町田久倍、賞重則勞、賜市來院上養
母門田一町八段、後轉居出水及國分之地、某年四月十五日、卒、法
號朝山常宗居士、子左近將監重治、文祿三年、正月廿二日、戰死
於朝鮮國、法號一窗存勝居士、筑後守重房初稱、
十郎彌右衛門重高次子
也、慶長三年、生、五年、重高戰沒於關原、貫明公憐重房幼失

秀、如秀始下于薩、以軍功為肥前邨田莊地頭職、如秀生三郎經種、

經種生通吉、通吉始事 大岳公、通吉生肥前守經房子經、事 公為國

老、經房生肥前守經安、事 節山公為國老、明應四年、七月五日、

違 圓室公命、被誅、經安生肥前守經堯初稱右、經堯居莊內財部・及

帖佐、及父被誅、出奔肥後、賴菊池氏、當 大翁公之世、復還薩、

後戰沒於帖佐、經堯生越後守武秀初稱五郎、事 大翁公為國老、公及

將 公及將欲以 大中公為嗣子、命武秀・及柁原某土持某至伊作、

而告之於 梅岳君、而後讓國統焉、其後武秀戰沒於柁城、武秀生經

定、經定事 大中公為國老、采邑於郡山、天文廿二年、賜隅州吉田

地頭職、天正中、轉蒲生地頭職、六年、從軍耳川、九年、從軍水

股、經定妻島津治部少無男、以新納忠茂第二子為已後、是曰右衛門尉秀久

三年、十一月廿三日、先經定戰沒於馬越城、子右衛門尉經平、事

貫明公為國老、天正六年、十一月、從破大友氏於耳川、八年、五

月、從攻肥後寶河內城、十月、從攻矢崎城、十二月、戰花山白石

坂、斬捕多功、十二年、三月、島原之役、從斬敵一人、十四年、岩

屋之戰、從在八代城、是歲屬公子家口入豐後、十二月、進攻利滿

城、經平先衆大呼血戰、敵以槍刺斷其首鎧簾、而身無恙、其後橫死

於泉州境、子刑部少輔經、永初稱九郎、自曾大父經定、世々領郡山、後更

領麥兼曾字牟田・神食二邑、及細川幽齋至薩、經平有故獻神食之地於

官府郡山邑、後從 慈眼公于朝鮮、既反累遷田布施・穆佐地頭職、

後航海鎮守琉球八重山島經永子孫、即今、村田庄八是也、

村田雅樂介經宣、號壽僊一作壽、田代備後守清宣長子、出為邨田雅樂

介經威初稱右衛門、戰死於三山、經威大父白三河守經季、父曰、之嗣、冒邨田氏、經宣事 松

有故父子出居肥後凡十年云、

齡公、為末吉地頭職、天正六年、從戰耳川、十五年、從 貫明公朝

京師、子三郎右衛門經昌、續父為末吉地頭職、從軍朝鮮、慶長三

年、十月、新寨之戰、經昌被玄甲、格鬪為多、十一月、南海之戰、

經昌與其徒五百人、俱困於南海島、得援而從歸國、子與五郎經高、

生死不知年月今村田藩兵衛、即經高子孫也、

村田源左衛門經元、其先不知何許人、慶長三年、十一月十八日、經

元陳沒於朝鮮海上、法號即菴松溪上座、子藤左衛門經友、為 松齡

公御香番即今村田善太夫、即經友子孫也、

村田能登守某、天正六年、與北鄉久盛等、俱戰死於高城下、

村田飛彈守經武初稱鄉左、事 梅岳君有戰功、無男、以柳田惣右衛門子

為養子、是曰源左衛門經友、其子鄉左衛門經乘、初居國分邑、後移

居覺府今村田與三左衛門、即經乘之子孫也、

村田藤五郎某、從軍朝鮮、泗川之戰、被紫緞甲、

村田式部少輔某、小林人、天正中、 松齡公選謀臣五十四人、式部

其一人也、

野史氏曰、

西藩烈士干城錄卷之十八

西藩烈士干城錄卷之十九

本田薰親列傳第三十八

紀伊守本田薰親^{二初稱又、}其先

桓武帝四世孫高望王第五子邨岡五郎良文、良文六世孫信濃守恒文、

其子左衛門尉親幹、是曰本田信濃守、親幹生左近將監恒親、恒親生

信濃守親恒^{曰左衛門尉、}又、親恒從 得佛公始下薩^{或云、從、公下薩者、親、}親恒生左

衛門尉貞親、貞親生信濃守親保、親保生信濃守重親、為 齡岳公國

老、兼隅州守護代、而近衛基通公賜姓藤原^{或云、按備記、有、道義公國老、本田左衛門、}

其後戰沒於莊內葦原、無子、弟信濃守氏親嗣、氏親生因幡守親治、

當是之時、齡岳公攻陷姬木清水兩城、賜之氏親父子、因居清水

城、親治生信濃守忠親、為 怨翁公國老、無男、以第五弟又二郎重

恒為嗣、其後重恒任信濃守、為 義天公國老、執權驕奢、潛畜異

志、大岳公因以法誅之、以其姪國親^{忠親次子、即五、}嗣其家、亦任信濃守、

而為國老、戰沒於帖佐駒埴、國親生因幡守兼親、為 圓室公國老、

兼親生參河守親安、親安生薰親、薰親傳食清水·早人^{今稱分新、}·姬木為

會於郡地頭職、而漸并有大窪·河北·宇須崎·持松·橫瀨·餅田

^{餅田在、}等數邑、勢強暴、劫略近邑、於是

應神宮^{宮在廣、}座主等與邑民相謀、築壇號

應神宮祭場、為防薰親故也、大永六年、五月廿日、北鄉忠相遣兵攻

陷會於郡城、十一月七日、大翁公至伊作城、而任 梅岳君、與聞

國政、而俱歸覺府、是時阿多加賀^{梅倍、}執 大翁公佩刀而從焉、薰親

內、擊破壇場、毀壞神祠、奪取材木、燒

應神宮、其後遣兵保衛覺府東福寺城、大翁公賞其功、賜向島云、

享祿二年、十一月廿八日、薰親與北鄉忠相戰於春山原、不利、亡五

十餘人、三年、薰親與祁答院氏合、攻會於郡城而復之、忠相乃急來

復攻西之城、薰親擊破之、天文四年、十月、大翁公出居帖佐、自

是三州大亂、親戚側目、姦兒窺隙、是時薰親每奉使 梅岳君、陽彰

忠貞之意、君曰、彼多貪、求欲無厭、彼不足與也^{在武、}六年、二月

十一日、薰親遣東條出羽、侵暴覺府、破壞神祠佛閣、奪其寶器而

還、十一年、薰親與同盟者、數來攻樺山善久于生別府城、城孤勢日

危、於是善久獻城 大中公而退去、公即賜之薰親曰、汝宜盡忠於

國家、無敢有二心、是乃 公之深慮秘計、世莫得而知之也、自是薰

親之一族徒黨疑通其志於 梅岳君 大中公、而離隔者多云、至是時

近衛植家公亦賜書於薰親曰、清水·早人·姬木三邑、則子所固有、

今又增封日當山·曾於郡·牛根·咲隈·小濱以下數邑、於是薰親勢

日益強大、十五年、大中公始加元服 貫明公於伊集院、而命薰親

掌結髮儀、十七年、薰親驕奢日甚、親戚老臣多諫之、薰親皆不聽、

正月十七日、無故殺伊地知又八郎、二月十日、又殺本田又九郎·及

家人十餘人、於是叔父本田親貞·及本田治部左衛門等直言諫薰親、

而反欲殺之、廿五日、親貞及家臣等懼其死而遁去、三月十一日、從

弟本田親知^{子親、}以姬木城叛、通志上井城主上井氏、薰親大怒、十三

日、率兵攻姬木城、不克、近境候其變、皆一時蜂起、廿四日、放火

小林·及上井濱市、是時

應神宮座主栗幡留守等遣三角道賀使伊集院城、請其率兵來警衛

應神宮、於是廿六日、公遣伊集院忠朗先往救之、廿七日、忠朗至

宮內、陽稱救薰親、而襲取笑隈城^{薰親部下、}時樺山善久亦承命引兵來

會、乃相謀急攻陷生別府城、則廻·上井·敷根·諸城皆不戰而降、

於是乃命復賜善久生別府、五月廿四日、我軍進陷早人城、命善久守

之、八月晦日、我軍進陷日當山、而擊殺、賊徒北原氏援兵百餘人、

九月五日、本田親知傳島田民部及其族本田式部等、請降忠朗、乃謀

入兵姬木城、逐北原氏所置戍兵於城外、翌日我軍進入清水、當是之

時、梅岳君來謁

應神廟、乃與北鄉忠相議事在忠相、召薰親親兼焉、而賜之清水邑方七十

五町、非德賞也也左氏。○或曰、薰親無信、無信則情離、攝未歇也、必叛亡而後能終、、居頃之薰親復

與祁答院・北原・加治木賊以清水城叛、於是十月四日、梅岳君

大中公自將兵來討清水城、薰親父子不能防、九日、捐城而奔都城北

罪、殊召而賜川内天辰邑、且為山田地頭職、十二月六日、獻酒魚於

公而拜其辱或云、薰親反無賞、然亦所謂中爭、備中收奪者耳、天正二年八月廿日、入來院氏獻天

玉者記功忘過、而厥叛以理、德宗於懷先、以其解奉天之圍、時赦一子、使之取鄉其屍、至於奇烈之逆勢已窮蹙、亦開其自新之路、未幾、准其自平、綱目書之以理、蓋其忠厚存心、以慰存人之意也、又曰、盧謂曰、此賊大羊相聚、以求溫飽耳、不足憂也、但兵不厭穢、願寬假養策、勿令有所拘圍、而已、二公之於薰、父子遠來服也、

其嗣立也、是時薰親為射者班、十七日、又有犬追物事、薰親射犬

七、廿五日、又有犬追物事、薰親復射犬七、四月、琉球人來朝、廿

一日、有享禮、又行犬追物事、薰親復為射者班、四年、四月九日、

又有犬追物事、薰親復為射者班、射犬二、十二日、又有犬追物事、

薰親復射犬三、六年、從耳川、十二年、九月、從軍肥後、十四年、

七月、從在八代城、卒時不知年月、一子大炊大夫親兼初名重親、

年、從赴耳川、十一年、十月、出守八代城、十五年、從公朝京

師、而任從四位下左京大夫、卒時不知年月、法號玄齋、一子與左衛

門尉公親初稱又二郎、號玄叱、貫明公在富隈城時、命公親為國老、兼

曾於郡地頭職、元和四年、卒、子作左衛門尉元親初名清親、稱又一郎、又、

伊集院幸侃女、累遷曾於郡敷敷地頭職今本由作左衛門、即元親之子孫也、

本田刑部少輔親知初稱又、因幡守親貞號一憲、參河守親安、之長子也、屬宗子薰親

守姬木城、天文十七年、春、薰親驕奢暴逆、多殺無罪、親貞及家臣

等直諫、不聽、於是二月廿五日、親貞恐死遂遁去、親知怨入骨髓、

至三月十一日、則乃據姬木城、而通謀上井城主、薰親怒攻城、堅不

拔、是時親知傳島田民部及本田式部等相謀、賴伊集院忠朗而降、親

知卒時不知年月、一子因幡守親治、為使役、天正三年、三月十五

日、命親治等習勒犬追物之事、十七日、復習勒犬追物之事、是日射

犬一、四年、八月、從征高原賊、廿一日、城中乞降、而更出質、是

時遣親治及德持舍人助質之城中、後歸家、六年、十一月、戰沒於新

納院高城、一子三河守正親初稱六左衛門、又稱、從父戰鬪被重創、十年、賜正

親肥後湯浦之地方十町、十一年、九月、出戌八代城、十二年、九

月、以典書記復成八代城、十三年、閏八月、出軍三舟、十四年、七

月、從軍筑紫岩屋、十六年、復以典書記從、貫明公朝京師、慶長四

年、慈眼公自伏水歸國、路經浪華、使正親使浪華城、秀賴喜焉、

因贈公馬一匹、後為使衆、又為國老、至慈眼公之世、猶服政、

累遷出水加世田地頭職、卒時失年月日、一子助左衛門尉親光一作親、從

朝鮮之役、慶長三年、十月、明大軍來攻新寨、親光被紅白雜縮甲、

執二十五錢鉛子鳥銃、多打殺敵、及敵軍潰奔、親光揮刀入敵中、所

殺傷數十人、身亦被創而退還、後從班師、賞賜田祿若干石、其後為

加世田地頭職今本由六右衛門、即親光之子孫也、

本田三郎五郎、因幡守親治弟、天正六年、與親治俱赴耳川、親治戰

沒於高城城麓、是時三郎五郎深入被重創、

本田伊賀守親正一作親政、初稱與兵、祖曰因幡守親貞再見、父曰信濃守盛親親貞初

稱民部左衛門、別號一葉、為粘地、親正從赴朝鮮之役、慶長三年、十月朔日、新寨

之捷、親正披黑赤雜縮甲、與諸將開壁出擊、時慈眼公策馬疾馳、

親正及鎌田次右衛門・木脇三右衛門・止之、捉鞍而徐行、上前

邱、則有敵於前、皆赤蓋紅旗丹甲、望之如火、猝自背後敗走、語在

寺山久兼事中、我軍爭乘之、於是三人乃縱鞍、公直馳親多斬敵、十一月、從而歸國、四年、從莊內、五年、從關原、而為大垣曾根先鋒、時我士野村彌次郎・河內源五・與敵戰危甚、親正奮勇衝敵、援二人、俱退還、公賞賜親正藤島腰刀、七年、慈眼公朝京師、八年、至自京師、使親正往拜歸國之辱、後為百次地頭職、十四年、率兵子十五人、與諸將俱征琉球國、是役也、諸將士或有為不潔之行者、獨親正與市來八左衛門、始終無纖介私行、及還國老聞焉、與書嘆賞之云、十六年、四月廿二日、使親正徙為甌島當明府（頭註）選親正三字一作選能治者以親正也、初小川氏者、世々領甌島、文祿中、小川有季、有故更賜田布施高橋之地、除甌島、因移居焉、自是島無主宰者數年、雖其偏小辟遠、而舟楫往來便宜、以故他邦商舶多來此、而官聞或有奉天主教而潛匿此者、天主教天下之大禁也、於是選親正為當明府、移居焉、親正性行端潔精緻、邪教者遂遁去、是則甌島置當明府之始也云、寬永三年、高奉行系譜云、本田親正領田祿五百四十五石、十六年、七月廿日、卒、法號德室龍陰居士、墳墓在南林寺（今本田與兵衛、即親正子孫也）、

本田下野守親尚、父曰古籬（法號越山本）、不知其何許人、親尚事梅岳君為伊集院地頭職、數從軍有功、天文八年、從大中公于市來之役、親尚二男、長民部少輔、次下野守親貞（右稱彌六、又、初稱彌六、又、右衛門佐）、民部少輔及子志摩介、皆頑愚不能服家政、因以親貞續已後、廿三年、九月、親貞以太刀役（詳末）、從貫明公攻岩劍城、天正三年、以公嗣立故、有犬追物事、親貞復為太刀役、後為使衆、兼薩州吉田地頭職、初親貞采邑吉野及礪、而居礪山下村、是時親貞各藏一鏡（俗云鏡正於吉野神祠、吉、從宮、童子、係神、山王、也、俗此云七社、也）、及礪白山權現祠・三社大明神祠、至今鏡猶存云、八年、命為國老、十四年、諸將攻岩屋城、親貞從留成八代城、十月、屬中

書公子、入豐後三重、進攻陷緒方城、十二月、公子大破京軍於利滿城下、親貞從有功、十五年、四月、從軍目白坂、五月六日、從公俱薙髮於伊集院邑雪憲院、號三省、直從謁豐公於太平寺、豐公賜朱印牒反秩一萬石、親貞辭曰、主人有田、分割而食之、衣食自有餘饒、不受、既而親貞夫婦從公女龜壽君、往質京師、是時公賜親貞當麻佩刀、後歸國、為加世田地頭職、居竹田村、鎮西方八外城、慶長元年、丙申、五月廿三日、卒、法號本立三省庵主、墳墓在本立院（在竹田）、初親貞無男、以同宗右衛門（兼次子）、為養子、是日內藏允親孝、天正十五年、豐公兵西下、是時親孝入守高城、及事平、與山田有榮俱為質子、居桑山修理亮營、其後從親貞、俱居竹田村、後從朝鮮之役、某年月日卒、子伊豫守親正（初稱彌六、一作政）、松齡公親加元服、及長授大坪流馬術於親正、其後累轉會木福山地頭職、天正十年、十二月、出守八代城、至翌年正月、猶在焉、十五年、從父入守高城、慶長十四年、以使衆將戰士廿七人、從諸將討流求、十五年、十一月、官習勒犬追物事、親正為射者班、射犬二匹、十九年、復將廿七人赴大坂、未至而和平成、六左衛門親武（初名親貞、號修仙）、親正第三子、有二兄、長十郎親宣、次大學親秀（有一女）、皆早卒、親武續父後、曾命加元服於公前、後為用人、兼福山地頭職、某年官慣習犬追物事、親武為射者班（今本田久米右衛門、即親武子孫也）、

本田若狹親豐、兵部少輔親賢（因補守兼親第三子）、之適子也、為使役、天正三年、上言曰、昔者臣子為國家戰死於三山、今臣老孫幼、無衣食以畜妻孥、伏願賜小田地、以免飢寒之苦、命賜田二頃云（詳前）、本田治部少輔、蓋親豐之子也、永祿九年、十月廿六日、戰沒於三山、

本田源右衛門親商、父曰藏人親尚^{兵部少輔親賢第二子}、母山田淡路久綱女、及

長為使役、後 松齡公舉為家老、兼蒲生地頭職、天正十四年、七

月、從軍岩屋、而在八代城、後從朝鮮之役、既而歸國、慶長元年、

親商與鹿島右衛門、俱護送近衛信輔公歸京師、後復至朝鮮、三年、

十月、泗川之戰、被雜緞甲、十一月、從班軍、舩至博多、直從如伏

水、從軍關原、公失軍、跳身逃去、親商謂 公曰、若有急、請誑

寇為 公、乃剃髮^{初剃髮號、蓋欲臨危代、公而人不疑也}、以從焉、遂得俱全而歸國、賞

賜褒牒及田祿百石、十年、四月廿日、卒於柁城、法號良山道久居

士、葬大株寺、後改葬本誓寺、神田藤兵衛殉死焉、子源右衛門親存

^{初稱小藤五、又曰伊豆}、母本野瀬豐後秀富女、與父俱從朝鮮之役、又從軍關原、賜

褒牒及田祿五十石、後為使役、兼蒲生地頭職、寬永六年、十二月、

廿五日、卒、法號觀雲淨密居士、墳墓在本誓寺^{親存孫今、在柁城云、}

本田與五郎、陣沒於三山、

本田治部少輔某、天正十年、十二月、命自八代城使熊本城、至九日

還報、十五年、從 貫明公朝京師、

本田丹波守親純^{初稱長}、大宗子信濃守重恒之子、民部親次^{初稱二}之子孫

也、初重恒以功為清水城主、當此時、姪二郎太郎國親譜重恒 大岳

公、於是没入清水城、而竄於曾於郡、遂為國親所殺、當國親曾孫黨

親之世、父子謀叛而奔莊內、於是官命親純復為本田氏大宗子^{與黨親傳不、合、可考}

親純生與四郎親贊、戰沒於牛根、無男、以同宗親治次子續之後、是

日伴兵衛家親、為兵具奉行、兼川邊地頭職、文祿元年、從 一唯世

子赴朝鮮、一日世子與敵相搏、敵伏 世子、危甚、時家親馳至焉、

而擊殺敵、因賞賜甲冑一領、後官命家親、讓大宗子於黨親孫與左衛

門公親云、子半兵衛親紀^{初名親望、稱勝、又集人}、貫明公親加元服、後學刀術於

東鄉重位、從軍朝鮮・莊內・關原、後轉徙兵具奉行・普請奉行、寬

永十四年、親紀從諸將、往討島原賊、萬治三年、十月三日、卒、年

七十九、法號天隻榮堯庵主、墳墓在南林寺^{今本田半兵衛、即親紀子孫也}、

本田彈正忠親歲^{初稱彌次郎、又百山城守}、號嘉辰齋、信濃守重恒第二子、永正四年、

生、為人能書、事 大中公為使衆、轉徙伊集院・及湯之尾地頭職、

而采邑於馬越下手村、因居焉、天正七年、十月廿九日、卒、法號福

壽院滿室田公居士、初親歲有子治部者、為人不肖、貫明公命逐

之、乃乞脇元權之介清常^{初稱清平、豐前清平字、}以為養子、是日助之丞親貞^{永祿、後}

更名元親、為唐舩奉行、從軍數有功^{覺書日記曰、天正十年十二月、關原之敗、}

元親等相失公之處、乃與新納旅庵潛匿鞍馬山中、東將山口直友索執

之、問以 公與三成之故、二人具言狀曰、寡君初請鳥居內藤二

將^{願生、將欲傳}、將欲俱入守伏水城、二將不肯入、時微聞三成等之言曰、如此則

先斃 寡君、寡君以故不得已、姑與彼等之脇從、是計窮事危、圖

除死、寡君非敢背 幕府而取敗也、直友言之 幕府、乃宥元

親歸薩、而赦 公罪、遂無所問、公乃賞賜褒牒及田祿二百石、慶

長十三年、九月廿九日、卒、法號忠心院明巖清圓居士、墳墓在帖佐

總禪寺、子勝吉親明、天正十一年、生、關原之敗、與父俱為山口直

友所虜、及元親歸國、親明留質直友所、後三年而歸國、慶長十年、

十二月十一日、先父卒、年二十三、法號清涼軒月窗昌心上座、墳墓

在天福寺、弟助之丞親正^{初稱勝、次初稱勝}、天正十三年、生、以兄早卒故、續父

後、子助之丞親長^{初稱勝、八、初稱勝}、慶長六年、生、及長徒居覺府^{今本田助之丞、即親長子孫也}、

本田出雲親貞^{初稱長助、又、次初稱左衛門}、其先本田次郎左衛門久兼^{次初稱貞親、今本田助之丞、之長庶子、即親長子孫也}、久兼之孫二

郎左衛門尉兼久、兼久第二子親信、親信之孫上野介親辰、親辰第四子大和某、其子孫伊賀某親變號、道伯、其子親貞也、從軍朝鮮、又從軍莊內、戰沒於安永城慶長四年、十月八日、、年五十七、法號節岩道忠菴主、墳墓在南林寺、子神右衛門親盛初稱盛三郎、又兵助、與父俱戰沒於安永、年二十二、法號昌眼全久居士、墓在南林寺今本田是右衛門、即親貞子孫也、

本田甲斐親良初名親智、稱新、又與五郎、岩切善信第二子、出為本田出羽親綱養子、

冒本田氏、親綱曾大父曰親信見于、大父曰周防兼恒、父曰彌次郎某

兼恒次、子、彌次郎嘗出為高崎氏養子、生親綱、及親綱續家、有故出高崎

氏、復本田氏、初親綱在高崎氏之日、有子木工之丞親盛者、出為本

田帶刀義子、嗣其後、至是親綱以親良續已後云、永祿十二年、九月

十日、大口賊降我、則大中公命親良及鎌田刑部實城中、天正十六

年、親良從 貫明公朝京師、後從朝鮮、其後為泊地頭職、當 慈眼

公之世、置相談役六人、親良其一人也、後為大坂藏番、又為高奉行

自元和五年、至寬永十年、寬永十四年、親良領四員十七石、、寬永十四年、十月廿日、卒、法號源溪宗本居

士、墳墓在南林寺、無男、以毛利肥前適子為養子、是曰新介親平後與

五郎、又更、右衛門、從朝鮮、泗川之戰被紺縞雜縮甲、既反為吟味役、及京師藏

奉行、又為假使衆、累遷羽月財部綾地頭職、寬永十三年、慈眼公

有病、十一月三日、命親平及本田親正等十二人、射鏑流馬、以禱神

焉、數日而病愈、(頭注)至今每年以下三十一字、一作今每年十一月三日、行鏑流馬之、至今每年十一月三日、祭稻荷神祠、而有射鏑流馬

之儀、(頭注)「自親以下八字、作自此始也」、蓋自親平禱 公病始也、及王子原有犬追物之事、親平為射者

儀於稻荷神祠前、是也、班、今本田新助、即、親平之裔也、

本田西市正某、天正中、為川內宮里地頭職、

本田信濃某、天正二年、閏十一月十七日、貫明公命信濃調馬、謂

左右曰、善哉、彼騎馬也覺家日記、○不知其有何官、且其善騎馬之由也、三年、以公嗣立之故、有犬追物事、信濃為喚次役、子民部左衛門忠親、為使役覺家日記曰、天正二年、閏十一月十九日、命曰、忠親有病、不能任事、因、從居山田、

本田吉藏親純、從幼近侍 松齡公、年十六、從關原、軍敗、從而還

國、賜褒牌及田祿五十石其後從論議、又在左京、寬永十四年、從三原重庸于島原

之役覺家日記云、至今子孫在伊、

本田四郎左衛門某、天正十五年、豐公大軍西下、既而班軍、六月、

及九尾之險城在宮、是時四郎以新納忠元之命、伏放六矢、誤中副興、大

索弗獲疑是傳記之誤、俟再考、文祿元年、戰死於瀧水、法號實際文真上座、

本田次郎五郎某、與四郎左衛門俱戰死於瀧水、法號月窗幸心上座、

本田九郎某、剃髮號笑閑、事 梅岳君、常從軍有功、大永七年、笑

閑從 君至帖佐、城宰島津政雅出見之、笑閑直入擊殺政雅及從者二

人、蓋 君命也、而不知其所以、左右擾亂、君則與笑閑俱脫身出

去野史氏曰、笑閑從 君性殊雅、則其事異於前朝焉、、永祿九年、七月二日、賜伊作入來村

之內原園・及田方二町、子九郎某、天文七年、十二月廿九日、戰沒

於加世田、子掃部兵衛親廣、天正六年、從軍耳川、又從豐後及朝

鮮、慶長四年、慈眼公誅叛臣幸侃於伏水邸、是時命親廣及曾木甚

右衛門、夙夜近侍左右、先是親廣臨戰被面創、至是眼痛幾失明、五

年、始置高岡外城、以比志島國貞為地頭職、因命親廣為組頭役、徙

居焉至今子孫在、高岡邑云、

本田周栗、從軍朝鮮、泗川之捷、被阜甲云、周栗為人文雅、按南浦

文集、本田周栗投子以和漢聯句、其意在求予批評、而非予所及云、

本田淡路親存、慶長五年、命移居高岡城、以為地頭相談役、

本田彌四郎、慶長十四年、率兵士十人、屬諸將征琉球國、

本田吉右衛門親良、命移居高岡邑、

本田掃部、金吾公子之家臣也、

本田民部、天正三年、從于平床、以嫌疑之事削所食之地方一町云
見兼日記、

本田丹波親康、事梅岳君 大中公、戰沒於某役、生三男一女名橋親、又少納言、

次郎久親後稱城之介、、長男與次郎、次男與五郎、與父俱戰沒、三男又

後、而為近侍、因賜宅地一區於本御內城中居焉、後命屬公子家口、

且賜十文字章旗至今藏之子、其後從家口移居佐土原城、官命賜田祿一千

三百石、以為其家老、兼都於郡地頭職、其後從豐久于朝鮮之役、居

數月、松齡公命奉使於名護屋、謁豐公、豐公賜久親眉尖刀陶盃石

器其後與敵戰、所賜眉尖刀失之海、其餘二物藏之子孫家云、而還報、遂病卒於朝鮮、子七郎兵衛久盛、續

父為豐久家老、貫明公會賜腰刀一口忠光所作、長二尺六寸、冠全藏之子孫家云、子丹波親昌、

慶長五年、豐久陣亡於關原、以故幕府没入佐土原城、是時貫

明公使榊山忠助於佐土原曰、故豐久部下士皆去佐土原來慶府、於是

親昌及相良善兵衛等去佐土原來居焉、親昌與島津忠直有姻、因命為

之與力屬部下而參謀者、而賜秩、因之菱刈本城居焉、後官易本城以永吉、

復從徙焉、其後以中書忠榮早卒無後故、親戚家臣為之上言請其嗣、

會慈眼公朝於江都、以故國老議遣親昌白之公、則召見而賜親所

飲酒和俗有以建所自飲云、此云御蓋頂戴、及麻衣、而以越後守忠紀為忠榮後與忠德下、因復召

見親昌、則命獻酒肴於公、公亦賜白銀及波平小刀其後為大前、忠紀亦

賜衣裳、後親昌抵役於京師、時慈眼公賜所詠和歌子孫家云、其後慈

眼公枉駕於永吉、因親臨親昌家、則命獻食、是時改丹波稱善右衛門、

本田掃部介、子外記介、母愛甲廉宗姊、及廉宗殉死、掃部介既死、

外記介猶幼、與母俱寄食於愛甲氏云、

野史氏曰、昔者季札如晉、將宿於戚、聞鐘聲焉、曰、異哉、吾聞之

也、辨而不德、必加於戮、夫子獲罪於君、以在此、猶燕之巢于幕

上、懼猶未也、又何樂焉、文字聞之、終身不聽琴瑟、孔子曰、季子

能以義正人、文字能克已服義、可謂善改焉石家、今薰親不聽叔父之

諫、而何以其力跌邪、如非二公之寬仁、予懼先人之絕嗣也、頭注一先人、作親安、予懼以下八字、一作于安知薰親更生之原也、

西藩烈士干城錄卷之十九

西藩烈士干城錄卷之二十

肝付兼道列傳第三十九

肝付左馬兼道郎一作兼亮、又兼盛、初稱二郎四、說初名兼成、稱與市、又九郎二郎、

天智帝之後裔也、

帝生大友皇子、賜姓伴、皇子之九世孫伴極大監兼行、始下薩州覺島

郡、而築神食四十町御此云伴極、兼行生無官大夫行貞、行貞生檢非違使右

兵衛佐兼貞、長元九年、始封隅州肝付郡、因氏焉、兼貞生太郎兼

俊、兼俊生兼經兼經之世、得備公、兼經生兼益、兼益生兼員、兼員生又太

郎兼右、兼右生彌太郎兼藤、兼藤生五郎左衛門尉兼尚、兼尚有一

女、無男、弟三股八郎兼重撰家政兼重與我不和、致、而妻子秋兼以兼尚女、

秋兼遂為兼尚嗣、秋兼生兼氏、兼氏生河內守兼元、兼元生河內守兼忠、兼忠生周防守兼連、兼連生河內守兼久、兼久與新納忠武合而畔我、屢寇 圓室公、兼久生河內守兼續初稱三、剃髮號省鈞、省鈞并吞百引・平房・大崎・安樂・蓬原・恒吉・牛根・市成・松山・志布志等地、以叛我、

按舊記、省鈞傳食肝付郡內之浦、高、山、給良、申良、百引、大給良、、居高山城、娶 梅岳君長女、而以其妹為 大中公夫人、先薨、天文元年、十二月廿二日、省鈞攻取西股城、八年、六月、大中公自將征市來、是時省鈞率兵來會、十一年、二月、擊取平房、十三年、四月八日、取安樂島津忠廣、、十月廿一日、取大崎領所、、是歲又取市成城鐵守山田口時戰死、子久武捨城而遷去、、

大中公命領之、十五年、二月二日、攻取大始良、七月十三日、圍蓬原城、城主救仁鄉藏人賴世降、十七年、正月、北鄉忠相攻取恒吉城省鈞所、、是歲本田薰親以牛根城與之省鈞、廿二年、省鈞兵與甌

三郎五郎武清高津忠親、戰大崎龍澤、廿三年、八月十八日、藥丸彈正將、與大野駿河戰大崎戰島、是歲 大中公自將軍帖佐、而討渋谷

蒲生賊、省鈞率兵來援、弘治元年、三月十九日、省鈞與北鄉時久戰於恒吉、二年、與島津忠親大戰大崎、部下死者三百餘人、永祿

元年、三月十九日、與北鄉時久戰恒吉宮原、殺時久兵二百餘人、及日置久範島津忠親、等、六月六日、藥丸伊豆省鈞部下、與甌武清戰志布志西

谷或云、弘治二年、六月二日、未知孰是、、十月廿三日、省鈞引兵侵志布志、忠親迎戰退之、

十二月廿日、伊集院參河省鈞部、復侵志布志、與甌武清戰向河原、二年、四月十四日、省鈞殺平山忠智忠親文、於志布志、進拔松山城忠親所、、

三年、三月、與伊東義祐合兵侵日州福島、是時始有畔我之意、四年、省鈞來朝慶府、恭饗 公於客舍、而有不協事、急還肝付、自此不復朝焉、是歲 梅岳君適肝付、而反覆說順逆之意、以開其自

新之路、省鈞遂不聽、君言於左右曰、彼專侈、將自斃矣、公聽焉、亦謂諸將曰、孤須彼罪惡孰著而討之、五月十四日、省鈞襲取廻城、而使其族治部右衛門守之、是寇我之始也、六月、公自將兵圍廻城、省鈞與桐寢氏合兵入城堅守、七月十三日、省鈞襲我竹原山營、殺右馬頭忠將、我軍奮戰多死、賊兵亦退恒吉、五年、二月十八日、省鈞與伊東義祐復戰肥城、島津忠親力屈、棄與志布志於省鈞、南鄉在、於義祐、而退福島、七年、七月十八日、省鈞來侵福島、忠親戰桂原、九年、十一月十五日、省鈞死於志布志、年五十六、墳墓在大慈寺門前、

永祿九年、丙寅、十一月、卒、長子左馬頭良兼、母 梅岳君女、續父領廻・松山・救仁院・安樂・福島等地、而亦叛我、卒時不知年月、

按記、永祿十一年、春、良兼與義祐謀、挾擊飢肥福島、六月八日、忠親去飢肥、遁福島、良兼追圍福島、七月十三日、忠親力竭、遁去都城、良兼逐領福島、元龜三年、正月六日、良兼兵二百餘人陣沒於末吉原、十九日、良兼遣兵舟行侵隅州小邨海濱、其族岸良將監以下二十餘人陣沒、二月、其族肝付越前等為甌府兵所殺於廻市成之境、五月、甌府兵擊破二川邑良兼所、、天正元年、正月六日、良兼與北鄉時久戰於末吉住吉原敗績、同族家臣戰死者數百人、今歲春、稱寢重長畔良兼而降我、三月十八日、重長與甌府兵俱攻西股城、良兼迎戰不利、其後良兼襲根占、與重長兵戰橫尾、不利、戰死者五十餘人、二年、我兵圍安樂備前長兼部、於牛根城、正月六日、良兼遣兵踰高隈山、救牛根城、不利遁還、廿二日、備前下城而遁去、其後我兵軍早崎、七月廿三日、良兼發兵夜襲早崎營、不克而退、又與伊地知重興合兵入根占、放火於邨市、與甌府

兵及重長兵戰，失利被殺一百餘人，其後良兼病死，「肝付修理亮兼定、良兼次弟、天正元年、正月六日、戰沒於住吉原，」肝付三郎五郎兼則兼兼、「肝付左兵衛・肝付三河入道竹友・二人俱戰沒於住吉原、至今竹友墓猶存焉，」肝付伊勢兼清、天文中、省鈞命為始良城宰，「肝付加賀兼吉加賀人為道文少孫也、應仁間、為安附付氏代官而多勳勞、天文間、為恒吉城宰，」肝付治部左衛門兼名、兼吉弟也、省鈞叛我之日、兼名勸省鈞襲廻城、省鈞喜、因賞佩刀、兼名乃引兵三百餘人、乘夜襲取廻城、命為邑宰、入守城，「肝付武藏兼堅、弘治二年、為鹿屋城宰，」肝付越前、元龜三年、陣沒於市成境，「藥丸出雲兼將、號孤雲齋、為省鈞家老、子彈正兼持、為內之浦城宰，」檢見崎常陸兼泰、元龜間、為串良城宰，「伊集院三河、號竹圃、為大崎城宰、天正元年、正月六日、戰死於住吉原，」安樂備前、為牛根城宰，「渡邊隱岐、為松山城宰，」岸良藏人兼直、永祿中、為大始良城宰，「安樂刑部兼口、永祿中、為市成城宰，」岸良將監、元龜三年、正月十九日、戰沒於小郡，「川越丹後家實、永祿中、為高隈城宰、元龜中、為百引城宰，」竹田山城、號笑我覺兼日記云、天正三年十二月廿七日、肝付氏使者竹田、「鹿屋周防兼豐、領鹿屋城、弘治二年、八月十七日、與北鄉氏兵戰於國合原、與子采女兼住俱陣沒，」町田左近將監、叛省鈞、陰欲奪廻城、而降麿府、事露顯、遂自殺、省鈞大怒、殺其母及妻子被覺兼日記曰、左、母、覺兼外家伯母也，「安樂下總、事省鈞、兼道省鈞第三子、初良兼娶伊東義祐女、有一女、無男、以妻兼道、遂為已後、及天正二年、兼道父兄既死、其黨伊地知氏禰寢氏皆降我、兼道計其難為孤立、盡獻肝付郡及其侵地、而降我、則赦其罪、四年、八月、兼道將兵三百餘人從于高原之役、無功、十月初一日、兼道命新納忠氏等忠氏弟野介忠盈、及黨友兼兼、肝付兵部等也、忠氏稱安藝、號永君、始以恒吉城主國新納忠氏、後叛國本田氏、又叛屬省鈞、或云、有新納下野號永保者、屬省鈞為志布志城宰、蓋與忠氏

也同人、率兵與伊東氏兵戰於南鄉肥後、敗績、忠氏及弟忠盈等皆陣沒、餘兵退保福島城、伊東氏進軍於十三浦、數遣使曰、開壁速不去、闔軍屠之、當是時我將鎌田政近在大崎城、聞之、則將兵來救福島城、島津以久亦將三百餘兵來救、伊東氏遂敗績、既而命兼道轉食邑於阿多之地方十二町、没入肝付郡及志布志福島等之地、後行成肥後某城、先是其妻以宗室之女故、驕矜不屈下、於是室家不齊、及兼道于役之日、妻在家益凶狠、兼道自白之官、於是官没入阿多邑、且遣妻及母俱送歸之伊東氏說云、兼道既沒於肥後、其妻不給單費衣食、以故去妻歸官、事顯則於官、及兼道還國、公告兼道異小、其後兼道從、松齡公關原、軍敗陣沒焉、子伴十郎兼幸、母稅所助十郎女兼道妻、及父陣沒、官賜兼幸秩一百石、後從于、慈眼公率琉球人赴江都、溺死於豐後愛之島、時年十九、無男、以新納慶雲衛門四郎左、稱甚右衛門今肝付八郎右衛門、長子為養子、冒肝付氏、名兼康、稱甚右衛門

肝付越前守兼演初稱三郎、剃髮號以安、父曰越前守兼固、兼固父曰越前守兼光、兼光乃河內守兼忠明見子第三子玉大輪城、文明十八年、兼固去大崎移隅州溝邊、因領其地，「兼演事、大翁公為國老、大永六年、公讓位於、大中公、是時以兼演任越前守、梅岳君任相模守、樺山信久任安藝守、七年、四月、梅岳君與兼演邊川在輪中之渺城在陀、是歲兼演攻陷陀城說字錄云、正月廿三、陀城未知何處、天文三年、兼演去溝邊移陀城、六年、黨島津實久以叛我、十一年、梅岳君、大中公自將至生別府、進討陀城、是時北原兼孝來援我、兼孝敗績、我軍亦引還、十八年、五月廿九日、伊集院忠朗・及北鄉忠相・樺山善久・往討陀城、軍黑河崎瀧是時東鄉氏、率兵援兼演云、、十一月廿四日、忠朗子忠倉放火矢於賊營、賊人馬衆死、兼演力窮、十二月朔日、賴北鄉忠相乞降、越十一日、兼演父子來清水城謁、公、公意固在招納、遂原其罪、十九年、四月、賜

兼演書、安堵柁城邑、廿一年、七月四日、卒、年五十五、法號存庭兼祐居士、一子彈正忠兼盛初稱兼盛壽丸、又三郎五郎、母廻兵部少輔女、天文二年、

生、廿三年、蒲生賊復謀反、是時兼盛上誓詞、白無叛意、八月、祁答院・入來院・蒲生・北原諸賊合兵來攻柁城、廿九日、兼盛戰網懸橋、九月十日、兼盛復與賊戰、十三日、大中公將兵軍平松、是日

大隅救兵亦至、賊兵驚而遁去、弘治元年、三月八日、兼盛率兵進至山田佐帖、殺賊兵若干人佐帖部將德永興、安田木工丞、及後卒、二人、長濱浦津港卒等數十人戰死云云、四月二日、夜、賊徒棄

帖佐新城・及山田城、而遁祁答院、公賞兼盛功、增賜西別府有川地、後命為國老、永祿四年、五月、宗子省鈞謀反、攻陷廻城、是時兼盛從、公戰被創、六年、將兵往守飯野城、九年、從攻三山城、十年、擊菱刈賊、戰功殊絕於諸將、十一年、從、松齡公攻大口城、力戰功多、二月廿八日、與島津忠長至市山城新納忠元所成、俱議軍事、十二年、命兼盛・及新納忠元、俱守羽月城、是歲兼盛與忠元攻圍賊魁菱刈隆秋於大口城、賊兵失利退散求麻、貫明公賞兼盛功、賜之書及

會於郡上三代堂地、元龜二年、從討省鈞、三年、從戰下大隅、進軍早崎、天正四年、從攻高原城、五年、從入日州、六年、閏八月十一日、卒、年四十六、法號玉繁名玖大禪定門家臣一官肥、後殉死、一子彈正忠兼寬初稱、母 梅岳君女、永祿元年、生、及長更肝付氏為加治木氏、天正三年、三月十六日、官慣習犬追物事、兼寬為射者班、射犬四匹、

十七日、又習勒犬追物事、兼寬復為射者班、射犬五匹、四月廿一日、又有犬追物事、兼寬復為射者班、六年、十月、大友氏大軍入我日州、十一月十一日、兼寬與諸將大敗之於耳川、八年、十月十五日、與諸將進拔寶河內城、十年、八月十八日、從軍水股、十一月、出守八代城、既而與諸將進兵至肥前有馬、十二月、攻陷肥後日比良城、十一

年、九月、引兵至八代、十月、與諸將擊破堅志田邊境、十一月、俱

築花山城、而各班師於國、十二年、三月、俱進救有馬城、六月、命使京師、九月廿九日、歸柁城、十三年、八月十三日、與諸將攻破肥後阿蘇氏、閏八月十三日、我兵進攻堅志田、兼寬與上井覺兼先登陷

內城、命俱戍內城、十四年、正月十三日、與諸將攻陷高森城、七月、進拔岩屋城、十月、從入豐後、十五年、三月、收軍、路數遇賊、擊破之、十八年、三月三日、卒、年三十三、法號利翁守益庵

主、一越前守兼篤初名兼仍、稱小五郎、又伴兵衛尉、兼盛第三子、母菱刈兵庫重狠女、永祿五年、生、初兄兼寬卒無嗣、養伊集院幸侃第三子三郎五郎為己後、名兼三、文祿四年、賜兼三喜入及川邊宮清、除前所食柁城・溝邊・踊・日當山・三代堂・田祿一萬五千八十四石、於是十月廿六日、兼三去柁城移居喜入邑、慶長二年、率三百餘人從赴朝鮮、軍加

德島、以其年猶幼未習軍事故、五月、命歸國、而以其家老前田盛張代其軍、三年、十月朔日、泗川之戰、盛張斬首一千餘級、四年、父幸侃有罪伏誅、以故命兼三去肝付氏、復伊集院氏、且移之阿多邑、後見誅、至是 貫明公以兼盛忠功莫大故、命兼篤以續兄兼寬後、而從討莊內、八年、二月十六日、宴將士於薨城中、兼篤亦與焉、十四年、我遣諸將征琉球國、兼篤亦從焉二月廿八日、慈眼公自特經山川、至深江津、登岸則島人盡降、十七日、至德島、廿五日、進入運天、今歸仁城不戰而潰、四月四日、國王出降、於是兼篤及諸將收軍而還、六月廿九日、卒、年四十八、法號傑心大英居士、一子鶴壽丸、

母岩切善信女、慶長六年、生、十四年、年甫九歲、續父後、是歲命加元服於 公坐、賜刀一口特定所、名兼武、稱長三郎、而詣國分及柁城、始謁 貫明公 松齡公、後任彈正少弼、十九年、冬、兼武率兵子一百餘人赴大坂、至肥後而聞和議成、乃還、是歲賜兼武真幸院吉

田正明寺村・及津留村、除前所食川邊宮村、元和中、命獻諸士田祿四一於官、是時兼武所食祿一千五十石、寬永二年、八月十九日、卒、年二十五、法號自性了源居士、子伴兵衛兼屋初名兼治、稱聽壽、九、又三郎五郎、母洪谷重將女、元和五年、十一月十四日、生、寬永二年、年甫七歲、八月、續父後、四年、八月廿七日、命加元服於公坐、賜安房刀一口、後承 寬陽公妹、十五年、正月九日、兼屋率一百餘人赴島原、廿年、為麾下將頭此云組、寬文二年、為大監察、慶安四年、為小根占地頭職、延寶三年、閏四月廿九日、卒、年五十七、法號桃外院洞巖素仙居士今喜入色君肝主、殿、兼屋裔也

肝付九兵衛兼初稱三郎、九郎、加賀守兼義初稱宮內丞、屬肝付兼演、為溝邊地頭職之子也、戰沒於莊內今肝付源

肝付彌五助初稱伴、九郎、戰沒於朝鮮即今肝付次右衛門、助、即兼口、子孫也、野史氏曰、

邨尾重侯列傳第四十

邨尾重侯初名重、光、自稱源左衛門尉初稱松、又龜三、又與、五郎、又右衛門兵衛、號笑栖一作松、清、入來院氏五世美濃守重勝長庶子刑部少輔邨尾重宗六世孫也、重宗生上野介紀阿、紀阿生備前守重道字重二、重道生河內守重拳字重三、重拳生河內守重晃字重三、重晃生甲斐守重全字重二、重全生重侯、母二階堂氏、天文十九年、庚戌之歲生、幼為祁答院良重侍童、永祿九年、正月十五日、良重為妻久島津實所弒於寢室、是時重侯急來以屏風壓之、而刺殺焉、時年十七、松齡公聞焉、殊召居飯野城、十月、從攻三山城、重侯及佐谷田武藏遠矢下總等斬獲頗多、十年、重侯以先鋒從征菱刈氏、元龜三

年、木崎原之役、重侯使富永萬左衛門為先導、率兵士五十人、伏本地原深塹、是日重侯自斬米良信濃・及敵三人、所率士斬殺數十人、天正中、公選五十四人、俱為參謀、重侯亦與焉、五年、十二月、福永丹波以野尻城降我、是時 公遣重侯經須木山中、至初木、而誘初木隼人降屬焉、及伊東氏敗亡、使重侯徙居須木、以備米良氏、九年、從 公軍水股、十二年、與諸將俱渡海赴島原、後從入豐後、慶長元年、命為須木地頭職、而移吉田・馬關田・小林・高原・土一百六十人與重侯所率士四十人合二百人、俱戍須木城、四年、莊內軍起、與子重昌率須木兵二隊、而以酒瀨川武安及上野忠則為部將、六月廿一日、出須木、翌日至莊內、廿三日、我軍進圍山田城、是時重侯以乙守筑前・築地內藏助・釘村源左衛門為先導、自荒神尾登焉、而與島津豐久・新納忠元・俱攻大手口城前此云、大手口、城陷、則使上野忠則・酒瀨川武安督修城營、而置戍兵、五年、庚子、三月十日、梅北城降、使重侯及入來院重時俱受之、十五日、賊寨咸降、十八日、收軍而歸須木、是歲九月十五日、關原軍敗、公引敗卒而歸、廿九日、船至細島、於是晦日、重侯率須木士三十人、往迎大野原、是時稻津祐信作亂、入自綾川、放火於諸所、重侯乃使人如須木召子重昌及兵士一百五十人、而俱進擊破賊、直至本城、謁 公於八代、是時祐信屯本城義門寺、十月初一日、重侯與五代友泰・相良長泰、俱擊破義門寺、斬賊六十餘人、獲馬十四匹、七年、八月、慈眼公朝京師、路經野尻、而留數日、命重侯及敷根賴豐・川田國鏡等、俱誅伊集院忠真、十四年、三月、率兵廿一人、航海與諸將俱征琉球、五月、船至琉球、琉球服而班師、十九年、重侯率兵八人赴大坂、路至細島、而聞和平、則引還、元和二年、丙辰、五月廿四日、卒於須木、年六十七、法號松岳定秀庵主、墓在須木一麟寺、子與五郎重

良、母有川右近女、天正二年、生、文祿元年、年十九、從一唯世子軍朝鮮、二年、癸巳、世子薨於巨濟、重良奉柩而歸國、三年、十月、從慈眼公復赴朝鮮、以功殊賜秩祿一千石、慶長二年、八月十五日、二公督諸將攻陷南原城、直赴全州、廿八日、師次益山、翌日去益山一里許、蜂須賀家政之部伍誤亂入我隊中、重良迎與之接戰、敵顛而臥斬重良右手、重良左手斬殺之、創痛不能行、慈眼公命乘公馬、尚不能行、公乃自賜藥、故乘（頭注）一作又、公興、行四里許、痛甚、遂卒年廿四、右衛門兵衛尉重昌（初稱樞僕郎、又舍人、）、重侯第二子、重良同母弟、天正十年、生、慶長四年、年十八、從父戰莊內、五年、九月、與父俱率須木士至八代、十月初一日、進破義門寺、是時有賊假屋原彌助者、投弓箭於地、而拔刀（長三尺、八寸、）向重昌、重昌及上野忠則（時生、）俱與彌助接戰、重昌執白幹槍刺之、忠則遂斬其首、重昌被小創、忠則被四創、重侯馬上視之、謂重昌曰、汝等年少勇力拔群、而獻首于野尻營（公時在、）、是時重昌始謁公、公賞其勇、賜眉尖刀、稱舍人、十五年、慈眼公率琉球王朝駿府及江都、重昌從焉、是歲與鹿島駿河・毛利內膳、俱航海檢地（說在別、）琉球國、十九年、從父赴大坂焉、及父卒、續為須木地頭職、寬永三年、十一月十三日、卒須木、年四十五、法號覺翁定圓菴主、墳墓在一麟寺、子三右衛門重候（初稱舍人、又、源在衛門、）、母伊勢上總介女、慶長十五年、生、及父卒、傳聞官命弟子丸右京宗辰為須木地頭職、重候遣面高蓮長房俊昌私於宗辰曰、聞諸道路、不知（似重復然亦古人句法、）信否、若聞官以子為須木地頭職、信乎、宗辰曰、不信、若之何、其有以先人之有功於國家、而不與其職於子、遽命之於他人者也、子必誤聞也、重候悅、乃使親族二階堂淨心、奉書於官請續父為須木地頭職、又遣家臣藏右衛門者、至江都邸、與國老伊勢貞昌謀之、乃命為地頭職、且賜秩祿二百石、而使須木士岩下次助・椎原內藏允・輔

重候俱保守須木城、九年、八月、幕府改易肥後國（加藤忠廣、）而命我戒兵疆場、以備其不意、人、槍、一、重候出騎馬一人、步兵十人、衆中并僕六、十三年、十一月、三日、命重候等十二人行鎬流馬之事、事在本田親平傳、十五年、島原賊起、命重候及伊地知重政（地頭、）、俱往為普請奉行、二月廿七日、諸將進攻、重候執槍與賊三人接戰、刺殺一人、而被重創、須木士今邨弓左衛門・堀添十郎右衛門二人俱進斬賊首、翌日城陷、三月、旋師（重候賊之日、佐賀土崎六左衛門勝宗、小倉土河五左衛門景信、及大、）、十七年、七月、有求麻大童伴兵衛者、據家宅而作亂、求麻境騷動、於是我敵兵備求麻境重候亦與焉（是時重候領田種四百石、而率家臣、須木士一百人守須木境、）、寬文十一年、辛亥、八月十一日、卒、年六十二、法號堅巖全固大居士、重候在職之日、累遷吟味役・御使役、且從駕數朝江都云（今邨尾源左衛門、即重候子孫也、）、邨尾筑前某、父掃部兵衛重好（笑稱、）、寬永十五年、從蒲生邑宰市來宗友赴島原、及攻城之日、筑前執槍大呼、奮戰被重創（筑前子孫今在、）、邨尾備前、邨尾越後、邨尾兵部（家臣、）、邨尾藏人（入家臣、）、未詳四人事業、野史氏曰、

西藩烈士干城錄卷之二十

卷之廿一

卷之廿三

岩切信朗

白濱重住

稻留傳翁

白坂昌棟

市來家政

東鄉重尚

三原重益

穎娃久虎

宮原景種

禰寢重長

卷之廿二

卷之廿四

菱刈重廣

奈良原資

井尻祐季

曾木重治

長谷場孝純

禰寢重長

猿渡信光

北原兼親

敷根賴賀

五代友慶

西藩烈士干城錄

廿一之
廿四之

西藩烈士干城錄卷之二十一

岩切信朗列傳第四十一

雅樂介岩切信朗、姓日下部、號可樂初名貞信、稱六角衛門、又三河守、以兵法事 梅岳君、

為掌務此云御使役、又申口役後、且軍師此云重配、後者、弘治二年、四月、叛賊蒲生範清勢孤、失

防禦術、而使家臣西股出羽・矢上大膳、依信朗乞降、而遁祁答院、

某年七月七日、信朗卒、法號覺宗大禪伯、子參河守善信初稱新、助、號

可春、受兵法於父、繼為軍師、從擊伊東氏、有功、天正九年、從

松齡公軍水股、十四年、從戰豐後、慶長五年、莊內賊降、於是三月

十五日、使善信唱凱歌、某年八月七日卒、法號心月聚仙菴主、墳塋

在松原山、子雅樂介信房初名信、家、天正九年、水股之役、公選近侍

二十人、信房其一人也、十五年、六月、從朝京師、後從入朝鮮、又

從軍關原、軍敗、從歸國、賞賜褒牒及田祿二百石、某年五月十三日

卒、法號龜山宗鶴居士、墳墓在松原山在大中、公廟後、子六右衛門尉信光光元、作元、

為主務兼某邑地頭職即信光子孫也、

野史氏曰、信朗父子好兵法、繼為軍師、此人臣之所難、於父子足

矣、信房父子忠良保身、可謂不辱父祖之業也、

稻留傳翁列傳第四十二附相良氏、脫岡氏

稻留傳翁見稱石、景事、謙蓋稱、建久九年、始下居玖麻郡、相良氏傳、相良賴子據此、則長賴景其支族、而從來者欵、、其先相良三郎長賴、建久九年、始下居玖麻郡

貞生善人、善人始來事 大岳公、公命為長庶子友久傳、善人生慶

麟、慶麟生增三、增三生傳翁氏為稱留氏之由云、、永祿四年、七月十二日、

傳翁戰沒於廻在講州、按奈純記、傳翁、田布施人也、、法號傳翁常、心禪定門、子日向守長泰代嗣

從諸將攻石之城當是時、公出軍於野尻、廿九、日長泰使安藤大膳來賀焉、、是歲命為紙屋城宰、因移居焉云、

其後 貫明公使長泰使相良義陽、是時長泰請義陽、改稻留氏復為相

良氏云、十年、十一月、出守八代城、十二月、奉使於有馬、凡六日

而還報、十一年、九月、復出守八代城、後轉徙八代及財部地頭職、

十三年、閏八月、從 松齡公出軍於三舟、九月五日、合志城陷、是

時命長泰及新納康久俱行、而安堵降兵、十二月、阿蘇高森氏通謀於

豐後大友氏、時 公遣長泰及阿蘇家臣仁田水左衛門大夫・村山丹

後、俱至高森氏、而責其質子、高森氏乃誑誘仁田水村山於城中、而

殺仁田水、囚村山、長泰覺而遁去、後高森氏引兵襲津守木山、此時

長泰在木山、盡力拒退、十四年、正月廿三日、我軍攻陷高森城、長泰從有功、七月、以副將攻筑紫岩屋二城、十五年、四月、從攻目白坂、後以船奉行與木脇三左衛門俱赴朝鮮、文祿二年、慈眼公始赴朝鮮、十月廿六日、舟至釜山浦、廿八日、小早川藤次郎遣使者而來賀焉茲夜、又與毛利治部少輔及天、俱携酒有至公營云、、則遣長泰往謝之、慶長三年、十月初一日、泗川之捷、貫紺緞甲一作甲、血戰為多、十一月、歸國、四年、從討莊內賊、五年、長泰及國老平田增宗等俱抵役於大坂邸、初我二夫人質大坂城中、及聞關原軍敗、增宗與留邸者相謀、留侍婢阿松詐為夫人、使長泰及吉田美作・新納孫右衛門・上原右衛門衛之、而二夫人與增宗及從士四人出城去、既而長泰等相謀、與阿松及上下人等俱竊出城而遁、乘舟至明石洋、而遇公船、乃從而歸國、十一年、十一月廿五日、有犬追物之事、長泰為射者班、射犬三匹、寬永六年、五月廿五日卒、年八十六、慈眼公作歌追悼之、長泰為人好國風、嘗詠歌曰、自夕二音由、雖聞二音多志、曉阿阿加都音、最音伊爾、身音入、無音志、小男左二音鹿鹿、鹿聲音古鹿、、一子玄蕃助賴豐、從慈眼公伐朝鮮、慶長三年、遣賴豐及勝目兵右衛門・監川上忠真軍於故館砦、及聞明兵大至、於是九月廿八日、使使賴豐後等棄砦而退新寨、是時明大兵急逐窘、賴豐所騎馬中矢而死、乃步射敵、矢盡則捨敵所射矢、復射之、遂戰死法山、、宗運、、兵右衛門亦策馬冒敵而死、公聞而惜之、賴豐無男、以岩切雅樂介為之嗣、冒相良氏、是日木工之助長信初云玄、、母和泉三河女、天正七年生、及長以使役為財部地頭職、寬永九年、本藩兵賦籍云、長信以財部邑宰、出兵子廿八人騎馬二人、馬統、、十四年、五月十三日、使長信等奉使於江都、為寬陽公嗣立之故也、是時與長信俱謁幕府者凡九人、皆獻太刀馬代在別記、及時服、寬文二年、九月十四日卒、年七十四、法號節岩俊忠大居士今相良與、即、

相良新吉某、長泰第二子、戰沒於關原今相良村左衛門、即新吉子孫也、、

稻留丹後守長常、祖父慶麟前見、、父八郎右衛門某慶麟、、梅岳君命長常

為左兵衛尉尚久傳、長常家富、貫明公命出自賊以供軍費、賞其功

賜田祿一千石、長常卒、子勘解由左衛門嗣、卒、子民部左衛門嗣、

卒、子勘解由次官賴豐嗣、亦改稻留氏為相良氏、從伐朝鮮、以其久

勞軍務、慈眼公賜賴豐褒牒、以賞其功、後為使役、慶長十三年、

十月四日、賜根占地頭職、十六年、四月、遣賴豐及有馬重純檢地

二字記在、琉球國、於是賴豐率根占士十餘人至琉球初十四年、我征琉球之日、有相良權兵衛、

十八年、事畢而歸國船至坊津云、、元和二年、遣賴豐為德島代官、是我置

代官于諸島之始也、其後還國卒、子權兵衛賴員嗣、為使役即相良權兵衛、

稻留丹後守長秀、號鄰松、長常第二子亦改常相、、初屬松齡公、後命為

島津忠長傳、其後貫明公賜之田祿一千石、則長秀請官與之適子吉

右衛門長信、徙居國分事、貫明公、而以次子左京亮稱稻留、為己後年、文十七

日、本田實知傳、是時左京等與北原氏兵戰於島原、有功、天、長信從慈眼公入朝鮮、又從松

齡公戰關原、從而還國、賞賜褒牒及田祿一百石、子主稅助長廣嗣、

命為用人、賜某邑地頭職、當王子原有犬追物事、命長廣為射者奉行

今相良長太郎、即長廣子孫也、

相良甚兵衛長繼初稱甚、、鎌田政近第三子、母長秀女、為舅長信有廢疾

而無子、以長繼為養子、冒相良氏、及長信生男長廣、而繼已後、則

長繼請官分為小宗、後從朝鮮及莊內、其後戰沒於關原、從使者二

人、法號玄通要律居士、子舍人嗣、累遷殿中奉行・普請奉行・納殿

役・日州代官役今相良甚五右衛門、即舍人子孫也、

稻留五郎右衛門、岩屋之役、執勁弓多射殺敵、其後為帖佐假地頭職、

相良五郎左衛門長家、〔頭注〕「卜、一作牧」號卜庵、初姓竹之下氏、有故請相良壹岐改姓云、松齡公以長家為刀筆吏、天正十二年、十月、從軍肥後、十三年、秋、又從戰肥後〔兼重日記、即長家子孫也〕、

相良少監物祐秀、別稱兵右衛門、父藤次兵衛祐清〔祐清祖父伊賀祐住、伊東氏家臣、長我有事於伊東氏、祐住戰沒於德北、其子仙代丸、幼而孤、以故中書君權而敬之、祐清祖父伊賀祐住、伊東氏家臣、長我之事、為三州檢校職、號常德院、而事、慈顯公云、祐清蓋常德院之子也〕、寬永十五年、肥前島原賊起、祐秀從 寬陽公歸自江都、至大井川、單騎先衆而涉〔相良是左衛門、即祐秀子孫也〕、

相良內藏之允賴章、父內藏介賴安〔初稱等、平次稱〕、祖清兵衛賴兄〔初稱兵、平次稱〕、曾祖犬童美作〔美作、美作之十餘世祖九郎賴員、即相良氏六世三郎賴長第五子也、賴兄事相良修理大夫義陽王、為家老、始更犬童氏復相良氏、及義陽子長每之世、羣下皆疏賴兄以疏之、因相牽引、國中不知、事聞於幕府、於是寬永十七年、幕府召賴兄父子於江都、是時求麻處守犬童伴兵衛作亂、以故幕府竄賴兄于津輕、遂死、賴安亦留死于江都、以賴兄見竄故、長每逐賴章、賴章遂流落上國、其後以賴章之母乃島津家口之女、元和三年、賴章伏劍至柁城、松齡公召而加冠焉、至寬永廿年、三月、賴章遂攜妻子及弟右近〔右近在、即今相、良作平次其衛也〕而來事於我、則賜歲俸五十石、其後正保二年、賜田祿二千石云〔今相良賴章之裔〕、

相良織部介、自求麻來事我、無男、以平田安房介次子為養子、是稱萬右衛門、後更稱半右衛門、為物奉行〔今相良伏右衛門、即半右衛門也〕、

稻留金兵衛〔兼重日記、天正十二年、三月、有伊賀院、忠極部下稻留金兵衛者、未知其事蹟〕、

相良助太夫、初姓竹之下氏、為伊勢貞昌與力、

肱岡豐前兵衛賴直、其先不知何許人、祖曰左衛門、父曰大膳、永祿

十年、丁卯、十一月、大中公出征菱刈賊、而以橫川城賜公子女家口、因移居焉、為鎮菱刈真幸之故也、此時使賴直為家口小姓役、元龜元年、庚午、正月、入來院重嗣・及東鄉重尚降、遣家口往受城、

因賜家口以串木野、而為隈城地頭職、除前所采橫川邑、於是家口自橫川徙居串木野、賴直從焉、翌年正月元旦、家臣皆被甲胄而朝賀、人々氣凜然、蓋以觀武於隣境也、當是時賴直以普請奉行役有功、家口賞賜田祿若干石、天正六年、戊寅、十月大友宗麟率大衆來寇日州、於是家口引兵入守高城〔新任新納院〕、遣賴直及永山大炊左衛門出謀敵、既而我軍大敗敵於耳川、於是 貫明公大宴享諸將、因召家口家臣十五人、而賜酒及物、賴直則賜金云、是日家口亦賜賴直大腰刀、七年、己卯、公封家口以佐土原之地、因移居焉、賴直從為弓頭役、十二年、甲申、三月、以家口為主將、出軍肥前島原、其子又七郎豐久年十五、而初從軍、是時賴直以弓頭役屬豐久、先登有功、十四日、公寇豐久於肥後八代〔豐久、既反而設冠禮宴、家口下嚮坐、豐久左嚮侍、長野下總次坐、田中筑前次坐、本田主稅右嚮侍、肱岡豐前次坐、十四年、丙戌、十月、家口督諸將入豐後、賴直以弓頭役率兵子五十人、戰鬪為多、十二月、家口率兵大戰利滿城下、敵軍敗績、仙石權兵衛秀久聚散卒於府內邊疆、家口移陣其前、乃遣賴直使秀久營曰、君猶能戰否、敢告左右、秀久出營手到地曰、拜命辱、然不復敢戰、因與鞍及鎧於賴直、賴直還報、衆皆嘆曰、彼上國將帥新敗軍、其卑屈乞憐可悲也、翌年三月、諸將聞豐公大軍西下、於是衆議皆退軍、十五年、丁亥、四月、根白坂之役、我軍不利、而和議成、家口遂出佐土原城、而退城趾新山、後如秀長野尻營、而暴卒、八月四日、豐公賜豐久朱印牒、封之於佐土原城、豐久因設宴享於城中、行三獻之禮、豐久下向坐、長野下總侍於豐久右伴食、平田伊賀

坐於其次、本田加賀侍於豐久左、肱岡豐前坐於其次、宮中亦行三獻之禮、豐久下向坐、夫人右侍、源七郎次坐、伴食平田伊賀以次就位於下、本田加賀左侍、肱岡豐前次坐、文祿元年、壬辰、三月、豐久率步騎五百三十人、與諸將俱擊朝鮮、賴直以弓頭役從焉、是歲豐久擢賴直爲家老、兼新田地頭職、賜歲俸二百五十石、且命請相良宮內大輔忠房守森太、改肱岡氏爲相良氏、更稱善兵衛、其後以功數益賜田祿、合食八百十二石云、慶長五年、庚子、五月、豐久往朝伏水、賴直有故不從、去之麿府居焉、初家口降豐公、以夫人豐久及長女豐久及豐久夫人爲質、自天正十六年、戊子、至是歲、俱留在伏水、及九月十五日、豐久戰死於關原、家臣等相謀、竊負三人而逃、能擺脫禍患、廿九日、至德洲、卒俱得全歸佐土原城、先是城中聞稻津掃部祐信伊賀氏家臣、而作亂、率兵將攻佐土原城、人心恟々、當是時母夫人聞松齡公舟至細島、自此路經植木不過佐土原、將還薩、大怒曰、噫、先公爲宗室盡心竭力、不避艱難、遠涉島原、深入豐後、中道不幸中毒而沒、豐久亦征朝鮮、擊莊內、卒戰死於關原、今公不思其功、適至此、聞難不救、而欲遽歸國、未亡人非無憾、乃急挾眉尖刀、將馳出城而迎候、公、家臣靖焉、而後止、會樺山忠助奉 貫明公命、引兵來援、而聞 松齡公自細島路經高鍋坊、即急使使請枉駕於城中、於是翌日朔日、公從左右入城中、值母夫人及豐久夫人、俱悲豐久死、泫然泣下、左右皆感泣、公召忠助告曰、勞子固守城、不可輕出與賊戰、翌日遂別去、既而賊兵攻陷宮崎城、至佐土原六坊上、放火新山口、先是賴直聞掃部亂、便去麿府至佐土原、入守城、及賊至、與城兵俱出擊、追至廣原、斬賊首八級、於是 貫明公命忠褒賞其功、六年、辛丑、幕府遣庄田三太夫没入佐土原城、是時 貫明公亦遣忠助至佐土原、命家臣等俱出城而退去、於是賴直與本田丹

波親昌俱移居麿府、貫明公賜賴直以田祿四百五十石、及宅一區山澤十太夫所居之地也、在元和間、史局輿地圖○元和間、麿府田所居、相良五左衛門、領田祿二百八十石、十三年、官命豐久母弟源七郎忠直、易其食邑本城以永吉邑、冬、喜入撰津守忠政命賴直、經營忠直宮室、及家臣宅區於永吉邑、十五年、冬、家臣咸徙居永吉邑、初九年、甲辰、官命喜入忠政長子三郎四郎以爲豐久之後、是日中務大輔忠榮、至十八年、癸丑、從忠榮來家臣等、與佐土原舊臣、宅區交錯、紛爭不息、邑宰禁之、不聽、於是忠政請官、命賴直主家臣事、又使本田丹波親昌爲騎馬與力、徙居永吉、寬永十一年、甲戌、六月、以安藝守久雄初稱播磨、是爲忠榮之嗣、又令本田親昌改稱善左衛門、以爲永吉邑宰、於是親昌與賴直謀、以家口二世盡忠國家、上言之於國老島津彈正久慶、以請增賜邑祿、官乃益賜久雄田祿五百石、今相良淡齋、賴直十世子孫也、解魔法師肱岡南覺坊、賴直伯父也、永祿十年、命屬家口、賜田祿百石、數從軍有功、天正三年、從朝京師、六年、高城之役、以弓大將兼軍師俗曰之軍、配後、從有功、貫明公召賞之、賜酒及錢、十二年、島原之役、以豐久軍師功勞爲多、肱岡阿權坊、永祿中、以解魔法師往仕豐之大友氏、而爲軍配者、天正初、家口召反之於佐土原、而爲軍師、改稱覺右衛門、復相良氏、及水股役、以覺右衛門爲伯父南覺坊嗣、且賜田祿五十石、從軍有功、益賜祿若干石、合領田祿百六十石、後 松齡公召爲祈禱役、以爲吉松般若寺住持、其後命徙居加治木、野史氏曰、

市來家政列傳第四十三

備前守市來家政、姓惟宗、其先八文字民部大輔廣言、廣言無男、養

某氏子以為已後、是曰太郎政家、政家受外祖十郎家房之讓〔頭注〕、領

市來院、因為市來氏、政家生太郎左衛門資家、資家生太郎左衛門尉

時家、時家生太郎左衛門尉氏家、氏家生筑前守忠家、忠家生備後守

家親、家親生四郎左衛門尉助家、助家生筑前守久家、當大岳公之

世、有故没収世々所采市來邑、久家生美作守忠家、忠家早卒、故以

次子家正為嗣、家正生家廣、家廣生□家、□家生太郎左衛門尉□

正、□正生家政、自廣言至家政凡十四世、家政自幼近侍梅岳君、

天文七年、十二月廿九日、君攻加世田城、家政執君佩刀而侍

側、時有城上呼者曰、市來備前來與我決戰、家政乃奉上君刀、陵

墨與之奮戰、遂斬其首、而復與敵戰死、子小四郎家朗、年十一、

君殊召家朗曰、汝父盡忠死難、孤深惜之、因賜之佩刀、而撫育焉、

及長任備前守、為松山州在舊地地頭職、食邑於櫛間南鄉之地方十一町山在舊、

天正六年、九月、命家朗及肥後山城、戊佐土原城、十月、從破大友

宗麟於高城、八年、十一月廿三日、戰沒於矢崎城、年五十三、子

小四郎家親、後更曰玄蕃左衛門尉、繼父為松山地頭職、天正九年、

從松齡公擊水股、十一年、秋、從軍佐敷、十二年、從軍島原、與

強敵戰獲其首、身亦被創、十八年、六月十五日、卒、法號蓮枝芳葉

居士、子家治、初稱袈裟松、年甫十三、始謁貫明公、公謂家治

曰、汝〔頭注〕不劣父〔一作似父〕、因更袈裟松稱小四郎、其後命居覺府、文祿元

年、十一月十日、賜松山之地方十一町〔頭注〕、慶長六年、三月五

日、益賜川邊之地田祿二百石〔頭注〕、後以納殿役從慈眼公

朝京師、十三年、二月、從獵於春山、其後遣家治督府下士檢地〔別記〕

琉球國〔國府下末廣兵衛、海江田十兵衛、宮內源助、及、其餘龜山志布志高山士七人從焉〕、及其屬宮古島・八重山島、畢事而

還國、賞賜一文字刀一口・馬二匹〔一名伊東黑、一名吉野栗毛、而按檢地琉球國、不置此等、十

九年、六月十四日、卒、法號花心淨蓮禪定門、無男、以日高正恒子

為之嗣、是曰長左衛門家延〔初稱彌右衛門、○今市來氏、右衛門即家延之子孫也〕、

市來美作守家守〔初稱八左、舊尉〕、市來氏四世時家庶子美作守家續之苗裔也、天

正五年、日州平定、以家守為野尻城宰、九年、從軍水股、十五年、

從戰目白坂、卒時不知其年月、子軍助續後、天正六年、九月、從

攻石城、十月二日、夜、至覺府、詳白敵情、十一月十二日、我師進

與大友氏大戰於高城、軍助先驅血戰遂沒陣、子八左衛門尉家繁〔一作家友、初曰掃、部介、又備前守〕、

以使役〔一作近以近〕從軍朝鮮、新寨大捷之日、被紺緞甲云、慶長

七年、從慈眼公朝京師、是時東照廟既歸關東、於是福島正

則・山口直友・相謀、遣使上言之於關東、公亦遣家繁奉書於本多

佐渡守、則

東照廟召見家繁、而頗降辭色、十一月九日、賜教而反命、十四年、

以家繁為與頭〔武頭〕、率兵子二十一人、與諸將航海征琉球國、元和六

年、為伊作地頭、寬永六年、轉遷蒲生地頭職、其後屬公子忠朗徙於

柁城、賜田祿七百十二石、十三年、五月廿一日、卒、子掃部介

嗣、元和七年、十二月五日、官有犬追物之事、掃部為射者班、而稱

八文字掃部介、翌日復有犬追物之事、復為射者班、八年、五月十六

日、命分與父田祿五百十二石、徙居覺府〔今市來軍八、即、掃部之子孫也〕、

市來清十郎家綱、軍助第二子也、為同宗出雲守〔號〕、因嗣其後、文

祿二年、為荷物役〔朝辭筆記、作為近侍、未知孰是〕、從赴朝鮮、慶長三年、十月朔日、我軍

與明兵大戰於新寨、明兵敗走、獨明將孟老爺茅國器候我軍空壁逐

北、即將疾入我壁、島津忠長覬焉、急擊破之、是時家綱一騎馳入敵

軍而陣沒、一人不知其所以云、子和泉、轉徙諸奉行職違、後又為納

殿役、慶長十九年、從赴大坂、未至、聞成乃還祿二百五十七石〔出騎馬二人、步卒四

人、○今市來十郎兵衛、即和泉商也。

市來備後守家利初稱早左、美作守家續法號道慶、之八世孫也、家續生左京亮

家廣、家廣事 怨翁公 義天公、家廣生因幡守家朝、家朝生左京亮

家榮、家榮生備前守家廉、家廉事薩州家別記三字說在、為加世田地頭職、家

廉生民部少輔家春、家春生備後守家永、家永生備後守家保、家保生

家利、家利以島津實久命、與父俱在加世田城、天文七年、梅岳君

攻陷加世田城、家保戰沒、家利撻槍與右馬頭忠將戰、刺其齒、齒

墮、雌雄不決、乃俱引去、其後家利覺其非、遂辭實久而來降、弘治

元年、三月廿七日、從戰岩野原佐在、有功、永祿十年、十二月、從戰

市山在、廿九日、遂陣沒焉、一子早左衛門家延初稱左衛門太郎、孫備後守家尚

元年、公親枉駕於家尚家云今市來源右衛門政、

市來備中家次初稱十郎、父曰太郎左衛門家親、家親父曰治部少輔家敦、

家敦父曰壹岐守家直、家直父曰太郎右衛門家弘號禎、家弘即備前守家

廉見字、第二子也、一不知家次初居何處、某年官命徙居新納院高城、天

正六年、大友氏大兵來圍高城、十五年、羽柴氏大衆來侵日州、家次

屬山田有信、二守高城、一子備後守家林備後一作備中、初稱宗、從父俱徙居高

城、一子太郎左衛門家尚初稱松次郎、又宗次郎、亦徙居高城、後屬 松齡公、

屢有軍功、一子五兵衛家昌初稱宗、為物奉行、又為高奉行、寬永十七

年、兵賦籍云、家昌田祿三百二石、出兵士十二人今市來十郎右衛門、

市來備後守家政、初備後守家保第二子民部左衛門者、為竹內隱岐者

之嗣、因冒竹內氏、家政其適子也、初名實位又稱兵部少輔、從軍朝鮮、泗

川之捷、被黑緞甲、尋衝敵艦、與樺山久高等俱上南海島、久高遣實

位等、自興善島使金山浦、請援於 公、既而歸國、後奏官辭竹內

氏、復市來氏、改名家政、自莊內賊起、至關原軍畢、數奉使上國云

今市來左中、即、家政子孫也。

市來源助、從 松齡公伐朝鮮、

市來治右衛門、事 松齡公為納殿役、

市來源四郎宗教、從赴朝鮮、慶長五年、八月、從攻伏水城、擊破松

丸口城門名、一說宗教戰沒、朝鮮海、未知孰是。

市來五兵衛宗豐、當島原賊起、從 寬陽公出江都邸、而歸國今市來助左衛門、即宗豐子孫、

市來內藏介、弘治三年、蒲生氏降屬、以內藏介為松坂城宰、

市來佐介、從 慈眼公伐朝鮮、

市來下總、川內人、天正間、選謀臣五十四人、下總其一人也、十四

年、正月、新納忠元出軍於三舟、是時遣下總及家臣立木玄蕃運籌以

誘敵、

市來孫左衛門、大口人、從 慈眼公赴朝鮮慶長二年、四月廿四日、朝鮮中、慶長三

年、二月、新納久宣家臣某獲虎、是時命孫左行祭矢之儀西土未聞、有此儀、於

公前、十月朔日、新築之捷、命孫左堀地於城西門外方十五間、而埋

首凡三萬八千七百餘級、以為京觀此云實、

市來清左衛門、慶長十六年、二月廿日、殉死於 貴明公、時年廿

六、法號瑞翁良王居士、墳墓在福昌寺 公廟前、

市來民部大輔家諸、元龜間為使衆、

市來三郎次郎、天正十二年、十一月廿六日、日比良之戰、與寇相搏
伊集院美作與市來次郎兵衛書中記之、死○即次郎子孫今在加世野邑云。

市來彦六、清水人、天文二十三年、八月廿九日、戰沒於柁城坊、

市來善兵衛、公子歲久家臣、文祿元年、七月、豐公梟歲久首於一條
戻橋、是時善兵衛・反掛宿某・實林庵周椿・往奪歲久首、而葬之清
福寺、

市來嘉兵衛、島津忠長家臣、戰沒於莊內、

市來加賀家諸、島津義虎家老、永祿間、為高尾野邑宰、文祿三年、

二月廿八日死、市來肥前、亦義席家老、

市來出雲家住、事 貫明公、及阿平君女公、嫁于島津義虎、從而至出

水、忠辰籍没出水之日、從君歸國分、君卒之後、又事國分君云或云、家
家正、其子吉左衛門家幸、家委日袁賴、而從居覽府、寬永中、官有改札
之事歸國、是時歸官、受淨光明寺門前、札、子孫遂為門前者云。

市來彌兵衛、從伐朝鮮、

市來常圓坊元和六年、田藤稱、
有常圓坊姓名。

野史氏曰、市來氏名將之苗裔、世々慕義無窮、宜哉、死節者之多也、

三原重益列傳第四十四

遠江守三原重益初名重秋、又重秋、稱、
號昌安。者、式部大輔重家初稱藤山郎、
初稱藤山郎。之長子也、初
菊池大夫將監則隆、其第三子警固太郎經隆、俱居肥菊池城、其第四
子兵藤大夫經俊、徙三原城後在筑、因氏焉、其子孫左衛門督直重初稱藤八左
衛門、初髮

號壽、始至薩州、則命屬伊作家伊作家、
伊別稱。其子孫淡路守久重、久重卒、子

遠江守重秀初稱次郎重、
初稱次郎重。嗣、事伊作家為家老、卒、子藤太郎重信初稱、
初稱。嗣、卒、子重家初稱、
初稱。嗣、卒、重益初稱、
初稱。嗣、事 梅岳君為家老重益創、
重益創、建方、於、
其棟曰、弘治二年、丙辰、六月、

廿九日、地頭三原遠江守重秋、其後為曾於、
郡地頭職、至貫明公之世、猶任其職云。
益獻酒魚俗稱、
荷、着、一折。、而見其子焉、卒時不知年月、法號心月昌安、

次郎四郎重次、天文廿三年、九月晦日、戰死於岩劍城下星原、

兵部少輔重宗初稱、
初稱。、病死於朝鮮、無男、以同宗神祇重行長子為之

後、是日諸右衛門尉重種初稱、
初稱。、從赴朝鮮、鎮戍晋州砦、

慶長三年、九月廿八日、命退於新寨、十月初一日、明兵進攻新寨、

是時重種被紺緞甲、兜鍪設大立物別記、
別記。、斬首數級、其後從赴莊內、

十七年、慈眼公命為國老、十九年、夏、幕府遣山口直友至長崎、

禁止天主教、是時 公遣重種往慰其勞、是歲十一月、重種率兵先驅

赴大坂俗稱、
界、不、乘、馬、一疋。、十二月十二日、至大坂、翌日至茶臼山平野、

謁 東照 台德二廟、十八日、使重種結營於川中島初稱、
初稱。、是日薩摩

陣、廿三日、和議成、則令諸將收軍、翌年正月、重種自大坂直至江

戶、而更番町田忠倍、元和六年、任備中守、而前後歷遷大口川邊地

頭職、寬永元年、六月六日、卒、年五十七、重種嘗詠花曰、萬音與、
音與。代

祿二千二百二十七石三斗云、子左衛門尉重庸初名重、
初名重。、為兒睿悟、及

長為伊集院地頭職、寬永間、慈眼公以重庸為國老、十四年、丁
丑、島原賊起、幕府使板倉內膳正重昌・石谷十藏為上將、率諸
侯兵往討之、是時 公使重庸使焉、於是十一月十四日、重庸將野元
源左衛門・江川彌左衛門等二人此、
此、
此、發覺府平田野、
平田野、
平田野、、及伊集院士二十八、
二十八、
二十八、、
人後、次京泊而乘舟、十九日、至島原、謁二將、退而下營、違賊墨百
八十步許、十二月廿九日、諸侯師畢會、重昌乃使重庸讀軍令及誓

書、且諸國使者至、則重庸主送迎禮、十五年、戊寅、正月元日、鷄鳴諸軍各會本營、是日重庸被甲插梅花於胡籙、而乘駟馬此云鹿、鹿鹿毛也、執鞭頭注一執鞭以下、至源左三十七字、一作執角樽承飲造于上將曰、戰祝也、請撰撰焉、許之、乃先釀之、又酌釀之、上將飲之、而下於上將前、奉角樽以爲樽、引滿先釀之、又酌而獻之曰、豫祝戰勝焉、傳飲于野元源左、執承飲于四左、左氏、、

上將飲之、賜輝于野元源左、詰朝諸軍進陵賊壘、前此野元源左等謂圍入六兵衛源兵衛二人曰、方今重庸年壯氣盛、臨戰必先衆衝賊、則

事大危、汝等臨機必止之、而堅執鞚、至是重庸策馬疾馳、二人執鞚不放、重庸執鞭擊二人頭、血淋漓、二人氣不撓、於是重庸急下馬、

進執弓多射賊、賊發鳥銃放矢如雨、銃彈中重庸背前立物數角利劍等形、以爲飾、此云立物、謂輪徑尺、楨以熊毛、合藏之、孫家丸、丸、、是時重庸使家臣山下助兵衛執認旗而從焉、羊頭中左手斷、更使兒玉五左衛門執之、戰烈、帖佐

小兵衛戰沒小兵衛伊、小集院士、其餘多被創、上將重昌亦戰沒、重庸乃取其骸、而送之本營重昌戰沒之後、幕府復使松平伊豆守、信賴由左門氏、入來指諸軍、、城固不能拔、諸軍皆解退、重庸拒

後、野元源左前後馳馬指揮士卒、亦中銃丸而死、重庸乘馬引去數十武、顧左右曰、收源左屍否、左右曰、未也、重庸乃躬往收骸、左右

扣馬而諫之、於是家邸六左・兒玉佐左・平山助之丞・兒玉五左・四人急反輿屍而歸、既而細川越中守使者及中小路左源大放加藤清正、下七、二人來

請重庸曰、今日吾輩之戰、君所親親也、願得君丈契、以爲後照、且二人俱打折槍、願亦君賚之、重庸乃與證狀及槍、居旬餘、更番島津

久元而歸國、十六年、三月、轉遷加世田地頭職、其後重庸有罪、蟄居其寺盤居在、別記、、卒時不知年月、子遠江守重時嗣初稱次郎、即重時、即重時也、、

三原備中守重實、祖淡路守久重、父藤四郎朝重久重次、、重實事 大中

公、子次郎左衛門尉重行、天正三年、三月十七日、官習勒犬追物

事、重行為射者班、後為伊作地頭職、子次郎左衛門重貞、號永安、為御香番御香番、未詳、、及船奉行・物奉行・歷轉屋久島・高城・甌島地

頭職、子五兵衛重英、幼為 慈眼公御小姓、後為船奉行、賜百次地頭職今三原次郎左衛門、即重英子孫也、、

三原藤次、事 梅岳君、天文七年、戰沒於加世田、子伊豆、天文廿三年、梅岳君使伊豆使平松軍、後事 大中公、為納殿役、子飛

彈重長、號一宅初稱喜三郎、又九兵衛、、事 大中公為荷物役、後屬公子家、徒佐土

原、為家老、其後復歸覺府、為牛根地頭職、賜田祿三百石、寬永十三年、三月十九日卒、法號溪湊、葬與國寺、長子九兵衛、黨

伊集院忠真、戰沒於山田城、次子藤七、戰死於關原、法號傑心英俊上座、墳墓在天昌寺在佐十原、○今三原九、兵衛、即重七子孫也、、

三原源三郎重房、天正四年、八月十九日、戰沒於高原城、無男、以平田新左衛門第二子為養子、是日志摩重時、為納戶奉行慶長五年、官命府下、是時有三原源三郎、亦與與、蓋重、時也、○今三原六、兵衛、即重時子孫也、、

三原與三左衛門名舍人、舍人義父曰萬兵衛、萬、、戰沒於關原、子市右衛門、寬

陽公始襲封、從為代官、後以小荷駄役抵役於江都、因為騎馬役、及還國更番米津、子舍人、善槍術、為泰清世子師今三原佐々右衛門、即舍人子孫也、、

三原七左衛門、從軍朝鮮、

三原源六、從公子歲久據瀧水嶮、公子臨死欲水、源六乃持天目器、、

往汲溪水、忽有流丸、觸岸土、汚器、復汲獻之、而自殺以殉、法號寶山善珍上座、墳墓在心岳寺、

三原下總重隆、善兵法、伊集院孤舟等從而學焉、天文八年、從 大中公攻市來城、有功、天正十四年、從 貫明公在八代城、十五年、

羽柴氏大兵至日州、下總率兵援山田有信、入守城、

三原右京亮、天正間、為日置地頭職、四年、從高原軍、八年、十月、與諸將攻矢崎城、有功、十五年、四月、與下總入守高城、

三原彦次郎、從軍朝鮮、

野史氏曰、直重何人也、以羈旅來事于我、而其子孫或死國難、或盡臣節、或命顯職、或為君師、一門闔族、何多其良也、

宮原景種列傳第四十五

宮原筑前守初曰兵景種、其先

文德天皇之胄左少辨賴明文德天皇之次子、世孫二品式部卿仁禮親王、其三世孫、任薩隅日三州長吏、天德二

年、始下薩、賴明之十世孫經景、封薩州別府邑、經景之三世孫修理

大夫景治、始為宮原氏、景治之八世孫筑前守景益、景益嘗事大岳

公、後公使景益及伊集院道可等左衛門、新納圖書、阿多源左衛門、比志島助兵衛、鎌田彌、佐

長庶子友久、景益生太郎左衛門尉景次、景次生景種永正十二年生、景種事

大中公、永祿十一年、命守曾木城、三月廿三日、菱刈隆秋與相良氏

兵來攻城、是時佐多久政率兵來援、景種與之俱擊賊而退之、十二

年、隆秋來侵羽月城、守將新納忠元及肝付兼盛與公子家口謀、使景

種及大野口宗設伏於戸神尾、而擊破賊、事在家口傳、天正四年、八

月廿三日、從貫明公赴高原、以功為須木地頭職、六年、從大破大

友軍於耳川、九年、從軍葦北、十一年、正月、從在八代城、十月、

復守八代城、十五年、四月、羽柴氏西下、景種守隈莊城在肥後、是時賊

徒蜂起、急來攻城、援兵不至、城陷、景種與門子與三郎等俱戰死與三郎

去敵軍四百步、開景種死、時年十六、則復衛戰死、、年七十三、景種嘗以功歷轉鶴田・加久藤・曾木・

平泉・須木・逆谷・佐敷・隈莊地頭職云、初景種有一女、無男、

乃以女妻蒲生氏子、以為嗣、因冒宮原氏、名景次、稱兵部左衛門、

當菱刈亂、戰沒於平泉、景次亦無男、以弟其繼之後、名景晴、稱

左近將監、冒宮原氏秋葉親、天正六年、從戰石城、而被創、九年、以

串木野地頭職、從貫明公、戰水股、十四年、我軍進攻岩屋城、景

晴先衆血戰、被創、十月、與諸將俱入豐後、後松齡公居帖佐也、

舉景晴為假家老、慶長四年、三月、命景晴、建寺於瀧水、名曰心

岳、為公子歲久之故也、公破明軍也、五大老賞其功以出水邑五萬

石、是時公賜自書、遣景晴等坂七右衛門、日、往修出水城、其後又使景

晴及本田六右衛門出水、築高尾野野地東鄉、因別分高尾野為一外城此云龜、今、乃

以景晴為地頭職、於景晴率阿久根士八十人、往居焉、寬永元年、病

卒於高尾野、景晴嘗轉徙逆谷・平泉・串木野・紙屋・阿久根地頭

職、子吉左衛門景衝初稱平、年甫十四、從赴朝鮮、及明兵大至之日、

景衝格鬪多獲首級、後從慈眼公朝江都及駿府、元和四年、以景衝

及柏原將監為奉行、俱使琉球道之島名地、而正其封疆、及歸、船覆溺

死、年三十六、大炊助初稱孝、某、三原重貞長子、慶長十年生、後出為

景衝嗣、冒宮原氏、更曰左近將監景賴、元和六年、官有犬追物之

事、景賴為射者班、是時命與祖父景晴、俱更宮原氏為仁禮氏、寬永

十五年、從赴島原、廿年、九月十六日、有犬追物之事、景賴為射者

班、射犬一匹、及王子原有犬追物之事、復為射者班、後轉徙長島・

高尾野地頭職、卒時不知年月今仁禮子孫也、即景賴子孫也、

宮原越中者、筑前守景益弟、越中守景口子孫也、天正六年、越中從

軍耳川、十年、十二月十二日、貫明公使延命院常覺坊使三舟隈

莊、是時越中及西田主馬為之僕、而往謀之覺兼日記、○今仁禮性、右衛門、與越中商也、

宮原隼人者、別府五郎資忠之裔也、事梅岳君、加世田之戰、賊逐

君間瀨川、事急、君將自殺、隼人等其後掃部代君而死、君得

與數騎遁去、語在祐秀傳、「子太郎左衛門尉某、天文間、往援島津

忠廣、戰沒於業每辻、」子伊豫守景有初稱人、移居飢肥、後為步卒將、

其後復歸覽府、為船奉行、」子主計助景親初稱人、又、事松齡公、

公使景親使福島正則、是時正則贈景親青江刀一口、慶長四年、從

慈眼公戰莊內、十四年、以琉球臣服故、貫明公遣町田久倍使江都

及駿府、松齡公亦使景親使駿府、謁東照廟景親自獻太刀馬代、又適江

都、謁台德廟廟之德云、東照、寬永元年、正月廿六日、卒、法號日嶺宗

心居士、墳墓在興國寺、景親嘗學馬術於荒木十左衛門、盡受其術、

嘗吊芳真大姊小祥忌歌曰阿陀爾、見花音波、花散散音知利、去年音能二春音波、復

毛耶、復開亮、開思波加奈左、音麻多、音左、思音於毛不、子五郎兵衛景房、為督工官此云嘗請奉行、○今宮原五、

宮原伊賀、薙髮號秀齋、事松齡公為使衆、元龜四年、從戰木崎

原、天正十年、十一月、從軍八代、

宮原右兵衛盛喜喜作、從擊朝鮮、慶長三年、九月廿八日、公使相良

玄蕃勝目兵右等、自故館退新寨、敵諜而知之、大兵逐窘、二人遂死

之、是時盛喜與押川公近・鳥丸重統等俱出城迎敵、敵軍遂解去、十

月朔日、我軍大破明兵、盛喜格鬪有功、

殺

宮原掃部助、天文十七年、九月五日、我軍破北原氏兵於姬木州在、掃

部戰鬪有功、

宮原藤兵衛、加世田士也、弘治元年、三月廿七日、戰沒於帖佐、

宮原半右衛門景為、長島士也、寬永十五年、從軍島原、二月廿八

日、諸將進攻城、景為執槍與賊戰、大口士肱岡左近允證之證書今藏之仁禮寺、

大府附、

原三在、景為之曾孫用右衛門、有罪家滅、

野史氏曰、景種老益壯、窮益堅、蓋古之遺烈也、隼人臨危而代為

君、不亦忠乎、

西藩烈士千城錄卷之二十一

西藩烈士千城錄卷之二十一

西藩烈士千城錄卷之二十一

西藩烈士千城錄卷之二十一

西藩烈士千城錄卷之二十一

西藩烈士千城錄卷之二十一

菱刈重廣列傳第四十六、其先大織冠鎌足公之十六世孫・撰

政関白忠實公第三子・宇治左大臣賴長也、保元之亂、賴長奉

崇德上皇之勅、與其孫三位右中將隆重俱陣沒於法性寺、賴長子四人

配流諸國、而流第三子左中將隆長于豆州一作者、其第三子三郎坊自幼

出家、居比叡山、號進士判官相印重妙、而修學於宇治平等院、後奉

後白河帝之詔還俗、而封太郎兩院地在關前、方七百餘町、於是建久四

年、癸丑、十二月、西下、而并有本城・馬越・湯尾・曾木・大口・

入山・羽月・平泉・山野・因為菱刈氏、重妙卒、子左兵衛佐重實

嗣、重實卒、子彦太郎宗重嗣、宗重卒、子孫三郎隆春嗣、隆春卒、

子又太郎隆平嗣、隆平卒、子彦太郎重信嗣、重信卒、子彦太郎篤重

嗣、篤重卒、子但馬守重遠嗣、重遠卒、子安藝守久隆嗣、久隆卒、

子參河守元隆嗣、元隆卒、子民部大輔氏重嗣、氏重卒、子參河守忠

氏嗣、忠氏卒、子左兵衛佐重時嗣、重時卒、子大和守重副嗣、重副

卒、子大和守重州嗣重號天、母島津成久女、世々并領菱刈太郎兩院、

至重州之世、侵掠肥後柘野八代邊境、而叛我、享祿二年、九月三

日、侵大口邑、邑宰島津忠明子忠征二作明距戰於大島邨、敗死、三

年、七月廿七日、重州與相良氏合兵、圍大口城、城陷、忠明自殺、重州取大口、相良氏遣兵援守之、天文八年、自任相模守、及大中公詣宮內在備、重州悔先非、來謁公、自此屬麾下、永祿七年、九月十八日、卒、法號天岩道祐大禪伯、墳墓在本城南浦村瓜峯、一子重猛初稱孫三萬、又稱孫三萬、、母東鄉隱岐守重朗女、永祿四年、十月二日、大中公封重猛栗野院在備、方一百二十町之地、先是重猛黨洪谷蒲生賊、寇我數年、至是悔前非、遂降、因赦其罪、而有此封云、五年、六月、公自將攻陷橫川城北原、所號、、又封之重猛、九年、十一月十八日、重猛卒、法號舜山道堯大居士、一子鶴千代、母島津實久女、及父卒、鶴千代甫五歲、叔父大膳亮隆秋重州第三子、一作弟、四子、初稱正、、撰家政、既而隆秋圖族叛我、按記、永祿十年、隆秋黨相良氏、使家臣井手籠駿河成馬越城、麥刈中務成橫川城、其餘數城分兵守之、十一月、大中公率軍至栗野、越廿三日、進攻馬越城、斬駿河父子、及從兵二百餘人、是時隆秋遣兵援之、而敗還、城陷、是夜、公唱凱歌於城中、自此公威名大震、賊徒棄橫川城逃大口、廿四日、夜、本城・湯尾・曾木・市山・青木・山野・羽月・平泉諸賊亦悉逃大口、隆秋與相良氏俱嚴守備、十二月廿九日、隆秋出兵殺市來備後等於西原、且數侵市山、十一年、正月廿日、隆秋率兵三千餘人侵堂崎、敗我軍於飛田瀬、二月廿八日、隆秋遣牧野次郎右衛門・及相良氏將竹添丹後、與我軍戰小苗代原、我軍不利、賊進至市山城下而還、三月廿三日、來攻曾木城、反過馬越城下、多發鳥銃、復進至市山、而分兵四五十騎、攻入永福寺、我軍奮勇迎戰、隆秋乃引還大口、八月、出兵襲馬越、殺川上丹波、而引還、我軍出城、逐之、不及、十二年、正月廿日、隆秋與相良氏、俱賴野田感應寺僧乞降、公許之、三月十八日、我兵蒲地越中自馬越至市山、隆秋潛使深水賴

益殺越中及從兵十七人、而復叛、公聞焉、大驚、乃遣將士守羽月城、隆秋數來侵、五月六日、我軍設伏於戶神尾稻荷山、陽誘殺賊一百三十人、餘賊狼狽奔回、八月十八日、我軍進圍城、攻擊凡廿日、隆秋力窮、至九月十日、遂復乞降、公許之待丁南湖曰、中興之主、以忠厚之、反臨、亦多類、又曰、巧詐不如拙誠、信矣、隆秋獨任私智、不誠恐、宜矣、其卒恐出亡也、、隆秋乃質相良帶刀、深水太郎左衛門二人蓋相、良兵、、公亦質鎌田刑部左衛門・本田新助・於城中、十四日、隆秋遂下城而走求麻、菱刈遂平定、隆秋死時不知其年月、野史氏曰、隆秋貪利、無有禮信、窮則稽首、安則侵盜、而公深知柔能制剛、弱能制強、務廣地者荒、務廣德者強之理、故縱使更戰、遂能制其不軌、蓋亦七縱七禽之餘意歟、一又曰、公之恕隆秋至矣、而隆秋不知所謂人皆有一天、我獨有二天言備、之意、亦愚矣哉後蘇軾行部、時、謂河太守有此語、、一又曰、夫釣者中大魚、則縱而隨之、須可制而後牽、則無不得也、公之於隆秋薰親等、可謂得制牽之術矣魏劉備、、十二年、正月、隆秋獻大口城而降、當是之時、沒收鶴千代所領諸邑、於是鶴千代去菱刈、而遁退祁答院、八月廿六日、貫明公賜鶴千代書、復封曾木本城二邑田祿一千九百二十三石、初祖父重州與相良氏數寇我、後遂降焉、至隆秋復叛、公、然以其世々領菱刈故、遂召鶴千代於祁答院、而有此封云記、、十三年、公召鶴千代、而親加冠、名曰重廣、至天正二年、轉封伊集院地神殿、因移居焉、其後從戰肥豐、文祿元年、從軍朝鮮、慶長四年、從攻莊內、十一月十三日、戰沒於山田城、法號月松道皎居士、無嗣、以叔父隆秋第三子為嗣、是曰善四郎重秀、為貫明公內侍少年、嘗從容謂于公曰、公千秋萬歲之後、微臣願自殺以殉焉、公奇其有志氣、乃笑曰、可也、然孤恐汝若死、汝父母不堪悲哀、又無他兄弟嗣家者、孤決不

許、至 公薨、重秀親斷一指、請藏諸 公棺、一座大驚、後創傷遂卒、法號空嚴淨圓上座、無嗣、以留主式部大輔藤原景次子為嗣、因冒菱刈氏、是日半右衛門尉重榮、母隆秋女、天正十八年、生、寬永元年、為馬越地頭職、七年、幕府任駕於櫻田邸、是時重榮及大寺主計為普請奉行、掌修邸事、十年、轉徙大邸地頭職、後為京師及大坂藏奉行、十七年、庚辰、十月十三日、卒今菱刈木工之次、即重榮子孫也、

菱刈越後守重昌初稱四郎、兵庫頭重根子、重根父曰伊勢守重政初稱次郎、重政

即宗子重時第二子、為大口地頭職、重根亦為大口地頭職、至重昌之世、宗子重猛獻其所領地、而與重昌俱來降、大中公則賜重昌曾木地、其後改賜大口花北村、子休兵衛隆豐初名重興、稱孫三郎、又越後、又源兵衛、數從軍有功、文祿三年、六月、隆豐率兵子至朝鮮唐島、而勤番凡三十三月、後從移加德島、慶長二年、二月歸國、是時 公使新納遊甫告之曰、

子多年屯戍異邦、軍勞甚多矣、班師之後、賞賜祿三百石、既反而居家凡三月、至七月、隆豐復至朝鮮、是時 公與諸將深入敵境、隆豐尋及之、後從還泗川、則下令於諸將曰、凡將士再從軍之士文祿元年、我軍始有再從軍之士云、宜率部下而歸國、既而又遣鎌田藏人及白坂式部告隆豐等曰、子等雖勞軍務久之宜歸國、而方聞明大軍來攻城、子等亦當留與孤守之、三年、十月朔日、我軍大破明兵於新寨、隆豐被白赤雜緞

甲、逐北多殺敵、十一月、公班軍、而與敵艦復大戰海上、隆豐強戰被創、從至壹岐島、而遣還國、十二月、歸家、賞賜祿三百石、四年、五月、抵役京兆、既反、從戰莊內、五年、從關原軍、又從歸國、十六年、宗子重秀死、無嗣、隆豐撰其家政數年、及重榮為重秀嗣、乃復家政、卒時不知年月、子九左衛門尉重種初稱四郎、又越後、又、久右衛門、又九兵衛、寬陽公初襲封巡國內、是時重種為大口衆頭役或云、衆頭役、即假城守、又云、衆頭役、謂之步卒將、未知孰是、、其後

移麿府今菱刈次郎左衛門、即重種之子孫也、野史氏曰、

井尻祐秀列傳第四十七

井尻祐秀、自稱四郎左衛門尉、其先曰伊尻源兵衛祐慶、父孫右衛門祐能、事伊作久逸、陣沒於加世田、祐秀事 梅岳君、天文七年、十二月十九日、君自將擊加世田、是時賊猝出、相迫於間瀬川鎮守渡、君急、祐秀及宮原隼人・肥後掃部・俱謂 君曰、方今可無臣等、不可無君、三人遂死賊、君因得免、及加世田城陷、君祈三人冥福、建六地藏塔於死所、至今猶存焉、子伊賀守祐貞、為日州肱屋地頭職、天正六年、大友氏來侵我日州、是時祐貞援守高城、八年、屬公子家口軍水股、十一年、春、從軍八代、十三年、使祐貞往五島壹岐・對馬、說其君而降屬我、十四年、諸將進攻陷筑紫岩屋城、祐貞從在八代城、卒時不知年月或云、伊尻伊賀守、伊東氏臣也、天正間、有故藤伊賀氏、而來時城、中實伊賀及荒武石馬介於我、蓋是伊賀臣事於我之始也、此人與祐貞別人也、或以為同人、蓋以同姓稱致誤耳、、子伊賀守祐盛、數從軍有功、子太郎四郎祐盈、卒於京師、無嗣、以喜入紹嘉第三子為之後、冒井尻氏、是日、伊左衛門祐幾、後更井尻氏為伊東氏、今伊東作太夫其子孫也、

井尻佐渡守祐元初稱次郎、其先會我大臣之苗裔・曾我兵部祐清、祐清生七郎次郎祐泰第九郎、始為井尻氏、祐泰生八郎次郎祐貞、祐貞生七郎右衛門祐德、祐德生佐渡守祐守、祐守生早左衛門祐俊、祐俊生祐元、祐元事 梅岳君為兵具奉行、子佐渡守祐宗初稱九郎、母宇多新左衛門貞次女大中公乳母、天文廿三年、十一月三日、卒於加世田、年八十七、是女頗聰慧、早知島津實久背逆、而告之、梅岳君云、、大

中公出清水城過小野、祐宗與母俱從焉、而至伊作按地理志、伊集院春山山中塚中髮於此、天正四年、八月十九日、戰沒於高原、年六十五早按世祿記、加世田八井尻、子相左衛門祐雪、其子權右衛門祐保初稱八、為酒藏役、及御里役、元和六年、請宗子伊藤惣左衛門祐重相州人、更井尻氏為伊藤氏、今伊藤權角其子孫也、

井尻神力坊宗憲、祐元次子、事梅岳君、嘗受命、造木札大書薩摩神力四字、而負之、經歷日本六十餘州、而藏四千三百五十六部法華妙經于每國神祠佛閣、以禱國家興隆、後經廿二年而歸國、貫明公賞其功勞、賜大明司村在百州裏、是時梅岳君卒既八年矣、宗憲不堪悲哀、遂自殺以殉焉、贈權大僧都神力宗憲法印、實天正元年、癸酉作三年、十二月廿七日也、墳墓在栴本寺在加世、至今數見靈驗云、子豐前坊、生死不知、其年月、子孫今在飯野邑云、

井尻紀伊守祐康、其先不知何許人元或云、祐康亦祐元之子、後再考、事貫明公為納殿役、從自覺府移富隈、遂卒於此云、「無嗣、以稅所但馬守第二子利左衛門初稱大千、為養子、冒井尻氏、是日孫兵衛祐貞、事慈眼公、寬陽公、為納殿役、後以慈眼公命、更井尻氏為伊藤氏、今伊藤孫兵衛其子孫也、

井尻常陸坊一作常陸人也、伯父信太伊勢守為小田城主在常、父信太壹岐守、與兄俱居城中、有寇、來攻陷城、兄弟俱死之、時常陸坊年甫八九歲、與母俱隱邨寺、是時神力坊適至常州、憫憐常陸坊、請之其母、以為已養子、因冒井尻氏、常陸乃與家臣三十人、俱至薩、而居加世田、天正五年、命徙居都於郡在信、是時選謀臣五十四人、常陸坊其一人也、從肥豐之役、有功、既而移居高城、十五年、豐公西

下、沒收我日州、則常陸坊去高城、徙居深年在常、後又徙蒲生、慶長五年、為出水噯役、因移居焉、是歲小西行長敗死於關原、於是加藤清正引兵擊破宇土八代水股諸邑、是時常陸坊戒嚴設拒守具、其功多、清正遂不來、十九年、九月十八日、病卒、常陸坊三男、長休兵衛、文祿中、從伐朝鮮、慶長三年、十一月十八日、戰亡於南海瀨戶、時年二十一、「次甚六、為松齡公近侍、從之京師、慶長

五年、八月朔日、從攻伏水城、中銃彈死、時年十八、「次壹岐守、薙髮號玄宅、改井尻氏為伊東氏、慶長二年、年甫十三年、十一月、將赴朝鮮、有故留隈之城大源寺、越三年、正月、至朝鮮、則慈眼公召為近侍、十月初一日、明兵來攻新寨、我軍齊登檣上、執大小砲銃、每人放六七十彈、筒熱如火、皆力竭氣迫、息疾口乾、乃置桶水於檣上、浸手巾於水、以執銃筒、且飲且放、是時壹岐盛水、再奉公、以其年少故、獨執公副刀而侍側、及從出城門、公馬疾不能從、於是家臣奪敵馬而騎之、逐北至晋州而還、十一月、從而歸國、十五年、從朝江都、元和元年、為出水噯役羽月人長野某承譜云、玄宅為野田噯役、按野田孫出水地、後分為一邑、蓋玄宅為其噯役、邑云、

井尻彌五助後稱伴兵衛、或名祐友、慶長二年、從慈眼公赴朝鮮、三年、十一月、諸將謀班師、當是之時、敵艦萃迫圍小西行長於南海瀨戶、於是十八日、松齡公自往救之、是時慈眼公以腹痛、留在興善島、夜半聞巨砲大響、疑有其變、詰朝急乘舩、將至南海瀨戶、時有六端帆在六端帆、說許舩、徐逆浪來、一人艫頭呼曰、臣是井尻彌五助、前公至南海瀨戶、有敵大艦猝至、大小眾寡不敵、公舩獨無恙、餘舩皆不全、臣等亦被創、而命臥往白之、公、楫師唯一人耳、是以舩行遲、公聽大驚、急被甲、徙乘關舩戰艦、此、進至南海瀨戶記語在別、既而彌

五助從歸國、五年、上杉景勝叛、起兵與、於是 東照廟去大坂歸江戶、是時公在大坂、乃遣彌五助使江戶、獻書及孔雀尾毛、得報還、至江州水口、聞既設關察往來人、乃燒報書、唯留押字、置之警中、而至關、吏果怪因之、凡廿日許、彌五助謂吏曰、臣父是 島津兵庫頭家臣松岡勝兵衛者、父羈寓遭疾、臣迫切之至情、行禱伊勢大神宮、病愈、故往賽焉、今見縲囚於此、憂苦日甚、願憐察見原、不敢欺罔、吏以為實、遂縱之、公謂左右曰、彼拘攣受苦、以盡忠、宜特賞其功以旌之、八月、西軍進圍伏水城、彌五助從攻松丸口、尋守美濃會根寨、日夜勤苦盡力、及關原軍敗、從而歸國、賜褒牒及田祿五十石、六年、徙居蒲生、十一年、遣使川上四郎兵衛及本田源右衛門、使彌五助徙居平松、十三年、復遣使又使彌五助徙柅城、卒時不知年月、至今其子孫在柅城云、

井尻八郎、文祿二年、從 慈眼公赴朝鮮、慶長三年、十一月十八日、戰沒於南海瀨戶按慶長二年、四月廿四日、朝鮮本營更、番籍云、井尻八郎更番於第九部曲、

井尻傳次、文祿二年、從 慈眼公赴朝鮮按朝鮮紀追加、傳次、以步小姓、從赴朝鮮、

井尻四郎、天文八年、閏六月十七日、從 大中公攻市來平城、擊賊魁島津忠辰實久、斬其首勳功、

井尻主稅助、天正八年、十一月、諸將放火於合志城外久保田千町、是時主稅縱擊有功、

井尻九郎左衛門、加世田人、天正十五年、從 貫明公朝京師、

井尻九郎兵衛、井尻小三太、伊作人、俱事 大中公見寵遇、

井尻太郎、天正間人、

井尻平兵衛祐知、國分人、從伐朝鮮、

野史氏曰、祐秀宗憲死難殉 君、可謂忠矣、祐貞惓歎盡心於國、彌五助幽囚不變志、善計見縱、亦智哉、

長谷場孝純列傳第四十八

長谷場越前守孝純、姓藤原、其先出鎌足公、鎌足公之五世孫閑院左大臣冬嗣、冬嗣子枇杷中納言長良、長良第六子右大辨遠經、遠經之二世孫伊豫掾純友天慶四年、有故被誅、、純友第二子彌四郎左衛門直純、以南都一乘院命始下薩、而為覺島郡司、兼辨濟使取納使、自曰覺島越前守、而家居長谷場山今福昌、直純卒、子師純嗣、亦曰越前守、卒、子永純嗣、自稱十郎兵衛尉、卒、子遠純嗣、亦曰越前守、卒、子行純嗣、亦曰越前守、卒、子經純嗣、是曰遠江權頭、卒、子朝純嗣、是曰遠江守、卒、子家純嗣、亦曰越前守、卒、子資純嗣、亦曰遠江權頭、卒、子國純嗣、亦曰越前守、卒、子宗純嗣、是曰兵部少輔、卒、子純連嗣、亦曰越前守、卒、子久純嗣、亦曰越前守昭和六、當 恕翁公之世、請長谷場山、而創建福昌寺、是時久純又獻東福寺城、公賞之、賜諱一字、因名久純云、卒、子秀純嗣、亦曰越前守、更覺島氏、始為長谷場氏、卒、子則純嗣、亦曰越前守、去覺府之市來邑居焉、卒、子貞純嗣、亦曰越前守、卒、子重純嗣、稱九郎、戰沒於吉田城、無男、弟慶純嗣、亦曰越前守、卒、子孝純嗣、事 大中公、從攻伊集院城、有功、卒、子治純嗣、是曰長門守、亦事 大中公、從攻市來城、時治純為先導、後數從軍有功、卒、子宗純嗣、亦曰越

前守初曰兵部、少輔、移居川内及飢肥去、天正四年、八月、從攻高原城、八

年、十一月廿三日、我軍出放火肥後合志城外久保田千町、宗純從有功、十二年、三月廿四日、島原之戰、宗純與上原彥五郎俱斬捕有

功、十四年、七月、岩屋之戰、宗純揮刀先登、獲甲首宗純年三十九、向江純繼獲敵首、中馬重繼、亦繼

云、十月、志賀道輝傷父道益不知、諫而益復之、遂據岡城、事在道益傳、是時入田宗和・赤星備中守等、相共謀教道輝請援於我、於是

公使宗純率三百餘人、往救焉、進至岡城、則道輝出質降屬於我、其後宗純從 慈眼公、戰莊内有功、寬永元年、十月七日、卒、

年七十八、法號徹山慶董菴主、墳墓在隆盛院、子十郎兵衛實純嗣、慶長十四年、以船奉行率兵子十人、與諸將往征琉球、十九年、

浪華之役、復以船奉行從焉、其後卒、無男、以某氏子繼之後、冒長谷場氏、是曰兵右衛門純正、有馬之役、以普請奉行從焉、後為兵具奉行・及吟味役、累遷松山・吉田地頭職今長谷場源助、即、純正之裔也云

長谷場筑後守純辰初稱四郎、又職部介、初稱六郎、又中務丞、匡純即宗子慶純第二子、永祿九年、十月十五日、我軍進攻三山城、是時純辰・及田

尻荒兵衛斬捕有功、十一年、二月、新納忠元戰勝於市山、是時大中公命純辰及三原右京亮使市山、賞其功、三月、大口賊兵來侵暴市

山永福寺、純辰拒戰有功、後 貫明公命純辰為典書記、天正四年、八月、從攻高原城、十四年、我軍攻岩屋城、純辰從在八代城、十五

年、六月、公女龜壽君為質赴京師、純辰以書記從焉、子織部介口口、天正八年、以近侍士從軍水股、十四年、以騎馬兵從入豐後、慶

長五年、從戰關原、我軍敗績、織部介與川上久智・町田源六等俱出京師、借金於三輪山大先達、而歸國、後從 貫明公徙國分、十八

年、移居柅城、領田祿一百十石、子傳左衛門、事公子忠朗於柅城

寬永九年、田祿籍云、傳左衛門、領八十石、名其子孫在柅城、

長谷場典兵衛尉純昌初稱四郎、二郎、又、主膳正、又傳內、純辰第二子、慶長四年、戰沒於莊内安永城、

按記曰、初純昌學體捨流劍術、術既通、及東鄉重位受示現流劍術于禪吉和尚于京師、而歸國、純昌聞其說奇正之理、出言意外

矣、大悅、盡棄其學而學焉、未幾許、遂為高弟、至是歲莊内賊起、十二月八日、我軍攻圍安永城、是時純昌獨揮刀馳入賊軍、而

或斬墮槍莖、或切割銃口、前後左右所殺傷數十百人、賊軍辟易數里、於是鳥銃手及持弓矢者、懸簇爭射之、遂為銃丸所中而死、

時年四十、闔軍痛惜焉、純昌長重位一二歲云、(頭注)四十二、作四十六、

無男、以宗子治純第二子彌二郎為嗣、妻以純昌女、是曰主膳正純常、慶長十二年、四月廿五日、純常與木原七郎左衛門俱為根占邑代官十六年、國分田祿籍云、純常領田祿五十九石、元和初、豐府、田祿籍云、純常領田祿五十九石、今長谷場伊角、即純常裔也

長谷場彌九郎、天正六年、十一月十一日、與福永丹後俱戰沒日州高城、

長谷場治部少輔、市來士也、天正四年、八月、從攻高原城、

長谷場主水慶長十六年、國分田祿籍云、主水領五十八石、元和、初、豐府田祿籍云、長谷場主水左衛門、領五十七石、

野史氏曰、

猿渡信光列傳第四十九

猿渡越中守信光初曰補部、兵衛、其先高望王之六世孫猿渡藤三郎信元、其子藤

四郎實信以劍役從 得佛公、始下薩、信光即實信之十五世孫也、采食於小湊^{加世田}、為加世田地頭職、後轉羽月地頭職、元龜三年、三月、信光力戰於根占、有功、天正十年、十二月四日、我軍進攻肥前千々輪城、信光先登於野頸口^{云野頸、此}、十一年、九月、率軍往守八代城、十二年、三月、與諸將俱赴島原、十月、從在八代城、八日、與新納忠元俱出城謀三池境界、而還報、十三年、九月、公遣信光等往攻筑後堀切城、十二日、陷城、斬敵首三百餘級^{繼廿六日、公復新、十四年、與諸將俱入豐後、十五年、春、班師、四月、率兵赴目白坂、遂陣沒、年五十四、家臣瀨川隼人負其屍、而歸羽月而葬焉、}一子掃部兵衛信豐代、續為羽月地頭職、從赴朝鮮、加藤清正深入兀良哈、屯甲山、是時五奉行將使焉、難其人、於是請 公而擇我部下、公乃遣信豐及敷根賴豐、率步卒二百人、出金海城、往使入敵境二百餘里、經十餘日、到于甲山、達清正書、遂得全身而反命、公及一唯世子賜二人書、賞其功、石田三成亦與書賞之云、慶長三年、十一月十八日、戰死唐島、年四十四、法號雲山元朝上座、墳墓在帖佐總禪寺^{禪寺}、信豐無嗣、弟與三為之嗣、與三從軍朝鮮及關原、亦無男、以日野如宅長子監物為嗣、冒猿渡氏、是日喜右衛門、為 奈齡公近侍童子、一夜侍 公坐、眠甚、乃抽小刀自刺砭其股、刃利不覺深中肉、滴々然血流衣外、喜右神色不變、滿坐皆驚、公聽焉、而奇其幼有志氣、長為物奉行、兼賜某邑地頭職、寬永十六年、正月十六日、乘船渡甕海大寄、烈風覆船、與子豐藤同溺死^{察臣石右衛門茂兵、備、虎、皆溺}、

猿渡大炊介信考、父曰大炊介信種、號休覺、以使衆為蒲生地頭職、信種父曰彦次郎信行^{或云、信行早卒、無男、以本田某者為嗣、冒、是日大炊介信種、未詳、俟再考、}、信行父曰大藏信口、信口父曰大炊介信秀、信秀即藤四郎第二子・道胤第七子・實善之後裔

也、天文九年、大中公習勒犬追物之事於田布施、信秀為射者班、一信孝事 貫明公、天正十一年、屬上井覺兼徒宮崎、後為使衆、賜羽月地頭職、一子新助信商、天正七年生、及長、以使衆事 貫明公於國分、為橫川地頭職、慶長十九年、十月、有甕府防人至上國者、曰、聞駿府老公不和於浪華孺子、事將及於干戈、於是 慈眼公遣信商及鎌田左京亮使江戶、元和七年卒、年四十二^{今猿渡新助、即、}

猿渡源五郎信盈、信考第二子、陣沒於肥後、

猿渡與市兵衛信兼、宗子十五世刑部少輔信有第二子也、信兼兄弟四人、其兄曰信光^{見前}、次曰信兼、次曰勘解由某、次曰與市左衛門信資、信兼及勘解由・及信資・三人俱事 梅岳君、同陣沒某役^{今猿渡嘉左衛門、即信兼子}、

孫也云、或云、信資即大炊介信孝長子、又云、信資前四歲、文明十七年、六月廿日、祖父源少輔信有、俱戰沒於日州鉄肥、信兼獨居隱城、及長事 梅岳君、天正七年、七月廿九日、從大中公攻加田城、賊糧兵來戰、頭注、三世戰死、口、年五十七、據此、季曰順阿彌^{兼次子、信、}、自幼出家、後 梅岳君命還俗、繼信資之後、居加世田、賜秩祿若干石、亦無嗣、以井尻早左衛門次子為養子、冒猿渡氏、是日九郎左衛門吉信^{天文十七、}、從 公女國分君祗役於京師、子備前守辰信、以兵具奉行從朝鮮莊內浪華之役、子喜之助直信、文祿三年、生、寬永十五年、率兵子九人赴島原之役、正保二年、為小琉球代官役、遂病卒於此地^{今猿渡仲左衛門、即直信子孫也、}、

猿渡彦次郎^{子伊賀、孫金兵衛、未詳其、事業、今子孫在阿多云、}、猿渡九郎、猿渡民部左衛門、天文七年、十二月十九日、三人俱陣沒於阿多鶴塚、

猿渡源太左衛門、以 大中公嗣立之故、行犬追物之儀於加世田、是時源太・及春山越中俱為射者奉行云、

猿渡備後守實明、宗子信光為羽月地頭職、實明從移居焉、子兵部少

輔左衛門實昌、居柅城、領田祿四百石、從朝鮮軍、新寨之捷、被赤緋甲、及班師之日、陣沒於南海瀨戶、子仲左衛門代、剃髮號法樂、從軍浪華、後掌城中鐘樓鐘堂俗比云樂所矣、而以犯吹烟草之禁、命為鶴丸七左衛門法樂之家人云慶長六年、官命猿渡仲左衛門者從居蒲、生後又從平松及柅城蓋法樂也、

猿渡宮內左衛門、父曰市郎左衛門、初宮內居高尾野、後徙莊內、陣沒於朝鮮、子將監、事 貫明公於富隈城、稅所篤和為曾於郡地頭職、將監從徙居焉、至今子孫在曾於郡云、野史氏曰、

敷根賴賀列傳第五十

敷根中務少輔賴賀中初白備、中守備、號世休齋、其先

清和帝之曾孫多田滿仲、滿仲之五世孫左衛門尉光信、光信始姓土岐氏、光信之曾孫左衛門尉光行、光行第七子光定、元曆元年、甲辰之歲、始下隅州、領小河院敷根邑、光定生五郎兵衛義時、義時生武藏守義基、義基生源內重基、重基生久基、久基生安基、安基生四郎左衛門國房、國房避國亂、出居求麻、其後經三十六年、子賢太郎賴房復歸敷根、賴房生賴義、賴義生義忠、義忠生賴忠、賴忠生忠堅、忠堅生重基、重基生基繼、基繼生成基、成基生興山、興山生備前守賴次、賴次生備前守賴重、賴重生備中守賴愛、賴愛生賴賀、自光定至賴賀、世々食邑於敷根、因為敷根氏未知誰世皇土殿氏、為敷根氏之故、天文十七年、肝付省鈞謀叛、自廿一年、至天正三年、賴賀獨據敷根城、拒守凡廿四年、肝付氏降屬之後、貫明公賞賴賀忠節、益賜春花益田之地州備、田祿凡一千石、文祿四年、八月、去敷根城、移居田上城現在下大、慶長元

年、五月五日、卒、八十四、法號教忠動山、子備中守賴兼、天文二年、生、天正六年、九月十六日、先卒於敷根、年四十六、法號瑞慶院善忠信室、子藤左衛門尉賴元初稱三郎、文祿九年、生、天正中、賴元領敷根杏花井田祿三千四百石、十年、十一月、出成八代城、十五年、六月、從 貫明公朝京師、文祿元年、松齡公及一唯世子率兵至肥前名護屋、將赴朝鮮、而我戰艦未至、獨賴元乘特舟九編與九編航說在別記先至、則 世子乘之、先 公至釜山浦、因賜褒牒及秩一千石、慶長三年、十月初一日、明兵來攻新寨、賴元出擊有功、十一月七日、自泗川使南海、路遇颶風、舟覆溺死、年卅三、法號宗徹透林、無嗣、至四年四月、官以島津忠長第三子三十郎為賴元贅婿、遂以為之嗣、因冒敷根氏、是日中務少輔立賴元初名賴榮、母右馬頭忠將女、天正十年四月廿五日生、移居田上城、其後更賜高隈地、八月、去田上、之高隈居焉、十五年、正月、父忠長遣立賴質江都、十六年、十一月、幕府命歸國、是時賜大小刀小作正廣、驪馬一匹、衣裳一襲、十八年、兄島津久元與立賴田祿五百石、十九年、自高隈移居覺府、是歲賜市成邑、除前所食高隈邑、又累遷申良・伊集院・大口・地頭職、元和二年、四月十七日、東照廟薨、立賴與伊勢貞昌俱勤番於駿府、賜遣衣服五襲、寬永四年、四月十日、卒、年四十三、法號天山清真居士、立賴二子、長三十三郎賴國、為東鄉地頭職、寬永十年、卒於江戶、年二十、法號宗月月林、次藏人賴喜、元和五年、七月二日、以兄早卒故、繼父後、寬永十六年、六月廿八日、承 慈眼公女、廿年癸未、寬陽公使賴喜於京師、賀

後光明帝即位也、是時任筑前守、賜島津氏、改名久賴、正保三年、十月、重命久賴、賜世々島津氏、更源姓為藤原姓、慶安二年、命為國老、賜秩一千石、其後卒今島津仁十郎、即久賴之子孫也、世々食邑市成、

敷根仲兵衛賴豐（頭注）中一作明、備中守賴次第二子播磨守賴宣之六世孫也、領田祿

六百石、從伐朝鮮、尋遣賴豐及獲渡信豐使甲山營加藤清正所築、語在信豐事

中、慶長三年、十一月、公退師於朝鮮、使賴豐告小西行長曰、至

興善島而與相會、時敵艦塞海上、行長不能退師、且留賴豐、賴豐

曰、留於此無益、請別還、乃衝敵艦而還報、從而歸國、又從討莊內

賊、後為野尻地頭職、其後賴豐有罪被適、而卒、子越中、以父被

罪之故、放之某島、後見原、慈眼公殊徵為近侍今徵三左衛門、即賴次子孫也、

敷根十郎賴清、從軍朝鮮、慶長三年、十一月十八日、戰沒於南海瀨

戶、

敷根宗左衛門賴次、備中守賴愛弟也、戰沒於隈莊在肥後、法號昌龍吟叟

今敷根市左衛門、即賴次子孫也、

敷根掃部左衛門賴道、父掃部兵衛賴長賴長、乃賴道、永祿四年、賴道從右

典廐忠將、戰沒於廻、

敷根越中或云與賴豐子連中、同、俟再考、以步卒將屬上井覺兼、天正中、公選越中等五

十四人、為軍事參謀、十年、十一月、從覺兼之有馬、十二月四日、

攻千々輪城、先登被創、七日、歸八代、

敷根民部少輔、宮崎士也、天正十四年、從攻岩屋城、先登中名被

創、

敷根源六、宮崎士也、天正十三年、閏八月十一日、陣沒於隈莊、

敷根源八兵衛、弘治元年、正月廿二日、陣亡於北邨在浦、

野史氏曰、

西藩烈士千城錄卷之二十二

西藩烈士千城錄卷之二十三

白濱重住列傳第五十一

白濱備後守重住初稱八郎左、備後守、父曰次郎四郎重計、戰亡於蒲生、重計父曰

上總介重陣、永祿十二年、戰沒於阿久根、重陣父曰周防守某、屬入

來院氏戰死於某地、周防父曰加賀守重香、重香父曰次郎四郎重久、

陣沒於某所、重久父曰周防守重元初稱五郎左、重元父曰三郎重貫、重貫

即東鄉右重第二子、食邑於東鄉白濱地、因氏焉或云重貫死、數有奇異之事、自

重貫至重住凡八世、世世屬東鄉氏、至重住之世、公殊召而臣事

焉、從擊朝鮮、重住二男、長九助某、戰死於莊內之役、次恕兵衛重

增初稱四郎助、又稱右衛門、號恕一、嗣父後、慶長十一年、以慈眼公嗣立之故有犬

追物之事、是時使重增支子重將為射者之班、且更白濱氏為洪谷氏、

其先為洪谷氏之故也、前是重將上言曰、白濱重增臣宗室、願亦命為

洪谷氏、於是重增為洪谷氏之命云、元和寬永間、重增領田祿一百

石府下田祿稱、今於谷田右、石衛門、即重增之子孫也、

白濱周防守重政者、上總介重陣見再之弟也、而大中公之夫人與重政

有姻夫人之父、入某院重興、與、乃、重政之祖父加賀守重香之女、以故重政自幼給事內庭、公病、謂貫明公

曰、重政少有氣節、必成國家之用、不當置之散地、及薨、貫明公

乃賜重政田祿一千石、以為使役、兼大邨地頭職、數從軍、斬首捕虜

甚多、天正十二年、三月、從軍佐敷、四月、與上井覺兼俱赴有馬頭注、果不違公命、

十四年、岩屋之捷、從留八代城、十五年、戰沒於豐後鶴寄、子重

治、自稱次郎左衛門、號伴松、天文二十年、生、天正六年、從父戰耳川、十四年、七月、從父在八代城、及父没、命續父後、而為使衆、轉徙阿久根・大村地頭職、十六年、六月、從朝京師、文祿元年、公子歲久見殺於瀧水、是時重治多與其事、是歲從入朝鮮、慶長三年、十月、泗川之戰、擐皂甲、奮戰有功、其明年、六月、從討莊內、其明年、九月、從戰關原、重治二子、長次郎九郎重綱、病死朝鮮、年十九初松齡公在朝鮮加德島、而聞、慈眼公名護屋、於是使白濱次郎五郎者、遣輕、以迎、公、九月廿五日、船乘孤舟、而自其無家、十月、公去名護屋、廿五日、達金山浦、翌日、使次郎、及三郎七左衛門、次郎五郎、並與重綱同入、而諱公字也。次四郎左衛門重將初稱三四郎、天正十年、生、

及長、從赴朝鮮莊內、又從戰關原、後嗣父之後、而為阿久根地頭職、慶長十一年、有犬追物之儀、重將為射者班、是時命更為洪谷氏、其後、松齡公在柁城、召重將於茶室曰、汝大父重政、自幼事大中公、多勤勞之事、其語頗叮嚀、因多賜物、元和寬永間、重將領田祿一千三百石、五年、為京師知邸前此、我借京師及淡路之坊地、以進藩邸、而各置知邸、及重將而理、金屋、巧匠遠服將、重將二男、長監物重賢初稱三四郎、又稱

介、慶長十六年、生、慈眼公親加元服、既長為吟味役、及納戶奉行、轉徙松山・鶴田・田代・始良地頭職今改谷四郎左衛門、、一次次郎左衛門重知初稱三五郎、按委野由來記、有改谷三、重知五郎者、蓋重知也、而似時世不合也。事、慈眼公為御小姓、寬永十一年、從朝京師、後為、泰清世子納戶奉行・及吟味役、後遷芹箇野金山奉行、其後為大口假地頭職、賜歲俸二百五十石、重知嘗傳受伊勢流古實五字、說在於某氏、因、世子數召學之云、今改谷次郎左衛門、別記、

白濱重葉、自稱源左衛門、祖父大藏大輔重續者、二郎四郎重計之弟也、戰沒於橫川、父加賀守重賴、一天正十四年、重葉陣亡於岩屋城、子重辰自稱孫右衛門、慶長二年、陣沒於朝鮮今白濱八郎左衛門、乃重辰子孫也。、白濱志摩守重仲者、加賀守重賴弟也、天正十一年、戰死於肥前深江

重仲子加賀守重時、移居郡、重季子孫在郡城云。

白濱重安、自稱七助、從擊朝鮮、慶長三年、九月廿九日、明兵來建榜木於新寨下、公遣重安及穎娃親智出城而持還、書曰、明日闔軍必進攻城、於是十月朔日、平旦、大兵果來攻、重安為人魁奇、是日被白緞甲、加獸毛陣羽織三字、說在、先衆奮烈多殺敵、後從戰關原、及軍敗、吾士能屬者五十餘人耳、進衝重圍、是時重安高歌欸乃此、蓋常好歌欸、至此乃復歌、、餘少年皆續歌、公怒、而後止、從入伊賀山中、公遣重安擇逆旅舍、要其堅固、重安報曰、旅舍其堅如城、公悅、至則一茅屋、而無有他備、公怒曰、汝何誑孤、重安曰、公何見之晚、今此山林郊野、安有堅固旅舍、前日、公左右前後皆戰沒於關原、惟臣輩五十餘人猶從耳、而為池、為城、為戈、為杆、為鋒鏑、死生唯聽命於天而已矣、公安在其中、謂之如城、非邪、縱賊徒數百襲來、斬獲之如挫朽摧枯、公何憂焉、公欣然曰、孤過矣、遂以全還薩、

白濱角左衛門者、造酒丞某者之子也、松齡、慈眼二公俱召而近侍之云今白濱角左衛門、即其子孫也。、野史氏曰、

白坂昌棟列傳第五十二

白坂美濃守昌棟、一名兼棟昌棟、、嘗以踊橫川城主、而屬北原氏、永祿六年、始來事、委齡公、則為真幸院吉田地頭職、文祿元年、與二子助七郎篤昌・助六篤次、俱從擊朝鮮、慶長三年、十一月、篤昌陣沒於海上、昌棟篤次從而歸國、五年、東西師起、八月初一日、我軍進攻伏水城、篤次執槍與有馬純房馳入敵中、刺殺五六十人、遂陣亡

焉、其後昌棟命自帖佐移居柁城、卒時不知年月、昌棟第三子七右衛門篤實初稱豐、十、剃髮號與竹、從軍朝鮮、又從攻伏水城、直從如大垣、關原軍敗績、從而歸國、十月十日、賜褒牒及田祿一百石、後為 奈齡公納戶役、兼吉田地頭職、卒時不知年月與竹子孫令、在柁城云、

白坂將監篤義者、昌棟第二弟也、從 松齡公軍朝鮮、子仲左衛門、屬公子忠朗居柁城、子與市左衛門、國人莫不知其姣也、至今世比之古之子都氏云與市子孫令、在柁城云、

解魔法師白坂大學坊篤辰後更稱、益云、慶長五年、年十八、修行登大峯、路聞東西軍起、則獨馳至 公軍、公喜曰、未戰前而法師來、乃我軍之吉兆也、既而關原軍敗、從 公備經嶮岨、遂得全而歸國、賜褒牒及田祿五十石、其後以 公抗於 幕府故、至七年、國人猶恟々、未知國家之安否、於是遣篤辰及法亢大炊左衛門、俱如上國、探知事變、而後 慈眼公朝京師云、初篤辰居帖佐邑、及寬永十三年、官分內之浦地別為一外城、以篤辰為內之浦噯役、賜田祿三十石、於是使長子某留居麿府、而與次子某俱之居焉、明曆四年、戊戌、六月廿四日、卒、年七十五、法號權大僧都法印大覺、墳墓在內之浦按記、篤辰自少與敵戰、多被創、左而食云、今白坂市內左衛門、即篤辰子孫也、右指指不能食以飯、當食樽置之盤上、口附、

白坂仲左衛門或在仲兵衛、與持監篤、義子同稱、而異人、從軍朝鮮、白坂彦左衛門、白坂宮內左衛門、永祿七年、俱從 松齡公徙居飯野城、

白坂宗兵衛篤清、從入朝鮮、新寨之戰、擐白緞甲、由故館道逐北、敵一隊拒後前水放矢如雨、是時川上久智謂篤清曰、有被緋甲將能指

揮子射焉、篤清乃執六錢鉛子鳥銃射殺之、敵遂敗走、白坂式部少輔篤國、從入朝鮮、後又將士卒十二人、與諸將俱入琉球云、

白坂佐渡、初屬北原氏、後來事我、而為某邑地頭職云可再、考、

白坂藏人實眞新納忠實記、有姓名、野史氏曰、

東鄉重尚列傳第五十三

東鄉大和守重尚者、菱刈重州第三子也、初名重綱、稱彌次郎、出為東鄉重治之養子、冒東鄉氏、重治其先

桓武天皇第三皇子葛原親王之九世孫渋谷太郎光重親王生高見王時、高見王生高望王、寬平元年己酉、宇多天皇賜高望王姓平氏云、高望王村岡五郎文實、良文生二部忠賴時、忠賴生秩父六郎將恒時、將恒生小机六郎基家時、基家生、河崎平三大夫家重、家重生中山部重實、重實生渋谷莊司重國、重國食於相州渋谷、故為渋谷氏、重國生光重、

食邑於相州及薩州、而有子六人、長曰太郎重直、次曰早川次郎實重、次曰吉岡三郎重保、次曰大谷四郎重緒、次曰曾司五郎定心、次曰落合六郎重貞、而長子重直居相州、事幕府、其餘五人、實治、戊

申、春、以父命皆下薩州、而實重領東鄉地去年丁未、七月廿三日、幕府經賜實重、因書、封薩州東鄉邑地頭職、因來居焉、因氏焉一作實重居內、因為實內、俟再考、重保領祁答院院氏祖、重緒領鶴田刑部少輔重實家滅、定

心領入來院院氏祖、重貞領高城武藏守某、猶領高城云、世謂之渋谷黨、實重生太郎忠重、承久之亂、屬幕府有軍功、忠重生小次郎重高、薙髮號淨

心、淨心生左衛門次郎賴重、賴重生若狹守重親初名忠重、稱太郎、又孫次郎、又門衛、幼嗣父家、後家臣完野某鳥丸某等謀叛、重親討之、不克、延慶元年、戊申、九月廿三日一作八月、入定重親豈學、而死、年廿三、崇其靈為

重親大明神、重親無男、弟太郎左衛門氏重初名重清、又武重、稱車內二郎、又嗣其後、元弘建武之亂、氏重屬將軍尊氏、有戰功、氏重生薩摩守右重初名忠重、稱次、又高師太郎、

文和中、屬 定山公、有忠節、右重生薩摩守重元初名重信、稱又二郎、又二、重元、稱又二郎、又左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

元生薩摩守重明初名重光、稱次郎、又左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

重信、重信生隱岐守重理初稱左衛門二郎、又、左馬允、稱次郎、又左衛門尉、又山城守、又二、、重

成城、而鄰邑皆降、更無佗援兵、以故不能全城、遂出降、文祿元年、夏、重虎從兄豐久至朝鮮、十一月十日、松齡公使重虎去東鄉氏復島津氏、賜名忠直、既而有疾、不能祇役、請歸佐土原、子若狹

守昌重初稱安親、又九郎、慶長十五年、生於日州田尻、寬永九年、

從 慈眼公朝江都、道至莊內高城、賴兒玉筑後守上言曰、（頭注）家連一作祖業、臣家連衰

微、祿少才拙、不可以為島津氏、願更賜佗氏、於是翌年四月、命為

東鄉氏、以嗣重尚後、至正保三年、十二月、命昌重又出東鄉氏、為

樺山又九郎久尚養子、冒樺山氏、更曰諸右衛門尉久廣云、九右衛門

尉重經初名忠忠、稱多喜、又多喜、忠直第二子、昌重同母弟也、慶長十七年、壬子

之歲、生於菱刈、以昌重出為樺山氏養子故、正保三年、命重經嗣重

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

尚後、延寶二年、十一月七日、卒、年六十三、法號一岳道貫居士今東鄉九郎

不惟通示現流、且傳授組討及鎌手、亦有弟子、」又云、重位好和歌、傳受三鳥三木之秘、又能書畫、有間輒摹寫書籍、終身所膳

摹有一千餘卷、」又好茶式、亦能通之云、

重位門人、長谷場典兵衛（重位二歲、嘗能擊體捨流、後師重、重位門人、久武、兒玉筑後利昌、藥丸大炊兵衛兼陳左衛門兼福、稱則髮部兵衛、活慶新藏兼雄、世々傳授示現流云、如上門人、治場四、此五人其高弟也、）大山三次、川上久國（久國門人、伊勢兵部貞照本場、春田主左衛門、本田半兵衛親純純純純門人、伊是公浦示現流始也、田中喜之助深山、師松浦之宗、後棄其術、而學力流云、其父田中雲右衛門、以來此云條山門人和田氏、大山氏、大藤氏、野崎氏云、）久保平内左衛門之昌、市來惣兵衛、愛甲次右衛門康宗、稻津傳彌左衛門（與傳彌左衛門俱投術云、後至薩

府平田大監物宗兼迫及之於市來邑、而傳授其術、宗兼臣水井源太左、又傳其術、今東氏、有川氏、又傳其術、俗此云門流居谷劍術也、東

鄉與助等、亦能其術、其餘可續考、

子肥前重方（初稱彌十郎、及家臣藤井四郎兵衛、）母松元伊豫女、慶長十二年生、及父卒、續後、賜坊泊地頭職、而命創建能岳寺於府城南、而安置能岳俊藝庵主之神

主、其後重方為町奉行、轉徙總田地奉行（奉行總、重方受術於父、術既通、為泰清世子師、萬治二年、己亥、八月七日、卒、年五十三、）法號雄山州英菴主、葬南林寺、重方學老莊、又能通五音、且能圍

棋、加之有墾田勸農之才云、

重方門人、伊集院仁左衛門久矩、小倉治左衛門、黒葛原周右衛門

入道可水、篠崎角左衛門入道正心、久保七兵衛之照、丹生彌兵衛

信詮、伊東隆右衛門祐房、山本宅右衛門是也、日高與市左衛門、

伊集院主水久明（頭注「或云、伯水重利門人、未知孰是、）速見新右衛門、是枝加藤左衛門宅元（宅元門人、僧普禪、世此宅元流、或普禪流、重利弟子有山城

之支流也、）岩元惣兵衛、東海徳兵衛（長崎、）等通其術云、

子肥前重利（初稱彌十郎、及藤兵衛、）母別府主殿重芳女、寛永元年生、幼時祖父重位

教術於看經所（三字看經、）凡三年、當此時 寛陽公亦常召重利於城中、親

授之術、因謂重利為己之弟子、及長繼父後、因為 泰清世子師（重方既為

世子、則重利兼傳、）是時 世子賜重利備前兼光小刀、後又為 大玄公之師

重利之他邦、則自稱早川氏、人不知其所以云（伊集院之子、藤兵衛重治世、家道衰微、退居宅

地及飛騨守一兵、重治五男、長壽五元門位、次雄十郎實隆、次平六後次、出命、頭注「藤木實木村、作直木村、」位照有故不嗣父後、以故其子藤兵衛門實助祖父地、實助二男、長壽兵衛之、次藤兵衛門實貞、出為川崎氏、次彌八郎實隆、實二男、長壽兵衛、今父、番印百日小香種、次六郎兵衛實守、為徒目付、）

重利門人、曰石原喜三左衛門（豐惠、）曰相良狩野介（繁、）曰鄉田源介、

曰白尾戸後右衛門、曰本田甚右衛門、曰小野郷右衛門、曰吉田甚

兵衛、曰税所彌五太夫、曰田代傳兵衛清方、曰種子島次郎右衛門

時貞（時貞以術傳之蒲生十帆足藤左衛門、藤左衛門以是傳之控家臣江夏五右衛門、五右衛門以是傳之日豐臣中原喜右衛門、其後改其子足流流、當是時、發劍於喜右衛門者、曰島津左衛門久備入道遊閑、其子左衛門久備、種子島權助門、其

弟次兵衛、清水源右衛門、上原金左衛門、黒岩正左衛門、等有其餘數十人云、）

東鄉源四郎重信、其先不知何許人、或云、大和守重治弟左馬介重貞

子孫也、祖父駿河守某（或云、郡守、）無男、以弟治部貞則第三子為嗣、是

日四郎左衛門重勝、重勝生重信、重信從 慈眼公朝鮮之役、慶長五

年、祗役於上邦、八月初一日、戰没於伏水城、重信無男、以弟長左

衛門尉重尚為嗣、重尚居柅城、及伊勢貞昌為谿山邑宰、以其當國無

餘暇故、使重尚代之以治邑事、因自柅城移居谿山、重尚嘗傳授日置

流射術於本郷義則、寛陽公師學重尚、賜俸祿十五石、其後重尚又

傳授射術於吉田一、水軒於伏水、萬治三年、七月初一日、卒、法號

傳弓院心與利成菴主（今東郷長左衛門、）

東郷重次、自稱勝次郎、父曰右衛門佐重歲、重歲父曰越後守重良號造、重良父曰美作守重前、有故去東鄉邑、往賴入來院氏、而居隈之城、重前父曰越後守重房、永祿十一年、戰沒於阿久根、重房父曰源左衛門重宗、重宗即薩摩守重隆第二子、自重宗至重次凡六世、重次屬入來院重時、戰亡於莊內之役即東郷次郎大、重次子孫也、一弟吉兵衛重明、文祿中、重時以重明質於京師、其後從軍重時朝鮮、後又從伯耆守重國子重時朝江都、子內膳重增、寬陽公命自入來移居覺府、今東郷太郎左衛門、其子孫也、

東郷兵部某、永祿十年、十一月、從攻馬越城、

東郷備前某、從 松齡公居飯野城、

東郷淡路某、日州人、天正中選智勇士五十四人為謀臣、淡路其一人也、

東郷刑部丞某、從死公子歲久於瀧水、法號助翁存佐上座、

東郷二右衛門重昌、湯田與七重成子也、重成九世祖民部重信、領祁答院湯田村、因為湯田氏、世々屬祁答院氏、重成戰沒於莊內、重昌為 松齡公荷物役、元和六年、謀東郷加賀重綱、更湯田氏為東郷氏

今東郷八郎次、即重昌子孫也、

野史氏曰、東郷氏系統雖正、而歷世之久、余未聞其有超群拔萃者、至重位而後、世皆服其英傑也、重方重利能傳父祖之術、重尚善射、而我藩之子弟競講習其術者不可勝數、則安得不謂之干城耶、

穎娃久虎列傳第五十四

穎娃左馬介久虎初名金福、稱少四郎、山城守兼堅之次子也、母帖佐氏、永祿元年

生、其先肝付兼元之次子二郎三郎兼政、義天公以為假子、賜姓藤原、名忠豐、及幕章五布掛詳見、及穎娃山川揖宿地、因以為穎娃

氏、任美作守、兼政辭名不受、餘皆受之云、兼政卒、子二郎三郎兼鄉嗣、兼鄉卒、子山城入道兼心嗣、兼心卒、子山城守兼洪嗣、兼洪

卒、子兵部少輔兼友嗣、兼友無男、弟山城守兼堅嗣、世々有穎娃揖宿山川地、天文八年、三月、大中公自將平定谿山、入神前城、是

時兼堅往謁焉、因安堵穎揖宿兩邑田畠一萬五千一百餘石、兼堅卒、久虎嗣、初久虎有兄九郎兼有、母樺山信久女、早卒、繼母不慈惡兼有、兼有與肝

付氏有姻兼有妻肝付、兼有妻付、因去穎娃、往賴肝付氏、後來覺府、請島津家口等、遂得復歸穎娃、而居枚聞山、於是家臣津曲俊宗等相謀曰、九郎

君即適子、宜領穎娃一邑、小四郎君領揖宿一邑、車如有兩輪、相輔翼、則穎娃氏長久、何福勝之矣、內議既決、及是時、穎娃新左衛門

兼豐潛引家臣等襲兼有于枚聞等、兼豐自執弓射殺兼有、枚聞山座主以下皆戰沒、書曰、元龜元年、七月十八日、小四郎久虎殺其兄九郎

兼有於枚聞祠、權不足也、兼有有子、賴外祖樺山氏、因冒樺山氏、曰助七、今樺山孝左衛門、即其子孫也、天正三年、以 貫明公嗣立

故、三月十五日、有犬追物之事、久虎為射者班、射犬十一匹是時久虎自稱高濬小四郎、四年、從破高原、六年、從戰耳川、九年、以副將從 松

齡公軍水股、十年、十二月、與諸將攻千々輪城、血戰被創、事在山田有信傳、十二年、三月、軍島原、十三年、秋、出軍三舟、十五

年、四月、從襲目白坂、八月四日、卒、年三十、法號桂岳林昌居士、子彌三郎久音初稱斐、而改壽、母桐原氏、天正十一年生、初久虎約以伊

集院忠棟子千壽丸為養子、及久音生、遂違其約、天正十年、十一月三日、夜、忠棟家臣阿多源太・平野新左衛門・殺野村民部少輔、而

出奔、是時我有事於肥後八代、於是本田下野守遺書於八代諸將曰、源太新左若在焉、宜誅之、而不知其所、其後及久虎朝京師之日、官知二人潛匿京師、於是使久虎誑誘二人、送下穎娃、而誅戮之、以故忠棟怨久虎久之、至十六年、戊子、忠棟遂讒久音、籍沒穎娃揖宿山川三邑、而別賜谿山之地方三十町、至文祿二年、改賜伊集院之地西股、慶長二年、從入朝鮮、一日、公從容謂久音曰、孤歸國之後、必復封汝舊邑、且為壻、三年、十月初一日、新寨之捷、久音力戰有功、越八日、病卒、年十六、法號一榮宗麟居士、無嗣、官以島津義虎第五子忠富嗣之後、冒穎娃氏、是曰彌一郎久秀、其後復使久秀出穎娃氏、嗣入來院重時後、冒入來院氏、改曰伯耆守重高、而別以鎌田政近第四子嗣久音後、冒穎娃氏、是曰左馬介久政初稱長五、衛門、久政母土佐一條氏、天正十二年、三月廿九日、生、寬永七年、四月十八日、大猷廟枉駕於櫻田邸、久政謁焉、而獻大腰刀及裕五襲、猷廟賜裕五襲及白銀五十枚、廿一日、台德廟亦枉駕焉、久政復獻腰刀及裕三襲、而謁焉、台廟賜久政白銀五十枚、其後、公賜久政日當山東鄉村、除舊所領西股、十九年、命為國老、累遷末吉高岡伊集院地頭職、慶安二年、三月十三日、卒、年六十六、法號一翁源忠大居士今穎娃長左衛門、即久政子孫也、

穎娃主水親智、從軍朝鮮、慶長三年、十月、新寨之戰、諸將逐北、過舊館大道、有坂於前、敵三百人許、據坂為矢叢齊放、是時親智擡赤白雜縞甲、冑前設舞鶴大立物別立物置在、揮腰刀、大呼先登、中矢倒臥、會川上久國馳至、即拔矢、使石川二石扶持而歸城、既癒、從而還國、十四年、以副將征琉球、有功、後有罪、放于七島、其後遣監使二人賜自割死、

按舊傳集曰、朝鮮之役、慈眼公年十七、銳敏絕倫、動輒先衆、一日、公見明騎二人出護其兵、乃獨往馳、身自與戰、危甚、親智傍觀曰、世子亦當苦鬪、以知士卒情、終不助、良久公擊二人皆殺之、既而怒曰、親智不臣、命賜之死、國老私相議曰、彼勇敢善戰、可惜也、佗日、世子亦必悔之、乃竊舍還國、放于州七島南共在九州、其後、公振旅歸國、居數年、從左右遊于府南匹練洲、風景四面似泗川、公語及親智、因嘆曰、彼臨陣大呼奮擊、敵兵皆披靡、其死可惜矣、國老相視而私語曰、可矣、乃告之故、公復怒曰、彼信有罪矣、汝等愛其材而私舍之、不忠也、宜早誅之、以正典刑、於是國老乃遣監使二人往賜死、親智稽首曰、臣死莫矣、乃藥刀櫛于柱、刃芒向前、笑謂使者曰、我使二君知吾能無懼而已矣、乃走自貫腹而死、君子曰、夏書曰、董之用威、公於是乎能刑矣、一罪而民畏之野史曰、古人曰、縱飲酒、非剪惡之法、絕禮加賜、漢文帝金瓶、今按慶長十四年、有親智征琉球之事、則其無得罪於朝鮮者、不問而可知也、舊傳集多是古老口實之說、似不可盡信也、

野史氏曰、

西藩烈士干城錄卷之二十三

西藩烈士干城錄卷之二十四

祁答院重加列傳第五十五

祁答院河內守重加、剃髮號加雲齋、賊魁祁答院良重事見之庶孽也、事良重居祁答院、及良重滅亡、重加犇飲肥、貫明公殊召而為祁答院氏大宗子、重加無男、以本田半兵衛適子為養子、冒祁答院氏、遂

以為嗣、是曰半次重次、從軍水股、又從擊朝鮮、又從戰關原、軍破而戰沒、因賜其家褒牒、重次亦無男、以谷山周防介重政子續之後、冒祁答院氏、是曰次郎兵衛重房、元和中、重房食田祿七十餘石、後重房更祁答院氏為泷谷氏、今泷谷次郎右衛門即其子孫云、

祁答院河內守良重初稱又、其先澁谷太郎光重第三子吉岡三郎重保一作重、寶治二年、春道備公、兄弟五人始下薩、重保為祁答院官城、佐志、黒木、鶴田、山崎、郡司、由是為祁答院氏、重保生平太郎重尚、重尚生又二郎重松、

重松生平次郎行重、行重生二郎左衛門尉重實、重實生出羽守公重、公重生出羽守重茂、重茂生遠江守久重、久重生播磨守德重、德重生遠江守重慶、重慶并吞虎居城今宮之柏原・紫尾・終野・合志・湯田・佐司・時吉・中津川・黒木・大村・久留木・山崎・上船木・下船木・木泷・蘭牟田・長野等數邑、方五百六十餘町之地、兵勢強大、重慶生常陸守重貴法施行、重貴生伊勢守重武、重武傳領祁答院、居虎居城、享祿二年、正月廿二日、重武攻取帖佐本城新城、翌日又拔山田城、天文四年、大翁公殺川上昌久於大興寺、於是其同志者十餘人、恐罪及己、或退居避難、或黨島津實久以叛、於是公請兵於重武及北原氏、重武則自將至麿府、北原氏亦遣北原加賀介來會、是時谿山兵實久入麿府、放火邨落、重武迎戰於滑川、大克之、逐至谿山、復戰神前城外、本城福元兵來援、橫擊重武軍、重武家老栗野越前以下數十人戰沒、重武遁還帖佐、實久直進入麿府、公夜乘舟至帖佐、賴重武及北原氏、七年、七月廿三日、卒、法號儂岩行登大禪定門、崇其靈為鬼丸明神、一重武生良重西大永六年、良重為人驍勇能彎強弓、而黨入來院東鄉蒲生三氏以叛、大中公、天文廿三年、八月、與蒲生氏等俱攻柁城、肝付兼演乞救於我、於是九月、公自將往援

之、至帖佐、結營於平松、擊帖佐兵重實於岩野原、十月二日、進攻岩劍城、是時良重適子重經率二千餘人來援、大戰於池島、敗績、重經・及西股武藏特種兵以下五十餘人皆戰沒、城陷、弘治元年、三月二日、良重與我戰於別府川、八日、肝付兼盛兼演設伏山田、而來侵帖佐、良重出擊之、兼盛佯走、良重逐至伏處、伏兵猝起、斬良重兵廿三顆、十七日、我軍岩野原別府川、而攻帖佐城良重、城兵出拒之牛渡原在岩野、而敗績、我兵遂放火民屋、擊破城門、斬賊一百餘顆、攻擊凡五日、城中遂力屈、四月二日、夜、帖佐・本城・新城・山田兵皆自拔而逃還祁答院、七月、良重求援於蒲生氏、因欲復帖佐、廿五日、進襲帖佐敗績、東鄉將監白濱某等以下數十人戰亡、永祿九年、丙寅、正月十五日、良重為妻所弑妻島津實、初良重放逸荒淫、且好田獵、輕出、妻常諫之、不聽、去年冬、出田於上宮山、是日歸城、至夜、妻飲之酒、候其沉醉、遂自刺殺之野史曰、普武帝及良重、同因婦色、以、邨尾龜古令人心之觸、可畏哉、、在側、急投果覆壓妻、拔刀刺胸、立死、至是祁答院氏滅絕、良重時年四十一、法號樹蔭行鐵大禪定門、墳墓在大邨龍石、祁答院地遂為入來院重嗣所有、良重三男、一女、長又二郎重經、戰沒於岩劍城、次出家、居入來院壽福寺、次藤兵衛重種壽福寺僧、子、及女溺死於某淵、不知其所以、

附錄

久富木兵庫重全良重家老、久、富木城主、栗野越前重武家老、天文四年、高城武藏重治良重家老、後來、山縣壹岐言甲、吉田出雲清良、北原安藝兼雄、船木播磨船木城、鶴田左馬主、鶴田城、朝隈肥前伴兼、鶴田長門重次、富光信濃湯田村、祁答院加賀、祁答院平次郎朝隈之後、有祁答院平次郎、祁答院平五郎、大井越中、大井孫太郎、大井刑部、湯田越後、高城民部、坂本又左衛門、折田外記、前原鄉兵衛、前原孫十郎、鈴木內

藏助、久富木兵部、青木右馬介、久富木平七郎、船木又八郎、石塚下野、石塚兵部左衛門、石塚彌九郎、青山甲斐、岩木左衛門、岩木與五郎、長野木工之允、谷口宮内少輔、谷口平左衛門、田中十郎三郎、大窪源左衛門、蓑毛備後、蓑毛外記、蓑毛源七、高城將監、東鄉駿河、東鄉右近允、中野宣右衛門、東鄉淡治、青山豐前、青山左京、安永五郎右衛門、安永孫七、藤井筑前、藤井六郎、藤井因幡、新原壹岐、新原小三郎、吉田山城、野崎但馬、野崎彌四郎、床并彌左衛門、床并次郎四郎、堀内權太兵衛、上井神三郎、前原伊賀、前原權太左衛門、前原仁五郎、田中主馬、鈴木壹岐、高城筑後重次、青山土佐尚豐、二渡壹岐、吉田右馬清興、神保十郎、長田備中、長田右衛門兵衛、池上越中、池上隼人、富光又六郎、蓑毛美濃、蓑毛主水、藤井木助、藤井又七郎、藤井宣七兵衛、原口越後、前原七郎右衛門、藤井勘解由、高城六郎右衛門、成松舍水、西山肥後、西山又十郎、鉛中左近兵衛、立木玄蕃、立木藤次兵衛、鳥取源左衛門、田上藤右衛門、田上五郎右衛門、石澤織部、鈴木木工之允、瀬戸口與一兵衛、中島木工之允、以上百人、事重武及良重、為頭領巨魁、以寇我者也、

野史氏曰、

奈良原資列傳第五十六

奈良原長門守資、姓源、其先

嵯峨帝皇子融大臣、融生正三位左中将昇、昇生從五位下武藏守任^{子第三}、任生源二宛、宛生内舍人渡邊別當綱、別稱箕田源二、與碓井貞光・卜部季武・酒田公時、俱事源賴光、有大功^{俗語四人為、四天王}、綱生源二

久、久生二子、長曰貞、居渡邊、次曰源二安、始為瀧口氏、安生二子、長曰源太郎傳、是為肥前松浦黨祖、次曰右馬亮至、至生好^{子第三}、好生源五於、始為筒井氏、於生源八高^{子第四}、高生大和守國、國生筒井太郎安、安生兵部少輔和、和生筒井法眼須回、回生忠、忠生源二賢^{子第五}、始為奈良原氏、賢生左馬亮通^{子第六}、通生二子、長曰左馬亮好、次曰帶刀周、周居山城州加茂、而與兄不睦、始下薩摩州居焉、周生大膳正覺、覺生二子、長曰伴五郎允、次曰助八郎滿^{滿事、圓室公、永正五年二月十五}、望生彌六左衛門行、亦事大翁公^{功、島津實久與書感實之云、依厚考、}戰沒於某地、戰沒於某役、行生彌三^{作六}、左衛門兼、兼生資、自融至資、凡二十五世、一資事梅岳君、為殿中奉行、而賜之加世田七浦之地、天文十四年^{一作永祿、}君使右馬頭忠將往援飢肥城、資及春成兵庫久正・柁原藤七兵衛屬焉、六月十六日、伊東氏兵入長慶寺^{在飯}、久正血戰死亡、十二月廿七日、敵兵復侵飢肥、放火箭急逼、我兵拒之於板敷、是日資藤七兵衛俱奮戰死之、法號慶秀、一子安藝守延^{初稱野、}天文十七年、九月、本田親知降、延等進逐出屯兵^{所北原長、}三十餘人於城外、十九年、十二月、從大中公、自伊集院城移居慶府、元龜三年、五月、鎌田政近設伏於牛根二川、破肝付氏兵、是時伊集院久春請延兄弟、進戰焉、兄弟戰甚力、其後肝付賊築砦於廻、以侵我邊疆、公子歲久以上將往討之、延亦從焉、進擊破砦、天正元年、七月、肝付賊兵襲我早崎營、久春及延俱率步卒而擊破之、二年、十月、移居國分新城、四年、為酒谷地頭職、五年、二月、賜福島之地田祿若干石^{此野本田親實、平田光宗、上并繁兼、島津忠}、列姓名具押字、以為勳事、同、六年、十一月、從破大友軍於耳川、八年、八月、從軍水股、及肥後屬麾下、遣延番戍鷲城、十年、十二月、出守八代城^{松前、}十二年、三月、從諸將大破龍造寺氏於島原、十三年、秋、從

出軍三舟、十五年、四月、羽柴秀長抵日州、延及長子敦俱援成高城、其後從戰朝鮮、卒時不知年月、法號經三、子狩野介敦、慶長二年、二月、屬島津忠長至朝鮮、八月、從攻南原城、三年、十月初一日、進塞之捷、被紺緞甲、頗有戰功、既而歸國、卒時不知年月、法號道心、子狩野介豐、母竹內備前女、天正十八年、生、元和五年、七月十五日、卒、法號宗林、無男、以猪股左近第三子元和二年生嗣之後、冒奈良原氏、是曰清左衛門長、為吟味役、卒時失年月今奈良原清左衛門、即長也、

奈良原大膳正廣、資第二子、與兄延俱從行朝鮮、慶長三年、十一月十八日、進衝敵艦、遂戰死、法號快宗俊活、

奈良原喜左衛門質初稱次、延第二子、朝鮮之役、質以自賦渡海、歷二十日至本屯、公賞其勞、賜衣服及田祿若干石、而為一唯世子侍衛、文祿四年、從歸、十二月、賜田祿若干石國老本田三省、伊集院幸胤、為書、同列姓名并押字、以證之云、寬永八年、閏十月廿六日、卒、年六十四、法號橋西、子帶刀重初稱清、生死不知年月今奈良原助左衛門、即重之子孫也、

奈良原源八郎、天文十七年、九月五日、破北原氏戍兵於姬木安藝守延傳、已載破北原氏中、記等、多有書源八郎者、俟再考、大、

野史氏曰、

曾木重治列傳第五十七

曾木播磨守重治、元龜三年、壬申、五月、陣沒於木崎原、年六十一重治子孫今在柁城云、一是役也、有名島彌右、衛門者、忠僕也、至其子孫給事曾木氏云、

曾木五兵衛尉重泰初稱權、菱刈氏小宗也菱刈氏始祖進士判官重珍第三子三郎、重茂、食邑於曾木、因為曾木氏、天正十八年、從一唯世子軍小田原、又從擊朝鮮、泗川之戰、重泰被紺緞甲、是日、慈眼公先諸將、開門逐北、有赤隊於前、候我空壁、將疾入我壁、松齡公望見之、急使重松告、慈眼公而還保壁、未及還報、赤隊亂遁走、是則我將寺山久兼出其背後、擊不意故也、關原之戰、先鋒島津豐久軍既破、於是左右謂公曰、宜擐甲、重泰乃擐甲公、既而軍敗、從而歸國、賞賜褒牒及田祿五十石、後命為納殿役、居柁城、其後重泰及上床藤左衛門二人俱從公女、質於江都云

重松子孫今在柁城云、

曾木彌次郎重貞重貞弟、事松齡公、為御小姓、居柁城、慶長四年、從慈眼公戰莊內、而被創、五年、東西軍起、於是八月、長壽院盛淳・伊勢貞成・應徵發兵、重貞兄蓋重弟亦從焉、廿日頭注「船着濱陵」、船着大坂、九月初一日、至大垣、十五日、關原軍破、兄弟從而逃、廿一日、至住吉、廿四日、從乘舟、十月初一日、至日州細島、自此重貞從執公佩刀、而至濱之市、十七日、歸帖佐、賜褒牒及田祿五十石重貞子孫今在柁城云、

曾木甚右衛門重正初稱權、天正十二年、三月、從戰島原、斬敵軍師守一軒、寬永十六年、某月十四日、卒、法號月江宗心居士、墳墓在南林寺今曾木甚右衛門、即重正之子孫也、

曾木越中、永祿七年、從松齡公移居飯野城、與山口大藏俱為吉松假地頭職、

曾木千次郎、從擊朝鮮、子孫今在柁城云、

曾木彌兵衛、為慈眼公納殿役、居柁城、

會木日向、慶長十八年以下開

野史氏曰、

禰寢重長列傳第五十八

禰寢右近大夫重長、父曰式部少輔清年、母島津忠興女、清年父曰式部少輔重就、重就父曰大和守尊清、尊清父曰山城守重清、重清父曰出羽守忠清、忠清父曰山城守清平、義天公之世、應永廿四年、與弟能登守清息、俱戰亡於川邊、清平父曰右馬介久清、久清父曰右馬介清有、清有父曰大和守清成、清成父曰三郎丞清保、清保父曰孫次大夫清治、清治父曰大夫丞清親、清親父曰三位中將清綱、清綱父曰右近大夫清忠、清忠父曰沙彌行西清重、將軍賴家封清重隅州禰寢院大根占、小根占、佐多、田代、津賀等數邑也。、北條時政之所策也。是時賴家所賜之書、及時政所賜之書、於是清重來居焉、因為禰寢氏、清重父曰妙覺律師高清、高清父曰左中將維盛、維盛即大相國清盛之孫、而小松内大臣重盛之子也、自清重至重長、世々有禰寢院、大根占、小根占、佐多、田代、津賀等數邑也。天文八年、重長從大中公討市來賊、十一年、種子島惠時父子不和、直時請援於重長、於是三月廿二日、重長率兵船三百餘艘、至種子島、圍惠時内城、惠時長子時堯能拒、不能拔而歸。據本傳、此時即時堯初名也、由是觀之、疑堯、弘治元年、從戰帖佐、四月二日、帖佐山田二城降、使重長唱凱歌、其後重長黨伊東・肝付・伊地知三氏、寇于我數年矣、永祿四年、公自將往圍廻城、重長與伊地知氏俱來援、元龜二年、五月、貫明公在揖宿、廿四日、重長乘舟來侵摺之濱。在揖宿、我軍拒戰、重長中流箭、拔箭血戰甚力、遂敗績、天正元年、癸酉、春、公遣實持院在實持、及國老等輩、僧及八木昌信、至禰寢、推誠撫接、重長遂感恩威、不敢復有叛意、於是乃遣新納忠元・伊集院久治・上原

尚常、率兵往援焉、三月十日、公復至揖宿、遣兵援忠元等、十四日、我早崎之軍亦至、而與揖宿兵合、進至高須濱、十八日、攻圍西股城、肝付兼續自率大兵來援、戰不利、遂引退本城、於是諸將各班師、是時重長來謁、公、直從還覺府、賜燕數日而遣歸、當是時兼續復率甲襲根占、重長拒戰於橫尾、斬獲敵兵五十餘人、兼續遂引去、其後、公加封重長鹿屋院與國老所、三年、十月廿日、有犬追物之事、重長為射者班、射犬五匹、八年、三月十六日、卒、年四十五、法號成圓寺殿月窗成圓大居士、墳墓在小根占寶屋寺、後崇重長靈為鬼丸大明神、重長在世之日、有禰寢院田祿凡八千三百三十餘石云。張之世、子重、子安藝守重張初稱聖代、又更七、代立、母肝付兼續女、永祿九年、四月九日、生、天正十年、人有告重張謀反者、重張恐上誓書、以謝焉、公亦賜誓詞云、十三年、秋、從出軍三舟、文祿四年、秋、命易禰寢院以薩州吉利邑田祿三千二百餘石、因移居焉、慶長五年、往護衛伏水邸、八月、從攻伏水城、先登、公乃使川上久智褒賞之、九月十五日、關原軍敗、重張相失、公所、與喜入撰津・新納旅庵・本田助之丞父子等逃入伊吹山、翌日重張出山中關、是時家臣或陣沒、或離散、家臣三人僧賴實一人從耳、至江州小松、投旅舍、既出而潛匿草野震穴中凡七日、東軍部下、搜出捕之、護送之大坂山岡修理亮所、以賴實為僧故獨見原、餘皆下獄、於是賴實求哀修理亮及淺野紀伊守、巧重張及從者三人生、繫獄凡三十六日。自十月六日、至、而後皆見原、重張乃出泉州境、至藝州廣島、則有根占僧文職房者、游學在焉、重張賴之、居數旬、至六年一作七、正月十五日、遂還國、八年、國家始安寧、於是二月十六日、燕諸將士於覺城、重張亦陪焉、寬永六年、三月十九日、卒、年六十四、法號龍雲存白居士、慈眼公作歌追悼之

後重張子孫帶刀清等之世、官命更禰寢氏為小、今小松君、重張之裔也、世々領吉利、

根占清長一作清良、自稱權之丞九郎、柁城人也、事 松齡公、數從軍有功、又從入朝鮮、慶長四年、又從莊內、六月廿三、我軍進攻山田城、賊兵三百餘人強能拒、是時清長與壯士七八人、違新納忠元節度、先驅直登陣、奮勇血戰、遂沒賊、葬柁城椿窗寺、法號無二無三禪定門、初人稱清長會敵不量其多寡強弱、無二無三守一不變、俗此云無二無三、直前力戰、時人目曰豬武者猪性直向前、不能顧敵不顧左、俗此云猪武者、至是戰沒、野史曰、

北原兼親列傳第五十九

北原掃部介兼親親初、又、太親、其先肝付氏始祖兼貞第三子右兵衛佐兼幸、始領日州真幸院、居飯野城、為北原氏、卒法號明善天、禪定門、子左馬頭兼貞嗣、卒、子右馬頭玄兼嗣、卒、子左馬頭玄幸嗣、卒法號笑定天、禪定門、子周防守範兼嗣、黨相良氏、始畔 怨翁公、後與相良氏弟祐賴者鬪狼、相刺而死法號高、頭生、子周防守久兼嗣、覺父非降屬我、逐出相良氏戌兵父時所、而、乞援兵於我、以保守飯野以保守飯野、史記句法、、應永間、從 公如京師、謁將軍義持公、任左馬頭、卒法號大度、玄祐、大禪定門、子長門守兼興嗣、卒、子又五郎貴兼嗣、初長子又五郎寬兼、背父命自殺、以故次子又七郎兼門、繼父家、先卒、及貴兼卒、孫豐前丸猶幼、叔父長門守立兼兼兼弟、兼兼子、撰家政、後黨伊東祐國、以畔 圓室公、文明十七年、與祐國俱見殺於飢肥、其弟民部少輔兼珍、謀兮出豐前丸、而自有真幸院、時長享二年也、於是豐前丸出奔於求麻、賴相良左近將監賴泰、後自改名義兼、稱中務、而娶賴泰女生男、曰之武藏兼幸、兼幸在於求麻、生兼親、兼親快々日思歸國、及永祿五年、兼珍孫兼守兼守事見後死、真幸院盡屬我、大中公以為真幸院乃兼親曾大父兼門舊所領、於是殊召兼親於求麻、復賜真幸

院、以故兼親有感恩報國之志、至七年、十一月、兼親叔父北原左兵衛尉在吉松城、而與相良氏伊東氏相謀、將攻殺兼親、公聞其事也、慮兼親遂難孤立、乃以薩州伊集院神殿村方三十町之地易賜于真幸院、兼親因徙居焉、於是乃封 松齡公於真幸院、天正二年、十月廿五日、貫明公詣伊作八幡祠、兼親從焉、四年、從赴高原、卒時不知年月、無男、以比志島義基次子彦次郎為養子、改曰治部左衛門兼茂、慶長五年、兄比志島義興病卒於伏水邸、兼茂與比志島國家俱率義興家臣等、從攻伏水城、續從關原軍云、初兼茂居伊集院、食田祿三百六十餘石、及伊集院忠貞畔我、強誘兼茂、不可、因訴之官、賞其功、益賜田祿一百石、其後從國分新城、卒時不知年月、

北原又八郎兼守、民部少輔兼珍之曾孫也、兼珍生民部少輔久兼、久兼生又二郎祐兼、大永亂、祐兼引兵襲取柁城、既而為肝付兼演所掠取、祐兼生兼守按舊記、祐兼早死、兼守猶幼、叔父、民部少輔兼孝撰其家政云、俟再考、、兼守娶伊東義祐女、而居三山林今城、并吞飯野、加久藤、高原、高崎、志和地、山田、馬關田、吉田、吉松、栗野、橫川、日當山、踊數邑、有精甲一萬人、而與北鄉氏數構兵相侵掠、天文元年、十一月、祐兼或云、以下至十七年、字當作兼守、與伊東兵戰日州、求援於島津忠朝、而擊破伊東氏於下河內、斬首三百八十餘級、是時伊東氏棄新納氏野々美谷而引去、四年、大翁公遣使乞援於祐兼及祁答院重武、因祐兼使北原加賀介報復慶府、十月、公為島津實人所逐、出至帖佐、賴祐兼及重武、祐兼等乃謀居 公于吉松般若寺、十年、六月、祐兼按忠傳、至以下十一、屯志和地、伊東氏軍鳥越、合力、攻高城北鄉忠相保、解怨、結好、反觀似遊、、不克、十一年、三月、梅岳君自生別府乘舟、徂征柁城、至此時、祐兼率兵來援、俱攻肝付兼演、不克、宗族家臣陣沒者七十餘人其後不知祐兼所、俟再考、、八月、兼守與伊東義祐合、與北鄉忠相戰

於小山河原、兼守將白坂下總志和略以下兵士數百人戰沒、十二年、正月、忠相取山田城兼守所、五月、忠相陷志和地城、十七年、本田薰親據清水城叛我、兼守遣平良尾張白坂助左衛門、率兵百餘人屯日當山城、又遣北原狩野介、率三十餘人入姬木城、以助薰親、八月、我軍攻陷日當山城、兼守所置守兵皆死、九月、本田親知主姬木城通志於我、潛入我兵於城中、兼守成兵不能拒、遂逃去眞幸院、廿三年、兼守與蒲生氏兵來攻柁城、自八月至九月、是時 公軍帖佐、援兼演、而攻陷岩劍諸城、於是兼守勢孤、遂引還、弘治元年、正月廿八日、兼守遣兵侵溝邊兼演所、不克、戰亡者數十人、永祿五年、兼守卒於三山、法號天陽昌春居士、無男、宗族家臣等相議、將以其叔父兼孝繼北原氏之祀、當此時、義祐欲以眞幸院為已有、乃使兼守妻女義祐再嫁於其族馬關田右衛門、潛謀殺兼孝今馬關田北川村間原有兼孝塚云、而以右衛門為兼守後、又將謀殺白坂下總高論城、下總懼、逐出奔、來賴樺山善久、於是兼守家臣皆惡右衛門不欲事之、以故眞幸院大亂、白坂美濃兼賴主開城先降我、而獻其土、自此栗野・吉松・馬關田・吉田・盡降屬我、獨北原伊勢介其子新助據橫川城、不肯降、六月、我軍進陷之、父子自割死、眞幸院平定、

附錄

北原周防介、吉田城主也、天文十一年、與渋江兵庫等率湯尾栗野橫川兵、至柁城、與肝付兼演戰、敗績、與從兵七十餘人陣沒、北原八郎左衛門、戰亡於柁城、北原八郎右衛門或云、蓋八郎左衛門子也、眞幸德滿城宰也、從又太郎兼親降我、白坂下總、志和地城宰也、天文十一年、八月廿日、戰沒於小山河原、子亦稱下總、事見于前、白坂助左衛門、日當山城宰也、天文十七年、八月、戰沒、

馬關田右衛門、事見于前、而不詳其始終也、平良尾張、與白坂助左、俱陣亡於日當山、

大河平越前、菊池氏之支葉也、而屬兼守、眞幸院擾亂之日來降我、有傳、

渋江兵庫允、天文十一年、戰沒於柁城、

宮蹟蹟一作栗野城宰也、北原氏家亂之日、為北原下總所逐出、

北原掃部介某、從關原軍、軍敗被擒、明且將斬、（頭注）斬一作別掃部性善吹天吹吹之長尺餘、前四孔、後一口、擊吹之、此云天、我少年輩好多弄之、作州不聞有此器也、其夜乞都伯、吹天吹、其聲悲壯清亮、聞

之者皆流淚、則請之司獄而免之、由此人名其天吹曰延命器、今猶傳藏之子孫家云、

野史氏曰、

五代友慶列傳第六十

五代右京亮友慶初稱勝友、複姓惟宗、其先魚名公五房公第之十三世孫・八文字民部大輔廣言、廣言生左衛門尉忠康、忠康生覺島大夫康友初稱內舍亮、右馬、兼是為執印、仲國分寺左衛門友久是為國分、叔

三郎康忠知法號、季友家是為豆野、康忠始為五代氏、生太郎師久、師久生三郎右衛門友家、友家生左馬頭友國、友國生式部大夫友備、友備生但馬守友豐、友豐生安房守友貞、友貞生助五郎友春、友春生周防守友政、友政生山城守友忠、事 □□公有戰功、賞賜驄馬、友忠生孫太郎友賴、陣沒於馬立、友賴生民部左衛門友親、友親生式部大輔友秋、友秋生筑前守友平、事 節山公、嘗奉命詣京師、有上書奉行浦上美作守則宗、而請二事者二事不詳、則幕府政義聽焉、而可之、則宗乃有報

書云、友平生左近將監友康、友康生左近將監友道、友道生兵部少輔友言、討伊東氏而陣亡、友言生助太郎友知、友知生豐後守友重、友重生孫太郎忠友、忠友生筑前守友綱、友綱生筑前守助友、助友生友慶天長九年、自康忠至友慶、凡十八世、永祿七年、從松齡公移居飯野城、為使衆、其後為家老、兼馬關田地頭職、木崎原之役、遣友慶將精銳四十四人、出自鳥山下野間門、擊敵將伊東加賀守祐安、獲其首、賞其功、賜田祿若干石、其後友慶禱祐安冥福、創建石塔其死所云、天正十八年、一唯世子擢知勇士十六騎、自將赴小田原、友慶父子亦從焉、文祿三年、豐公命細川幽齋下薩、始丈量起稅、是時公新賜友慶田祿五百石、友慶即獻之公子忠清云、慶長五年、加藤清正侵我出水邑、是時 貫明公遣友慶警衛長島、清正率戰艦數圍之、不克既而 松齡公自關原歸國、則清正不復來、友慶引還、賞其功、賜田祿二百石、七年、慈眼公朝京師、友慶從在伏水邸是時 松齡公賜友慶其邸其云、其後松齡公女嫁懸川侯行、任隱岐守、居數年、公數賜友慶書、寬永三年、七月廿七日、卒、年八十七、法號月松全春居士、墳墓在隆盛院、一子勝左衛門尉友泰作勝、母祁答院氏、永祿十一年、戊辰、十月、生、年二十三、與父俱從行小田原、又從朝鮮、文祿二年、九月、世子薨於巨濟營、友泰等奉柩歸國、而欲經歷日本六十餘州、藏六十六部大乘經於每國神祠佛閣、以禱 世子冥福、辭國至伏水邸、是時 慈眼公將赴朝鮮、命友泰從行焉、慶長三年、泗川之戰、友泰被緋甲、加猩々皮陣羽織（頭注）兵甲二字一作甲上、此本兵甲之衣、西語之稱也、血戰多殺敵、十一月十八日、樺山久高等為敵艦所圍於南海島、命友泰及伊勢貞昌等使焉、事在貞昌語中、既而還報於巨濟營、賞賜田祿一百石一作二百、從歸國、後從戰關原、軍敗歸國、是歲為加久藤地頭職、因移居焉是時、寬永十九年、八月十八日、卒、年七十五、法號參香、墳墓

在隆盛院、一友泰二男、長主水佐友貞、母亦祁答院氏、文祿三年、三月、生、寬永八年、十一月廿一日、先卒、年三十八、法號清香、次仲兵衛友光、友貞同母弟、慶長十一年、五月、生、以兄早卒故、友光為之嗣、後為清水地頭職、正保三年、六月五日、卒、年四十一、法號月清今五代勝左衛門、即友光之子孫也、

五代舍人友安初稱助、友慶第二子、母壹岐助五郎女、元龜三年、生、及長友慶請官以其所領田祿二百石分與友安、友安為船奉行、從軍朝鮮、慶長五年、從攻伏水城、執槍先登、擊破松丸口、遂從赴關原、寬永十年、五月廿五日、卒、年六十二、法號榮光院是心如竹道士、墳墓在不斷光院、一子正助友義初稱實、母中山兵部左衛門女、文祿三年、甲午之歲生、明歷二年、丙申、八月朔日、卒、年六十三、法號月川宗白居士、友義妻三島本覺院女云今五代正助、即友義之子孫也、野史氏曰、

西藩烈士千城錄卷之二十四

卷之廿五	卷之廿六	卷之廿七	卷之廿八
土持親成	伊東右衛門	二階堂安房	丹生民部
吉田宗清	平山忠智	八木正信	勝目兵右
福永丹波	林百梅	谷口重定	大山經綱
大野口宗	柏原有閑	山口大藏	遠矢重良
大田忠與	押川公近	高崎能宗	梅北國兼

西藩烈士干城錄

廿五之

西藩烈士干城錄卷之二十五

土持親成列傳第六十一

右馬頭土持親成初稱新太郎、複姓田部氏、其先

反正帝別稱皇子高部王生武城王、武城王生野樂王、野樂王生直彦宿

禰、始賜田部姓、而為宇佐八幡宮前在在英惣辨官、直彦宿禰生鳥養、鳥養

生吾津麻呂、吾津麻呂生連國、連國生連方、連方生連景、連景生景

文、景文生信連、信連生信增、信增生信春、信春生信行、信行生信

勝、信勝生信親、信親生信藏、信藏生信鄉、信鄉食邑於白杵郡・及

門川州在日、自稱門川七郎、名則綱、則綱生諸縣大夫宗綱、宗綱生妙

綱、妙綱生土持冠者榮妙後名信綱、或宣綱、一按、榮妙生二子、長左兵衛景

綱、次左衛門道綱初稱五郎、右衛門、道綱嗣父立、生岡富新右衛門惟綱、惟綱生

二子、長左衛門長綱、次四郎左衛門政綱、政綱嗣立、生刑部左衛門

國綱、國綱生左兵衛榮信、榮信生遠江守賴宣初名榮英、稱太、戰於勢多

在江、有功、幕府賞其功、益封縣在日半邑、因稱縣氏云、賴宣生下野守

宣弘初名直綱、稱孫太、宣弘生豐前守秋綱初名景、秋綱無男、以弟下野守金宣

廻久元 蒲生清綱 高城重治 入田義實

上林國成 橋口安張 米良重隆 上野忠元

中馬重方 濱田經重 小野則次 黑田賴清

仁礼頼景 春成久正 平田純貞 黒木實利

和田玄蕃 毛利元房 久保行久

長野祐為

初稱次郎為嗣、金宣生左衛門宣綱初稱後太郎、宣綱生五郎太郎金繁、金繁無

男、以弟左衛門大夫常綱為後、常綱生尾張守親榮初稱新太郎、親榮生日向

守親佐初稱孫太郎、親佐無男、以小宗右馬頭佐榮之適子新太郎為後、即親

成也、世有縣三城三城曰鹽見、俱在日州、至天正五年、冬、親成始降屬 貫明

公、翌年四月、大友氏大衆入日州、圍縣城、親成拒戍數十日、衆寡

不敵、潛出城、往賴清田重忠親成妻重忠、於浦邊在後、其後大友氏復發軍攻

圍浦邊、親成血戰、遂亡於陣、初親成無男、以同宗次郎九郎者稱守榮

為養子、是日彈正忠綱實、親成戰沒之後、潛出豐後、匿長門待時、

欲報父讎、貫明公聞焉、以其父盡忠於國家、殊徵綱實於長門廳、

賜縣門川新名爪鹽地御手洗四邑、七年、綱實獻盟書焉、十月十三

日、公亦賜盟書、十二年、十二月、賜諱一字、名久綱、稱左馬權

頭、十五年、羽柴秀長抵日州、諭久綱曰、若畔島津氏以為導、則加

賜陀邑、久綱不可、於是秀長進圍縣城、城遂陷、久綱遁匿平等寺

在在去、十六年、二月十三日、久綱白 松齡公無異志、因上誓詞、廿

五日、公亦賜久綱盟書、至文祿四年、公召久綱及其子盈信於平等

寺、九月廿八日、賜栗野邑田祿五百石、其後久綱祇役於伏水、而病

卒、左馬權頭盈信初名龍崎、稱、久綱第三子也、有兄二人、嘗出質高橋

氏其一人曰久介公綱、後來、故盈信續父後、自幼近侍 松齡公、及長為大崎地

頭職、凡廿餘年、慶長六年、四月廿五日、慈眼公加賜末吉邑田祿

五百石、其後累遷高江・曾於郡・山崎地頭職盈信子孫也、

土持伊豆守政綱、剃髮號弓伴、土持榮妙之支屬也、而為 大翁公國

老、大永六年、丙戌、十一月十二日、命政綱及村田雅樂介、迎 大

中公於田布施、以為養子、七年、丁亥、四月、公讓位於 大中

公、於是 大中公親承國統、即位於慶府、居清水城、而 太公退居

於伊作野史氏曰：國家受授之際，天下之大事，其義明白昭著如此，人々宜明目張，於是島津實久不悅，乃以姦計將鳩公、政綱覺之，於是十五日一作六夜、與川越背尾等密謀、使公潛逃清水城、既而實久聞焉、大怒將召殺之、政綱乃杜門燒家屋、而割腹死野史氏曰：臨患免君、智也。圖國、其孤生才三歲、其僕母作、抱而匿伊集院、梅岳君聞焉、乃召之、命侍女名大貳、上木貞晴、育之、及長曰若狹守某、君以侍女妹妻之、後為泊地頭職、慶長六年、四月五日、卒、法號心月恭安上座、子若狹守利綱初稱治部、左衛門、今土持之子孫也、

土持大膳正綱家、志布志人也、複姓田部氏、其先不知何許人、天正間、公召智勇士五十餘人為軍事參謀、綱家其一人也、卒時不知年月、無男、以江田氏子為養子、是曰大膳某、後有故復江田氏、而以土持平左衛門綱辰適子、嗣綱家之後、是曰半右衛門綱慶、以兵具奉行為大始良地頭職今土持大衛、綱慶之子孫也、

土持平右衛門某、綱家次弟也、為山川地頭職、
土持平左衛門綱辰、累遷馬關田・大根占・地頭職、
土持因幡某、從松齡公居飯野城、
土持外記某、為松齡公御內衆、
野史氏曰、

吉田宗清列傳第六十二
吉田若狹守宗清初稱次郎、複姓息長氏、其先

日本武尊之皇子息長宿禰、傳世四十餘葉、至於

正八幡祠在廣州、○野史氏曰：轉外傳云、孔子升泰山、觀易姓而王、可得而數者七十餘人、而封禪之文不經見、特助于青初明也、又始也、而後世人王希慕之、以為王者盛典、蓋欲以告太平於天、報尊神之功也、本邦受命帝王、千五百姓而王、地運實諸鬼神、而開有欲禪者、比比之西土、易、知祀事助清公領當權政助清、助清生長

太夫清道、清道受外祖源為重顯西八郎為之讓、食吉田邑、因為吉田氏、

清道生吉清檢校吉清、一或云、吉清、建久間人、吉清生太郎清弘、清弘生又二郎高

清、高清生彦次郎清秋、清秋生次郎太夫清朝、清朝生伊豆守氏清、

氏清生伊豆守清元、清元生若狹守清正、事義天公為國老、清正生次

郎四郎兼清、兼清生尾張守泰清、泰清生參河守孝清、孝清生若狹守

位清清、一推、自助清至位清凡十五世、居吉田城、永正十四年、畔興

岳公、沒收吉田邑、往至山門院、而依島津忠興及忠興沒、位清竟為

島津善左衛門所殺於野田阿久根之境、初位清娶梅岳君姊、生宗

清、宗清二男、長子若狹守朝清初稱次郎、當貫明公之世、見登庸為馬

越地頭職、次子美作守狹守、一作清孝、稱次郎、清孝、天正間、為阿多地頭職、後

從限之城地頭職、十二年、九月、從入肥後、十四年、七月、從守八

代城、又從成津牟禮城、文祿元年、七月十八日、公子歲久見誅、是

時貫明公遣清孝、祭公子冥靈於福昌寺、是歲清孝抵役於京師、慶

長間、轉遷加世田地頭職、五年、清孝在大坂城中、聞關原軍敗、與

相良長泰等、俱留護衛侍婢阿松、語在長泰事中、既而還國、一清孝

無男、以大田吉兵衛久好弟彌市市郎、一作彌久、久千為養子、更名清久、稱治部

左衛門、因冒吉田氏、清久從軍關原、軍敗、從而歸國、賜褒牒及田

祿五十石、清久亦無男、養川上氏次子長四郎為嗣、是曰次郎兵衛康

清、性好和歌、嘗為時雨歌曰、出音伊、能日、影毛、影幽、幽成、成音奈利、山能山

彼方音阿奈多、二時雨、二音志、降音羅、音不、音寬、音永、音中、為高奉行、領田祿五百九十餘石、

轉遷日當山・福山・地頭職、一子次郎兵衛為清初稱長、慈眼公親加

冠、正保四年、有王子原犬追物之事、為清為射者班今吉田守右衛門、

吉田若狹守清親初稱七郎、次郎、位清第二子、宗清同母弟也、天正中、為帖佐山田地頭職、六年、耳川之役、清親將兵番戍高城、十五年、從戰目白坂、其後卒、一子六郎右衛門清長初稱右衛門、門佐、薙髮號半雪齋、耳川之捷、清長戰鬪冠於衆、時年廿六、後每從戰有功、命為日州山蔭地頭職、及豐公没入我日州、清長去山蔭、來居國分、不幾累遷百引・高城地頭、後來居覺府、從軍朝鮮、後從戰關原、軍敗、從而歸國、賜褒牒及穀祿一百石、寬永四年、十一月十七日、卒、法號寶山了珍居士、一子大藏清盛時稱清盛、又康、皆清親也、母島津周防守忠續女、元龜三年、壬申之歲生、及長從赴朝鮮、泗川大捷之日、清盛由故館大道逐逃、時敵一人猝出於叢中、拔刀擊其兜鍪、清盛急下馬、與之相搏、敵伏清盛、川上久國來援自後斬殺敵久國舍家臣市來佐小、右衛門持歸其首佐小、南海之戰、清盛與樺山久高等五百餘人、俱為敵艦所圍、是時久高遣清盛等、急至釜山浦、請援公、以故五百餘人皆得無恙而歸國、後戰没於莊內財部、年廿八、法號董山了香菴主、一無子、以西川源右衛門適子為嗣、因冒吉田氏、是曰貞左衛門清貞、為本城地頭職、一子久兵衛清房、始命加冠於慈眼公座、及長累遷本城日當山地頭職今吉田休兵衛、即清房之後也、

吉田肥前某、大永六年、肥前等六人從 大中公自田布施始至覺府清水城、卒時不知其年月、

吉田玉林房某、從戰關原、軍敗、從而歸薩、

吉田外記某、宮崎土也、從戰於肥後甲佐堅志田為多、

吉田刑部左衛門清繩、天正十二年、生、初日野大納言之庶孫小三次者、子母五人自京師來仕大友氏、及十五年我兵入豐後、吉田清孝見于前

廣小三次子母以歸、既而小三次為 貫明公內豎、稱喜兵衛、公以其姊為清孝妻、故清孝請喜兵衛於官、冒吉田氏、名清繩、稱刑部左衛門今吉田四郎兵衛、即清繩之後也、

吉田備前清正、事 貫明公、陳没於祁答院長野城、賞其忠節、賜田祿廿七石於其子新左衛門清房初稱十郎、七郎、孫清次、陣亡於豐後南郡今吉田新左衛門、即清

吉田洞庵、天正十一年、十月以下開、也次

吉田吉左衛門、天文七年、十二月廿九日、戰没於加世田城、野史氏曰、

福永丹波列傳第六十三

福永丹波守、伊東義祐之家臣、而為野尻城主在信州、天正五年、十二月七日、叛義祐降我、丹波為人智勇、久為義祐所寵任、我將以計離間彼焉、乃遣使者佐土原義祐所、馬、更為書間遣丹波曰、告子、事可成、勉成之、不可成、疾西歸、事久必泄、徒令身死、因詐墮之城中、俟得而獻之、義祐果疑丹波、乃遣使者詰問丹波、丹波大驚、明白無其事、其後丹波適子松千代丸年甫十三、丹波至佐土原請義祐親加冠、義祐不聽、丹波因留五六十日、而後歸、未幾、又至、復留五六日、乃上書諫曰、今臣遠思深慮、主一以事君、徃日間使之來間我者、可我得而使也、願君無疑、義祐不納、丹波不得已而歸野尻、以為吾竭忠盡智、以事君、而見疑焉、讒諂乘間、嚴刑在近、可謂窮矣、因憂愁不知所為、當此之時、上原尚常為高原地頭職、間而知

之、於是乃遣使者告丹波曰、聞子正道直行、以事君、而却見疎、吾恐斧鉞且夕及子身也、且聞子君數廢黜忠臣、毒害士民、天譴既顯、於是乎君臣過計、良將勇士多敗沒於真幸、疆蹙民畏、為四鄰笑、子所親親也、子與事昏昧貪暴、衆叛國削之君、信而見疑、忠而見捐也、寧以城邑而西歸於我乎、吾請奏寡君而重封土、死生榮辱此其一時也、按戰國策、魏亂宋、德強齊、定身封、其意與傳說相違、古語曰、去忿忿之怨、立終身之名、棄忿

捐之節、定累世之功、此之謂也、詩曰、出自幽谷、遷于喬木、子宜察之、丹波沈吟三日、然後報曰、敬聞命矣、野史氏曰、信見疑、忠見捐之語、其言雖憤事敗、叔向曰、辭之不可以已也、如楚去、子孫有辭、請後報之、若之何其難也、尚當、說段野、日州遠矣、我有笑、辭之不可以已也、又曰、宋太祖忌江南林仁彥名、竊其畫像、懸別室、以問江南主、江南主不知其間、始殺仁彥、我之間殺、太祖之間江南也、江南已於祖一職也、於是尚常使告 松齡公於飯野城、而請來會、則遣尚常至浦

之名、會丹波、因謀交質堅約、丹波告曰、今伊東氏兵番成城中、子如遣兵、而吾為道、則彼可逐也、尚常唯諾、六日、丹波遣人誑告義祐番成將曰、吾將進君等酒、已命田獲禽獸、且又遣兒輩穿林打鳥、

以助宴享、因遣長子及近侍者數人、俱出城赴猿瀨、是夜尚常將遣兵而往會、部下皆曰、丹波知勇可畏、如有異心、我無類矣、可且貯威養勢、以須 公來、俱謀乃進兵、尚常曰、公且到、臣子當獻酒肉、以犒軍、反欲以定謀受降煩君父邪、乃遣兵至猿瀨、彼我交質、

丹波長子為質於我、我國老川上參河守第三子助八郎為質於彼、而我先驅三十人至野尻、城險不能登、丹波緹焉、皆登、揭白紙于竹竿以為驗、遂入內城、後登者或五十人、或三十人、親白紙而相續至內城、凡三百人、此夜天寒、丹波躬羞以饘粥、妻行酒、五更丹波上檣、大呼曰、薩大兵在城、且高原兵士數千騎將續至、君等退去、不然、徒遺之禽耳、吾兵亦同時譁卸、聲動山岳、番成兵大驚、皆棄城而遁、我兵追至紙屋而歸、八日、松齡公自將三十騎赴野尻城、左右請以衆從、公曰、孤推誠待人、何以衆為、行至野尻

原、丹波率八百人出迎、望見十文字旗章、急下馬而駐從兵、獨前拜跪於路傍、公為降辭色、因從 公入城、亦既歸止、我心則悅、是謂也夫、以上與見尚常傳事同而辭異者、以其詳於此而略於彼、詳於彼而略於此、○描寫富白光景、宛然在目、何等針線、當是之時、野村文綱亦降內山城、九日、我兵入綾、十日、入都於郡古城、是日、我下大隅・根占・肝付・志布志・福島兵進踰鄉原、入清武宮崎、十一日、義祐出兵拒戰、敗績、自燒城、遂出奔豐後、貫明公嘉丹波功、賜褒牒及野尻城、後移居柁城、其後卒、子宮內少輔、佛寺十世之任持其阿和尚之母也云、又按龜山氏系譜、休庵適子良久、母廣原、其後良久為僧、云、

天正十三年、屬上井覺兼攻岩屋、擊破副陣、而被創、子筑後、屬公子忠朗於柁城、領田祿四十七石、至今其子孫在柁城、

福永久左衛門、從軍朝鮮、全羅道昌原之獵、揮刀刺殺猛虎、

福永藤十郎、福永備後、福永伊豆、三人俱見于覺兼日記、

野史氏曰、

大野口宗列傳第六十四

大野駿河守口宗、者、義天公第二子薩摩守用久之五世孫也、用久生薩摩守國久、國久生駿河守資久、始為大野氏、居山田、天文七年、三月六日、卒、年七十、法號節傳忠公、資久生三男、長駿河守忠悟、次忠康、次三郎五郎忠鄉、戰沒於吉松、忠悟生二男、長三郎二郎忠友、戰亡於松島、次駿河守忠基、嗣立、忠基生口宗、口宗世々食邑於山田、穀祿凡二千二百九十石、為加世田地頭職、永祿十二年、五月六日、口宗與宮原景種俱伏兵於戶神尾稻荷山、而斬獲賊首數百、事在島津家口語中、

十文字旗章、在朝記、急下馬而駐從兵、獨前拜跪於路傍、公為降辭色、因從 公入城、亦既歸止、我心則悅、是謂也夫、以上與見尚常傳事同而辭異者、以其詳於此而略於彼、詳於彼而略於此、○描寫富白光景、宛然在目、何等針線、當是之時、野村文綱亦降內山城、九日、我兵入綾、十日、入都於郡古城、是日、我下大隅・根占・肝付・志布志・福島兵進踰鄉原、入清武宮崎、十一日、義祐出兵拒戰、敗績、自燒城、遂出奔豐後、貫明公嘉丹波功、賜褒牒及野尻城、後移居柁城、其後卒、子宮內少輔、佛寺十世之任持其阿和尚之母也云、又按龜山氏系譜、休庵適子良久、母廣原、其後良久為僧、云、

天正十三年、屬上井覺兼攻岩屋、擊破副陣、而被創、子筑後、屬公子忠朗於柁城、領田祿四十七石、至今其子孫在柁城、

福永久左衛門、從軍朝鮮、全羅道昌原之獵、揮刀刺殺猛虎、

福永藤十郎、福永備後、福永伊豆、三人俱見于覺兼日記、

野史氏曰、

大野口宗列傳第六十四

大野駿河守口宗、者、義天公第二子薩摩守用久之五世孫也、用久生薩摩守國久、國久生駿河守資久、始為大野氏、居山田、天文七年、三月六日、卒、年七十、法號節傳忠公、資久生三男、長駿河守忠悟、次忠康、次三郎五郎忠鄉、戰沒於吉松、忠悟生二男、長三郎二郎忠友、戰亡於松島、次駿河守忠基、嗣立、忠基生口宗、口宗世々食邑於山田、穀祿凡二千二百九十石、為加世田地頭職、永祿十二年、五月六日、口宗與宮原景種俱伏兵於戶神尾稻荷山、而斬獲賊首數百、事在島津家口語中、

伏於戶神

設

伏於戶神

設

設

尾者非口宗、乃是口宗祖父忠信也。按舊日記、天正二年、十月廿六日、貫明公諱多、
實寺、是時有大野淡入追者、從焉、是即忠信也。據之、則設伏者實忠信也。天正三年、十月廿日、

有犬追物之事、口宗為射者班、射犬五匹、翌日復為射者班、射犬六匹、四年、從攻高原城、十三年、閏八月、從 松齡公出軍肥後三舟、十五年、從 貫明公朝京師、十八年、九月七日、一唯世子班師於小田原、而至京師、八日、貫明公享 世子於伏水邸、是時口宗・及北鄉三久・伊集院忠棟・本田親貞・道正菴宗固・渋谷對馬・

以次陪焉、十九年、四月廿七日、有故、被誅於堂尾關川邊、今實福寺門前有之、初口宗無男、有一女、乃乞樺山忠助之子以為養子、冒大野氏、名久高、稱七郎、因以女妻之、及口宗被誅、久高謫居於加世田、文祿元年、松齡公將赴朝鮮、是時召久高、復樺山氏、更曰權左衛門、賜秩祿若干石、擢為國老、語在樺山氏事中、其後至慶長間、以三原重饒第二子嗣口宗之後不能居父母國、去關京師凡五年、而歸、獨居川邊二年、慶長十年、秋、以島津朝小女實京、是時我國女無一人知上國風者矣、松齡公曰、妙春在阿、是則可從也、於是召妙春而命、妙春固辭、曰、汝從、則孤直再興大野氏以報汝志、妙春乃從至上國、及朝久女嫁樺川、妙春復從、後歸而稱國、公賞賜田祿二百石、且讓大野氏之祭焉、卒、是日內記久行、因冒大野氏、今大野多宮、即、

大野正右衛門尉久武正一作祥、初稱三郎、又右近將監、又左近將監、者、駿河守資久見乎前、之曾孫也、祖曰右衛門大夫忠康資久弟、父曰正右衛門久重初稱三郎、按覺兼日記、天正十年、有大野左近將監、蓋久重也、十六年、又有左近將監、從 貫明公朝京師、蓋久重也、久武孝劍術於東鄉重位、慶長五年、年十九、從戰關原、及公潰圍而走、敵騎二人將輕卒數百人急躡後、久武謂衆曰、事急、君等速護 公而退去、我宜拒後、乃執鳥銃而伏草間、射殺先驅一人、餘騎恐不逐、久武馳及 公、從歸國、賜褒牒及田祿一百石按神戶五兵衛日記、關原之敗、敵騎逐我、公謂久武曰、汝宜射後追者、因後、十九年、六月、為綾地頭職、寬永九年、本藩兵賦籍云、久武出騎馬二人、兵士二十九人、鳥銃二、弓一、槍一、正保三年、轉甌島地頭職、四年、十月十三日、病卒於甌島、年六十六、法號孝山良居士、墳墓在妙谷寺今大野源宗、即、久武之孫也、

野史氏曰、

大田忠與列傳第六十五

大田周防介忠與一作忠實、初、本姓島津氏、高祖薩摩守用久、曾祖下野守延久用久第二子、始食邑河邊、祖下野守昌久久政孫、以帖佐地頭職、黨島津實久、謀叛被誅、父周防介忠續一作守、初名忠弘、刺又忠元、稱一郎、初忠續有兄中務大輔忠成參母島津又四郎善久女、陣沒於川邊、無男、以故忠續嗣立、天文間、為阿多地頭職、六年、八月、從 梅岳君攻加世田城、有功、賞賜和田脇之地在伊、某年月日卒、法號玄光宗珍居士、至今花瀨村在阿、有大閑塚云、忠與天文七年、及父卒、續為阿多地頭職、而別以中津野村在阿、為采地、永祿元年、十二月下流、七日、大中公命忠與、更島津氏始為大田氏、天正三年、十月廿一日、有大追物之事、忠與為射者班、射犬九匹、七年、八月七日、卒、年三十二、法號澄岸銀清居士、子吉兵衛忠綱初名忠好、稱四郎三、母吉田位清女、元龜元年、四月廿六日、生、及長從如朝鮮、慶長二年、七月、與川上忠實俱出加德島營、往使島津豐久營在川原、及毛利壹岐守營、途遇敵艦、殊死鬪而還報、三年、新寨之捷、被紺緞甲、十一月、從歸國、五年、上國亂起、忠綱與伊勢貞成俱馳至大垣、及關原軍敗績、始終不離 公側、從而歸薩、賞賜褒牒及穀祿一百石、慶安三年、五月一傳三十六日、卒、年八十一、法號超嶽常越居士、墳在福昌寺即忠綱子孫也、

大田筑前守忠秀、祖父山城守忠聖號安者、大田氏始祖延久之第三子也、父曰筑前守忠光、忠秀有女、名阿松阿初從 慈眼公夫人質大坂城中、及關原軍敗、衆議欲潛出城而還國、而無辭以出城門、阿松謂

大田筑前守忠秀、祖父山城守忠聖號安者、大田氏始祖延久之第三子也、父曰筑前守忠光、忠秀有女、名阿松阿初從 慈眼公夫人質大坂城中、及關原軍敗、衆議欲潛出城而還國、而無辭以出城門、阿松謂

夫人曰、妾詐為夫人、於是 夫人乃與左右侍婢等數十人、出城門而遁、忠秀及相良日向其餘士多留衛焉、既而多以金啗城吏、遂護阿松及衆婢、出城去、尾及 夫人舟中、從而歸國、公賞忠秀以田祿二百四十石中、一作三百五十、黑江氏女名少納言、諸役氏女名勝子、二人亦從、夫人在城、而與阿松等俱從歸國、賜褒隆及昌勝士石、後少納言嫁有川早左衛門云。元和初年、麿府田祿籍云、忠秀有田祿三百石云。忠秀子孫、今絶云。

大田藤二郎忠次者、兵部少輔忠辰忠辰、周防介忠續次子、之第二子忠次兄日月、後守忠純、陣沒於關原、

大田八郎久治、祖父山城守忠聖忠聖、周防介忠續次子、、父左近將監忠富忠富、忠聖次子、、久治年廿四、陣沒於朝鮮久治有異、曰又五郎久存、見、子孫為川邊士云、、

大田幸大坊、周防介忠續第四子也、為幸大寺在川內、四世住持、幸大坊解魔、、天正十五年、貫明公遣幸大坊使桂忠詮於平佐城、事在忠詮事中、

大田小平次久照、其先伊集院久氏第五子、伊豫守久勝、初為大田氏、久勝之四世孫三河守久饒、從新納忠元、去伊集院之大口居焉、而生久照、久照陣沒於關原久照子孫、在大口云、、

大田尾張守忠行初稱三郎、五郎、者、周防介忠續第三子、永祿七年、從松齡公移居飯野城、

野史氏曰、

廻久元列傳第六十六

廻兵部少輔久元者、

清和帝之皇子貞純親王之廿二世苗裔也、親王生六孫王經基、經基生

多田滿仲、滿仲生撰津守賴光、賴光生美濃守賴國、賴國生多田左衛門尉賴綱、賴綱生兵庫頭仲政仲政、、仲政生三位兵庫頭賴政賴政、、

近衛帝武臣中最善射者也、仁平三年、奉 敕射怪鳥、賞賜寶刀及御衣仁平三年、辛未、四月、帝幸茨、百寮不律、每至深夜、輒頓池方蘇、當其疾起之時、常有黑雲、大霧而蔽之、怪聲在其中、侍者以為帝幸實由於此、於是議推推政射之、賴政乃執弓堅立、手回、仰發、矢有物擊、聲墮地、其臣早大懼而殺之、衆乘機而獲之、狼面狸身虎足、蛇尾、其形可醜、帝翌日乃慶、因歎賞之、賜刀及衣服、野史氏曰、此蓋當時有類此事、而人敷衍之也、亦善東野人之語、狼面足為異矣、方今實畫師畫之、以助兒女子之夜話耳、山海經云、崇丘之山有鳥、狀如鳥、一翼目、相得乃飛、名云鸞或云作鸞、鸞亦不可怪、阿彌合、

治承四年、五月廿六日、陣沒於宇治、年七十六一作七十五、、賴政生

伊豆守仲綱、與父俱陣沒、仲綱生肥前守宗綱、始封廻邑在關州、或云、、因下居焉、宗綱生兵庫部卿守義、守義生兵庫太郎信義、信義

生兵庫藏人義氏、義氏生大和前司親義、親義生前司親秀、親秀生備後左衛門賴資、屬畠山直顯有戰勲、賴資生新左衛門親成、親成生大

和左衛門兼義、兼義生兵庫太郎政義、政義生大和守政久、政久生兵庫頭政友、政友生豐後守元政、元政生兵庫頭光清、光清生久元、自

宗綱至久元、世々傳領廻城、因為廻氏、永祿間、久元奄奄明為誓、而與子三郎四郎賴貞幼稱管、、俱為肝付省釣所襲殺、賴貞生玄蕃介賴賢、賴賢生兵庫頭賴堯、賴堯生狩野介賴次、天正十五年、四月、戰

沒目白坂、

解魔法師廻三曲坊某、三郎四郎賴貞子、而玄蕃介賴賢次弟也、以武名聞於藩、天正六年、十一月十二日、戰沒於高城在新關、、

野史氏曰、

上牀國成列傳第六十七

上牀助六左衛門國成、父曰八郎三郎某、事 梅岳君、居阿多村上村、、天

文七年、十二月廿九日、陣亡於間之瀬川在加世、、國成事大中公、後從

松齡公、率妻子移居飯野城、永祿九年、十月廿六日、從攻三山城、

戰急、公被創、國成力戰遂死、一子藤右衛門國寄宗朝髮變、年十八、為

兵具奉行、天正十八年、與騎士十五人俱從、一唯世子軍小田原、文

祿四年、十二月廿一日、從、松齡公朝京師、又從戰朝鮮、軍畢、從

而歸國、直從至伏水、因留在焉、及子國隆戰沒於莊內、命國寄歸

薩、後更上牀氏為江田氏、其後為納殿役、慶長十八年、與會木五兵

衛俱從、公女質於江都、後歸國、其後卒、一子吉右衛門尉國隆

初稱五郎、兵衛、從、慈眼公擊朝鮮、慶長二年、八月十五日、我軍進陷南原

城、是時國隆與安藤權右衛門俱先登被創、時年廿七、三年、十月朔

日、明兵二十萬來攻新寨、國隆自前夜出謀敵或云、此夜國隆、盛赤籠包云、因潛伏草

間、詰朝候敵至、先馳獲甲首而還、有一人亦獲首還、俱爭先後、

公乃謂左右曰、孤前自城門樓望見之、衣甲尚陣羽織陣羽織、者先獲首、

記之則國隆有焉、於是以國隆為第一、十一月十八日、我軍大戰於南

海瀨戶、是時國隆與樺山久高俱同舟冒敵艦、既而命與久高俱先衆歸

國、四年、六月廿三日、戰沒山田城一作廿九日、戰、、年廿九、一子吉右衛門

某初稱助、、移居柁城、食田祿二百石、為柁城兵具奉行、後公子忠朗置

騎馬十人、吉右衛門其一人也在吉右衛門子孫、

上牀新助某、殉死公子歲久於瀧水、法號心安春波禪定門、

野史氏曰、

中馬重方列傳第六十八

中馬大藏允重方初稱與、八郎、其父大藏某、市來士也、天正六年、從松齡公

戰沒耳川或云、大藏從、公入戰後、既而、、重方身長八尺、力能扛鼎、好彎弓五箇力

五箇力說在野、李皇芬將經、、每射鵠輒矢墮地、而其與敵遇、不逼不發、發即應弦而殲、

終身殺人多矣、而身不被小創、人稱其天幸、天正八年、年十八、屬

比志島紀伊守攻矢崎城後、、擊驍悍二人斬其首、松齡公召焉、而褒

賞之、十二年、從軍佐敷、十三年、八月十三日、從攻甲佐志田二

城、斬首三級、十五年、正月念六日、公遣新納忠元督阿蘇兵攻下

城在豐、、是時重方與本田兵右衛門後為高岡、俱踰女墻入城中、時敵將縞巾盤

頭、指揮克戰、重方乃叫曰、身是中馬與八郎、可來共決死、敵將亦

曰、我為下城大膳、二人疾鬪、重方遂斬大膳、持首及其腰刀而歸

營、公大賞焉、因謂曰、自今而後、每出師汝不可須臾離孤左右

也、其後重方居市來邑、得罪邑宰、沒入田宅、徃依親戚於蒲生邑

矣、公每年臘月、使便密賜之米若干石云、十九年、公將赴朝鮮、

是時重方見原而從焉、臨行賜米三十石、以給妻子衣食當是時、國家多難、軍無給

食、皆以自贖從軍者多矣、而賜重方妻、、慶長三年、十一月十八日、大戰於南海瀨戶、

重方在川上掃部船、彎勁弓放百餘矢、而與谿山市來士、俱前上敵

艦、斬首數級、公賞其功、且賜稱大藏、罷與八郎、而與川上掃部

俱先衆歸國、其後、慈眼公以重方為納殿役、重方曰、人有能不能、

軍旅之事、臣死且不避、知內庭事、則臣不能也、不敢奉命、公聽

之、笑曰、此則其素志也、乃止焉野史曰、重方之氣豪、固非被髮束髮之職、謂勝房隨之仕也、昔者

今公於重方、、五年、五大老賞我新寨之功、增封出水邑田祿五萬石、是時

松齡公命重方移居焉、而賜田祿若干石、是歲秋、上國亂起、時公

在伏水邸、而兵寡矣、於是在薩將土料知其危、乃急多馳赴之、是時

重方聞川上忠兄率兵至米津在出、、即與長野勘左衛門、俱馳及焉、則在

舟中矣、喚焉、時急舟不還所謂衣魚不申、頭懸不去、、於是重方等晨夜急馳與勘左

小、至大坂、尋謁、公伏水邸、公大喜曰、大藏孤以為汝如聞有此

役、則先衆馳至、今果然、九月十五日、關原軍敗、重方等從、公自

伊勢退去、重方恐數遇敵、乃白 公捨認旗、匿山宿野、君臣或至晨夜不食、得投逆旅、則重方輒率步卒、(頭注)「三千撤(讀作「撤」)」經伊勢・近江・伊賀・大和・河内、達摂津住吉、遂得俱歸國、賜褒牒及田祿五十石、其後為出水武主役詳末、兼脇元知邸此云龍元、假屋守、寬永十二年、臘月下浣八日、卒、年七十二、法號貫翁道一居士、墳塋在瀬浦在出水西、目村、子兵部左衛門重辰、生死不知其年月、

按記、關原之敗、重方從逃於伊賀山中、公疲則重方輒負公、公重大、重方多力、遂得俱全於難而歸國、異日 公退居于櫻島、重方暇日間行、自出水往謁焉、終日便座、或俯而語、衣後穿、蠅得出入、近侍少年見而笑之、公怒曰、汝曹不知乎、是為中馬大藏、何指笑之無禮、近侍恐謝罪、重方戲、謂近侍曰、昔者我負公于險、飢苦甚、(頭注)「我今以下十字、一作汝等令、公自炊、吾決不食、寧失所設」我今非、不肯食、其質朴豪放多此類、重方嘗與東鄉重位較量劍技、一擊被打倒、笑曰、子今能勝我、若夫臨矢石之間、子豈能為必勝哉、則可謂子是席上之良師也耳、

中馬源助、殉死公子歲久、法號明窓正知禪定門、

中馬市作、慶長五年、陣沒於森江在豐、

中馬主計重治、從入朝鮮、

中馬左近、事 慈眼公為納殿役、

中馬新左衛門入道了意、不知其名聲、(今伊地知半左衛門、即了意之子孫也云、而不知其改中馬氏為伊地知氏之故)、
中馬與市、從戰朝鮮、

中馬武藏、飢肥士也、見于濱田榮臨記、

野史氏曰、余聞之出水邑人、曰、重方嘗自耕野、有一大漢、來告曰、余是九州第一善角力者也、今余觀子身長大、風骨奇偉、頗知其多力也、子其與余角力乎、重方曰、諾、乃輟耕、行軫折生竹圍八九寸許、拉縮以為帶、曰、可矣、來可共決勝、大漢蹙然曰、子力勝余遠矣、請辭、是雖比齊東野人之語、而非強有力者弗能行也義眼、不可以為烏有耳、因姑書焉、

仁禮賴景列傳第六十九

仁禮藏人賴景初名景藏、又稱尊、稱小、其父又信濃守、本姓別府氏、父隼人佐賴延、天正八年、生、其先新羅三郎義光之苗裔賴平賴平父曰主、賴平之口世孫佐渡守、賴長、賴長生民部左衛門賴昌、賴昌生賴延或云、八世云、自賴平至賴、世々食邑於別府村在福世、因為別府氏、永祿七年、松齡公自加世田城移居飯野城、是時選知勇士六十人從焉、賴延其一人也、後特命賴延及久保七兵衛為一唯世子傳、天正十五年、賴延陣亡於目白坂、是時賴景年甫八歲、以父亡故、長於別府助右衛門家賴延親、既而 慈眼公召為御小姓、文祿二年、公朝京師、賴景從焉、四年、八月、公自京師直赴朝鮮、賴景從焉、慶長三年、十月朔、泗川之軍、賴景被紺緇甲、逐遁多殺敵、十一月、從班師、直從復朝京師、四年、三月、公有故手刃伊集院忠棟於伏水邸、未死、賴景刺殺之、賞賜關小刀長一尺三寸、今、藏之子孫家、是歲從歸薩、五年、十一月、特賜田祿一百石、貫明公亦賜腰刀名肥太、長二尺六寸、一名鹿毛、慈眼公又賜鐵砲、及弓、腰刀相州刀、長二尺二寸、一名鹿毛、甲冑名佛、一名鹿毛、奧馬二匹一名鹿毛、一名鹿毛、其後為使役、轉徙串木野・高山・高隈・市來地頭職、十九年、從赴大坂、途聞和成、乃班師、因使賴景使江戶、元和元年、四月、

反命、是歲復從赴浪華、未至手城陷、六年、有犬追物之事、賴景與焉、是時更別府氏始為仁禮氏、七年、十二月四日、有犬追物之事、賴景復為射者班、射犬三匹、翌日又有犬追物之事、復射三匹、寬永八年、更番琉球國、翌年夏、歸國、其後祇役於江戶邸、正保三年、正月十三日、病卒、年六十七、法號如實要心居士、葬二本榎廣岳院、又建石塔於得水軒在福昌寺、境內、而為之招魂墓今仁禮小吉、即、賴景子孫也、

仁禮佐渡守忠賴初曰高原覺兵衛、後景觀、受劍術於東鄉重位、寬永十八年、八月晦日、卒、法號喜叟常悅庵主、墳墓在日新禪寺在賴子孫今在、加世田云、野史氏曰、

和田玄蕃列傳第七十

和田玄蕃允某、菊池氏之枝屬、和田土佐正覺領二股北之子孫也、事貫明公、天正二年、十一月九日、玄蕃允上言曰、某年某之役、臣勤成山野城、而疾病、臣子讚岐迫切之至情、行禱於伊勢神祠、請數月之休暇而往賽焉、不報覺書日、記、十五年、從公朝京師、子讚岐守正貞初稱乘、和和玄蕃助為大根占地頭職、文祿五年二月念八日、未詳孰是、為大根占地頭職和和玄蕃助、即、正貞之子孫也、幕府、則召見而教諭懇々、因拜辱而還報、其後與北鄉久利俱受鳥銃術於浪華浪客稻留一夢齋、以是傳之子孫、延寶五年、四月十三日、卒、法號田翁湛心居士、墳塋在南林寺

和田右京某、姓息長、其父丹波守某、某即吉田又次郎清高第二子和田清光之枝族也系譜曰、大系子、未知孰是、右京初居田布施、天正中、移居飲肥、及豐公沒収我日州、右京去飲肥至飯野、則松齡公為納殿役、其後轉居栗野帖佐・平松・柁城、子半十郎某、從擊朝鮮、後陣沒關原、無

男、以樺山藏人一慶次子為之嗣、是曰主膳某、松齡公手自教馬術、以為門人今和和正七、即、主膳之子孫也、

解魔法師和田相模坊、弘治二年、三月十三日、從攻松坂城生備、松齡公攀梯先登危甚、相模坊自下引下、公、已將登之、有步卒急趨登、城兵舂其頸以槍、顛墜而死、公怒、拔三尺刀復登、而呼曰、彼可擊勿失矣、衆畢登、城遂陷、

和田圓覺坊正信、能登人也、井尻神力坊經歷諸州之時、正信從而來薩、以解魔法師給事、松齡公、尤長間謀、永祿七年、從從飯野城、十一年、八月、伊東義祐遣將至飯野、築砦於城對岸、是曰田原陣、以候我虛實、一日、公召正信於看經所此設神位而禱誓之處、而告之計策、因賜大腰刀長三尺、後光世所作、及衣服、且謂之曰、刀則孤移飯野之日、貫明公

賜焉、而告孤曰、此是利刀、佩之必有天幸、而今與之汝、汝宜佩之而雄心壯氣、徧謀敵營而還報、正信曰、謹奉命、翌日召正信、而大呼曰、姦賊、拔刀擊之、正信遽躊躇而走、急免內外邏所、而赴田原陣、敵謀二人肥田本舟後、落合某、遇焉、俱以槍刺之、一出胯下、皆未及身、正信曰、有故抵君營、請原之、二人執訊之、正信曰、臣是兵

庫頭內暨稱圓覺、以姦侍婢故、寡君將手自刃、臣幸而逸、言未訖、脫大小刀而獻之、於是二人伴至營、則主將召又糾察之、既而知其無詐、送之都於郡義祐所、居、義祐猶疑其間謀、則命執鐵火於神祠加鐵於火術、熱盡

則行祝要法、使燒燬者歎之於神明、以快其誠、倘有曲者、其手燒燬、亦是幻術、即今吞刀吐火之類、不足強解、來觀者前後如堵、正信乃執鐵火、而置之閣上正信蓋知免、燒燬術、自此人皆謂為誠、居頃之事竟覺、正信乃乘夜潛出城、遂歸報、公大賞其功、加賜歲俸三十石、固謝曰、臣幸得待罪給事、全間諜而還、臣有所賜秩一百石、家人衣食自有餘、今又辱加

俸、敢辭焉、遂不受、天正六年、二月念一日、公遣正信及赤塚重

眞久留木康辰花堂大圓坊、擊殺霧峰座主秀澄僧都伊東氏所置、其後正信請

從伐朝鮮、公不允曰、方今之務、汝當登大峰、以禱出師之吉凶、

於是正信遂登焉、行禱於上下神祇、事畢而至大坂、因乘商船至朝

鮮、獻所禱札於公、公賞其勞、又命之曰、今有故遺正宗佩刀於

國、遣汝贖還、正信乃奉刀而歸、慶長六年、命居蒲生城、十一年、

從徙平松、十三年、又從徙柁城、寬永七年、庚午、五月六日、卒、

法號權大僧都法印圓覺、墳墓在柁城山中、至今禱眼病有愈、世人多

詣之、子秀存坊某秀秀、戰死關原、年廿四、子甚兵衛某、列小番

籍於柁城、其後列大番籍、當寬陽公之世、上訴反乎慶府、列小番

籍、秀膳坊某、正信之子、秀存坊次弟也、以兄戰死之故、命嗣父後

和今和田孫右衛門、秀膳坊子孫也云。

和田刑部左衛門某、宮崎士也、屬上井覺兼、每從軍有功、天正十二

年、九月廿六日、從擊破白間野陣、

和田鄉兵衛、四世祖三郎左衛門宗重者、藤中納言某有被殺於筑紫大宰府、而不何世來降云。之

苗裔也、宗重第二子三郎左衛門重久、始為和田氏、重久生石見守正

連初稱三郎、左衛門、正連生備前守正久、正久生豐前守正能、正能生鄉兵衛、陣

亡於日州、鄉兵衛有弟曰鄉左衛門、屬上井覺兼而居宮崎豐前日記曰、天正十二

之祭、五月廿七日、召鄉左衛門子某、而命尸事、鄉左衛門字曰、臣、

子在鎌之中、來解嚴夢、且其所祭之地遠矣、不敢奉命、乃止、亦陣亡於日州今和田孝右衛門、即、鄉左衛門子孫也。

野史氏曰、

西藩烈士干城錄卷之二十五

西藩烈士干城錄卷之二十六

伊東右衛門列傳第七十一

伊東右衛門助某、不知其先何世始事我、松齡公在飯野也、召右衛

門助為馬越地頭職、永祿十一年、正月廿日、賊將菱刈隆秋率兵來侵

堂崎、公出羽月城迎戰、兵寡、賊兵逐窘飛田瀨、事急、右衛門助

奮身死鬪、賊兵遂退去、天正九年、從軍水股、十年、十一月、從在

八代城、十五年、我諸將收師於豐後、路至關城後在肥、則賊兵猝起、我

軍擾亂、右衛門助血戰退賊、遂俱歸薩、及豐公西下、九州諸城望風

爭降、於是貫明公命諸將迎之、當此之時、新納忠元據大口城、不

肯降、松齡公乃使右衛門助命下城、語在忠元事中、右衛門助生喜

右衛門某、從慈眼公伐朝鮮、後戰死於莊內、喜右衛門生肥前祐

貞、累遷屋形奉行、勘定奉行、口事奉行、船奉行、轉徙坊津、溝

邊、內之浦地頭職、寬永十七年、本藩軍賦籍云、祐貞領田祿二百六

十石、出兵子十人今伊東源右衛門、即祐貞裔也。

伊東駿河守祐豐、姓藤原、伊東氏臣川寄駿河長子也、以伊東祐氏稱平

門伊東六郎左衛門祐國之子也、加賀某之子也。者無男子故、請祐豐為養子、因冒伊東氏、駿河則以次

子大學伊東氏命為吉、者為已後云、慶長中、祐豐居飲肥城、而與稻津掃部不

和、因辭飲肥城、與父俱至浪華居焉、後松齡公徵祐豐、賜田祿一

千石、是時復為川寄氏、慶長十九年、浪華之役、使祐豐及新納雅樂

介率柁城兵往會焉、未至而和成、乃引還、後與新納右衛門佐俱為京

師及浪華藏奉行、寬永元年、復改為伊東氏、其後慈眼公枉駕於祐

豐邸凡二度、因賜茶銚、名蘆谷形、方腹鑄和歌一首曰、釣留毛、熏

心加藤、心善、善惡、惡音阿志、人音比充、志音伊成、志音奈、祐豐死時不知年月、子九

左衛門祐秀初稱松平、又新六代、慶長十六年、年甫七、松齡公召為近侍小姓、

元和元年、年十一、從獵於櫻島武村、射鹿一匹、公賞賜南蠻鳥銃

四錢銀、及是日所獲鹿九十三匹、五年、從 慈眼公至江都、時年十五、其後 公傳馬術於祐秀、授書十二卷、且賜刀備前盛次所作、長一尺四寸、子刑部左衛門祐平、嘗至京師、學蹋鞠於飛鳥井卿、及歸國賜十八人賦在別記、十八人賦說、及某邑地頭職即今伊東九右衛門、即今祐平之子孫也、、

伊東雅樂介某、殉死於公子歲久、法號玉林長泉禪定門、墳墓在心岳寺、

伊東源四郎某、從伐朝鮮、泗川之戰、被赤緞甲、力戰有功、慶長十九年、從赴大坂是役也、本藩兵賦稱云、伊東源四郎、頭田、時二百六十石、出騎馬一人、步卒七人、、

伊東次左衛門某、日州伊東氏臣也、父曰右衛門某、以其兄加賀無子故、右衛門為之嗣、而二人俱戰死於木崎原、及伊東氏敗亡、次左衛門浪客於佗邦、後來事伊集院忠真、忠真伏誅之後、去之揖宿邑居焉、其後 松齡公召居柁城、賜田祿若干石、子志摩介、後更稱仙右衛門、為 寬陽公傳今伊東才藏、即其子孫也、、

伊東甚六、從攻伏水城、中銃丸而沒、家臣深水金右衛門負骸而歸營記宅、、
野史氏曰、

平山忠智列傳第七十二

平山越後守忠智、高祖島津季久者、義天公第三子也、曾祖越後守忠康季久弟、、享德間、大岳公遣季久討帖佐、逐出平山氏、而賜帖佐邑、是時季久遣忠康領平山城、因氏焉、後忠康轉領松山城在日、、祖越後守近久、父左衛門大夫久兵、至忠智四世居松山城、永祿二年、四

月十六日、忠智如志布志、肝付省釣謀而知之、伏兵於途、猝出殺之、直進陷松山城、忠智二子右馬助久武、太郎四郎久次、俱死之、忠智法號道空、久武法號椿窗榮壽、後人崇久武之靈為軍神摩利志天云、

對馬守久清初稱彦八郎、又七、又主殿助、、姓紀、

孝元帝之苗裔、平山法師了清之子孫也、從 松齡公伐朝鮮、慶長二年、七月十五日、戰唐島、斬敵一人、三年、十月、戰新寨、斬五人、既而歸國、五年、從戰關原、軍散而歸國、賜褒牒及田祿五十石、初久清祖先平山氏者、世々居平山城、及島津季久陷城、不知其遁居何所、至久清始出、事 松齡公、從軍數有功、至是 公謂島津久賀季久之子、曰、子小宗平山久武死無後、而久清事孤尽忠、子其以久清為久武後、久賀乃授久清系譜、以繼久武之後、久清卒時不知年月今平山清之傳也、、

平山作右衛門尉忠續初稱源者、、越後守近久第二子也或云、近久子久正孫棟某、生忠續、未知孰是、、從

一唯世子伐小田原、所謂十六騎之一人也、文祿元年、從軍朝鮮、二年、九月、世子薨於巨濟、十月八日、忠續奉柩歸國、而剃髮為解魔法師、名一忠坊、以禱 世子之冥福、於是翌年二月十一日、與堀之內久規俱負 世子神主、而經歷日本六十餘州、藏法華經於每國神祠佛閣、慶長元年、七月廿九日、事畢而歸國、五年、九月、從 松齡公赴關原、十五日、軍敗戰死、子備後守忠道、慶長四年、從征莊內、山田之戰、忠道力戰傷左股、乘輿而歸營、後遂不能步、忠道嘗事 松齡公為近侍、因從遷徙飯野・栗野・帖佐・柁城諸邑、元和九年、官分踊邑在稱、為一外城、因遣忠道為假地頭職、徙居焉、遂病卒、

平山九郎左衛門某者、忠智之支族也、從川上忠兄伐朝鮮、

平山永聞忠清勳稱大、又大和、姓紀、其先

孝元天皇之後、武內宿禰之苗裔祐盛俗謂之石清水善法寺大隅國彌、勳寺正八幡宮攝政權大僧祿、祐盛曾孫了清

石清水法橋法眼、居平山城、因為平山氏、了清之七世孫又二郎忠武、齡岳公

賜諱一字、且姓島津氏、名忠武、忠武生又二郎武久、武久生越後守

忠邦、忠邦更島津氏復平山氏按平德中、大原公遣季久、善忠邦之世也、忠邦之子孫中務丞忠

重、忠重生忠清、事 松齡公見寵遇即平山五右衛門、即忠清之孫也、

野史氏曰、忠智父子以身殉國、可謂忠矣、久清良實盡力、故見簡

拔、使祖名復見於既滅、可謂孝矣、忠續事 君數奇、豈非天哉、

林百梅列傳第七十三

林百梅者、明人、其先蓋林放也云、嘗遜世來竄薩、貫明公在本御

內城時、召作庭梅詩百首、因賜名百梅、卒時不知其年月、法號心宗

常安居士、墳墓在南林寺、子道甫、業醫今林休兵衛、即、道甫之子孫也、

林仙朝房景福、朝鮮人、姓朴、明萬曆六年日本天正六、戊寅之歲生、廿

一年、癸巳日本文祿二年、年十六、為我軍所捕、始來薩、事 貫明公、賜稱

仲七、又仙朝房、後 公疾病、景福行禱鬼神千日、獨居小島分在國、又

登大峯、或宿於霧峯火井、以祈神之佑、及 公薨、景福遂殉焉、年

三十四、法號權大僧都法印仙朝、葬福昌寺、公廟前第十五石塔是

也、臨終為歌曰、君音波君音密花音香、惜音須須音禮禮音波、春音波風音爾風音散散音知知利音本本根

爾根還音羅無、運音加應留、音念景福子仲右衛門鎮澄、事 松齡公、後給事 公女阿平君

云鎮澄子孫今在、佐志邑云、

林藤七兵衛某、從 慈眼公伐朝鮮

野史氏曰、

栢原有閑列傳第七十四

栢原周防介某初稱左近、將監、薙髮號有閑、天正中、命為步卒將、移居日州宮

崎、以戌其疆場、公嘗選謀臣五十四人、有閑其一人也、十年、十

一月、有閑從上并覺兼至有馬前、十二月、守八代城、十三年、八月

廿二日、與鎌田兼政俱率宮崎兵復至八代、閏八月十三日、進破甲

佐・堅志田砦、獲甲首、九月六日、從新納忠元自肥之豐、諜敵情

偽、量道遠近、多得其要云、後為松山地頭職、其後為用人、慶長十

四年、與諸將俱入琉球、卒時不知年月、有閑二男、長將監某、天正

十年、冬、與帖佐宗辰俱往援田尻氏於筑後、其後戰沒朝鮮、次東市

丞一作市、丞之丞、從擊朝鮮、泗川戰貫紺縉甲云、其後航海撿地琉球國撿地說在、別記、

船覆溺焉即今栢原彌太右衛門、即栢原市丞之子孫也、

野史氏曰、

押川公近列傳第七十五

押川公近、姓橘、稱強兵衛初稱鬼三郎、後更、稱七、又六兵衛、祖讚岐一作淡路、公移居飯野城、松齡、父對

馬某以某年命移居大口、以保成求麻藏、元龜二年、十二月初一日、生公近於大口、公近幼鸞

勇野史曰、具鐵春秋云、子書相專、雖額、語目、知其勇士、如公近者、豈難於此耶、

兒入廩、公近知之、乃拔刀長一尺、以候其出、遂斬殺之、九年、辛巳、

年十一、是歲有水股之役、從其兄河內始于役、寇射公近、矢中其

髻、河內拔矢而持見新納忠元、忠元知其近敵、因賞曰、此兒遇敵、

能無所懼、中矢而不創、佗日當武且壽、及長事。松齡公、而屬忠元、文祿元年、三月、公近誅逆賊、權兵衛於上關後傳、初豐公西下之日、入來院氏家臣今藤權兵衛陰通志豐公、而為之鄉導、豐公賜之朱印及秩祿一千石、而即日與塔原之地五百石、且命我別與五百石、我則憎彼姦邪、而久不與焉、彼深怨之、乃至京師、自訴之豐公左右、且譖公子歲久、貯異志久之如權兵衛惡、加之嫉者、則則山劍射之刑、可也、石田三成聽焉、密告之。松齡公曰、彼讒佞遂為君國家害、於是。公乃詐誑之曰、

方今則與汝田祿五百石、汝宜歸國而拜受焉、權兵衛曰、諾、公乃使忠元與彼檄榜而歸國、又命公近及久保彥八、與忠元同舟而路以便宜俱誅之、因賜公近小刀一把、三月、舟至上關、而與俱候風、是時權兵衛及公近彥八乘暇俱下舟、閒遊且拾蝸螺屬、權兵衛則從容踞巖間而嘯歌、彥八目公近、而誘權兵衛家臣等、徇徃循渚遠去、公近乃裏（頭注）「衣下、一作帶」、

摠沙石於衣下、詐為拾蝸螺、因近權兵衛、濫投之其面、而與之相傳、權兵衛伏公近、將拔刀斬之、刀長支巖、不立拔、公近自下拔小刀刺殺之、而斬頭、權兵衛時年四十二、公近二十二、家臣等至、大愕驚、不知其所以、（頭注）「乃告以下至及焉廿三字、一作撫家臣曰誅止權兵衛耳、汝等固無罪、此為是。」彥八乃告諭其有負、君罪而伏誅、又曰、汝等勿敢動、動則波及焉、皆摺伏莫敢起（記史）、公近持頭而還、示之忠元、

元大賞其勇、既而俱歸國、則擢公近以為府下士、因移居焉、後從伐朝鮮、軍加德島、我軍進與敵艦戰、公近與赤崎丹後俱奮戰被創、其後公近出擊養鷹禽、時有一人、拔刀走出加藤清正營、躡者六七人呼曰、此是罪人、請子誅之、其人逼擊公近、公近左手以鳥銃障之、右手拔刀斬殺之、清正乃使二使至於。公營而謝焉、且與公近道服及衣一襲、後復出打鷲、鷲懸木不墮、乃搢鳥銃腰間、而上木、遇朝鮮人十五六人、急來、執弓自下多射、公近乃放鳥銃於木上、斃二人、其餘皆逃去、慶長三年、公聞明大兵至、於是遣公近及相良玄蕃、

勝目兵右衛門・川上六郎兵衛・徃成故館營、有故公近獨還新寨、九月廿九日、故館破、玄蕃等皆戰沒、敵兵進近寨、是時公近及鳥丸重統出迎敵、重統執鐵砲、射殺最著前敵一人、公近冒陣斬其首、敵兵不敢進而引去、公近乃獻首。公所、公賞其功、十月初一日、明大軍來近新寨、公遣公近出謀、則出城一里許而還報、是日我軍大破明軍、公近奮戰擊殺數十人、十一月十八日、大戰南海瀨戶、公近及大山綱宗等張赤幕朦朧進衝敵船、公近放鳥銃、打敵數人、而被創、從歸國、直從至伏水邸、五年、八月朔日、公近及濱田主水密入謀伏水城、既而城陷、從至大垣、公賜公近甲冑一領、九月、遣公近徃偵敵軍於江渡川、時望見之、則敵將騎馬而指揮衆、公近乃裸程泳水底、暫騰而推墮敵將、遂斬其首、而歸獻之、翌日石田三成至我營、

而謂。公曰、聞昔日君部下有殺敵者、此西軍獲寇之始也、請相見而賞之、乃見公近焉、三成謂之曰、震起三軍之勇、子之功也、因與大判金一、居數日、東軍至赤坂、此夜遣公近謀之、還報曰、東軍遠來罷勞、枕甲冑而臥、若襲之必得志焉、於是。公遣島津豐久告之三

成、三成不聽、語在豐久傳、十五日、關原軍敗、敵急迫、公近及川上忠兄等五人執槍拒後、既而失。公所、時敵又卒至、執槍刺公近、公近以刀障之、相搏而刺敵、敵倒、復能騰、拔刀擊公近冑、公近復搏、遂伏敵、而斬其首、於是公近與島津久元等二百餘人遁入伊吹山、衆皆苦飢、公近乃與濱田重昌下至村落、而煮粥、密持還食衆、而後皆離散遁去、公近危急、乃裂捨。公營所賜褒牒三紙、且踏匿三成所與大判金於泥中、遂為東兵能瀨早左衛門所擒、將刑、遇山口直友、直友乃公近所嘗知、則解拘繫、與大小刀及衣服、而置直友所、後陰遁去、而不暇佩刀、徃採前所匿金、潛匿赴京師、道路艱危、罷臥道側叢祠中、而驚醒鰐口之音（頭注）「鰐一作鱉」、（傳）倭俗稱祠室前懸鰐、其形略鰐口、而別、此云鰐口、視之、則

一大漢佩刀衣袴而拜佛前、公近猝騰奪刀、遂斬其首、而身佩其刀、直至京師近衛公邸、是時我兵士來潛匿焉者日多、以公有訴幕府故、遂得俱全於難而歸國、則以功賜田祿五十石、且稱強兵衛、當此之時、國中恟々、訛言甚多、於是遣公近及飯野成就軒僧、詐謁三所虛空藏、經歷諸國、而察島津豐久生死、且探知東師遂來討我否、凡三年而歸國、後為川內高城代官役、十五年、六月十五日、遣公近及桐野九郎左衛門、陰誅平田增宗於入來土瀨戶、賞賜田祿三十六石、至翌年、則獻之於官、公近妻田榮女、公近誅增宗也、誅後而臥塚、蒙被而臥塚、增宗從者拾得賊所手、蓋曰、昔者公近有婦稱、適妾刈而、未歸、因織布自若、追者去而不復來、先是公近約殉死於松齡公、及慈眼公即

位、則使土持平右衛門請公近於松齡公、以給事已、公乃使比志島國貞曉諸公近、於是十九年、慈眼公使公近徙慶府、而居之城中、賜田祿五十石、公近復辭而不受、後公近發癰疽、公親來視、且賜酒以慰焉、隔日而卒、時寬永六年、四月廿九日也、年五十九、法號勝山良忠居士、墳墓在大德寺、子市之亟近尚、生死不知其年月、

押川氏遺書略曰、寬永己巳之歲、四月、公近家卒、公近勇力殊絕於人、自少至老、殺人凡百六十有餘人、此是其所明識、其餘斬捨道路者不可算、其子近尚稱市之丞、其子公富亦稱六兵衛、其子公武亦稱強兵衛、其子公備亦稱六兵衛、其子公尚亦稱強兵衛、而高祖近尚以其父公近武功筆記、世世傳之于子孫、公尚亦以是授之其子市熊、實安永九年、甲子、三月某日也、

押川治右衛門則義、穆佐士也、慶長七年、使川田國鏡村尾重侯誅賊臣忠貞於野尻、國鏡乃遣則義殺之、是日忠貞出獵、則義乃以岡原七左衛門為導、執鳥銃伏路、而俟其歸、時有騎驄馬而來者、七左衛門

曰、是也、則義即放中而墮馬、則是平田增宗長子新次郎宗次者也、是日忠貞與宗次易馬而騎、以故見誤殺、忠貞後至、則國鏡重侯磨衆而擊殺之、則義以誤殺人故、遂剖腹死、平田大休坊監視之、

押川喜右衛門、事慈眼公於柅城、為納殿役、

押川近長、自稱五右衛門、三山人、文祿三年、以伊勢貞昌之與力、從伐朝鮮、又從公自唐島勤戍加德島、四年、十二月十四日、發朝鮮、晦日、至阿久根、慶長元年、正月三日、至帖佐、八日、歸三山、是年十二月、復赴朝鮮、十二日、發三山、達向田、翌年正月廿八日、乘舟發向田、三月十日、至加德島、而番戍焉、尋破敵艦、攻南原城、又從深入敵境、既而勤番泗川、是時更稱內藏丞、三年、四月十五日、休暇發泗川、五月十五日、歸三山、

押川弓藏者、近長弟也、與上井兼政俱陣沒於安永城、

押川近重、稱曲內左衛門、從征琉球云、

野史氏曰、公近蓋刺客之流、而盡忠於國家者也、則義誤殺人、命乎、

蒲生清綱列傳第七十六

(頭注)「綱」作「規」四、作「三」

蒲生美濃守清綱初稱十郎、後稱內大輔、父曰越前神充清、其先鎌足公之十二世

孫・從一位太政大臣道長公之第五子・從一位關白教通公、其孫檢校坊教清、為宇佐八幡祠留主職、始下豐後、娶大宮司之女、生一男、是曰上總介舜清號真光坊、保安四年、舜清始來隅州、居垂水邑、其後自領蒲生吉田二邑、居蒲生城、因氏焉、舜清生七郎太夫助清、助清生八郎太夫種清、種清生太郎太夫清直、清直之世、得佛公以薩

橋口市作、戰沒木崎原、

橋口勘左衛門、從慈眼公伐朝鮮、元和間、麿府田祿藉云、橋口勘左衛門領一百五十石、

橋口肥後、從戰下大隅、與伊集院久春等俱軍勞多、

橋口助右衛門、元和初領田祿三十石田祿、

野史氏曰、

濱田經重列傳第七十八

濱田經重、一名重門、自稱民部左衛門、剃髮號榮臨、佐渡守重好之第三子也。或云、按濱田氏系譜、桓武天皇之後、洪任司重國之庶子左衛門尉重助、重助之八世孫越後守重征、始為濱田氏、稱重好、即重信之十七世孫、又按諸家大概記、重好藤原姓、○按福昌寺奉加釋、永亨中、有濱田藤原義藤者、蓋族好枝、

兄曰喜兵衛、幼出家名成典、後還俗名重泰、天正六年、從戰

耳川、有功、經重為人武勇拔群、尤長間諜。初為村田經定附衆中、從軍屢有實明公徵為將下士、

廿二年、四月、從戰於久瀨瀨戶。在瀨、徒步提刀為士卒先、十一月、命

經重持文契、自吉田至蒲生、路經苗竹山、遇賊斬殺數人、廿三年、

十月二日、戰於平松、斬賊一人、弘治二年、進與賊戰於蒲生、斬獲

無算、尋便諜城中、斬戍兵數人、既而與吉井源七兵衛竊入蒲生新

城、燒盡城營、因潛行城外水底、裸入萩原邸、發火燒盡邸落、其反

常應變多此類也、於是 大中公殊召經重至麿府、賜褒牌及甲冑、永

祿四年、竊入廻城、發火、又詭殺守兵、一日肝付賊兵至數根城趾、

進入柵、經重與德持舍人、率步卒數十人、督戰疾力、有我兵大藏

者、中銃彈、不能退、經重大呼突前、援大藏而還城中、五年、從攻

橫川城、斬賊數人、九年、從村田秀久戰三山、與賊相擊、經重誤墜

壑谷而無恙、十年、從攻馬越城、殺賊三人、其後 大中公遣經重謀

牛根城、又諜田上城。在下、又諜高隈凡二度、而還報、天正五年、遣

經重及酒瀨川武安至莊內、此時北鄉時久使經重諜紙屋城、是日大

雪、不終謀而還、六年、從戰、石山口。亦三、秋、大友氏大軍至日州、

經重與上村右近將監出諜敵營、十一月十一日、我軍進擊破松山砦、

經重入守高城、十二日、大戰於高城城下、經重手親斬敵十五人、而

唱凱歌、八年、諸將進攻寶河內。在北、經重擊高橋丹後、斬其首、村田

經平私與甲冑、賞其功、十月、我軍攻圍矢崎城、經重進擊殺敵一

人、又有一人、馳出城門、與經重戰於濠傍、經重傷胸、村田經平從

奴太郎兵衛者、執眉尖刀、擊退敵、經重忍傷、又與敵隔女牆而戰、

復被創而退、十二月廿二日、我軍陷日比良城、是時經重執槍刺殺敵

數人、尋攻花山城、斬捕頗多、十二年、諸將徂救有馬城、經重揮大

腰刀、斬首過當、十四年、遣經重及山口大藏使豐後志賀道益、因諜

岡城而還、又遣經重及八木水使入田、便道諜津牟禮城、十月、諸

將進攻丹生島城、經重與城將柴田蠡翁。一作能、奮鬪墮溝中、蠡翁追擊、

經重急起刺之、遂斬其首、是日經重斬敵凡四人、又鬪臼杵、斬一

人、是歲又從諸將攻利滿城、隔柵與敵鬪、我軍進擊破千石氏、經重

奮擊殺敵數人於鶴崎、十五年、豐公西下、聞經重驍勇有膽略、召而

賜槍。之鑲金房裝衛尉政次作人字、手裏、及田祿五百石、經重以 公嘗賜祿百石、子

孫衣食自足、故辭不受、十八年、從 一唯世子軍小田原、文祿元

年、從入朝鮮、勞軍務凡三年、而歸薩、慶長三年、實明公聞明兵

大至于朝鮮、乃遣經重督火藥船、行運之於朝鮮、遇 松齡 慈眼二

公班軍于風本、即從至伏水邸、及東西軍起、始終從而還國、其後村

田經永為田布施地頭職、請經重為噯役、經重固辭、經永請不止、於

是經重不得已、身居麿府、遙為田布施邑噯役、十六年、辛亥、正月

鹿兒島県史料集刊行一覽

集	史	料	名	執	筆	者	集	史	料	名	執	筆	者
1	薩藩政要録			桃園恵真・五味克夫			25	三州御治世要覽			宮下満郎・桑波田興		
2	丁丑日誌(上)			村野守次			26	桂久武日記			村野守次		
	丁丑日誌(下)			芳 即正			27	明赫記			宮下満郎		
3	薩摩国新田神社文書			五味克夫			28	要用集(上)			芳 即正		
4	一向宗禁制関係資料			桃園恵真			29	要用集(下)			芳 即正		
5	薩摩国山田文書			五味克夫・郡山良光			30	桂久武書翰			村野守次		
6	諸家大概・別本諸家大概・職掌紀原・御家譜			桃園恵真			31	本藩地理拾遺集(上)(薩摩国)			桐野利彦		
7	薩摩国阿多郡史料・山田聖采自記			五味克夫・郡山良光			32	本藩地理拾遺集(下)(大隅国・諸縣国)			宮下満郎		
8	御登御道中日帳下向・列朝制度			原口虎雄			33	江夏十郎関係文書			山田尚二		
9	明治元年戊辰戦役関係資料			村野守次			34	示現流関係史料			宮下満郎		
10	伊能忠敬の鹿兒島測量関係資料並に解説			増村 宏			35	樺山玄佐自記並雜録・樺山紹劍自記			晋 哲哉		
11	管窺愚考・雲遊雜記傳			五味克夫			36	島津世祿記			山田尚二		
12	川上忠塞一流家譜			五味克夫・桑波田興			37	島津世家			島中 彬		
13	本藩人物誌			桃園恵真			38	譯司冥加録・漂流民関係史料			宮下満郎		
14	薩陽過去帳			宮下満郎			39	薩摩藩天保改革関係史料一			尾口義男		
15	備忘抄・家久公御養子御願一見			五味克夫			40	薩藩学事一・鹿兒島県師範学校史料			宮下満郎		
16	鹿兒島縣他誌(上)			桐野利彦			41	薩藩学事二・薩藩学事三			島中 彬		
17	鹿兒島縣他誌(下)			桐野利彦			42	薩藩名勝志(その一)			吉元正幸		
18	薩藩舊土文章			五味克夫・桑波田興			43	薩藩名勝志(その二)			吉元正幸		
19	薩藩先公貴翰(乾)			五味克夫・桑波田興			44	薩藩名勝志(その三)			吉元正幸・塩満郁夫		
20	薩藩先公貴翰(坤)			五味克夫・桑波田興			45	鹿兒島県布達(上)			宮下満郎		
21	小松帶刀傳・薩藩小松帶刀履歴・小松公之記事			芳 即正			46	鹿兒島県布達(下)			宮下満郎		
22	小松帶刀日記			芳 即正			47	伊地知権左右衛門日記・先君掖官遺抄			堂満幸子・林 匡		
23	新修舊鹿兒島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(上)			原口虎雄			48	加治木古老物語・薩藩雜事録・雜事奇談集・舊薩藩奇譚日記集上下			安藤 保・徳永和喜		
24	新修舊鹿兒島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(下)			原口虎雄			49	西藩烈士干城録(一)			徳永和喜		

鹿児島県史料集刊行委員会委員

五十首順

安藤 保 九州大学名誉教授

尾口 義男 始良市歴史民俗資料館長

五味 克夫 鹿児島大学名誉教授

塩満 郁夫 志學館大学特任講師

清水 勝 志學館大学非常勤講師

晋 哲哉 元蒲生町長

堂満 幸子 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

徳永 和喜 鹿児島県歴史資料センター黎明館
学芸課長

中野 翠 鹿児島高等予備校講師

丹羽 謙治 鹿児島大学教授

原口 泉 鹿児島大学教授

日隈 正守 鹿児島大学教授

三木 靖 鹿児島国際大学短期大学部名誉教授

宮下 満郎 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

「西藩烈士干城録」(二)

(鹿児島県史料集 第五十集)

平成二十三年三月

発行

鹿児島市城山町七一一
鹿児島県立図書館

電話 ○九九―二四―九五一一
FAX ○九九―二四―五八二四

印刷

鹿児島市中央町二七一―一六
かわち印刷有限公司
電話 ○九九―二五四―五〇五四

鹿児島県史料集刊行委員会委員

五十音順

安藤 保 九州大学名誉教授

尾口 義男 始良市歴史民俗資料館長

五味 克夫 鹿児島大学名誉教授

塩満 郁夫 志學館大学特任講師

清水 勝 志學館大学非常勤講師

晋 哲哉 元蒲生町長

堂満 幸子 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

徳永 和喜 鹿児島県歴史資料センター黎明館
学芸課長

中野 翠 鹿児島高等予備校講師

丹羽 謙治 鹿児島大学教授

原口 泉 鹿児島大学教授

日隈 正守 鹿児島大学教授

三木 靖 鹿児島国際大学短期大学部名誉教授

宮下 満郎 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

「西藩烈士千城録」(二)

(鹿児島県史料集 第五十集)

平成二十三年三月

発行

鹿児島市城山町七―一
鹿児島県立図書館

電話 ○九九―三四―九五―一
FAX ○九九―三四―五八二四

印刷

鹿児島市中央町二七―一六
かわち印刷有限公司
電話 ○九九―二五四―五〇五四